

---

# NOA / 葦原國の剣士

ユーザネーム推敲中

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NOA / 葦原國の剣士

### 【Nコード】

N1923K

### 【作者名】

ユーザネーム推敲中

### 【あらすじ】

高校生の西奈蒼惟は売れないタレント。ある日撮影中に事故が起こり、彼は子供を助け自分は溺れてしまう。その者はもとは若き魔導師。世を恨み、数えきれぬ人命を犠牲に闇の原理神を召喚し、己を悪龍と化した。貴殿が、今この時に、ここに現れ宝珠を与えられる事は、まごうことなく定め導き。侍・魔法剣士・蠻族・悪龍・聖女・魔導師・魔導師ギルド・マナ（内在する光）

「売れないタレント」

十七歳の西奈蒼惟は高校生ながら小さな芸能事務所に所属している。とは言え、学業に支障をきたすほど売れていない。ほどというより、全く、と言った方が良くくらいだと自分で感じている。

しかし彼自身はそのことをあまり気にしていない。気にしているのはこの人。もうすぐ三十歳になる女性マネージャー、木原美奈。美人なのに今日も眉毛を吊り上げている。彼はそういう表情を何と言つか知っている。柳眉を逆立てて、と言う。

柳眉を逆立てて木原美奈は言った。雑誌の表紙をパンパン叩きながら。

「大手事務所のブサイクがこんなに売れてるのに悔しくないの。ブサイクにどんどん追い越されて、ちよっとは悔しがりなさいよ」

「怒られますよ……。それにみんな格好いいですよ」

「あなたに比べたら月とすっぱん。言っとくけど、トイレで使うパコパコすっぱんよ。少しは目立とうとしなさいよ。ふられたら気の利いたことを言うの」

「思いつかなくて……。それに、本当に怒られますよ……」

柳に風といった彼の様子に苛立って、木原美奈はファミレスで許される最大ボリュームの声で言った。つまり、声を押し殺して怒鳴

った。

「あんたはっ、仕事が出来ない最大の原因を何だと思っているのっ」

「事務所の大きさ？」

「ぎい」

木原美奈は漫画みたいに唸った。唸っただけじゃ足りなくて吼えた。釈迦の説教を獅子吼と言う。意味合いは全く違うがそれも獅子吼だった。形相が。

「さっきの収録っ、やっと廻ってきたテレビ出演のチャンスにっ、一言も喋らないっ、ふられてもジョークの一つも言わないいっ！あれじゃあ、全部カットよ！あんたの映ったところは全部カットお！女子高生も女子中学生も、あんたの顔を見たことないのお！すでにファミレスで許されるポリウムではなかった。周りの客が目を丸くしている。」

「見て貰っても……僕はそこそ普通くらいで……」

「その性格を直せえ！それから不敵な面構えで謙虚な台詞を吐くなあ！あんたの本心は一体どっちなのよっ」

「ええつと……謙虚な方……？」

「だったら、こんな顔をするの。分かる？これ。これが「申し訳ありません」って顔」木原美奈は顔を作ってみせた。

「上手いじゃないですか。美奈さんが役者やった方がいいと思いませんよ。美人だし」

「お……おう……」

美人という部分に木原美奈は顔を赤らめたが、すぐに我に返った。

「おべんちゃらを言って誤魔化さないで。それから、レッスンにはちゃんと行ってるの?」

「今更カポエイラなんて二番煎じもいいとこだと思いますけど……前みたいにラップ系の……」

「どっちも出来なきゃ駄目。いい? この先アクションの仕事だっ  
てあるかも知れないんだから」

「役者の仕事がないのに?」

「ぐ……ぐちゃぐちゃ言わない。一つずつ実績を作る。仕事は私が  
取ってくるからあんたはもっと頑張りなさい」

「はい、はい、と。ケーキ食べませんか?」

蒼惟は木原美奈の弱い処を知っている。

「う、うん……。そうね。私は食べる。あんたはダイエット」

「え、まちに?」

「当然」

蒼惟がまったくと言って良いほど興味ないタレント業をやっているのは、この年上の女性が何となく好きだから。街でスカウトされ、  
マネージャーだと紹介されて以来、彼にはり附いて、いつも口やか

ましく小言を言っつて、その癖やり返されると慌てふためいたりして一緒にいると面白い。口やかましくせに、実は相手が自分に弱いことを知っている。一年付き合っつて学習した。現に今こうして話している、なるべく目を合わさないようにしている。目が合っつてしまつと弱いらしい。

蒼惟がドリンクバーからコーヒーを持っつてきて笑顔で手渡すと、木原美奈は目をあわさず小さな声で「ありがとう」と言つた。それから、ことさら憤懣やるかたない、といった表情を作っつてみせた。

「まっつたく……。どうしてそんなに飄々としてるのかしら。君は全然思わないの？ 芸能界で大物になっつてやるとか、……」

「だっつて、威張つた人だらけで怖いですから。俺、威張つた人は嫌いです」

「何処の世界に行っつても、威張つた人だらけよ。先ず頭を下げつて、仕事を教えてもらっつて、そうしてみんな一人前になっつていくんだから……」

「でもほら、なんか言っつう人は新人を連れてご飯食べに行っつて、箸の持ち方が悪いと怒るっつて。俺、箸の持ち方悪いから」

「それは礼儀を教えてくれるの」

「俺の箸の持ち方が悪くっつて誰が困るんです？ それとも俺が恥を搔かないように？ そうじゃないでしょ。そうかも知れないけれど、実際はそんな事どうでも良くて、つまりこうでしょ。貴様は箸の持ち方さえなっつてなあい。俺が一から教えてやる。今日から俺がお前のボスだあ。俺に従ええ」

「呆れた。あんたって、捻くれてるのか素直なのかほんとに分らない……」

「俺は、威張ってない人には素直なんです」

木原美奈は首をふった。

「それじゃ働けない。威張ってない人なんていないもの。今度の撮影はそんな事言わないでよね。端役だけど始めて来た映画の仕事なんだから」

来週にその撮影がある。簡単に言えばそれは災害救助シーンで、蒼惟は濁流の中をロープをつかんで渡らなければならぬ。勿論、救助する側の主人公ではなく救助される役。

「アクションシーンがやれるって証明してみせれば、廻って来る仕事もあるんだから……」

木原美奈ははっきり言わなかったが、実は内々に抜擢の話がある。主役ではないけれど、子供向け特撮物のレギュラー。代々それに出演した男の子は、みんな出世している。もしもこの子がそれに出ることが出来たら、テレビの前のママさん達をバタバタぶっ倒してくれる筈、と想っている。けれど黙っているのは、教えると面倒くさがって今度の仕事の手を抜くかも知れないから。

彼女は彼女で、一年付き合って蒼惟の性分をほぼ見抜いている。

この子は、一見爽やかで素直な好青年だけど、将棋で言えば絶対真直ぐ進まない桂馬のような奴。飛車角金銀の活躍を横目に見て、ちつとも羨ましいとも悔しいとも思わない奴。角も斜めに進むけど、

この子は、まっすぐ進むと見せかけて斜めに着地する奴。  
普通ならこの世界にいられない。育たない。けれどどうしても捨てられない、惜しい素材。いつかきつと大化けしてくれる筈と、祈る思いで見守る毎日……。

溜息をついた木原美奈に蒼惟は言った。

「大丈夫ですよ。ちゃんとやりますから」

「本当かしら……」

「俺、信用ないですか……?」

「わたしは、信じてるわよ」

「良かった。美奈さんの爲に頑張ります」

蒼惟がにっこり笑いながら目を見て言うと、木原美奈は「コーヒーを咽喉に詰まらせ咽た。」



二・「蒼惟」

友達と呼べる人間はいない。交際している女の子もいない。少し変わっているかもしれない。しかし昔からそうだったわけではなく、昔は友達も沢山いて好きな女の子もいた。

その女の子は友達の子だった。学年は一つ下。数回デートをした。嫌われているとは思えなかったけれど、今ひとつ相手の気持ちが分らなかった。ある日の夕暮れ、何となく良いムードに感じられ、思い切つてキスしていいか聞いたら断られた。それで分かった。脈なしだと。

間抜けな感じで失恋したと思った。蒼惟はその女の子を誘うのをやめ、同学年の女の子と付き合い始めた。ちょうど落ち込んでいたときに告白された。「付き合ってください」と言われたので、「いいよ」と答えた。

しかし暫くすると誰も口をきいてくれなくなった。完全に友達全員からしかとされた。始めはまったく理由が分らなかった。交際している女の子から呼び出されて言われた。

「君の妹にあんなこととして飽きたらポイするなんてあんたつて最低っ」

やっと理解できた。キスしようとしたくらいでそんな風には言われないだろうから、きつと凄い話しになっているに違いない。蒼惟は呆れかえって背中を向けた。ふり返らずにバイバイをした。

嘘の噂を広めた女の子のことはそれほど頭に来なかった。キスするのが嫌なわけじゃなかったんだと、漸く気附いた。恥ずかしかったか、怖気づいたか、それが分らなかつた間抜けな俺が悪い。それよりも頭にくるのは友人とそれに追隨する奴等の方。普段あれ程、友達達の仲間だの言っておいて、何かあつたらこれか、と思つた。こつちの言い分は一切聞かず、結託して排除にかかる。素晴らしい、友情の塊りのような奴等。陰湿な硬派つて笑えるじゃねえかと。

それ以来彼は孤立した。それが中学を卒業するまで続いた。しかし彼自身もしらけてしまい、そのことをもうなんとも感じなかつた。学習した。誰も皆、友達を欲しがるけれど友達が大切なわけじゃない。もう一つ。女の子は平気で嘘をつく。

友達が一人もいなくても平気になつた。学校へは居眠りしに行つた。夜はネットをして本を読み調べ物をした。彼の興味は現実世界から別のものへ移つていた。

高校に入つてすぐに、スカウトされた。まったく興味なかつたけれど、気さくなお姉さんといった感じのマネージャーを紹介され、やってみようかなと思つた。やってみてすぐに悲鳴をあげたけれど、むいていなかつた。

ともあれ、髪型が変わり、着ている物が変わり、立ち居振る舞いが変わると、俄然クラスの女の子が興味津々に近づいてきた。しかし彼にしてみれば、一旦興味がなくなつたものを先方が興味を持つてくれたからと言って、はいそうですかと興味持てない。相変わらずしらけたままだった。

やはり、少し変わっているのかも知れない。

\* \* \*

夕刻、蒼惟は家に帰って来た。家は広い敷地の日本家屋。とは言え、母屋はそれほど大きくない。大きいのは道場。祖父の代から剣道の道場をやっている。

真直ぐ母屋へ入ると、母親が夕飯の支度をしていた。テーブルの上に真新しい足付きのグラスがあった。民芸硝子。母親が趣味で集めている物。

「また買ったの？」

「いいでしょ。九州の作家さんのよ。手作り風工場製品じゃなくて、ホントの手作り。綺麗な赤でしょ。セレン赤って言うのよ。藍色はコバルト、赤はセレンウムで発色させるんですって」

「何万回も聞いたよ……。訊くけどセレンウムって何だよ」

「さあ。何かしら……。それに何万回も言っていないと思うけど……。さあ。ご飯ができたわ。お爺ちゃんを呼んできてくれる？」

「いいよ。道場に居るの」

「そつよ」

蒼惟が道場へ行くと、祖父は誰もいない道場に独り正座し、瞑目していた。彼は、石頭の父親は苦手だったがこの祖父は好きだった。厳格ながら穏やかな老人。蒼惟の姿を見ると言った。

「アオや、お前もう一度剣道をやってみんか」

蒼惟は肩を竦めてみせた。

「才能ないから。お前の太刀筋は汚いって親父にさんざん言われたし」

「それはお前が型を守らんからじゃ。何を求めて武道を行うのか、それによって違う。武道を通じて生きる姿勢や精神を学びたいのであれば、型は大切じゃ。されど極めれば、自ずと美しい姿勢になる。最も鋭く最も強い剣は、美しい姿勢から自然と発するもの。しかしじゃ。零戦の勇者坂井三郎氏がこんなことを言っておる。教科書どおりの宙返りをしたら、実際の空中戦では簡単に撃ち落とされる。だからなるべくへたくそな宙返りをする、とな。分るか。敵に容易に予測できる動きは、実際の戦いでは命取りとなると言っことじゃ」

「へえ……。面白い話だね」

「じゃろつが。お前も頑張ればお前なりの剣をあみ出せるやも知れぬ」

「ふーん。でも、それって、昇段試験には受かるの？」

むう、と老人は言葉に詰まった。そこにおいては我流など論外。

「昇段試験に受からないんじゃない。段が取れないじゃない。段が取れない人間が道場持てるわけがない。この道場は兄貴が継げばいいさ。ご飯できたって。早く行こう」

溜息をついた祖父を慰めるつもりで言った。

「今、俺、カポエイラやってるの。カポエイラって知ってる？」

「知っておるとも。極真の大山倍達氏を苦しめたブラジルの謎の武術じゃな」

「それ、漫画の話だろ？ 実話だったの？」

「いや。わしも漫画を見ただけじゃ」

「ぶっ」

カポエイラはジンガオというステップを刻みながら、逆立ちや側転を交え、多彩で華麗な蹴り技を繰り出す武術。それは、奴隷が手錠をはめたまま戦ったのが始まりだとか、奴隷達がダンスの練習のふりをして業を磨いていたとか言われている。格好良いので、最近のダンスはその動きを多く取り入れている。その影響で彼も習わされた。しかし彼が「へえ、面白いじゃない」と熱中したのはダンスの部分ではない。

「アウマードマテロが出来るようになったんだ」

「なんじゃ、それは」

「見てて。やって見せるから」

蒼惟は道場の真ん中へ行き、宙を跳び、蹴りを放って見せた。どう跳んだかというと、先ず大きく左足の後ろ回し蹴りで宙を切り、その勢いで体を捻りつつ宙を舞い、奥足で高い蹴りを放つ。かなり高く跳ぶ。アウマードは後ろ回し蹴り、マテロは回し蹴り。

「ほう。見事じゃないか」お爺さんは目を丸くした。

「だろ」

蒼惟はにやつと笑った。嬉しかった。祖父はこうして感心してくれるけれど、これが父親だところはいかない。父親は自分の意に沿わないことを、息子がどれほど上手にやってみせても喜ばない。

祖父はしきりに感心してくれた。

「それほど出来れば、アクションスターにでもなれるじゃろう」

蒼惟はタレント業の話になると急にしらけた顔になり、笑って言った。

「無理無理。むいてないから」

## 三・「オカルティスト」

つけっ放しのパソコンが、コロコロと静かな音をたてている。深夜一時。蒼惟はベッドに寝そべってずっと本を読んでいる。

彼がそれに興味を持ったのは、ゲームから。様々なゲームの中で様々な姿で登場するけれど、何もかもごちゃ混ぜで味噌も糞も一緒になっているそれら。悪魔。

始めはネットでソロモンの霊あたりから調べてゆき、徐々に専門的になった。すぐにネットでは事足りなくなつた。そこにある情報はちつとも体系的ではなかつた上、正確さに欠けていた。架空の存在に対して（架空というのが不適切ならば、）いるのかいないのか分らない存在に対して、正確さに欠けるというのも可笑しな気もするが。つまり、そこでも味噌も糞も一緒。古代の伝承と、中世に捏造され付加された情報がごちゃ混ぜになっていた。

中世という時代は洋の東西を問わず妖術と悪魔崇拜の時代である。西洋ではそれは魔女狩りという形で顕現した。この時代の悪魔学者達は魔女狩りを正当化する爲、非常に恣意的な捏造を行っている。それがもつともらしく現代のオカルト書に載っていたりする。本当の悪魔の姿が知りたければ除外して考えなければならぬ。

蒼惟は様々な文明に登場する神や悪魔を比較して捉えるよう努めている。出来る限りルーツに溯り。余計なものは省き。バールのことを知る爲に古代セム人の言語を調べたりしながら。それについて知りたければ、調べるべきことは多岐にわたる。

今読んでいるのはゾロアスター教の二神、アーリマンとアフラ・マズダーについて書かれた本。現代のオカルティスト達は、アーリマンがサタンであり、アフラ・マズダーがルシファーであると言う。一体どんな事柄を証拠や根拠としてそれが分かったかは知らないが、要約すれば以下のような事である。

アーリマンであるサタンは闇の神であり、闇としてこの宇宙を支配している。対してアフラ・マズダーであるルシファーは、光の犠牲神であり、光としてこの宇宙に散らばり、人間の霊的本質となっている、という。アーリマンは人間を物質至上主義的思想に捕え、物質世界と肉体に付随する欲望の僕とする。アフラ・マズダーは逆に、人間に創造力を与え、人間を高い霊的世界に引きあげようとしているという。

言わば、ルシファーとサタンが人間を間に対立している光と闇の二元論的構図。

そもそも、悪魔とはキリスト教的善悪二元論の産物である。キリスト教成立以前から、その地域にあったある種の忌むべき存在の捉え方、それにキリスト教のフィルタをかけたもの、それが「悪魔」<sup>。</sup>その姿にはキリスト教の教理が色濃く投影されている。

ヘブライ語のサタンは神への忠誠心を試す天使の名だったと言われる。アラム語のマナシーナはサタンを意味し、「試みる者」という意味でもある。

名称の語源の意味やその古さは一旦脇に置いて、サタンに「デーモン」「デヴィル」の語源である「ディアボロス（反逆者）」というギリシャ語が当てられたのは、紀元三世紀に聖書がヘブライ語からギリシャ語に翻訳された時。この時点で、サタンは神の対立者と



なった。

さらにキリスト教の悪魔は二層構造である。周辺民族の神々を悪魔として吸収している。宗教的敵対物ゆえ。つまりこの時点ですでに、味噌と糞が一緒になっている。

そして時は流れ、そのおよそ千年後に狂気の時代を迎え、キリスト教会は己の身中に敵を見いだす。解釈という名の歪曲、拷問による自白を証拠に捏造が繰り返され、悪魔の姿は補完される。それが現代の我々が知る悪魔の姿。

日本人が子供の頃から目にする映画や漫画、ドラマ、それらに登場する悪魔がそれである。日本人も知らずどっぷりとキリスト教的善悪二元論に浸けられている。

ここでは悪魔を掘り下げて描けば描くほど、困惑と混乱が生じる。何をするのが「悪」なのか、「悪魔の為すこと」に明確な定義を与えられず。その混乱は現代のみならず、大昔からずっと続いていた。混乱の原因は、それが「悪」を司っているからである。それを捉えるにもっともふさわしい言葉は「闇」。仏教で言う無明である。

神や悪魔は娯楽作品の善玉悪玉で登場したのではない。信仰の中でこの世界に姿を現してきた。それを考えれば、ほぼ全てが権力者により恣意的に創り出されたものなのかも知れない。古代のどの文明においても王は神の子であり、その後の宗教は国家より強大な、時に複数の国家にまたがる巨大な権力機関となった事を忘れてはならない。

しかし歪曲のあったことは当然としても、まったく一欠片の真実

も無い、完全に想像の産物　　と言いつ切るのは早計である。

喩えとしては悪いかもしれないが、宇宙人を見つけれないのは何故か、という命題がある。それには三つのタイプの結論が用意されている。

一つは、「いないから」。もう一つは「いるけど地球には来ない。ないし、地球人とは連絡を取りたがっていないから」。もう一つは「既に地球に来て、地球で暮らしているけれど皆気附いていないだけ」という、やや笑える三通りの回答群。神霊の場合もほぼ同じ答えがあてはまる。

いない。

いる。けれど人間のことはかまっていない。

いる。いて、この宇宙と、宇宙の中にいる我々に強い作用を及ぼしている。けれど皆気附いていない。

譬えて言えば、音楽もまた目に見えないが、その有る無しで人の気分はがらりと変わる。有る無しだけではなく、その種類でも。同様の形で、目に見えず耳にも聞こえないけれど在るのかも知れない。常に在るから気附かないだけで、その在る無しで、またはそれが何者かにより、人間の精神は大きく左右されるのかも知れない。

四・「撮影」

翌週、木原美奈マネージャーから電話が入った。

「明日撮影だから。用意して待ってて。わたしの車で迎えに行くから」

「春休みだから別に文句は言いませんけど、随分急ですね」

「雨待ちだったのよ。だって川が増水してないと」

「げっ。まぢで濁流を渡るんですか」

「何言ってるの。ほんとに濁流だったら危険じゃない。そこそこ増水してればいいのよ。後はプールで撮影して加工するらしいから」

\* \* \*

車で四時間ほど走った山間の川。道沿いに見えたその流れは、確かにそこそこ増水している。茶色い水。川底に大きな岩でもあるのか、所々白い波を見せている。割と速いうねるような流れ。

ハンドルを握る木原マネージャーに蒼惟は訊いた。

「確かに増水してるけど濁流ってほどじゃあ……こんな濁流シーンでいいの？」

「遠景と前後のシーンを撮るの。後は加工するらしいから。この川を実際に渡るところも撮影するけれど、ちゃんと命綱つけるから大丈夫」

「ふーん。このくらいの流れなら泳げそうだけどな……」

「生意気言わない。強がらない。油断しない。それから、共演者に失礼の無いようにね。売れっ子だから」

\* \* \*

木原美奈がわざわざ一言注意した理由が分った。共演者は小学生だった。人気者の例に漏れず、礼儀正しかった。名前も知らない役者以外には。「西奈です。今日はよろしく」と蒼惟が言つと、「セナって言われてもわかんないよ。知らないもの」と素っ気無く答えた。

何だこの面白いガキは、と思ったけれど、それを顔に出すほど彼も子供ではない。笑ってみせた。

芸能人の端くれでありながら、芸能音痴の蒼惟は、その子供の顔も名前も知らなかった。なにしろ彼は配役表も台本も見えていなかった。台詞が無いと聞いていたので。その場で台本に目を通すと、彼とその子供が川に転落したバスから、レスキュー隊が張ったロープを頼りに脱出する、というシーンだった。

監督に挨拶に行くと、こう言われた。

「ふーん。普通は女の子の名前だろ。芸名？」

「いえ。本名です」

「ふーん。まあ、どうでも良いけど……」監督は背中を向けた。

そんなこんな愉快的な出来事が二三あった後、撮影は始まった。雨は殆どあがっていたが、水滴を含んでいるかのような大気。頭上は真っ白い雲が低く垂れ込め、上流の山は雲に包まれ隠れていた。

まずはじめに、主人公役のレスキュー隊員が大きなピストルのようなものをかかげて引き金を引くところを撮った。

蒼惟は隣りの木原美奈に訊いた。

「あれは、何をしてる処？」

「スーパーレスキュー隊の秘密兵器で、ロープを転落したバスに向かって撃ってるの。映画になったらあの辺にバスが沈んでるわ」

「へえ……」

「バスから脱出するアップはプールで撮影」

蒼惟は内容のイマイチなことはあえて話題にしなかった。気になっっていた事を訊いた。

「俺はまず心配ないとしても、小学生にこの川を渡らせるのはどうなの？ 大丈夫なのかな」

「うん。命綱付けるから。それに、あの子は準主役だからストーリー

「上どうしても必要なシーンなの。台本ちゃんと読んだ？ あなたはバスに乗り合わせてただけだけど、あの子は始めから出てたでしょ」

「え？ はい……」

その後船外機付きのゴムボートでスタッフの人が川の対岸に渡り、ロープを張った。続いて蒼惟と子役がゴムボートに乗せられ対岸へと運ばれた。足下はぬかるんでいて、急な斜面に鬱蒼と木が茂っていた。スタッフが二人の腰に命綱を結び、紐の端のフック型の金具をロープにカチリと留めた。子役がぼやくように言った。

「こんなの附けるとリアリティが無くなっちゃうんだよなあ」

「でも、危ないから附けないと駄目だよ」

蒼惟が言うと、子役は不服そうだった。不服そうと言うと可愛らしくも感じるが、ちよつとムツとした様子だった。

スタッフのゴムボートが対岸へ戻り、監督が合図をした。カメラが廻り始めた。先ず子役が川へ入り、続いて蒼惟も川へ入った。

見た目よりかなり流れが強く、ロープをつかむ手が滑りそうだった。加えて川底に大きな岩がゴロゴロ転がっていて、気を付けないと足首を捻りそうだった。蒼惟は胸元まで水に浸かっていたが、前に行く小学生は首まで水に浸かっていた。彼は小声で訊いた。

「おい、大丈夫か？」

小学生はふり返らず小声で答えた。怒っていた。

「話しかけないでよ。ちゃんとやってよ。NGになるでしょ……」

確かにもっともだと思った。この子の方がプロだな、と。彼が感心した時、急激に水かさが増した。この時雨は上がっていたが、上流では激しく降っていたのだ。突発的に。上流で降った雨で川の水位があがった。

## 五・「事故」

あつという間に足がつかなくなった。ロープが流れを受けて激しく躍った。つかんだ手が滑りそうだった。前にいる小学生に「大丈夫か」と訊いたけれど、答える余裕はないようだった。ちらりと見えた岸では皆慌てふためいていた。次の瞬間、小学生の頭が水の中に沈んだ。

大変だ、蒼惟は思ったが、彼の想定した事態より、事態はもっと悪かった。濁流の中浮かんできたその子の頭は、ロープからかなり離れた処だった。小学生は命綱を外していた。

蒼惟は余計な事は考えなかった。手探りで自分の命綱の留め金を外し流れに身を躍らせた。木原美奈の声が聞こえた。彼の名を叫んでいた。馬鹿だな、と思った。マジの濁流シーンになったのに叫んじゃ駄目じゃないかと。

靴を履いては上手く泳げなかった。何度も水の中に頭が沈みこんだ。仮令靴を履いてなくても、この流れでは泳ぐどころじゃなかった。水中で靴が脱げないようにしっかりと紐を結んでいた。今、それをほくことは出来ない。手で水をかいた。

泳いでいる感覚は無かったが時折靴底に触れる大きな岩を夢中で蹴った。急激に押し流されて運良く距離が縮まった。蒼惟は手を伸ばしその襟首をつかんだ。しがみつかれそうになったので後ろ向きに抱きかかえた。岸で歓声があがった。みんな馬鹿じゃないか、と思った。端役が人命救助するシーンを使えるわけないか、と気附い



た。使えるとしたらナント力大賞かなと思った。

左手で小学生を抱きかかえ、右手で水をかいた。けれど岸へ向かえなかった。流されるばかりで、思う方向へまったく進めなかった。小学生の頭が何度も水に沈んでいた。

船外機付きゴムボートが下流に回り込んでいるのに気附いた。彼のいる地点よりかなり下流。スタッフが二人乗っていて懸命に手をふっている。流されながらそちらへ向かった。

スタッフの差し出したオールをつかみ、体を引き寄せ、ゴムボートの縁のロープをつかんだ。抱きかかえた小学生をスタッフの手に渡した。小学生はゴムボートの上に引き上げられた。もう大丈夫だと安心した。ジョークのつもりで蒼惟は言った。

「今度会った時は俺の名前憶えとけよ」

小学生は水を飲んでいて返事が出来ないようだった。苦しそうな顔で彼を見た。

「忘れてたら承知しねえぞ」笑いながら付け加えた。

スタッフが急に険しい顔になり、彼の方へ手を伸ばした。

「蒼惟い！！」木原美奈の悲鳴が響いた。

スタッフの手が彼のシャツをつかんだ。その時何が起こったのか彼はまったくわからなかった。気附いた時は水中だった。シャツをつかんだスタッフの手は離れていた。流木が流れてきて体にあたったんだと分った。後頭部に鈍痛があった。上下感覚が失われていた。

肺に水が入った。一気に押し流されて川底の大きな岩に頭があたった。真つ白になり、火花が散ったように感じた。必死でもがき、水をかいていた腕が緩慢になり、やがて力なく垂れた。

その体が川底へ向かい流された。水が渦巻き、淵になっていた。その体に沢山の手が差し伸べられていた。彼は目を開いて一瞬だけ見た。濁った流れの中に人魚が見えた。何かの間違いだと思った。それが最後の思考の一欠けらだった。

流れが激む淵の底に神秘的な光の渦があった。人魚達はその光の中へ彼の体を導いた。その途端、淵自体消え去った。茶色い濁流が戻ってきた。まるで押し流されたように全て消えた。

少年は川面を見つめていた。階段状になされた護岸の石の上に、膝を抱えて座って。石の隙間に生えた菜の花が風に吹かれている。背後にはクムラギの高い石壁が聳えている。

城壁の外は危険だと知っているが、少年は時々ここへ来る。独りになりたくて。

しばらくの間そうやって水面を見つめていた。けれどずっとそうしているわけにもいかない。立ち上がった。眸に浮かんだものをぬぐい。壁の内側に戻る爲、川下へ向かって歩き始めた。

やがて分厚い木の門の前についた。番兵に声をかければ中に入れてもらえる。けれど少年は気が附いた。ずっと先の岸边に、何かあることに。ゆっくりと流れる水に体の半分を沈めて。

## 六・「ヴェセプタ」

小さな部屋で彼は意識を取り戻した。黒い板張りの床の上に布団が敷かれ、そこに寝かされていた。頭に包帯を巻かれていた。布団をはぐつてみると、奇妙な見慣れない寝間着を着せられていた。頭からすっぽりかぶって着る物らしく、丸首の衿には胸元まで切れ込みがある。身幅が広くゆったりした肌着。彼は体を起こして周りを見た。

漆喰の白い壁には両開きの木窓があり、開け放たれ夜風を入れている。外の様子は暗くてよく分らない。壁に古めかしい箱型の掛け

時計。文字盤には点が刻まれて数を表している。床の上に硝子の筒のランプがあつて優しい光を放っていた。

ランプ……。訝しく思った。ランプって……おかしいじゃないか。

ところが他に何があつたのか思い出せなかった。まったく言つて良いくらい記憶の中に無かつた。

アレレ、と少しパニックになつた。俺は確か溺れて。人魚を見て。しかしその前の記憶が無かつた。何故溺れたのか思い出せなかつた。

記憶を辿ろうとしてそれ処じゃない事に氣附いた。これまで自分が何をやってきたのか、これまでの自分の人生を一切思い出せなかつた。

俺は、。

記憶喪失という単語が頭に浮かんだ。背筋を冷たいものが走つた。記憶喪失という言葉と言葉の意味は憶えていた。言葉は、切れ切れながらいくらかでも浮かんだ。しかし意味を伴つたり伴わなかつたりした。

例えば名称の持つ具体的な姿が浮かばない。今、ランプを見て「ランプ」という言葉は浮かんだ。しかし、それ以外が浮かばない。関連すると思われる単語が幾つか臍に浮かぶが、それが具体的には何かということは真つ黒い靄の向こうにある。考えると頭がこんがらがつた。混乱していると、部屋の黒い木戸がそつと引かれ、一人の少年が入つて来た。

歳は十歳くらい。可愛らしい顔をした男の子で、彼が今着ている

のと似た形の上衣を着ていた。首元からおへそくらいまで衿のついた着物で、絹の飾り紐で衿を合わせている。丈は腰下までで、下には膝下丈のズボンをはいている。着物は松葉色で、目が三角の雀が、大きめの水玉模様のように刺繍で描かれていた。そういつた柄は何処となく目に馴染みがあったが、着物の形はまったく馴染みがないものだった。少年は彼の顔を見るとにっこり笑って言った。

「やあ、良かった。目を覚まされたんだね。お客さまは川で倒れてたんだよ。額に怪我してた。溺れたの？」

「あ、ああ……。そうなんだ……。でもよく憶えてなくて……」

少年は首を傾げた。

「お客さまは異国の方？ 何処から来たの？」

彼は正直にうちあけ、訊いた。

「実はまったく憶えていないんだ。ここはどこで、今は一体何年なんだ？」

少年は驚いた顔をして早口で言った。

「ここはクムラギ。タパタイラ（タパ・タイラー・タパ・大楽）さまの廟堂だよ。今は旧暦の二千年、聖女マナハナウラさまが冥界入りされて二年、つまり新暦の二年じゃないか。暦を憶えてないの？」

さっぱりだった。

「聖女……？ 誰なんだ？」

少年は目を丸くした。

「ひょっとしてお客さまは記憶喪失なの？」

「どうやら、そうみたいなんだ……」弱り切って答えた。

「名前も憶えてないの？」

「いや……」自分の名前は憶えていた。「セナ……。セナ・アオイだ……」。

少年は首を傾げた。そして言い直し、問い返した。

「アオイセナさまだね？」

「アオイ、セナ……」

「僕はユタミツキ（ユタ・ミツキーユタ・弥月）だよ。よろしくね。お客様が元気になるまで、僕がお世話するんだよ」

第一章 龍翅

一・「クムラギ（空の底）」

ユタミツキと名乗った少年はこう言った。

「きつとお客様は目がさめたばかりで記憶が混乱してるんだよ。ゆつくり眠ったら思い出すんじゃないかな」

そうかもしれないね、アオイは答えた。あまりそうは思えなかったが。

「僕は隣の部屋にいるから、具合が悪くなったりしたら遠慮しないで呼んでね。明日の朝、ご飯の用意が出来たら起こしに来るよ。その後、お廟の中を案内してあげる」

お廟、というのは耳慣れない言葉だった。さっきは廟堂と言っていた。同じ意味らしい。

「君は、ここの子供なのか？」

「うん。そうだよ」

「さっき言ってたタパタイラという人の子供？」

少年は笑って答えた。

「違うよ。ここでお手伝いしてるんだよ。お廟は僕みたいな子供が沢山お手伝いしてる。みんなは夜は家に帰るけどね」

君はどうして帰らないんだい、と訊こうとしてやめた。ひよつとしたら孤児かもしれないと思い。若しも自分の勤が正しくて、お廟というのが宗教的施設なら、孤児を引き取ることも充分考えられると思った。

「オビヨウってどんな所……？」

「お廟は皆が寄り合う所で神様を祭ってる所だよ」

「うーん……」

「じゃあ、お休みなさい、アオイさま。筒灯の消し方は憶えてる？」

「筒……？」少年の目線を追って、それがランプのことだと分かった。「いや……」

「そのネジを終わるまで廻すと芯が引っ込んで消えるよ。じゃあ、また明日ね」

ユタミツキ少年は部屋を出て行った。

アオイは倒れるように布団に仰向けになった。考え込んだ。お廟って何だ？ こういう所って普通、お寺って言わなかったっけ？ それにクムラギって何処なんだ？ が、そもそも自分が住んでいた町の名前が思い出せない。頭の中に霞がかかっている。さらに目にするもの全て、違和感を伴う物ばかり。

少年の装束。異質だった。しかし、なら自分がどんな格好をして



いたのか、それは思い出せない。ランプを使っていることもふに落ちない。

ランプを俺は使ってたか？ 消し方も知らなかったじゃないか。いや、それも忘れてしまっただけなのか。そもそも、旧暦って何か変じゃないか？ けれど、じゃあ何だったのかは、全く思い出せない。聖女が冥界入りとかも言っていた。新暦の二年と。それって、人間が生きたまま冥界へ行っただけという事か？ そんなのありえるのか？ ひょっとして紀元前にでも来たのか。

タイムトリップという言葉と言葉の意味は憶えていた。どうしてこんな下らない事は憶えているんだ、と少し腹が立った。

アオイは目を閉じた。まったく眠れそうな気はしなかったが体はくたびれ果てていた。無理にでも眠った方が良いと思った。少年の言った通り記憶も戻るかもしれない。全てとはいかなくても、何か思い出すかも知れない。

しかし閉じかけた目の端で、何かが動く気配を感じて身を起こした。そしてそこに居た者の姿を見て心臓が止まりそうになった。

開けっ放しの窓から、女の子が一人入ってきていた。歳は分らない。その身長なら五歳くらいだと思われるが、真ん丸いふくれっ面は五歳の子供には見えない。しかし、意地の悪そうなその顔に驚いたわけでも、窓から入ってきた事に驚いたわけでもない。その女の子は体が透き通っていた。

座敷わらしという言葉が頭に浮かんだ。

女の子は薄笑いを浮かべて彼の布団の側に立った。

「お前、座敷わらし？」

女の子は不思議そうな顔をして首を傾げた。それから肩を竦めてみせた。

「わたしはフィオラパって呼ばれてるわ」

「フィオラパ？」

「ネ又ファとかシルフって言ったら分かるかしら」

不思議な感覚に襲われた。耳に馴染みある名称。よく知っている気がする。けれどはじめて目にする。いや、初めて目にするのかどうかは分からない。なにしろどの部分の記憶が残りどの部分の記憶が消えているのかはつきりしない。会っているのに忘れているだけなのか……。

「じゃあ、お前は、大気の精霊……」

「まあね。名前は人間が勝手にそう呼んでるだけ。名前なんて私達はどうでもいいの。気分はどう？ ファフィーネイカのこと憶えてる？」

「ファフィーネ……？」

「ウンディーネよ。助けて貰ったでしょ」

「じゃあ、あれは……あの人魚はウンディーネだったのか……」

ムフフとフィオラパは笑った。

「俺は、あんた達に以前にも会ったことがあるのか？」

「ないわ」

アオイは少しがっかりした。もし会っていれば以前の自分を訊くことが出来た。

「実は、記憶がないんだ……」

フィオラパはにやつと笑った。

「ふふふ。心配しないで。はじめは戸惑うかもしれないけれど、少しずつこっちの事を学んでいけばいいわ」

「こっち……？」訝しい台詞だった。

フィオラパは意味ありげな笑みを浮かべた。

「あんたは呼ばれたの」

「呼ばれた……？」

「けどそれはあんたが望んだからでもあるわ」

「俺が……？」

「既に「定め」が始まっている。導きが始まっている。その導きが多い人間をからめとっている。あんたもその一人」

「導き……」

「ケイを預かってるの。今度会うときあげる。移動呪が使えるようにしてあげる。今日はくたびれてるみたいだから駄目よ。じゃあね」

フィオラパは窓から外へ出て行った。窓枠から下へ飛降りたわけではない。透き通った体が上方へ飛んでいった。

翌朝、ユタミツキ少年に揺り起こされた。

「まったく。アオイさまは寝ばすけだなあ。せつかく作った朝ご飯が冷めちゃうじゃないか」

アオイは「うーん」と呻きながら体を起こし、はつきりしない頭を振った。寝る前の事を思い出し、そしてやはり自分の過去を思い出せない事に気附いた。少し期待していただけにがっかりした。

「ほらほら。布団から出てください。畳んじやいますから」

ユタ少年に布団から追い出された。少年はぱたぱたと布団を畳み、押入れに押し込んだ。それから彼に着物を渡した。

「これに着替えてくださいね。その間に、僕はご飯を運んできます」

それは竜胆色の着物だった。車輪に龍の図柄。何処となく蜥蜴っぽい龍が、背中一面に描かれていた。たてがみや鱗などの線が筆で描いたように細かかった。首周りは詰め襟に似ていて、着物の前はへソの辺りまで衿が附いている。部屋を出て行こうとした少年を呼び止めた。

「なあ。ほら、俺が目を覚ました時、異国の人かつて聞いただろ」

「うん。だって奇妙な服を着ていたもの」

「その服は？」

「脱がせる時大変だったからお医者さまが鋏で切っちゃった」

「そうか……」

少年は出て行った。ぱたぱたという足音が遠のいた。アオイは渡された着物に着替えた。

袖を通してみて、どうやって前を合わせるのかなと思い、衿をめくるとその下に隠しボタンがあった。反対側の紐の輪っかを引つかけて前を止めると分かった。首元と胸元の二箇所の飾り紐を結ぶと衿が押さえられた。記憶はなかったが、何となく着方は分かった。下に穿く同じ色のズボンがあった。ズボンの丈は少年の穿いていたものより長かった。着物の丈も少し長く腿半ばまで隠れた。着物を着てズボンを穿くと後に細帯が残っていた。

「これは腰に結ぶのかな……？」記憶にないがそう思った。

着てみるとしっくりきた。目にした時の違和感は無くなった。着慣れた感覚。特に袖が開放的で気持ち良い。首周りも詰め襟というほど窮屈じゃない。しかも図柄が格好よい。「好いじゃないか……」。一人呟いてみた。

箱膳を抱えて少年が戻ってきた。着替え終わった彼を見てにっこり笑った。「やあ。ぴったりじゃない。良かった」。

箱膳を床に置き、その前に方形の毛皮の敷き物を敷いた。白い斑点が鮮やかな茶色い毛皮。鹿皮のようだった。

「さあ。ここに座ってください。でも、召し上がるのは少し待ってくださいね。僕のお膳も持ってきますから」

「一緒に食べるのか？」

「うん。だって、一緒に食べようと思って待っていたんだもの。あれれ？」少年はアオイの飾り紐の結び方を見咎めた。「衿の紐の結び方が違つよ。蝶結びじゃなくて、花結びにするんだよ」。

「花結び……？」そんな結び方は知らない。知っていたのかもしれないけれど。

「憶えてないの……？」

少年は、彼の前に立つと、手を伸ばし衿の紐をほどき、そして複雑な手順で結び直した。こんな結び方は絶対知らない、アオイは思った。

「これでよし、と」

綺麗な結び目が出来た。確かに少年の衿の結び目と同じ形だった。見栄えも良かった。

「じゃあ、ちょっと待っててね」少年はそう言い残してぱたぱたと出て行った。

アオイは毛皮の敷物の上に座った。はじめ胡坐をかいて座ったが、正座に座りなおした。箱のうえのお膳は、お粥が入ったお椀や、蓋のついた汁椀や、鮎の塩焼きが乗ったお皿など。ゴボウの漬け物が乗った小さなお皿もあった。汁椀は朱の漆塗り。他の器は白と茶の釉の焼き物で、文様は素朴な飛び匏文だった。粗野で野太い印象の器。

自分のお膳を抱えて戻ってきた少年は、アオイの座り方を見て言った。

「どうしてそんな儀式の時みたいな座り方してるの。それじゃ足が痺れちゃうじゃない」

「え……?」

「普通に座れば良いのに」

少年は箱膳を床に置き、自分の敷き物を敷いてその上に胡坐をかいて座った。アオイは首を捻りつつ苦笑して座りなおした。

「頂きます、と言って、並んで食べ始めた。汁椀の蓋をとると中は鯉こくだった。」

「へえ。鯉こくじゃないか。美味しそうだな」

アオイが言うと、少年は笑って言った。

「恋こく、って何言ってるのさ」

「え? これは鯉じゃないの……」

「恋? コエだよ」

「へえ……」

「コエってどんな魚だった? 考え込んでみると、少年は言った。」



「それに、食べ物を見て美味しそうとか言っちゃ駄目なんだよ」

「え？ そうなのか？」

「そうだよ。生き物を食べるんだよ。美味しいとか不味いとか言ったら罰が当たっちゃうよ。ただ黙ってありがたく頂くんだよ」

「そ、そうだな……」

確かにもっともな事だと思った。こんな基本的な礼儀作法まで忘れてしまっている自分を、多少情けなく感じた。

「あれね。アオイさまは箸の持ち方が全然じゃないか」

少年はまたしても見咎めた。

「え……？」

「こっやって持つんだよ」お手本を見せてくれた。

「こ、こっか？」

「違うよ。こっだよ」

「うーん。こっかい？」

「そっそっ」

「でも、難しい。食べ辛いな……」

慣れない持ち方でお椀と格闘する彼を見て、少年はにこにこ笑っていた。

「うーん。難しいじゃないか……」

牛蒡がつかめなかった。記憶は無いが、こんな持ち方は初めてするはずだと思った。鮎の塩焼きの身をほぐしながら訊いた。ふと、気になり。

「これは鮎だよな？」

「アユ？ 年魚だよ」

「ネン、魚？」

「そっだよ」

「うーん……」

それはどう見ても鮎だった。どうして違う名前なんだ？ 頭が混乱した。そう言えば精霊の名前も違っていた。シルフではなく……。

「実は昨日の夜、フィオラパが来たんだけど……」

「えっ!？」

世間話のつもりで言ったのに少年は目を丸くした。

「本当っ??？」

「あ、ああ……。え？ それって珍しいことなのか？」

「当たり前じゃない。タパタイラさまにお話ししなきゃ」

ユタミツキ少年はご飯を大急ぎでかきこむと、手を合わせご馳走様と言って立ちあがった。自分の箱膳を抱えてあわただしく部屋を出て行こうとし、戸の前で立ち止まりふり返った。

「ひよつとしてアオイさまは魔道師さまなの？」

「魔道師……？ いや」

記憶にない。魔道師っているのか、と思った。

少年は首を捻り「二十年前に此処に泊ったシユスローさまの前に現れて以来なんだ。フィオラパが人の前に姿を現すのは。勿論聖女さまは別だけど。憶えてないだろうから教えてあげるけど、シユスさまは大魔道師さまだよ。そうそう。ご飯を残しちゃ駄目だよ」そう言い残して出て行った。

アオイはフィオラパの言葉を思い出した。あの時解らなかつた言葉の意味が解った。移動ジュって移動呪って事だったのか。使えるようにしてくれると言っていた。じゃあ、俺は移動呪が使えるようになるんだ。で、移動呪って、何が出来るんだ？

## 二・「巫術師」

ユタミツキ少年に案内されて、黒い板張りの長い廊下を歩いた。軽い眩暈がしていた。少し熱っぽい感じも。額の傷の所為だと思つた。少年はふり返り「大丈夫？」と訊いた。「ああ」アオイは頷いて少し笑つてみせた。

「ここだよ」と少年が言つて、黒い引き戸を引いた。

そこはかなり広い板の間だった。祭祀場だと思われた。壁の一方に祭壇があつた。上から金色の飾りや珠が垂れさげられ、金色の香炉や燭台が並べられた奥に、神像が立っていた。雲の意匠の台座の上に、のたうつ太い蛇を踏みつけて立っている、手が六本ある神像。手前の二本の手を胸の前で合わせ、その後ろの手に二本の短い剣を持ち、残る二本の手を天に掲げている。見たことある気もしたが、異質な感じもした。

その祭壇の前に、五十代と思しき一人の人が座っていた。くすんだ苔色の柄無しの着物を着て、その上に白茶の道服をはおっていた。穏やかな目をした優しそうな初老の男性だった。

「タパタイラさまだよ」ユタ少年が言った。

アオイが頭をさげると、タパタイラは毛皮の敷き物をすすめた。アオイは座ろうとして、少し迷つた。正座するべきだろうか、と。しかし見るとタパタイラも胡坐をかいていた。安心して楽に座つた。

タパタイラは優しい笑みを浮かべ言った。

「アオイ殿。御加減は如何かな」

「ええ。まあまあなんですけど……その、憶えていないことが多くて……」

「うむ。記憶を無くしたと聞いておる。何かと困ることもあるうが、何も心配せずここで養生されると良い」

「ありがとうございます……」

相手の古めかしい口調に戸惑いながらアオイは頭をさげた。もつとも、古めかしいと感じる自分の感覚に自信はない。本当に古めかしいのか、それともこれが普通なのか。

「さて。フィオラパが貴殿の前に現われたと聞いたが……」

「はい。昨日の夜、眠る前に……」

「フィオラパは、貴殿に何を話した？」

「ええっと、定めが既に始まっている、と。それから、その導きが俺をからめとつたとか……」

タパタイラは眉間に皺を寄せた。

「なんと……」

相手が驚いた顔をしたことで、アオイはさらに戸惑った。

「あの……。何か不味かったですか？」

「タパタイラは難しい顔で考え込んでいたが、我に返ったように「いや、いや」と答えた。「不味くはない。どころか逆である。吉報ということかも知れぬ。他には何か話さなかったかね？」

「ええ。その……。ケイ？ を預かってる、と。今度それをくれると。それから、移動呪を使えるようにしてやるって」

「タパタイラは目を見開いた。隣にいたユタ少年も吃驚した顔でアオイの顔をのぞきこんだ。

「それ、本当っ？」

「アオイは戸惑いながら頷いた。

「あ、ああ。そうなんだけど。そんなに吃驚することなのか？」

「当たり前じゃない。アオイさまはほんとに何も覚えてないんだね。いい？ ケイというのは神霊が人間にくれる宝珠で、魔力を宿しているの。元素魔法が使えるようになるの」

「げん……。魔法……。？ 魔法って使えたっけ……。？」

「ユタ少年は呆れ顔をしてみせた。

「魔道師はみんな持つてるんだよ。ケイを。しかもフィオラパは移動呪って言ったんでしょ。移動呪が使える魔道師なんて滅多に居ないんだから。確か、今は誰も使えないんじゃないかな。シユスさまだって使えないんだもの」

「移動呪って何が出来るんだ……？」

タパタイラが説明してくれた。

「移動呪はツフガの用語でプレ・レイナと呼ばれる。プレは呪文、レイナは跳躍の意味。つまり、跳躍呪のこと。自分や、任意の人や物の位置を一瞬で変える術」

「え？ それって、跳躍というよりも……、それ、テレポーテーションですか？」

「てれば……？」

怪訝な顔をしたタパタイラとユタ少年。

「いや……。何でもない」アオイは口ごもった。そういつのつて確かテレポーテーションって言わなかったっけ？ 自問自答したが自信は無かった。

「フィオラパはそのケイを何者から預かったか貴殿に話したかね？」  
タパタイラに訊かれた。

「いえ。それはなにも……」

「うむ。渡される時に訊いてみると良い。「定め」に関わり、その導きが貴殿に及んでいるのならマアシナ様かも知れぬ」

「マアシ、ナ？」

隣りからユタ少年が口を挟んだ。神像を指差した。

「あれがマアシナさまだよ」

「へえ……」

「憶えてないの？」

「うん……。憶えてないみたいだ……」

タパタイラが説明してくれた。

「マアシナはツフガの言葉で月を意味する。月を司る神とも考えられているが、その神の身がラアテアの光を反射している故、ラアテアの月と呼ばれている」

「ラアテア……？」情けないことにそれもまた憶えていない名だった。

「うむ。ラアテアとはこの宇宙を満たす目に見えない光。万物の裡に宿る存在」

「あ、なるほど……」それってマナみたいなものかな……、そう思ったが同時に、マナって何だったっけ……？とも思った。

「思い出した？」笑いながらユタ少年が口を挟んだ。「じゃあ、ウポコポオは？憶えてる？」

「ウツポコポー？」

少年はプツと嘔き出した。

「ウポコ・ポオだよ。遠国ではサタンと呼ばれているよ」



「サタン？ サタンがいるのか？」

「当たり前じゃないさ。いるに決まってるよ」

アオイは少なからず眩暈を感じた。この人々はそれが実在することを当たり前のように話している。マアシナという神も実在してその神が人に魔法の石を与えと言った。しかし何故自分がそのことにこれほど驚きを感じるのか分からなかった。いて当たり前じゃないか……。

「それは万物を闇として支配する神……？ 人間が霊的な高みに上ることを妨げる存在……？」

「然様」タパタイラは笑みを含み頷いた。

「なんだ。ちゃんと憶えてるじゃない」ユタ少年が笑顔で言った。

「じゃアルシフアーも……？ いるのか……？」

「うん。でもそれは遠国の呼び名で、この地方の人はノアって呼んでるよ」

「ノア……？」それもまたはじめて耳にする名だった。けれど聞いたことがないという自分の記憶はあてにならない。意味は同じかも知れない。「それは遠い昔に墮天した光の犠牲神で、宇宙に散らばり人間の内なる個我となっている存在……？」

タパタイラは小首を傾げ興味深げに言った。

「ふむ。多少意味合いが違うようだが……何故かな……。遠い昔に

墮天した光の存在という点は同じ。しかしノアとは宇宙を彷徨う獯猛な光であり、人間の裡に自身の光を送り込んでいる解放の原理神のこと」

「原理……神……？」

「然様。宇宙全体に力を及ぼす神々を原理神という。ノアは解放の原理であり、ウポコ・ポオは闇の原理。名は古くからツフガ達がつ呼んできたもの……」

「あの……」 前から出てくる耳慣れない言葉の意味を訊いた。その言葉も憶えていなかった。「ツフガって何ですか？」。

タパタイラは頷いて教えてくれた。

「ツフガとは世俗の職業とは厳格に区別された特別職であり、ツフガにはいかなる政治権力も介入できない。ツフガとは魔導師と巫術師のことを言う」

「巫術師？ 巫祝ふしゆくですか？」 その言葉は知っていた。（巫術は原始的宗教形態であるシャーマニズムであり、巫術師とはシャーマンのこと。巫祝とも呼ばれる。）

「然様。私がこの廟堂の巫術師。しかし私は過去にある出来事があり、それ以来神霊を召喚できぬが」

アオイは相手の言葉を遮って問い返した。

「召神術が本当に出来るんですか！」

タパタイラは頷いた。多少怪訝な表情で。この若者は何故そんな

。当たり前前の事を訊くのだろう、とばかり。「然様。巫術師であれば」

アオイは酷く眩暈がしていた。頭の中が混乱の極みだった。額の傷も疼いていた。知っている言葉の数々。はじめて耳にする言葉でも名前が違うだけで知っているモノ。それらは存在して当たり前。名が在るのだから。でも何で俺はそれが存在することに、こんなに驚いているんだ……？

「大丈夫？ アオイさま。お顔が真っ青だよ」顔をのぞき込んで心配そうにユタ少年が言った。

「うん……、なんだか憶えてないことばかりで、……」

タパタイラが優しく言った。

「お疲れの様子。一度、部屋で休まれては如何かな。知りたいことがあれば、その後いくらでもお答えしよう」

「はい……」

頭をさげて立ち上がろうとしたが足に力が入らなかった。目が廻り、意識が白んだ。そのまま倒れた。

\* \* \*

目が覚めると、もといた部屋だった。再び布団に寝かされていた。真上にユタ少年の顔があった。心配そうにのぞきこんでいた。目が合うとにっこり笑った。

「良かった。目が覚めたね。急に倒れちゃったんだよ。憶えてる？」

「あ、ああ」笑ってみせたけれど、頭の中は相変わらず霞がかかったようだった。少年の隣りにはタパタイラも座っていた。優しい笑みを浮かべて言った。

「アオイ殿。体が回復するまで、まずはゆっくり休まれることだ。されば心の霧も晴れよう。ただ、少し事情が変わった。貴殿が定めに関係し、ケイを与えられるならば、どうか記憶が戻られても此処に留まり我等に力を貸して欲しい」

アオイは体を起こして訊いた。

「定めって、何なんですか……？」

フィオラパが言っていた。フィオラパがそう言ったことを話したら彼らの顔附きが変わった。しかし帰って来た答えは多少期待外れだった。

「定めの内容は、我ら人間には明かされておらぬ。その始まりにまつわる話は、また日をあらためてしてあげよう。今日は休まれるが良い。暇つぶしに読む読み物を一冊置いてゆこう。アオイ殿は神霊に興味がある様なので、神霊の位階に関する本を。ひよっとすると記憶が戻る助けになるやも知れぬ」

「ありがとうございます……」

しかしタパタイラが差し出した本を手にして、アオイは眉をひそめた。本は紐で綴じられていた。それも異質だったが、本当に異質だったのはそこではない。表紙を見て戸惑い、中をパラパラ見て心底弱り果てた。

「どうしたの？」

ユタ少年が訊いた。様子を訝しく思ったみたいだった。アオイは正直に答えた。泣きたい気分だった。

「文字を憶えてない。字が読めない……」

渦巻きや丸や三角や四角、それらと点や棒の組み合わせの文字。まったく記憶の中に無かった。少年は目を丸くして呆れ顔をした。見た。

「まったく。アオイさまはしょうがないなあ。僕が教えてあげるよ」

言葉と裏腹に嬉しそうな顔だった。

三・「浴室」

翌日、文字を覚えてくれるものと思っていたらユタ少年は朝ごはんの後姿を消した。彼の分と自分の分の箱膳を二つ重ねて抱えてはたばたと部屋を出て行って、それから暫らく戻って来なかった。

アオイは昨日よりずっと気分がすぐれていた。とは言え、相変わらず頭の中は霞がかかったようだった。切れ切れに浮かぶ言葉。辿ろうとすると霧の中へ消え去る。その繰り返し。ふと、家族の事が気になった。俺に家族はいたんだろうか？ 今頃捜しているんじゃないか。捜索願を出してないのだろうか、そこまで考えて、捜索願って何処に出すんだっけ と、首を捻った。

やがて少年は一人の男性を伴って戻って来た。

「お医者さまをお連れしたよ」にこにこ笑って言った。

「医者………？」

医者は六十代と思しき髭のお爺さんで、上品な薄茶の着物を着ていた。笑みを浮かべて言った。

「お加減は如何かな。旅の方」

「ええ。今日は割と。気分は良いんですが、やっぱり、憶えていないことが多くて……」

「うむ。聞いておる。それは時に任せるしかなかるう。今日は傷口を診て、ふさがっていれば抜糸してあげよう。どれ、診せなさい」

膝で立ち、座っている彼の頭の包帯をほどき、額の傷を診た。ふむむと頷いた。

「これなら今日抜糸できるわい」

ユタ少年が嬉しそうに横から口をはさんだ。

「じゃあ、もうお風呂に入っても大丈夫なの？」

「うむ。じゃが、長湯はいかんぞ」

「良かった」

少年は目を輝かせて、アオイに向き直り言った。

「じゃあ、後で浴室にご案内してあげる」

「浴室……?」

「やだなあ。アオイ様はこんなことも覚えてないんだね。普通、お廟にはふるまい用の浴室があるんだよ。お廟に浴室がなきゃ、家にお風呂がない人は何処でお風呂に入るんだい？」

「浴室って大きいの？」

「勿論さ。僕たちが沸かすんだよ。お手伝いの子供の仕事なんだ。僕は今アオイさまのお世話で外れてるけど」

「へえ……」

大きなお風呂に入るのは気持ち良さそうだった。アオイも思わず顔が綻んだ。

「さて。抜糸の前に……」

医者が、持参した木箱から葉っぱを一枚取り出した。千切ってきたばかりと思われる緑色の葉っぱだった。

「これを噛むのじゃ。痛むのが嫌ならば」

手渡された葉っぱを、言われるまま口に入れて噛むと、肉厚の葉からとてつもなく苦い汁が出てきた。「うげえ……」。思わず顔をしかめたアオイに医者は言った。

「我慢するのじゃ。噛んだことがないとは言わさぬぞ。多分忘れてるつもりだが、顎の感覚が無かった」

すぐに口が痺れてきた。さらに噛むと痺れが広がった。噛んでいくつもりだったが、顎の感覚が無かった。

「さて。もう良からう。横になりなさい」

医者は小さな鋏とピンセットを木箱から取り出した。アオイは言われたとおり横になろうとして、体まで痺れている事に気付いた。「あれれ？」と言いつつ床にごろつと転がった。咄嗟に手で支えようとしたが痺れていた。その様子を見て医者も少年も笑っていた。

ほんの数分で抜糸は終わった。医者は言った。



「おそらく傷跡が残ろうが、男の子ならば気にせぬことじゃ」

はい、と答えながらも気になった。彼自身はまったく困らないが、誰かに怒られそうな気がした。誰か口やかましい人がいたような気が。誰だっけ、首を捻った。

「さて。わしは帰るが、今宵傷が痛めばまたこの葉を噛むのじゃ」  
葉っぱを二枚、床に置いた。

「はい。わかりまひひゃ……ありえりえ？」舌がもつれた。

ユタ少年が笑いながら言った。

「クコの葉を噛んだんだもの。暫らく口が廻らないよ」

「ひょうなのか……」

「じゃあ、僕はお医者さまをお見送りするね。すぐに戻ってくるよ」

「うん……」

部屋を出る医者に礼を言ったがやはり口が廻らなかった。医者は笑いながら帰って行った。その後、二分と経たずユタ少年は戻ってきた。アオイは訊いた。

「今の葉っぴやはるんなろき噛むの？」

「ぶつ。何言ってるか全然分らないよ」

「今の葉っぴやはほんなとき噛むんら？」

「歯を抜く時とかだよ」

「へえ……」

「面白いからもつ喋らないでよ」

「うん……」

「お風呂の用意をして迎えに来るね」

「うん……」

少年はぱたぱたと出て行った。

アオイは何日ぶりなのか記憶にはないが、久しぶりに入るお風呂が少し楽しみだった。大きなお風呂だという。それは確かセントウと言っていたような気がする。ナントカセントウ。けれどお風呂がセントウって意味が分からないじゃないか、と思った。ヨクドウ、が正しい気がした。

ユタ少年は、同じ歳くらいの少年を連れて戻って来た。

「一緒にお手伝いしてる同い年のリュウミチモリ（リュウ・ミチモリ一龍・道守）だよ」

「こんにちは」リュウ少年はペコンと頭をさげた。

ユタの目は綺麗な二重だったが、こっちの少年は切れ長の一重だった。ユタと違って口数が少なく物静かな感じの少年だった。「お風呂から上がったらこちらにお召しかえ下さい」と着物を差し出した。広げてみると、くすんだ暗い灰緑色の着物で、花をつけた桃の樹に山鳩を配した図柄が描かれていた。

「しゅごい渋ひな。こえってタピヤしゃまがくえ……くれゆのら？」

二人とも噴出して笑った。ユタ少年が言った。

「まだ口が廻らないんだね。この着物も、アオイさまが今着ている着物も、近所の人が不用品を持ち寄った物なんだ。はい。これは肌着と手拭。石鹸や木桶は浴室にあるからね」

肌着と手拭を渡された。見ると二人の少年も着替えと手拭を持っていた。

「いつひよに入ゆのか？」

「みんなで入った方が楽しいでしょ」

二人の少年が先を歩き、浴室へ向かった。アオイは後からついて行った。やがてお廟の入り口と思われる場所に着いた。大きな両開きの木戸が開け放たれ、下置き場があった。

「浴室ってお廟のしょと（外）にあるのか」少し呂律が戻ってきた。

「うん。そうだよ。同じ敷地の中だけど」ユタ少年が説明した。

土間に見覚えのある靴があった。

「これは、……俺の……」

ユタ少年が笑顔で言った。

「そうだよ。アオイさまが履いていた靴。洗って干しておいたんだ。変わった靴だね」

「うん。鬼塚って言うんだ……」

「へえ……」

靴を見て懐かしい思いがした。目に馴染みのある物体。何故こんなに懐かしく感じるのか自分でも分らなかったが。

処が自分の靴は見覚えあつたが、二人の少年がそれぞれ下足箱から取り出して履いた靴はまったく目に馴染みのない物だった。短めのブーツのようであり、しかし筒部分がぶかぶかで、そこに毛皮の飾りがあしらわれている。

「それは……？」

「半靴ほつかだよ」

「ふーん……」

履いてみると、今着ている服に自分の靴は似合わなかった。少年達が履いている靴の方が似合っていた。俺はどんな服を着ていたんだろう。少し考えたがそれもまた霞の向こうだった。

それから、オニツカ。見た瞬間これはオニツカだと思つたが、ほんとにそんな名前だったのか。靴がオニツカつて意味が分らないじやないか。勿論、靴がホウカの意味も分からなかったが。

外に出ると掃除の行き届いた広い庭だった。玉砂利が敷かれていた。その向こうは白い塀。そして門。二人の少年は左手へ向かった。後にした廟堂と軒を並べるようにして、高い瓦屋根の大きな建物があった。それが浴堂だった。

木の格子が嵌った窓から、湯気と人々の楽しげな声が漏れ聞こえていた。白い土壁に沿って進むと、壁が途切れた。そこは吹き抜けの広い板の間だった。沢山の湯上りの人で賑わっていた。飲み物を飲んだり歓談したりして涼んでいた。そこを通り過ぎると広い入り口があった。廟堂と同じ、大きな両開きの木戸。開け放たれていた。広い土間に乱雑に靴が並んでいた。それを見てユタ少年は口を尖らせ、ちよつと生意気に言つた。

「まったく。今日の下足番は誰だい？ さぼってるよ」

リュウ少年が首を傾げて答えた。

「年上の子達じゃなかったかな」

二人の少年は散らかっていた靴を手早く両脇の棚に並べた。

「さあ。アオイさま、上がってください」

ユタ少年はちよつと得意げだった。その後も先頭に立って休憩所を横切り脱衣所へ案内してくれた。籠を持ってきて「これに着替えと脱いだ服を入れて棚に置いておくのです」と、物知り顔で説明してくれた。そのくらい憶えているつもりだったが、何も言わず笑って頷いた。

アオイは何となくこの少年の気持ちが分るような気がした。もし自分の想像が正しくて、この少年に家族がないのなら。

湯殿は広がったが想像していたほど広くはなかった。一体俺は何を基準にして想像していたのかな、訝しく思った。大きな湯船がひとつ、と言うのも物足りなかった。しかし、風呂に湯船があれば他に何が必要なのか、今ひとつ自分の期待していたものが自分ではめなかった。広い湯船の周りで皆体を洗っている、そのスタイルも違うような気がした。しかし、なら体は何処で洗うんだ？ と自問自答してもよく分らなかった。

三人で並んで湯船に浸かった。ユタはほんとに話し好きで色んなことを話した。リュウ少年は口数が少なくておとなしかった。けれど楽しそうだった。暫らく浸かるとユタ少年はこまっしゃくれた口

調でアオイを促した。

「さあ。アオイさまは長湯をしちゃいけないってお医者さまに言われてるんですから、そろそろあがらないと駄目ですよ」

アオイは苦笑いして、黙って従った。

それから三人湯船の側に並んで、体を洗い、髪を洗った。額にお湯がかかると、やはりまだ痛んだ。泡が沁みて痛かった。

髪を洗い終わり隣りを見ると、二人の少年はまだ髪を洗っていた。リュウ少年は上手に自分の髪を洗っていたが、ユタはへたくそだった。不器用に手を動かしていた。アオイは笑って言った。

「かしてみな」

「え……？」

「頭をこつちに出しな」

ユタは意味が分ったのか、おとなしく自分の頭を差し出した。アオイは石鹼を泡立て、少年の髪を洗ってやった。

処でさつきから彼は気になっていた。髪を石鹼で洗ってたかどうか。しかし石鹼で洗わなければ何で洗うんだ？ と自問自答しても、なにやら不思議なクチバシ付きの瓶が頭に浮かんだだけで、結局分らなかった。

髪を洗い終わりお湯で流してやると、ユタ少年は照れくさそうに「ありがとう」と言った。

風呂をあがって休憩所で涼んだ。そこは正式には飲食所と言うそうだった。気持ちよい風が吹きぬけていた。裏手の井戸の側に飲み物を用意した露店があり、水を張った桶に綺麗なラベルの瓶を沢山冷やしていた。

「僕達はお金を払わなくても貰えるんだよ」

ユタ少年はそう言って瓶を二本持ってきて、一本を彼に渡した。見慣れないラベルの瓶の中身はレモンジュースだった。

三人でジュースを飲み涼んでいると、近所のおばさんらしき人がユタ少年を手招きして呼んだ。何か頼み事をしているようだった。戻って来たユタ少年は言った。

「ちょっと用事を頼まれちゃったから僕は行くね。アオイ様はゆっくり涼んで行ってね」

それから浴室を出て庭を走って行き、見えなくなった。うまい具合にリュウ少年と二人残されたので、気になっていた事を訊いてみようかとアオイは思った。

「君とユタは仲が良いの？」

リュウ少年はにっこり笑って答えた。

「はい。ずっと以前から、同じ先生の所で剣の稽古をしてました」

「へえ。剣道やってるんだ」

「剣どー……?」



「あれ。何だっけ……。剣法？ 剣術？ いや、いや。それより、君もここで暮らしてるの？」

「いえ。僕は家に帰ります」

「じゃあ、ユタは……？ 家族がないの……？」

リュウ少年は顔を曇らせた。口ごもりながら言った言葉はアオイを心底驚かせた。ある意味予想していた通りだったが、その実、まったく想像できなかった答え。

「ユタは……二年前。お父さんもお母さんも……、妹も、蠻族に殺されて……、ユタも殺されそうだったところを、駆けつけた人々に助けられたのです」

アオイは目を見開いたまま暫らく口が聞けなかった。リュウ少年は目を伏せて黙っていた。

「蠻族……。蠻族って？ どんな奴等……？」

「小鬼族こまけぞうや蜥人せきにんです……」

教えてくれてもまったく分らなかった。そいつ等がどんな奴等でもそれはどうでもよかった。関係なかった。糞野郎に違いなかった。ユタの事を思った。いつも明るいその口調や笑顔を思い出し、見開いた目に涙が滲んだ。

「それ以来ユタは剣がまったく駄目で……。足が竦んでしまうようなのです……。二年経つ今でも、剣を握ることが出来ません……」

あまりにも悪意ある暴力の経験は、人の心を破壊する。怒りも憤りも奪い、生きる本能さえ萎えさせる。恐怖は、一度人の心をつくと容易には解放してくれない。

アオイは少年の心に刻まれた傷を思い、言葉を失った。何も言えなかった。膝頭を抱えて、顔を伏せた。目を擦った。

家族のいない少年が、記憶を失った旅人に親近感を感じ、世話を焼いてくれている、そう思っていた。ほぼそうだったけれど、まったく違っていた。甘かった。こんなこと想像できなかった。

四・「導き」

廟堂に戻ったアオイは、リュウ少年に案内してもらってタパタイラの部屋へ行った。タパタイラは文机に向かい書き物をしていた。彼が姿を現すと向き直り「入りなさい」と言った。リュウ少年は黙礼して立ち去った。

アオイは部屋へ入り、向かい合って座った。開口一番訊ねた。

「教えてください。蠻族とはなんですか」

タパタイラは一瞬口を噤んだ。口調から彼が何を知ったのか推測できたようだった。優しい声で問い返した。

「ユタから聞いたのかね？」

アオイは無言で首をふった。

「うむ……」

タパタイラは静かに頷き、教えてくれた。記憶を失っている彼に理解できるように、やさしく。

「それらは人に似た姿ながら、人とはまったく違う種族。人間には発声できない言語を喋り、程度の低い独自の文明を持っている。元々この世界に広く居た者達ながら、人に棲み処を奪われ、深い森の奥や山の奥に移り棲み、潜むように暮らしていた者等」

臃に思い描いていた姿をまったく裏切られた。人ではないという。

人でないなら、その姿がまったく想像できない。そしてもう一つ。凶暴で野蛮な奴等だとばかり思っていた。今の話の通りなら、人に全く非がないわけではない。

「処が今より二十年前、一人の愚かな人間が闇の原理神召喚に成功し、マヌシニの王となった。以来、その闇の霊力が世界の隅々にまで及び、蠻族が人を襲うようになった。今では蠻族はこの世界の至る所に潜み、徒党を組み、町や村へ攻め込んでいる」

「マヌシニの……王……？」

巫術師はやさしく説明してくれた。

「やはり憶えておられぬか。その者はもとは若き魔導師。世を恨み、数えきれぬ人命を犠牲に闇の原理神を召喚し、己を悪龍と化した。イロキノと呼ばれている。その禍々しい霊力を浴びれば、蠻族の如きは我を失う」

「それで蠻族が人を襲うようになったのですか？」

「然様」

「それは何処に？」

「はるか北方の凍原、カイガマテにいる。その地下深くに籠もり、世界を焼き滅ぼす術を修めようとしている」

「焼き滅ぼす……」

「うむ。その術、終末の焰が一たび灯されれば、どんな方法をもつ

てしても消しようがない。普通の焔ではない。万物を蝕み、万物を灰にしながら広がり続け、最後にはこの世界を蔽いつくす」

「じゃあ、こうしている間にも……」

「いや。いくら高い霊力を得ようと、人間であった者に容易く修めることの出来る術ではない。さらに、終末が近づけば妖霊星カイハアが怪しく瞬く。今はまだその気配はない。その時については国中の巫術師が占った。三十年、三十一年という答えもあったが、最も多かったのは三十五年後であった。悪龍イロキノ誕生は二十年前つまり、今より十五年後にそれが起こる可能性が高い。まだ少し猶予はある。とは言え、占術による答えであり、油断は許されぬ……」

「その龍は倒せないのですか……」

「倒せぬ。今はまだ……」

絶望的な言葉ではなかった。今はまだ、と言った。アオイは言葉の続きを待った。巫術師タパは言った。

「二年前に冥界入りした聖女マナハナウラが、マアシナの御子を宿し、産んだ。今、二人目を宿している。その子等であれば、龍を倒せる呪文と剣が使える。マアシナの霊力を宿す御子であれば、人間には使うことの出来ぬ呪文と剣が。その子等を受け取りに冥界へ入る為、今、五名の勇者が世界中を遁走している。冥界への扉を開く呪文の、呪文材料を集める為。アオイ殿。貴殿が定めに関係し、宝珠を与えられるならば、我等に力を貸してくださいさらぬか」

「俺が……、俺が役に立つんですか……」

タパティラは頷いた。

「貴殿が、今、この時に、此処に現れ宝珠を与えられる事は、紛う方無く定め導き……」

自分に何ができるのかわからなかった。自信など微塵も無かった。けれどその有る無しは関係なかった。俺に出来ることがあるなら。

「やらせて、やらせてください。俺にも」

双眸に涙を滲ませ、頬を震わせて言った若者に、巫術師は優しく頷いた。

五・「龍翅」

アオイが部屋に戻ると、ユタミツキ少年が待っていた。彼の姿を見ると嬉しそうに笑った。が、思い直したようにほつぺたを膨らませた。

「もう。何処に行つてたんですか。待ちくたびれちゃいましたよ」

当然のことながら、その顔を見ると少し戸惑った。「タパ様と少しお話ししてた……」。

「そうだったんですか」

疑う様子はなく、すぐに笑顔に戻った。見ると少年は鉛筆と紙、それから薄い本を持っていた。

「それは？」

「約束したでしょう。文字を教えるって」

「ああ。そうだったね。教えてくれるの」

「アオイさまはまったく覚えていないようなので、五歳の子供用の手習いの本からはじめます」

「うーん。ひどいなあ……」

しかし、いざ始めてみるとそれが丁度良いくらいだった。なにし

る全く記憶から欠落していた。少しやったら思い出すんじゃないかと実は内心想っていた。しかしその期待は見事に打ち砕かれた。やればやるほど、存在しない記憶の袋小路で右往左往する羽目になった。

それは、基本が四十四文字から成る表音文字。

先ずはじめにユタ少年は渦巻きと逆渦巻きを書き、「これが「あ」で、これが「わ」。「あ」は宇宙開闢の渦巻き、「わ」はそれが塊り地になったことを意味します」と説明した。「ただ、これは旧字で、普通の「あ」は、こう書きます」と言つて、円を描きその真ん中に点を打つた。三角の真ん中に点を打つのが「う」で、四角の真ん中に点を打つのが「お」だった。円の真ん中に縦棒を貫かせると「か」だった。基本となる円、半円、三角、といった図形に、加える点や棒の種類で分けて順に教えてくれた。

「あ。いけない。もう晩御飯の時間だ。急がなきゃ。今日はこれくらいにしましょう」

少年は手早く紙と鉛筆を片付け、「ご飯を貰ってきますね」と言つてばたばたと出て行った。

暫らくして少年は箱膳を抱えて戻つて来た。「お待たせしました」と笑顔で言つて、彼の前に置いた。大きなハサミの蟹が乗っていた。

「すごい蟹だね」

「うん。のこぎり蟹だよ」

いつものように一緒に食べるものと思つて箸をつけずにいると「



早く食べないと冷めちゃいますよ」と言った。

「ユタは？ 今日と一緒に食べないのか？」

「うん。僕はいいんだよ。今日はお腹が空いてないから。今日はこれで失礼します」

おかしい台詞だった。さっきお腹が鳴っていた。それで夕飯の間だと気附いたのに。アオイは全く理由も事情も分からなかったがこう言った。

「うーん。困ったな。実は俺もあまりお腹が空いてないんだ。半分食べてくれないか」

そう言うと少年の顔が嬉しそうに輝いた。やっぱりお腹が空いてるんじゃないか、と思った。後から知った事情はこうだった。夕飯の手伝いを忘れていた為、年上の子たちが意地悪してユタの分の御飯をあげなかった、という事だった。リュウ少年から聞いた。

「でっかいハサミだな」

「この道具で殻を割るんだよ」

「貸してみな」

殻を割り、身を出してやり、渡した。二人で蟹を半分ずつ食べた。淡泊な味ながら身が詰まっていて美味かった。アオイは思わず「へえ。美味しいじゃないか」と言ってしまう、またたしなめられた。

お膳にはラッパ型のコップも附いていた。これは？ と訊くと「

葡萄酒だよ」と答えた。「これは駄目だぞ」と言ってアオイが一人で飲むと、少年は口を尖らせて羨ましそうに見ていた。けれど楽しそうだった。

「のこぎり蟹も年魚も、大河ラーで獲れるんだよ」

「ラー？」

「うん。アオイさまはその岸辺に倒れてたんだよ」

「え、そうなのか……。じゃあ、俺はそこで溺れたのか……」

そこに行けば、ひよっとしたら何か思い出せるかもしれない、  
そう思っていると少年は言った。

「もうお元気になられたので明日ご案内してさしあげます。クムラギの街も」

その夜、寝る前にランプの灯りでタパタイラに貰った神霊の本を読んだ。教えて貰った文字の記憶を頼りに。まだ殆んど読めなかった。ぱらぱらとめくった。

首が二つある神鳥の絵があった。長い首の先にある鳥の頭は、龍の頭だった。絵の下の文字を読むと「ノア」と書いてあった。

首が何本もある黒い蛇の絵の下には「ウポコポオ」とあった。

牛頭の神の姿が描かれてあり、そこには「マウオラ」とあった。文章は途切れ途切れにしか読めなかったが、どうやら生命の誕生と死を司る神のようだった。

渦巻きの上に立つ女神の絵があり、「ヴェセプタ」とあった。同じく途切れ途切れに読み下した内容は、冥界などの異界へつながる扉を開く神のようだった。

「勉強熱心じゃない。でもその本子供向けなのよ」

突然の声にふり向くと、窓枠にフィオラパが腰掛けていた。透き通った体で。もう驚きはしなかった。待っていた。

「ケイを持って来てくれたのか」

フィオラパは、すんと床の上に降りた。それから彼の側まで歩いてきた。

「せつかちな人は嫌い」

「事情が変わったんだ。ケイが欲しい」

「それでどうするの？」妖精は意地の悪い笑みを浮かべた。

「それで何が出来るの？ あんたに」

「それは……、」アオイは言葉に詰まった。「分らないけど……でも、何か出来るからくれるんじゃないのか？」

「うふふ。その通りよ。慌てないで。説明しなきゃいけない事が山ほどあるんだから」

フィオラパは手を開いた。その手の平、その五センチほど上の空間に、碧色の石が現れた。大きさは直径二センチくらい。表面に朱色がまだらに走っている。中心に孔が穿たれている。

「これがケイ……？」

「そう。あなたのケイ。で、どうする？ 普通は首にかけるの。力を高める爲に水晶とか色んな石と一緒に。でもあなたの場合手首でもいいわよ。どっちがいい？ 首と手首と」

考えてもどちらが良いか分るはずもなかった。

「じゃあ、手首に……」

「分ったわ。左手を出して」

アオイが手を出すと、フィオラパの手のケイが消えた。同時に彼

の手首に現れた。数珠のように紐に通され。

「紐はわたしからのサービスよ。後で好きな石を加えるといいわ。じゃあ用意はいいかしら？」

「用意……？」

「今から注意事項を沢山言うから。しっかり憶えるのよ。先ずこのケイの名前」

「名前があるのか？」

「勿論。どのケイにも名前があるわ。このケイの名前は「龍翅<sup>リュウシ</sup>」。  
つまり龍の翅<sup>はね</sup>」

「龍の翅……」

「それから、このケイはあんたにしか使えない。もしあんたが死んだら一緒にお墓に埋めてもらうといいわ。遺したって誰にも使えないもの。そこが先ず普通のケイと違う。」

「それから、このケイは既にプレ・レイナ（跳躍呪）を宿している。普通、ケイは与えられた時、何も宿してないの。対応する元素とか、宿せる呪文の数とか、色々決まりがあるだけで。巫術師か魔導師が呪文材料を調査して、初めてケイに元素魔法が宿るの。その点これは、お届けしたその日から使えますって奴よ。そのかわりこのケイは他の呪文を宿せない。タパタイラに言っついて。調査したって無駄よって。」

「プレ・レイナの呪文文言は「フル（羽）」。左手に印を結び、移

動先を目線で指定して唱えるの。他の元素魔法は右手を翳して呪文効果の対象を決めるけれど、プレ・レイナは目線だけで決まる。あんたが睨み据えた先にあんたが跳んじゃうわけ。」

「結ぶ印の種類は二種類。月の位置によって使い分けるの。それはタパタイラにでも訊くといいわ。ここまではいい？ 憶えたかしら」

「あ、ああ……ちょっと待って」

「待つてあげない。これから先はあんたに関すること。」

「普通、プレ・レイナは熟練すれば自分以外も跳ばすことが出来る。その場合跳ばしたい物や人に右手を翳して、跳ばす先の空間を睨み据えて唱えれば良いの。でも、あんたの場合それは出来ない。いくら上達してもあんたが移動させられるのは自分だけ。」

「でもがっかりすることないわ。自分自身の移動に関しては他の誰よりも勝れてる。頭抜けてる。桁外れ。いっぱい褒めちゃうけど。あんたにこのケイが与えられるのは、それが理由。ざっと見廻してあんたが断トツだったってわけ。頑張っちゃうといいわ。じゃあ、あんたの魔力の経路を開いてあげる。目を閉じて」

「え……。ちょっと待つて。もう一度」

「駄目。目をつむりなさいったら」

フィオラパは手の平を彼の頭に翳した。アオイは諦めて目を閉じた。

「あんたの経脈はまだ閉じている。開いてあげる。クンダリーニを

上昇させてチャクラを回転させちゃうの。とっても幸せな気分になっちゃうから覚悟するといいわ。普通はとっても修行しないと人間には起こらない事。悟者の扉が開かれる瞬間でもあるわ。でも、今回は自力で修行したわけじゃないからそうはならない。幸せな気分にはなっちゃうけど。はじめ怖いくらい進っちゃうわよ。いくいくって感じ。なに？ わたしは子供じゃないのよ。人間でもないけど。分るように説明してやったの。言ってみれば、そうね。人間打上げ花火。じゃあ、いいかしら。体を楽にして。大きくゆっくり息をして。それが始まって怖がっちゃ駄目よ。抵抗しないで身を任せるの」

次の瞬間、体の中を何かの流れがジェット気流の様に吹きぬけた。それが起こった瞬間恐怖した。意識を根こそぎ消し飛ばされそうに感じた。しかし嘔きあがった。目の裡に光の波が押し寄せ脳内を満たし頭頂から抜けた。自身の意識まで共に抜け、成層圏まで打上げられたように感じた。目の裡に星が瞬いていた。意識も体も炭酸の泡になったように感じた。

驚き、星のちらつく目を押し開くと、妖精は既にいなかった。

「おい……。いないのか……？」

返事はなかった。気配も。開け放たれた窓から月明りが静かに差し込んでいた。ケイを与えてくれたのがマアシナかどうか、訊きそびれた。しかし。

アオイは布団に倒れこんだ。目を閉じた。不思議な感覚が続いていた。星々に包まれている感覚。宇宙を感じ、宇宙のほうも彼を知っている、彼の存在を認識している、そう感じられた。これで移動呪が使えるのか、彼は思ったが思考は途切れ途切れだった。い

つしか、そのまま眠ってしまった。



翌朝、辛うじて憶えていた「フィオラパが早口で言った説明事項」を全てタパタイラに伝えた。タパタイラは話の途中で何度も首を捻り、ううむ、と唸った。

「変ですか？」

話し終わり訊いてみるとこう言った。

「いや。フィオラパが既に貴殿に伝えたとおりの事。貴殿にしか使えぬ事、既に呪文を宿した状態で人に与えられること、全て異例の事。ケイは一度人にもたらされれば魔道師の師から弟子へ継承されてゆくもの……。やはり貴殿は、今という時に必要とされ、定めのために来られたとしか私には思えぬ。ただ、少し分らぬのは、自分以外を移動させられぬという事。その術をどう使うのか……」

それはアオイにも疑問だった。他にどんな元素魔法があるのか知らないが、ただ移動するだけの魔法しか使えないのならば、あまり役には立たないような気がする。ともあれ「印」について教えてもらった。

「元素魔法は元素の力を借りるものながら、魔力を開放する為には月の力を借りる。結ぶ印の種類は二種類。月の位置によって使い分ける。月の軌道「白道」と、太陽の軌道「黄道」が交わる点が空に二つある。それぞれ龍頭点りゅうとうてんと龍尾点りゅうびてんと呼ばれる。呪文を唱える時、月が龍頭点を通り過ぎ龍尾点へ向かっているならば、龍尾の印を。龍尾点を通り過ぎ龍頭点へ向かっているならば龍首りゅうしゅの印を結ぶ。龍

尾の印は、親指を折り、他の指は立てる。龍首の印はその逆。親指を立て、他を折る」

「今はどちらですか？」

「龍首だが……」

それを聞きアオイは立ちあがった。タパタイラとユタ少年に背を向け、大広間の端を睨み付け、身構え、印を結び、唱えた。

「フル……、」

微動だにしなかった。全く何も起こらなかった。慌ててもう一度唱えた。

「フル……、あれれ？」

狐につままれたような気分だった。昨日確かに妖精に会った。魔力の経路とやらも開いてもらった。あれは夢じゃなかった。印を結んでフルと唱えれば跳ぶはずだった。

ふり返るとタパタイラは驚きもせず微笑んでいた。隣りのユタミツキ少年もにこにこ笑っていた。

「何故でしょう……？」

タパタイラは答えた。

「不思議は何もない。ケイを佩び、印を結び、呪文を唱えたからと言って、すぐに誰でも結果が出るものではない。例えば、強力な焰呪を宿したケイを師から授かった弟子が、その焰呪を使えるかと言

えはそうではない。もっとも初歩的な焰呪しか使えぬか、または、それすらもままならぬのが普通。修業して師と同じ焰呪を修めることが出来るかと言えば、一生叶わぬこともある。あるいは、師の焰呪とは別種の焰呪に成長することもある。ただ、アオイ殿の場合は跳躍呪が使える事は約束されておる。既に法力の経路も開かれておる。焦らず試みられよ。一度使うことができれば体内に道ができる。されば自在に使えるようになろう」

「うーん……。そうなんですか……」少しがっかりした。少しではなくかなり。それはつまり言ってしまうえば、何時の事やら分らぬ、ということ。

意気消沈、といった感じのアオイに、ユタ少年がにっこり笑って言った。

「さあ、アオイさま。出かける用意をしましょう。リュウのお父さまのリケミチモリ（リケ・ミチモリーリケ・道守）さまがご一緒してくださいさるそうです。クムラギの町を見物して、大河ラーまで行ってみましょう。きつと気分転換になりますよ」

七・「クムラギ見物」

竜胆色の着物に着替えて廟堂の入り口で待っていると、リュウ少年が父親を伴って現れた。優しそうなお父さんといった感じの三代後半の男性だった。落ち着いた松葉色の上等な着物を着ていた。アオイの顔を見ると、にこやかに笑って頭をさげた。

「リュウの父です。息子がお世話になってます」

偉ぶった処がない気さくな感じの挨拶に、アオイも思わず笑みが浮かんだ。頭を下げた。

「セナ、ええっと……アオイセナです。はじめまして」

「リュウからお話しは窺っております。フィオラパがケイをくれたと」

「はい。でも、……実は、まだ……」

アオイが説明しようとする、隣からユタ少年が全部詳しく説明してくれた。記憶が戻らないことから、呪文が失敗したことまで。アオイは苦笑したが、ミチモリ氏は一々感心して頷いていた。話を聞き終わるとミチモリ氏は言った。

「どうかこのまま此処に暮らし、我等に力を貸していただきたいものです。奇妙な身なりの旅人が何処からともなく現れ、人々に科学や医学を教えたとか、大きく歴史を動かしたとか、そういった昔話

や伝説が、この国や西国には幾つもあります。ひよつとしたらあな  
たはそういった人の一人かもしれません」

「いや、俺は……。そんな話があるとは吃驚ですが……。でも、  
俺はとても……」

精霊が現れたことやケイを貰ったこと、全て異例の事らしいと解  
っているが、自分に何か大きなことができるとは到底思えない。し  
かもフィオラパが与えてくれた跳躍呪は自分を移動させるだけ。た  
だそれだけの術で、何かに大きく貢献できるとも思えない。何かと  
世話を焼いてくれる家族のいない少年の爲に、何かできるかも知れ  
ないと思っていた。ケイを貰えば自分が大きく変わるかも知れない  
とも思っていた。しかし今の処期待外れの結果だった。

「さあ。参りましょう。ご記憶が無いのなら、きっと驚くことばか  
り。まずは街の大きさに驚かれませぬように」

ミチモリ氏にはこやかに言って皆を促した。今日、町を見物に出  
かけるのは、アオイ、ユタ、リュウ少年、そしてリケミチモリ氏。

門へ向かって歩く後ろ姿を見て、アオイはリケミチモリが左足を  
少し引き摺っている事に気付いた。義足かも知れないと思った。踝  
まで隠す丈の長いズボンを履いていたから。けれど気付かないふり  
をした。

二本の太い柱の上に横木を渡した屋根のない門。二人の少年が門  
を開いた。一步踏み出し、そして、目の前に広がった光景に息を飲  
んだ。あれれ、というのが正直な感想だった。一体自分が門の外に  
どんな光景を思い描いていたのか疑問だった。どんな光景を予想し  
ていたのかまったく見当もつかないが、多分その何れとも違う光景  
が広がっていた。

お廟がこういう建築様式なのはお廟だからだと思っていた。しかし目の前に広がっているのは似たような建造物。それがずっと目に見える限り道の両脇に続いていた。黒い柱に白い土壁、黒い瓦屋根の低層建造物。二階建て、ないし三階建て。それらの屋根の向こうに、お廟にあるような高樓が顔をのぞかせている。

ここは、。目を丸くした。知らない町、。どころではない。しかしそもそもどんな街の姿を知っていたのか、今となっては分らない。それは霧の向こう側だった。戸惑い。混乱。さらに。広い道を行き交うのは、人と……。

「おい、おい、あれ。牛??」アオイは隣りのユタ少年の肩を叩いた。

少年は笑いながら答えた。

「やだなあ。アオイさま。牛に吃驚しなくても」

「え? え? でも、牛が歩いている……」

「牛は普通歩きますよ。走りません」

「でも、何で牛が……」

「牛車うしぐるまなんだから、牛が牽ひかなくて何が牽ひくの」

人と一緒に牛が歩いていることが何故こんなに違和感あるのか、自分でも不思議だったが納得できなかつた。だけでなく、牛そのものに強い違和感があつた。

「牛つて、鼻に角があつたっけ？」

ユタ少年は呆れ顔で首を傾げた。

「鼻に角が無ければ一体何処にあるって言うの？」

問い返されると記憶の袋小路で同々巡りするだけだった。しかしほんの数分も歩かないうちに前からやって来たもの。

「あれ、あれ、あれおかしくないか？ あの馬」

皆、不思議そうな顔をした。ユタ少年が言った。

「何処もおかしくありませんけど……」

それは足の長いスマートな馬だった。毛艶も良く美しかった。記憶にある姿よりも、心なし首がしなやかに感じた。クネツとしていた。しかしそれはよいとしても。

「頭の上に羽飾りみたいなのがある。何だあれ。付けてるのか？」

「鶏冠とんがが不思議なの？」

「鶏冠？ じゃあ生えてるのか？ 馬に鶏冠が？」

素っ頓狂な声をあげるアオイに、ユタ少年は首を傾げて言った。ちよつと生意気に物知り顔で。

「そりゃあ、鶏冠竜と同じ先祖を持つんだから、鶏冠があつて当たり前でしょ？」

「鶏冠、竜？ りゅう？」全く耳に馴染みのない動物の名前。竜は穏やかじゃなかった。

「やだなあ。毎日鶏冠竜の毛皮に座ってたじゃないですか」

「え？ え？ あれ、鹿皮じゃなかったのか？」

「鹿？ 鹿も鶏冠竜の仲間ですけど、あれは鶏冠竜の毛皮ですよ」

「へ？ へ？」

アオイは頭の中が渦巻いているように感じた。自分は一体何を常識と思い、何を知っていたのか。牛の鼻の上に角があって、馬の頭の上に鶏冠があったのか。竜ってゴロゴロいるのか。口ぶりから言ったらゴロゴロいそうだった。しかも、鹿が竜の仲間って変じゃないか……、鹿が竜の仲間……。

少年は笑って言った。

「犬やネコを見ても驚きそうですね」

道端に犬が寝そべっていて、白い塀の瓦の上に猫が寝そべっていた。驚かなかった。何の変哲もない普通の犬と猫だった。そこに記憶の齟齬は無かった。

「いや。これが犬で、あれが猫で、それはちっとも変じゃない……。でも、牛と馬は変なんだ……」

納得いかない様子の彼を見て、皆不思議そうな顔をしていた。



リケミチモリ氏は暖簾の下がった一軒の家の前で立ち止まった。暖簾をあげ、中を覗きながら手招いた。アオイにも覗いてみるように促した。

「ここは刀剣の鍛冶屋です。クムラギの剣は切れ味が良く頑丈なことで有名です」

覗いてみると、土間の竈に赤々と火が熾され、上半身裸の男が二人、鎚をふるい鉄を打っていた。その光景は見覚えがあった。

「こういつた鍛冶屋が、町の至る所にあります」

処が、鍛冶屋は見覚えあつたが、製品の剣を見てやはり違和感を覚えた。

「ここは刀剣を扱う商家です」

ミチモリ氏に促され入った店内には、ずらりと剣や槍が並んでいた。槍などはアオイはよく分らない。何を分っているのか自分でも定かでないが。こういうものだと思つた。違和感はなかつた。

しかし、剣。それは剣だつた。直刀。つばは随分小さく感じた。彫物の無い単なる丸つば。柄は染色した革を綺麗に巻いている。そしてほぼ全ての剣の柄頭に環状の飾りがあつた。環の中に、龍や魔物の意匠の彫物。

ミチモリ氏は一本を手を取つて言った。

「これなどは上等な一振りです。鞘も上品な白造りで。帯取り金物の造りも大仰でなくて実に良い」

鞘を抜いて見せてくれた。両刃だった。当然だとアオイは思った。両刃でなければおかしい。柄頭に環のある直刀ならば、当然、両刃。これは、剣（つるぎ）。じゃあ、刀は？

アオイは店内をぐるりと見廻しても見つけられず、ミチモリ氏に訊ねた。

「片刃の湾曲刀……って、無いのですか？」

ミチモリ氏は、はたと首を捻った。

「いちじるしく湾曲した幅広の刀を使う異民族もいますが……。この近辺ではあまり見かけませんね」

うーん、とアオイも頭を捻った。彼が考え込んでいる様子を見て、ミチモリ氏は言った。パツと顔を輝かせ。

「もしや、アオイ殿はその異民族の出身では？」

「いえ。それは無いかと……」

さつきから脳内で石ころのようにコロコロ転がっている朧な記憶。それに、いちじるしく湾曲した幅広の刀、は符合しなかった。

その店には他に、鉄杖（てつじょう）、鉄鞭、檜の木の六尺棒、鎖に分銅や鉄球を附けた物、斬馬刀という銚（しやう）、などもあった。鉄杖や檜の棒は雑多に並べられていた。高そうな斬馬刀は、客の手の届かない奥の壁に飾られていた。

その後、様々な職工の仕事振りを覗きながら町を歩いた。ざっと並べると、刀剣関係では、尻鞘（毛皮の鞘飾り）を作る職人、つばを作る職人、鞘を作ったり柄の装飾をする職人、生活用品関係では、木桶を作る職人、銅鍋を作る職人、薬缶やかんを作る職人、服飾関係では、靴を作る革職人、布に絵入れする絵師、刺繍の針子、など。

ミチモリ氏は案内しながら言った。

「此処クムラギは職工と武人の町と言っても良いでしょう。職工の熟練者は、地位が高いのです。なにしろこの町の産業の基幹ですからね。今見てきたような工房は全て町中にあります。町外れには大きな工場が沢山あります。硝子工場や、製鉄所、など」

立派な構えの門の前でミチモリ氏は立ち止まった。門の内側に広い庭があり、大きな桶が沢山干してある。ふり返りにつこり笑った。

「ここは酒蔵です。アオイ殿はいける口ですか？」

「いえ……。俺はあまり……」

ミチモリ氏は少しがっかりした顔になった。

「葡萄酒を造っているのですか？」昨日の夜、食事に附いていたことを思い出して、アオイは訊いてみた。

「いえ。この辺りは穀物で造る酒です。葡萄酒は西方の交易都市ラエモミが名高い産地です」

その隣はまたまた大きな立派な建物。しかし酒造と違い扉も門も無く、建物自体が通りに面していて、大きな木の看板をかがけていた。

「ここは版屋です」

「版屋？ ハンコ屋ですか？」

ミチモリ氏は何も言わずにつこり笑い、先に立ち中を見学させてくれた。印刷所だった。ズラリと並んだ机に何人も人がいて、活字を組んでいた。大きな機械があり、太ったおじさんが、大きなハンドルをクルクル廻していた。印字された紙がパリパリと口から出ていた。

「プアロアから買い入れた最新式の印字機です。ハンドルを廻すだけで何枚でも印刷できます」

「へえ……」時間がかかって大変ですね、口から出かかっていた言葉をのみ込んだ。若しも言っていたら相手が気分を害する処だった。第一、何を基準に時間がかかって大変と思ったのか、自分でも分からない。

「プアロアの機械技術は進んでいます。そういった技術ではプアロアに適いません。時計なども」

「プアロアって何処なんですか？」

「ラエモミと同じく西方にある大きな町です。ラエモミの北には広大な平野が広がっています。その北端、山岳地帯の手前にある町です。此処クムラギとラエモミとプアロアで三都と呼ばれています。」

この地方で最も繁栄している自由都市です」

棚に見本らしき本が並んでいた。それらは紐で綴じられた物ではなく、製本された物だった。アオイの目にも馴染みがあった。ユタ少年が言った。

「こういう本はとっても高いんだ。欲しいけど……」

アオイは一冊手に取ってみた。それは百科事典だった。開いたページに鹿の絵があった。頭に羽飾りのある……。横から覗き込んでユタ少年が言った。

「これが鶏冠竜だよ」

「へえ……」

あえてもう何も言わなかった。

町中に時々高い石の壁が聳えている。街並みを遮り。大きくて頑丈な分厚い門がある。ミチモリ氏が説明してくれた。

「これは古い防壁です。つまり昔の町はここまでだったわけですよ。その後、広がって新しい壁ができ、しかしまたさらに広がり、それを繰り返して今の姿になったのです。往來を妨げないように、道の通る場所は壁が壊されていたのですが、蠻族の襲撃が激化して、門が造られました。半鐘が鳴ると門は閉ざされます。お気を付け下さい」

その門を何度もくぐりながら町を見物し、幾つ目かの門の先に、工場群が広がっていた。木造ながら大きな建物。高い屋根。外観は今まで目にした建物よりずっと安普請。土壁ではなく、黒塗りの板壁だった。道沿いに製品と思しき大量の瓦や鉄の筒などが積み上げられていた。

飲料工場らしき建物の前の路傍に、王冠が沢山落ちていた。「うわ、宝の山だよ」。二人の少年は目を輝かせて拾い始めた。ミチモリ氏は少年たちをそこに残し、一軒の工場にアオイを案内した。「ここは私の所有している硝子工場です」。

建物の板壁は隙間だらけで、中に熱がこもらないように工夫していた。中に入るとただだっ広く、天井が無く、煤だらけの太い柱がむき出しになっていて、建物の中央に円筒形の窯があり坩堝が赤い口を開いていた。窯を取り囲むように何台も作業台があり、職人達が坩堝から融けた硝子を鉄の竿で巻き取り、吹きあげては、作業台へ運び、吹きあげた硝子の首を絞っていた。台の上で竿をコロコロ転がして、火箸を用いて。

「これは見たことがあります」

アオイが目を輝かせて言うと、ミチモリ氏は怪訝な顔をした。

「ほう……しかしそれは奇妙。硝子工場のある町などそんなに多くはありません。と言うよりも、この地方では此処クムラギだけです。アオイ殿は一体何処から来られたのでしょうか……」

「そうなのですか……。じゃあ、硝子工場のある町を探し歩けば、自分の住んでいた町にたどり着くかも知れませんね」

「うーん。ですが……」ミチモリ氏は首を捻りつつ言葉を濁した。

その後、今朝窯出した製品を見せてくれた。竹籠が幾つも並んでいて、白い煤にまみれたコップが沢山無造作に入っていた。一つ手にとってみた。丸尻の花型のコップ。陶器のように肉厚でぽってりしていた。そのくせ手取りは軽やかで、ずしつと来るほど重くはなかった。

「いいですね。民芸硝子という奴ですね」

何気なく言うと、ミチモリ氏はまたまた怪訝な顔をした。

「みんげ……？」

アオイは戸惑った。そのコップを見て頭に浮かんだ言葉を言っただけだったのだが。

「ええっと、その……、ビードロとか……言いませんか？」

ミチモリ氏はさらに不思議そうな顔をした。

「いえ。硝子の事をそんな風には言いません。しかしするとアオイ殿が暮らしていた町は、硝子工場があり、硝子の事をびーどると呼ぶ町……かも知れませんか」

「あ、そうですね」

アオイは顔を輝かせたが、リケミチモリはしきりに首を捻った。

「しかし私の知る限り、硝子の事をそんな風に呼ぶ地方はありません。西国へ行っても。しかも、言葉の問題があります。アオイ殿が今喋っている言葉。当然の事ながら、私達の地方の言葉です。西国へ入れば言葉が変わります。それより遠くの地方はさらに」

「うーん……。じゃあ、有り得ませんね。東の方には何も無いのですか？」

「東方には、昔この地方を治めていた旧王朝の町があります。それより東は広い海です」

「うーん……」

考え込んだアオイに、リケミチモリはにっこり笑って言った。

「さあ。もうお昼をとくに過ぎています。防壁を出て大河ラーを見物し、廟堂へ戻りがてら何処かで食事をしましょう」



建物を出ると、二人の少年は硝子工場のゴミ捨て場で、色硝子の欠片を拾い集めていた。見ると、粉々になった坩堝や煉瓦の欠片に混じって、色硝子の小さな塊が沢山捨てられていた。アオイも一つくらい記念に拾おうかなと思っていたら、ミチモリ氏は少年達を促してサツサと先に行った。少し残念だった。

後でユタに貰えばいいか、そう思いながら後を附いていった。ミチモリ氏は前方に見える門を指して言った。

「これが一番外の防壁です」

一際高いその壁をくぐると、一瞬湖と見紛うほどの広い川に面していた。岸辺は階段状に石の護岸がなされ、ひたひたと静かな波が寄せている。

「これは……、違う……」思わず呟いた。

「何が違うの？」ユタ少年が顔を見あげて訊いた。

「俺はほんとにここに倒れていたの？」

「うん。もっと下流だけど。僕が見つけたんだよ」

「うーん……」

人魚を見たときの記憶。速い進むような水の流れ。茶色い濁流。頭に残るその一瞬の光景と、目の前の川はまるで一致しなかった。

「その時は雨が降って濁流になっていた？」

「いいえ……」

「この川に水の精霊……なんだっけ？ ファファイ……」

「ファファイネイカ？」

「そう、それ。ファファイネイカはいる？」

「そりゃあ、いると思いますけど……。どうして？」

「溺れている時にそれを見たんだ。フィオラパが言うには、ファファイネイカが溺れている俺を助けてくれたらしい……」

皆目を丸くした。ミチモリ氏が「うーん」と唸って言った。

「やはりあなたは私の思ったとおり、昔話や伝説に残る人々と同じ種類の人なのでしょう……。水の精霊ファファイネイカや土の精霊サカワオは、魔道師<sup>ソフガ</sup>達でさえまず会う事が出来ません。ましてや、それに助けられた人など……」

「いえ、俺は……」

今日、町を見て廻って、彼はますます分らなくなっていた。何か出来るかもしれないと思っていた希望も失いかけている。「なにしろ右も左もわからないから……。」。そんな人間に何か出来るとはとても思えない。

ミチモリ氏は慰めるように優しい口調で言った。

「先ずは、ゆっくりなさり、心を休めることです」



## 八・「移動呪の剣士」

その後、しばらく川の流れを眺めながら下流へ歩いた。壁に沿って。ずっと石の護岸が続いていた。ユタとリュウ少年が川面を指差し言った。「見てみて。アオイさま。コエが岸に寄ってるよ」。

のぞいてみると水面の直ぐ下に大きな黒い魚がいた。大きな口をパクパクしている。口の横には髭がある。どうしてこれがコイじゃなくてコエなんだ？ 正体を見ても謎が深まるばかりだった。微妙な違いだから余計に。

その後現れた門をくぐり町へ戻った。その時、遠くの方で半鐘が鳴った。リケミチモリはムツと顔を強張らせ、アオイに言った。

「あれは蠻族が襲撃してきた合図です。あの音は南側の防壁。私は武人ですので行かなければなりません。後はリュウに附いて行って下さい」それから息子であるリュウ少年をふり返り言った。「アオイ殿をこの区画の廟堂にご案内するのだ。頼むぞ」。

「はい。お父さま」リュウ少年は答えた。

「では、私はこれで」ミチモリ氏はそう言い残して駆けて行った。駆けると左足の不自由なことがはっきり分った。

リュウ少年が先に立った。

「この区画の門は閉ざされてしまいます。この区画にあるお廟へ行きます」

そこは広い通りだった。両脇には二階建ての民家が並んでいる。漁をするらしく網が干してある。家々の戸や窓がバタバタと閉ざされ、雑多な武器を持った男達が南の方角へ駆けて行った。その姿も消え去り、あつという間に人っ子一人いなくなつた。

その時。背後で悲鳴が響いた。ふり返ると、今、彼らが入ってきた川に面した門、分厚い木の扉、それが押し破られ番兵が斬られていた。そこにわらわらと群れている者。薄汚いボロを身に纏い、柄の長い斧を手にした者。人間より一回り小さい軀。遠目で顔形までは分らないが、土色の顔。はじめて目にするアオイにも分かつた。

蠻族。

アオイがふり返ると二人の少年は息を飲んでた。リュウ少年はまだ冷静に見えた。しかしユタは半鐘が鳴った時から震えていた。気附いていた。今、ふり返って見ると、足が竦んでしまっているようだった。とても走って逃げる事は無理だと思われた。アオイは覚悟を決めた。それは少年の境遇を聞いた時から、心に決めていたことだった。

「心配するな。俺に任せろ」

ハツと我に返り、リュウ少年が駆け出した。脱兎の如く駆け出すと、民家の軒先に立てかけてあつた木の棒を二本取り戻ってきて、一本を彼に渡し、一本は自分が持ち身構えた。棒は檜で、先端に小さな鉄の鉤爪が附いていた。しかし勿論、殺傷する爲の道具ではない。おそらく、漁で網を手繰り寄せる爲の物。

「小鬼族です」リュウ少年は口早に言った。

「わかった。俺が盾になる。ユタを頼む」ユタの足は動かない。顔を見れば分かる。俺が盾になり、囷となり、蠻族達の注意を逸らさなければならぬ。

棒を手に、二人の少年を背後に庇い、道の真ん中に立った。小鬼族はすぐそこまで来ていた。先頭に一匹、その後ろに十匹以上。ギョロとした目、裂けた口、牙がのぞいている。牙は乱杭歯。

ふり下ろされた大鉞を身おまさかりを捻りかわした。勝手に足がはしった。体側面に躍り出て横向きに棒を繰り出した。鉄の附いた先端をあらに喰らわせ、一匹を転がした。棒を引き込み、廻し、反対の先端を正面の小鬼族の顔面に喰らわせた。

二匹の小鬼族を突き転がしたが、そこは群れの只中。ふり上げられた二本の大鉞。再び勝手に足が反応した。細かく足を刻むフェイント。逆方向へ抜けた。斧が空を切った。抜けざま突きを繰り出した。さらに一匹を転がした。

助かった、こいつらは好戦的だ。全て俺を狙ってる。

小鬼族が全て自分に群がっていることを見て取ると、アオイはさらに足を走らせ、群れを二人の少年から引き離した。己に引きつけて、駆け、その間に考えていた。俺は、剣をやっていたのかいや、剣じゃないかも知れない。さっきから勝手にはしるこの足、咄嗟に反応する足の運び、これは剣術じゃない気がする。

足を止め、ふり返った。バラバラと駆けてくる小鬼族の向こうで、リュウ少年がユタを庇いながら、気附かれないようにその場を逃れようとしていた。民家の戸口を開いて、女の人在必死に手招いてい

る。アオイは目の端でそれを見た。よし。

ふり下ろされた斧をかわし、その小鬼族の胸板に鉄の先端を喰らわせ突き転がした。軀を廻し、背後に廻りこんだ敵に突きを喰らわせた。

斧をかわす時、咄嗟に足が動く。さらにどう足を運ばいいのか、瞬時に頭に浮かぶ。敵の位置、他の敵の位置、己、全ての位置と全ての動き、それを踏まえた足の運びが瞬時に見える。

アオイはさらに足を走らせた。しかし取り囲まれていた。取り囲む小鬼族達の壁を抜けることは出来なかった。アオイの周囲には三匹の小鬼族。襲いかかってくる。その背後に十匹以上。仲間が人間を引き倒すのを待ちかまえ、己が斧を叩き込もうと目を血走らせている。

次々打ち下ろされる三本の斧をかわし、二匹に突きを喰らわせ、一匹を見た。その距離、間合い、頭部の高さ、敵はたった今斧をふり抜いた所、一瞬で見て取ると頭の中に鮮烈なイメージが浮かんだ。

棒を捨て、瞬間背を向け、左足で宙を切る後ろ廻し蹴り、その勢いで宙を跳び、右奥足で敵頭蓋を蹴り碎いた。左の後ろ廻し蹴りで敵眼前を蹴り抜き、のけぞった敵の頭を右の廻し蹴りで捉えた。身を翻して地に降りると、棒を拾い上げた。

小鬼族達は一瞬、攻めあぐねていた。円になってぐるりと彼を取り囲み。その時、民家の二階から声が響いた。

「剣士様、剣をお使いください」

見あげると、二階の窓から女の人が身を乗り出して、彼に向かつて剣を放り投げた。空中でつかみ、すぐさま鞘をはらった。

片手で剣を持った。少し腰を落とし、左半身で構え。切っ先を斜め後方、少し下向きに。足を肩幅に開き、重心は軀の芯に。敵次第で左右どちらの足も軸足となる。こう構えるのではない気がしたが、こう構えた方が蹴りを放ち易いと思った。軀を廻すのも、この構えの方が好い、と。

取り囲む小鬼族の後ろで、さっきの女の人が二人の少年を連れて家の中へ逃げ込もうとしていた。が、一匹の小鬼族がそこへ向かい駆けている。アオイは咄嗟に走った。けれど抜けない。取り囲む小鬼族が壁になっている。打ち下ろされる斧を躲しながら無心で唱えた。龍首の印を結び、取り囲む敵の軀の隙間から跳躍先を睨み据え。

「フル」

妖しく光った手首のケイ、龍翹。

次の瞬間、目の前に小鬼族の背中があった。二人の少年を庇う女の人に、斧をふりあげている。両手に剣を持ち、その背中を貫いた。腹まで突き破った。嫌な感触が手に伝わった。生きている者の感触。女の方は少年二人を連れて引き戸の中に逃げ去った。

アオイは貫いた刃を横に薙いだ。小鬼族はごろごろと地面をのたうちまわった。かん高い声でいきいきい喚きながら。

「くっ……」



生き物を刺し貫き、その生き物が臓腑を垂れこぼしながらのたちまわっている。その光景にアオイは思わず息を飲んだ。しかし深く考えている余裕は無かった。背後をふり返った。小鬼族が駆けてきていた。

再び唱えた。「フル」。

群れの背後に背中合わせに出た。ふり向きざま一匹の背中を薙ぎ払った。再び嫌な感触。骨を砕く感触。しかし四の五の考えている暇は無かった。小鬼族が次々大鉞をふり翳した。

敵の獲物が全て柄の長い斧というのは幸いだと感じた。動作が大きい。鈍い。複雑な太刀筋はない。

余裕で、かわせる。

身を捻り斧をかわし、敵懐に飛び込み胸板に刃を叩き込んだ。全ては一瞬。円を描く足捌き。剣術とは異なる体重移動。

飛沫あがる血を浴びながら抜けた。そこはすでもう一匹の間合い。斧をかわし、軀ごと廻して剣を振り抜き、撫で斬った。敵は彼を捉えられない。背後から斬りかかってきた敵、身を翻して側方に抜け出、胴を薙いだ。腹を割かれた小鬼族は地を転がり廻った。

その光景にやはり眉を曇らせながらも、アオイは思った。感じていた。

俺は確かに剣をやっていた。けれど、これは違う。

生き物を殺めるのも初めての事と感じていたが、この構え、この動き、片手で剣を握ること、円を基本とした足の運び、全て初めての事と感じていた。

彼の中に萌芽として臙に存在していた剣。記憶を失い既存の形を忘れ去ったことで、逆に発現した。無心に動くことで形に成った。自分が蹴り技を使えることを知り、蹴りが放ち易いよう構えると、自然この構えとなった。いつでも蹴りが放てるように足を運ぶと、この動きとなった。そしてこの構えが、予測不可能なモノを融合した。

複数の敵に相對して、咄嗟に飛び出すフエイント、回避、あるいは軀を廻す回転動作、円を描く足捌き、回避からそのまま攻撃へつながるその動き、敵が斧を振り抜いた一瞬の隙に飛び込み軀ごと廻して叩き込む剣、円運動により速さと重みを増した鋒、アオイの剣術は体に染みついてしまったたく別個の動きを、運動理論を、記憶を失ったことで吸収していた。

それは勿論、カポエイラではない。それは剣術。剣術が、足に染みついた記憶を咄嗟の場面でトレースした。それが、捉え辛い、予測不可能な動きへと昇華したものの。

この剣法なら、剣はもう少し短い方が使い易い。斧をかわし敵の首筋に白刃叩き込みながら感じた。刀身に反りが欲しい、とも体を何度も切っ先が掠める。取り囲まれているがかわせる。アオイの周囲には屍、そして死にきれずもがいている者、それらが地に転がり障害物となり、襲いかかる敵を阻んでいる。しかしそれは逆に、彼の動きを妨げるモノでもあった。

その時、心に声が届いた。思い出したのだ。彼に剣を教えてくれた老人が言っていた。紙一重でかわせるのが達人ではない。真の達人は危うい状況に身をおかぬ。そもそも危うい状況を作らぬ。それもまた、技量。

移動呪を唱えた。離れた場所に跳び、待ち受けた。道の中央。残る小鬼族は六匹。大鉞をふりあげて駆けてくる。巫術師タパは言っていた。一度使うことが出来れば道ができる、されば何度でも使えるようになる。精霊フィオラパは言っていた。自分自身の移動に關しては図抜けている、桁外れと。

印を結び、上方を睨み据え、跳んだ。目標を失った大鉞が空を斬った。アオイは風の中に飛んだ。クムラギの城壁より高く。下を見て取った。

落下しながら唱えた。一番有利な場所に出現するやいなや、側にいた小鬼族を叩き斬った。飛沫あがる血を頬に浴びながら立った。向かってきた小鬼族に一瞬背を向け、移動呪。その小鬼族の背後に跳び、間髪入れず斬り捨てた。すぐさま襲い掛かって来る敵。しかし移動呪を唱えたかのように敵側面に廻り込む足捌き、瞬く間にさらに一匹を斬り伏せた。残るは三匹。再び移動呪を唱えた。

処が何も起こらなかった。

紙一重で斧をかわした。体勢を立て直しもう一度唱えた。しかし跳ばなかった。二度の失敗は致命的だった。二本の斧をかわし、立て直せないくらい体勢が崩れた。さらにふりおろされた斧をかわし、アオイは転んだ。すぐさま剣をかがげ身を庇ったが、仁王立ちした一匹の小鬼族が斧をふりあげた。

駄目だ。

その時。

「リピ！」凜とした女性の声が響き渡った。

次の瞬間、斧をふりあげた小鬼族の体の周囲に八本の剣が出現した。切っ先を体に向け、取り囲み、空气中に突如出現した剣。小鬼族が身を振り逃れようとしたが、逃さず一瞬後貫いた。小鬼族は串刺しにされ地面に転がった。

目を見張ったアオイの前に、頭抜けて体格のいい大男が飛び出してきて、長い斬馬刀をふり廻し、残る二匹の小鬼族を斬り捨てた。アオイの側に、真っ白い道服をはおった若い女性が立った。彼を見下ろし言った。

「既に月が龍頭りゅうずを越えた。つまり印を結ぶなら龍尾だ。お前は素人か」

随分綺麗な女の人だった。歳は二十代前半。彼よりもずっと大人の女性。少し気の強そうな切れ長の眸、紅鳶の虹彩。長い髪を細かに編んでいた。じっと見つめっていると、急に真っ赤になり目を逸らした。

## 九・「兄と弟」

女性は名をリリナネ（リリ・ナネ）と言った。白っぽい薄青の着物の上に、純白の道服をはおっていた。後に聞いた話しでは、その純白色は白練という色で、大魔導師しか着用を許されないそうだった。アオイがお礼を言つと、目を逸らしたまま返事をした。「気にするな……」。薄い唇が無愛想に動いた。顔が赤いままだった。

もう一人の大男はカタジニ（カタ・ジニ）と名乗った。人より頭一つ高く、胸板厚く腕も足も太かった。顔付きも見ると頑丈そうで、顎も首も太かった。そのくせ何故かしら女のように色白で、目は線を引いたように細かった。木賊色の着物の上に、黒っぽい外衣を羽織っていた。背中には双頭の龍鳥が紋章風に描かれていた。

小鬼族の血で濡れた斬馬刀を手に、笑いながら言った。「移動呪を使う剣士とは前代未聞だな。さらに、そんな綺麗な面をした剣士も前代未聞だ」。

リュウ少年が飛び出してきた。

「リリナネさま、カタジニさま」

「おう、お前はリケの息子だな」カタジニが答えた。

「お戻りになったのですか」

「ああ。タパの廟堂でシユス等と落ち合う予定だ」

「では、シユスさまとアズハナウラさまもお戻りに？」

「いやいや。奴らは何時になるか分らぬ。まあ、それまでタパの廟堂に逗留するつもりだ。イオワニ（イオ・ワニ―イオ・丸迹）は自分の道場へ戻ったぞ」

「先生も戻られたのですね」

その時には、わらわらと町の人が周りに集まっていた。アオイはその中から剣を貸してくれた女性を探し、剣を返し、お礼を言った。それからユタを捜した。

ユタは女の人の後ろに、隠れるように立っていた。うつむき、彼が側に来て目も合わさなかった。アオイは女性にお礼を言って、ユタを促した。

「行こう」

ユタはうなだれて附いて来た。けれど、ふと戸惑ったように言った。

「どちらへ行くのですか……？」

「うん。……もう一度川が見たくて……」

タパタイラの廟堂へ向かうリリナネ、カタジニ、リュウ少年等と別れ、来た道に戻った。ユタは黙ったまま後ろについて来た。門をくぐった。

\* \* \*

空を茜色に染め、低い太陽が水面を照らしていた。聳え立つ壁を背に、階段状の石の護岸を降りて行き、岸辺に座った。足下に水が寄せている。ユタは隣りに来てしゃがんだ。ずっと、しよげかえり黙ったままだった。

ずっとこの少年に言いたかったことがある。きっとこの少年には必要な言葉。誰かが、この少年のそれになってやらないといけないけれど、まずは自分自身の事。

目に焼き附いて離れない。苦しみのた打ち廻る生き物の姿。耳に残る叫び。手の平に染み付いている。肉をひき裂く感触。あばらを砕く感触。殺さなければ殺されていた。いくらそう言い聞かせても、ふり払えなかった。

記憶はないが生き物をこの手で殺したのは初めての筈だった。けれど記憶はないがこれもハッキリしていた。俺は生きてるだけでずっと殺し続けていた……。

色々考えてその事にまで思い至り、どう自分に納得させればいいのか分からなくなっていた。

自分が今ここに生きているということは、その事について明確な答えを持っていたからに違いないが、過去の自分がその事をどう自分に納得させていたのか、今となっては霧の中だった。

水面を見ながら、隣のユタに訊いた。

「犬か猫を飼ったこと、ある……?」

唐突な質問の真意を量りかね、戸惑いながら少年は答えた。弱々



しく元気がない小さな声で。

「ありませんけど……?」

「じゃあ、もし犬を飼っていたとして、もしその犬が死んだら、食べる? こんなこと言うと、ひどい奴だつて言われそうだけど、でも、牛や豚を食べるんだから……。その犬を食べれば、牛を一頭殺さなくて済むじゃないか……」

少年は格別驚いた様子は無かった。川の方を向いたまま目を落として言った。

「それでも、そんな事はできません……そんな事は、きっと誰もできません……」

アオイは水面を見つめたまま訊いた。

「人間は、犬や猫は可愛がつて殺せないくせに、どうして牛や豚は殺しても平気なんだらう……。牛や豚が、犬や猫に比べて感情が劣っているなんて事、あるはずなのに……。悲しまないはずなのに……」。

俺が殺しているわけじゃないけれど、俺が食べる爲に誰かが代わりに殺してくれているのだから、もつと悪い……。野菜だけ食べればいいってことじゃないんだ。それも命だから。

結局、何かを殺さないと生きていけないなんて……。

何が言いたいのかわからないだらうけど……。どうしてこんな誰も気にしてないような事を言ってるのか自分でも分からないけど……」

何が言いたいのかわ、ユタは分っていた。小さな声で答えた。

「気にしてない人なんていないよ。みんな……。だから食べ物を食べ、美味しいとか不味いとか言っちゃいけないんだよ……。他の生き物を殺して食べて、この肉は上等だねとか言っつて喜ぶ人を、神さまは許さないと思うよ……。だって、神さまは人間の爲だけにいるんじゃないんだもの……」

「そうか……。そうだな……」

不思議な感覚に包まれた。何かが降りてきて、何かが分った。不確かながらも。

俺は、ただ生きているだけで、沢山の命を犠牲にしている。だから善いとか悪いとかじゃない。だからこの上さらに命を殺めたところで、という事でもない。ただ、その言葉どおりの事実を、胸に刻んでいなければならない。

この事実さえ忘れ去り、置き去りにして、善悪を言う人間の言葉になど耳を傾ける必要はない。きっと人間は、まだ本当の意味でのそれを理解していない。この宇宙には、ちっぽけな人間には捉えられない超然とした法のりが存る。俺はそれを、善悪を、人から教えて貰い信じるのではなく、自分で感じ、考え、自分で知らなければいけない……。

とても言葉では説明できない不確かな何か。求めていた答えではない。けれど、その答えは、自分でつかまなければならぬと悟った。確かなものとして。ぶれることのないそれを。

アオイは立ち上がった。隣りを見た。今度は俺の番だ。払拭してやらないといけない……。

たった一言言っただけで、どうにかなる事とは彼も思っていない

い。が、たとえ今伝わらなくてもかまわないと思っていた。それは、この先行動で示すこと。自分にそれが出来ることを、戦って彼は知った。

「どうした？ 随分しょぼくれた顔をしているじゃないか」

ユタは顔をあげなかった。消え入りそうな声で答えた。

「アオイさまは、僕を見て、呆れたんじゃないかな……」

「そんな事ない」

「でも足が竦むなんて格好悪……」

「気にするな」

「慰めないでください……正直に言ってよ……。僕は駄目だって……」

「駄目じゃない」

ユタはうつむいたまま首をふった。足下の石の上に涙がぽとぽと落ちた。

「うつん……僕は駄目なんです……。僕はちっとも駄目……。いつも、足が竦んでしまって全然体が動かなくて……。父さんも、母さんも、……。妹まで……。なのに仇を討つどころか、……。二年間ずっと、毎晩、天国にごめんなさいって……。悔しいのに、悔しくて仕方ないのに」

「もう言うな」流れる水面に目をやったまま、アオイは言った。「お前はいつも一生懸命やってるじゃないか。俺は知ってる。お前がいつも精一杯頑張ってることを。お前のその気持ちは、勇気と何ら変わらない。勇気の種のようなものだ」

ユタは顔をあげた。水面から目を移し、涙をためたユタの目をまっすぐ見た。

「その気持ちは、いつか強い勇気になる。お前なら出来る。その時持つ勇気は、お前にしか持てない本物の勇気だ。今は、いくら怖くても気にするな。今は、代わりに俺が戦ってやる。お前は、俺が護ってやる」

ぼろぼろこぼれる涙をぬぐい、ゆがむ唇を一生懸命動かしてユタは言った。

「僕は、ふ、再び、勇気を、持てますか……？」

「当たり前だ。お前はきつと誰よりも強く優しい男になれる。それまでは俺が護ってやる。ついでに髪も洗ってやる」

泣きながら少年は笑った。護岸の石の隙間に生えた菜の花が、風に揺れていた。

十・「言葉」

少女は父が大好きだった。

彼女の父親はいつも難しい本を読んでいた。

その日、彼女の父親が読んでいた本には、見たことない文字が沢山載っていた。ひらがなでも漢字でも、英語でもない文字。本の上半分がその文字で、下半分が日本語。上の文字の説明をしているみたいだった。

「それ、どこの国の字？」

父親はにっこり笑って答えた。

「日本の、だよ」

「うそ」それは全然違っていった。丸や三角と棒を組み合わせた図形のような文字。見たことがなかった。

「うん。そうなんだ。実は偽物」

首を傾げた少女に父親は笑って言った。

「これはホツマ文字といって、漢字伝来以前に使われていた文字と言われている。つまり、弥生時代の頃のモノってこと。「ホツマ伝え」という古事記に似た内容の本があるんだ。でも、それは江戸時代に捏造された偽書と言われている。実際の処、パパもそう思う」

「ねっぞっ?」

「でっち上げってこと」

「嘘なの?」

「うん。でもね。漢字が伝わる前に何かの文字があったとしても不思議じゃないだろ」

「そうだよ。言葉があるのに字がないなんて変だもん」

父親は笑って言った。

「いやいや。それ自体はちっとも変じゃない。日本語の親戚みたいな古代ポリネシア語には字がなかったんだよ」

「古代ポリネシアってどこ?」

「現在の、東南アジアからミクロネシア、メラネシア、ポリネシア、イースター島」父親は彼女が考え込んだ様子を見て言い直した。「ハワイみたいな南の島々だ」

「ふーん……」

「ハワイ語に文字があてられたのは西洋文明が入ってきてから。だから全部ローマ字読みで日本人にも読みやすい。ホノルルとかワイキキとかね」

「ふーん……。日本語の親戚ってどういうこと?」

「発音がよく似てるんだ。だから日本人のルーツは古代ポリネシア

の民だつていう話もある。けれど実際の処はよく分からない。と言  
うより、実はお父さんもその辺のことは詳しくない。発音が似てい  
るだけじゃないかな。でもね。たまに意味まで同じモノもあるよ」

「例えば？」

「うん。例えば古代ポリネシア語でつつくことや突き砕くことを「  
ツキ」という。突き、だよ」

「へえ……」

「だからお父さんの大好きなボクシングは古代ポリネシア語で言う  
と「ツキツキ」だ」

「古代ポリ……ネシアにボクシングがあったの？」

父親は笑って答えた。

「いやいや。あつたかどうかは知らないけど、ボクシングを古代ポ  
リネシア語で言つと、そうなるってこと。重複形と言って、同じ言  
葉を重ねるんだ。「ラパラパ」とか「リコリコ」とかね」

「ふーん……面白いし、何となく可愛い」

「だろ？」

それが、父親と過ごした最後の夜になった。彼女の父は翌日自動  
車事故で帰らぬ人となった。

第二章 武人支度

一・「リリナネとカタジニ」

お廟へ帰る途中でとっぷりと日が暮れた。足下が見えなくなると、ユタは棒切れを拾い上げて懐から出した粉をかけた。呪文を唱えると棒がやさしい光を放ち、夜道を照らした。

「驚いたな。魔法が使えるのか？」

アオイが目を丸くして言うと、ユタは照れくさそうに笑った。

「これは灯火の術だよ。こういうのは誰でも使えるんだ。調合はツフガしか出来ないけど」

「へえ……」

「今日見た硝子工場とかの炉も、火力を上げる粉を使ってるんだよ。木炭だけじゃなかなか温度が上がらないからね」

アオイは何となく何かが違うような気がしたが、それが何かはよく分からなかった。話を変えてリリナネとカタジニのことを訊いた。

「大魔導師のシユスさまと、聖女様の叔父のアヅハナウラさまと一緒に、扉の神を召喚する爲の呪文材料を集めている勇者さまだよ。あと一人イオワニさまも。イオワニさまは剣術家で道場を持っていて、僕の以前の先生なんだ」

昨日タパタイラから聞いた人々だった。



「タパ様は「冥界への扉を開く呪文の材料」って言ってたけど……」

「扉の女神ヴェセプタを召喚して、冥界への扉を開いて貰うんだよ」

「へえ……」その女神は、タパタイラにもらった本の挿絵にあった。

廟堂ではアオイとユタの帰りを、皆首を長くして待っていたようだった。リュウ少年が案内してくれた部屋にタパタイラとリリナネとカタジニがいて、姿を見るなりカタジニが言った。糸のような目が笑っていた。

「やっと帰って来たな、色男。とつと風呂に入ってその血塗れの服を脱いで来い。お前が来なきゃ飯も来ない。急げ」

リリナネとカタジニも風呂上がりらしく、着替えてござっぱりしていた。リリナネは細かに編んでいた髪をほどいて、擦れの残る髪がまだ少し濡れていた。カタジニは磊落に言った。

「大体の話をタパから聞いたところだ。そういうことなら教えたいことが山ほどある。早く風呂に入ってこい。お前が来ないと酒が来ない。急げ」

タパタイラがアオイの労をねぎらい、手伝いの少年を呼んだ。何度か見たことある少年が着替えの着物を持って現れ、入れ替わりにリュウ少年は父親のリケミチモリを呼びに家に戻った。

\* \* \*

前を歩く手伝いの少年にアオイは言った。

「案内して貰わなくても大丈夫だけど。浴室の場所は分かっているし、その着替えを渡してくれれば……」

少年は無表情で答えた。

「今、お召しになっている着物を頂いていかなければなりませんから」

「あ、ごめん。これ、もうダメだよね……。捨てるの？」

「いいえ。血抜きをすれば大丈夫です。一晩かかりますが」

「一晩？ ……ごめん」

一晩中働かせるのかと思うと申し訳なかった。しかし少年は平然と答えた。「いえ。ちつとも」。

浴室で血まみれの着物を脱いで渡し、着替えの着物を貰った。ユタと風呂に入っていると、耳の早い町の人から声をかけられた。近所のおじさん達。

「あんだ、剣士様だったのか」

「いや……、覚えてないですけど……」

「ああ、記憶がないんだってな。心配するな。そのうち思い出すさ」

「はい」

「蜥人が南下してきているそうだ。不穏な空気あり、って奴だな。何かあったら頼むぜ。兄ちゃん」

「おいおい、剣士様に向かって兄ちゃんはないだろう」

「なあに。近所のよしみさ。構わんさ。なあ、兄ちゃん」

「はい……」アオイは照れ笑いを浮かべた。少し嬉しかった。

風呂を上がり、貰った着物に着替えた。灰色がかった暗い青色の着物だった。図柄は銀灰色の双頭の龍鳥。ノア。図柄も良かったが、アオイはそのくすんだ青色が気に入った。

「随分綺麗な青だな」

「青碧せいへきだよ。着物の色にはみんな名前があるんだよ」

「へえ。じゃあ、リリナネが着ていた青色は？」とても薄い青で、上品だった。

「あれは青竹色。大人の竹は白っぽい青になるでしょ」

ユタの着替えた着物の柄は鹿だった。頭に羽根飾りをのせた。

「それは、鶏冠竜？」

「やだなあ。鹿じゃないか」

全く違いが分からなかった。

浴室を出ると、廟堂の入り口脇で、さっきの少年が着物の染み抜きをしていた。水を張った桶に血塗れの着物を浸し、懐から取り出した粉をふりかけ、呪文を唱えて立ち去った。ユタが説明してくれた。

「血抜きの粉だよ」

やっぱりか、アオイは思った。

部屋に戻ると会食の用意が出来ていた。お膳が並んでいた。下がろうとしたユタをタパティラは引き止めた。「一緒に食べなさい。リュウもじきに来る」。ユタは喜んでアオイの隣りに座った。

タパティラはアオイの前に来て、懐中時計を差し出して言った。

「先ず。これは、私からだ」

金色の大振りな懐中時計。使い込まれた古い物だった。お爺さんから時計のプレゼントかと思いい、粋だなあと思っっているとそうではなかった。これで交点の時を知りなさいと言われた。

「今朝話したように、空に龍頭と龍尾の二つの交点がある。仮令空に太陽がなくとも、月がなくとも、それが交わる時を正確に知っておかねばならぬ。この星の裏側で交じろうとも。さらに交点はずれてゆく。六三九七日かけて天空を一周する。それが交わる時間を正確に知り、結ぶ印を使い分けなさい。実際の天空の二つの道、白道と黄道について明日リリナネに教わると良い」

向かいの席で黙って聞いていたりリリナネが吃驚したように言った。

「わ、わたしが??」

「うむ。頼まれてくれるか?」

「う、うん……」

真っ赤になつて答えた。「よろしく願いします」アオイが言う  
と、ぎこちない笑顔で頷いた。

「さあ。魔道師同士の堅苦しい話はそれまでだ。今度は男の話だ」  
カタジニが割って入った。

「我らは扉の女神召喚の爲の呪文材料を集めている。今回我らは二  
つ持ち帰った。シユスとアズハナウラがまもなく三つ持ち帰るだろ  
う。此処で合流して最後の一つを捜しに行く。で、だ。お前が定め  
に関わる男ならば、是非にも仲間を迎えたいところだが」

「あの……」アオイはその話が出たらよく考えて決めたいと思っ  
ていた。手伝えば世界中を遁走する事になる。当然ユタとの約束を  
守れない。

「仲間に迎える前に一つ訊いておかねばならんことがある」

「はい」

「お前は、男と女のどちらが好きだ？」

「はあ……??」

「何だ、その面は。世の中には男と女がいる。お前はどっちが好き  
か訊いている」

「はあ……」「これはどういう意味だろうか。噛み砕いて考えて、友  
情と恋愛のどっちを優先するか訊かれているのか。

そんなわけがなかった。笑いながらカタジニは言った。糸のよう

な目の奥が見えず、さらに怖かった。

「記憶がないようだから教えてやる。男色はちっとも変ではない。そつだな。世界の半分くらいはそつだ」

「げっ、まぢですか」

「まぢだとも」

「馬鹿なことを教えるな」リリナネがカタジニを睨み附けた。そしてアオイに言った。「今のは冗談だから間に受けちゃ駄目よ」

からかわれただけか、そりゃ違つよな、アオイはほつと胸をなでおろしたが、リリナネは言った。「この男は変態なの」。

違つてないのか。

変態とは何だ、というカタジニと、男のくせに男がなどは変ではないか、とリリナネは言い合った。決着がつかず、じゃあ訊いてやると、カタジニはアオイに向き直つた。再び自分に鋒先が向き、アオイは身構えた。

「お前はどう思つんだ？」

ここではつきり言っておかないと、この先自分の身に危険が及ぶかも知れない、理解ある寛大な人間であるよりも回避を第一に考えた。

「変態だと思ひます」

むうっと、カタジニは眉をしかめた。糸のような目がとんがった。

「じゃあお前はどんな女が好きなのだ？」

「え……」

「どんな女が好きなのか聞いておる。実はお前が去った後女達に取り囲まれ難渋した。「今のお方はどなた？」「どちらにお住まいなの？」「決まった方はいらっしやるのかしら」等々」

「え、そうだったんですか？」

「「うちの娘はもうすぐ十七、良かったら是非」「うちの娘はもうすぐ二十一、良かったら是非」「うちの旦那は行方不明、良かったら是非」等々……。実に下らん。好みの女を言え。俺が適当に連れてきてやる」

「え、でも……ええっと……」

「記憶を失い、それも忘れたか？」

記憶はないが、自分がどんな女性を好きかはもう分っていた。ほんの二時間ほど前に。しかしその特徴そのままの人が目の前にいるこの場で、言えるわけがなかった。窮しているとりケミチモリ氏が息子のリュウ少年を伴って現れ、救われた。

「やはりあなたは、私の思ったとおりの人でしたね」リケミチモリは今日のアオイの働きを褒め、息子を助けてもらった礼を言い、今後必要な物は全て私が用意しましょうと言った。



「先ずは剣を拵えましょう。此処クムラギにはキトラという稀代の刀工が居ります。六十を越えた気難しい老人ですが、引き受けてくれるでしょう」

ありがたい申し出だった。反りのある剣が欲しいと思っていた。勿論、片刃で。そして、あまり長いものではなく、少し短めの物が欲しいと。

「明日にでも注文に行きましょう。それから靴も革職人に作らせましょう」

「靴を……？」

ミチモリ氏はにやっと笑った。

「リュウウから戦いぶりを聞きました。目にもとまらぬ足捌き、電光石火の如き蹴り技、おそらく半靴では動き辛い筈。今御履きの鬼津靴がつぶれてしまう前に、同じ形の物を革職人に作らせましょう。戦履きという物もありますが、履き慣れた靴の方が好いでしょう」

あの靴はすっかり鬼塚という名で通っているようだった。

「何から何まですみません。戦履きというのはどんな物なのですか？」

「しとうず、という皮の足袋あしひやくがあります。足にすっぽり履いて上を紐で結んで止める形です。それを履いて、底に鉄の歯の附いた草履を履くのです」

「へえ……」

しかし翌日目にしたそれは、草履と言うよりも、彼の記憶の中に

ある言葉ではサンダルだった。鼻緒が二股でなかったし、足首まで革紐で固定するようになっていた。

「それから胴服も拵えましょう。武人用の外衣です。大抵背中に勇ましい図柄を入れますから、お好きな柄を選ぶとよいでしょう」

「はい」それも嬉しかった。今日、町を歩いていて数人の武人を見かけた。皆、背中に龍や獅子やムカデを背負っていて格好良かった。

カタジニが横から口をはさんだ。

「リケ様。この男は高尚な趣味が理解できない奴ですぞ」

ミチモリ氏は取り合わなかった。

「お前の高尚な趣味は誰も理解できない」

「ふん」カタジニは不服そうだった。

リケミチモリの左足はやはり義足だった。板の間を歩くと、こつこつと音がした。誰も何も言わないし、アオイも訊けなかった。

その後、皆で食事をした。歓談といった雰囲気になったので、アオイは向かいに座っているリリナネに話しかけてみた。何を話したらよいのか迷ったが、無難な話題を選んだ。

「あの壺に描かれている動物は何ですか？」

リリナネの背後に彩色された大きな壺があり、虎に似た動物が描かれていた。虎に似ているけれど、絶対に虎ではなかった。虎そっ

くりの縞模様で虎に似て頭部が大きい。ところが、口唇がめくれあがり馬鹿でかい二本の牙が顎の下まで伸びていた。さらに四足ではなく、二本の後肢で立っていた。前肢は飾りのように小さかった。

記憶の霧の中から一致する姿が浮かび上がり、これはあれだ、あれに似てると思ったけれど、迂闊な事は言わなかった。それに関しては用心深くなっていた。

リリナネは照れくさいのか、視線を曖昧に向けて答えた。こっちを向いても目をあわさなかった。けれどにつこり笑って教えてくれた。

「これは劍竜けんりゆうだけ……」

相手の笑顔が嬉しかった。さらにそれを竜と呼ぶことは、鹿を竜と呼ぶことより理解できた。とは言え彼はこう答えた。きっと話しがはずむと思ひ。

「鹿の仲間ですね」

リリナネは目をぱちくりした。そのあと、あきれ顔で首を傾げた。違うのか、アオイは焦った。ますます分らなくなった。けれど鹿と竜の違いはどうでも良かった。月の軌道の話題にすれば良かったと後悔した。

## 二・「武人支度」

翌日のアオイは目が廻るほど忙しかった。

朝一番に現れたリケミチモリ氏に伴われて、刀工のキトラニケ（キトラ・ニケ一鬼虎・二家）を訪ねた。しかし刀工は既に作業を始めていた。ミチモリ氏はしかめっ面をしてみせ、口をへの字に曲げて言った。「こうなると、話をしてくれません」。

相済みません、昼ごろお出でて下さい、と申し訳なさそうに頭をさげる見習いの少年に見送られ、一旦鍛冶屋を後にした。一番腕が良いと言われる革職人ヒワマナカ（ヒワ・マナカ一ヒワ・間中）を訊ねた。

ヒワマナカは鬼塚を見て言った。

「うーん、じゃあ、こうしよう。ここで適当なしと<sup>へい</sup>ずと兵靴<sup>が</sup>を選んで履いて帰りな。で、今履いてるそいつを置いていってもらおう。そいつをばらしてみないと。ばらしてみたって、作れるとは限らんけどな。ばらしてしまっつていいか？」

アオイは一瞬躊躇した。それは彼の過去につながる唯一の手がかりだった。けれど頷いた。漠然と感じていた。自分が何処から来たのか全く分からないが、そこへはもう帰れないのではないかと。

帰れなくていいとは勿論思っていない。自分が何処の誰なのか、勿論知りたい。家族がいたのかどうか。心配しているかも知れな

い。けれど、もう帰れない気がしていた。その予感、日々目にする、感じる、違和感がもたらしていた。何もかも異質。異質なのはおそらく、彼自身。

けれど頷いたのは、こつも感じていたから。俺は今のほうが幸せなんじゃないか、と。兄弟がいたのかどうか、全く記憶にないが、口が生意気で世話焼きな弟みたいな奴がいる。友達がいたのかどうか記憶にないが、魔法使いと知り合いになった。自分も魔法が使える、妖精と会話したりもした。しかも、大きなお風呂付きの建物に居候している。

記憶はそのうち戻るだろう、それから捜しに発てばいい、自分の住んでいた町を、そう思った。

「で、いつ出来るんだ？」

抜け目ない笑みを浮かべて言うミチモリ氏に、革職人ヒワマナカは大袈裟に肩をすくめて答えた。

「いつも言ってる通り。こればかりはミチモリ様の頼みでも聞けねえ。注文は順番どおりだ。そうさな。二十日後だ」

ミチモリ氏は笑みを崩さず憎まれ口を叩いた。

「なんだ。意外と早いじゃないか。最近は注文が少ないんだな」

へい、へい、おかげさんで、と職人は答えた。それから奥へ引つ込み、両手いっぱい例の足袋あしがくろ、しとうずを持ってきた。アオイの前に並べて、「好きなものを選びな」と言った。

それはまず、絹の物を履いて、その上に黒い革の物を履く形だった。絹の物は色とりどりだった。下に履くしとうずは大抵錦織です

と、ミチモリ氏は説明した。朱や黒や緑の錦織だった。

「随分、綺麗なんですね。これ、靴下って言いませんか？」アオイは頭に浮かんだ単語を言ってみた。

しかし通じなかった。ミチモリ氏は怪訝な顔をして問い返した。

「靴舌……？ しとうずです」

アオイは緑の物を選んで履き、その上に革の物を履いてみた。サイズは良かった。履き心地も良かった。さらにヒワマナカが持ってきた兵靴というサンダルから、これも足に合う物を選んだ。革製の靴底に鉄の歯が付いていた。足の甲の革紐を固く結び、さらに足首にも革紐を結んだ。これは花結びではなく蝶結びで良いらしかった。足首まで結ぶとしっかり足に固定された。歩いてみると鉄の歯が力チャカチャカ鳴った。

「好いですね」

「これも持つてきな。洗い替えの靴シタだ」

ヒワマナカは笑って朱色の絹のしとうずをくれた。

靴屋を後にして歩きながらミチモリ氏は言った。

「二十日後とは面目ない……。この町の職人は客より威張っているのです。頑固者ばかりで客の言うことをちっとも聞いてくれません」

それから仕立屋へ行き胸服の布地を選び、染め屋へ行き、描いて欲しい絵の説明をした。

一口に武人の胸服と言っても、赤や金を基調とした派手なもの、

背中に勇ましい柄を描いたもの、細かな柄を染めた木綿のものなどと、色々あるらしかった。ミチモリ氏は、「単と袷の二着作らせますから」と言った。単は夏用で麻、袷は他の季節用で裏地附きと言った。アオイは仕立屋が色々出してくれた生地見本を見ながら決めた。

麻のものはくすんだ色合いの暗い青にしてもらった。今着ている青碧よりも暗い青。背中の上部に円形に丸まったムカデを刺繍してもらったことにした。

胴服の前は閉じない。着物と同じ飾り紐がお腹の処にあり、それを渡して止める。飾り紐の色は黒にしてもらった。

一ヶ月ほどで出来上がるということだった。採寸をしてもらった。

裏地付きのものは、染めで模様を描いて欲しかった。どのくらいかかるか訊くと、「二ヶ月くらいでしょう」と店主は答えた。

「秋には充分間に合いますから、季節的にはちょうどよろしいかと」

店主の並べた色見本の中から、アオイは一枚の黒い布を手にとった。黒色とは少し違う色合い。

「これは黒ですか？」

「それは青鈍あおにびです」

店主の説明では、鼠色の一種類で、殆ど黒に近い暗い灰色にわずかに青みを入れたもの、ということだった。深みのある色合いが気に入った。

「これにします」

すると店主は困った顔をした。「それは、あまり縁起の良い色では……」。店主の説明では、大昔は凶色と呼ばれていたそうだった。「剣士様のお召しになる色では……。」と言った。

アオイは笑って答えた。

「関係ないです。ますます気に入りました」

描いて欲しい絵の説明は直接染め屋に言われた方が良いでしょうと言われ、下絵職人の処へ行った。下絵職人は痩せたおじさんだった。

描いて欲しいのは獅子の絵。しかし説明しているうちに蛇を踏みつけたマアシナの神像が頭に浮かんだ。

「布の色は青鈍で、背中に、獅子が蛇を踏みつけている柄を入れて欲しいのです。蛇の首は八本くらい。ちょうど八本でなくても良いですけど、沢山あった方が良いでしょう」

下絵職人はフフンと笑った。

「そりゃあ、格好いいじゃないか」



染め屋を出ると昼近かった。再び鍛冶屋を訪ねた。刀工は木箱に座り、啜え煙草で待っていた。

「移動呪を使う剣士だってな。噂で聞いてるよ。座りな」仏頂面で向かい合わせの木箱をあごで指した。

「耳が早いな。都合がいい。ちょっと変わった注文だが聞いてくれるか」

ミチモリ氏が言うと刀工キトラは無愛想に言った。「あんたの頼みを聞かない職人がこの町にいるかね？」。

「面白い冗談だな。聞かない職人ばかりじゃないか」

刀工はミチモリ氏の皮肉をまったく無視した。「どんなのが欲しいんだ？」とアオイに訊いた。

アオイは説明した。少し短めがよいこと、片刃がよいこと、刀身はほぼまっすぐで柄に反りが欲しいこと、片手で握るので柄も短めがよいこと、片手で斬りつけるので重めがよいこと、など。

「そりゃあ変わったるな」刀工は渋い顔をした。

「で、いつ出来る？」相手のことなどお構いなしといった笑顔でミチモリ氏は言った。うむを言わさぬとばかり。

「さあな。こればかりはあんたの頼みでも急げねえ。気長に待つ  
といいさ」

「ふん。やっぱり俺の頼みを聞かない職人ばかりじゃないか……」

ミチモリ氏がぼやくと、刀工はにやにや笑った。

「無理な注文だったのでしょうか？」

鍛冶屋を出て訊くと、ミチモリ氏は笑って答えた。

「この注文は気に入ったはずですよ。気長に待てというのは、納得い  
くまでやらせろということですよ。きっと良い仕事をしてくれるでし  
ょう」

「そうですか……」

「さあ。気長に待つにしても、とりあえずの剣は必要ですよ。刀剣屋  
へ行きましょう」

昨日訪れた刀剣屋へ行き、上等な一振りと言っていた剣をミチモ  
リ氏は買った。鞘は銀で装飾された白造りで、柄は灰色に染色した  
革がまかれ、柄がしらの環状の飾りはアレに似た剣竜を単純化した  
意匠だった。単純化したらますますアレだった。鞘に銀製の帯取金  
物が二つ附いていて、綺麗な紐を通して腰につるすようになってい  
た。刀剣屋の主人は券を一枚くれた。

「その券が二枚たまると尻鞘と交換できます」

「むづ。俺はもうその券が何十枚も貰えるくらい買ってるじゃないか」

ミチモリ氏が抗議すると、主人は申し訳なさそうに言った。

「相済みません。今月から始めた特典ですので……」

「だったら」「ミチモリ氏は店主の後ろの壁に飾られている手鉾を指した。「アレも買う。そうしたらもう一枚券が貰えるだろう」。

それは高価な物で、それ故、客の触れない場所に飾られている物だった。柄には絡みつくように龍が彫られている。両刃の鉾身は穂穂型。鈍く輝いていた。ミチモリ氏はアオイをふり返り言った。

「実戦で斬馬刀はとても有利です。一本持っておいた方が良いでしょう」

「いや……でも、尻鞘は特に必要ではないですし……」刀、胴服、靴、かなり散在させていた。それだけでも恐縮なのに、尻鞘の爲に斬馬刀まで買わせるのはさらに恐縮だった。

「斬馬刀はいずれ必要になりますよ。そうそう。馬は要りませんか？」

「いえ、とんでも……その、多分乗ったことが無いと……」

「でも記憶がないのですから。ひよっとしたら弓も」

「いや、もう、あの……、多分絶対無理ですから、」

ほくほく顔の店主は、尻鞆交換券を二枚くれた。ミチモリ氏も満足げに笑った。

\* \* \*

「色々買い物をしたらけっこう時間がかかりましたね。私はそろそろ政治堂へ行かなければなりません。お廟へ帰る道は分かりますか？」

刀剣屋を出るとミチモリ氏は言った。アオイは丁寧にお礼を言って、ミチモリ氏と別れた。

足下は戦履き、鉄の歯をカチャカチャ言わせ、腰に剣をぶら下げ、右手に鉾を持って、廟堂へ帰った。廟堂の門をくぐると、庭にリリナネがいた。庭の石に腰掛け頬杖をついて、独り手持ちぶさたに。アオイの姿を見ると立ち上がった。

「交点について教えてあげなさいって、夕パ様に言われたから」にっこり笑った。

「すみません。待っていてくれたのですか？」

「ううん。気にしないで。忙しいんですよ。随分買って貰ったのね」

「はい、申し訳なくて……」

「いいのよ。リケ様はホントは自分が戦いたいの。でも、足が不自由だから……。期待に込めてあげて」

「はい……。あの人の足はやっぱり……」

「遠征でなくしたの。悪龍イロキノが誕生したとき、何度も征討隊が派兵されたの」

「そうなんですか……」

「今、時間あるかしら。交点を説明したいんだけど」

「はい。お願いします」

アオイは相手の目を見て話していたが、リリナネは目を合わさないようにしていた。顔はアオイの方を向いていても、一度も目は見なかった。目線の着地先は鼻とか頬とかだった。際どいところで眉何故だろう、微妙に話し辛かった。

「今日の軌道だけ知っても意味がないけど……。とりあえずそこから……」リリナネは空に手を走らせて、太陽の横道と月の白道を説明した。

「今日の横道はこう走ってる。今日の月はもう出ていて、今はあそこにある。こう走る。後三時間ほどで横道を横切る。時間で言えば午後四時二十五分。はじめから横道と白道をしっかり把握するなんて無理だから、私が毎日交点の時間を教えてあげる。毎朝聞きに来て」

「はい」

「交点が近いときに戦いになったら頭の中で時間を計るの。時計を見る暇があれば見ればいいけど。失敗したら唱え直せばいいって考えは命取りになる」

「はい」それは昨日の戦いで分かっていた。

「それから、当然のことだけど、日食と月食があるの。太陽と月が重なる時と、この星の影と月が重なる時。どちらも月が消えてしまいうわけじゃなくて、月はそこにあるんだけど、どういつわけかケイの魔力が乱れるの。重なっている間は、元素魔法は使えないから。憶えておいて」

「はい」

アオイは相手の目を見て真剣に聞いていた。勿論真剣だったが、多少見とれていないでもなかった。紅鳶の虹彩、綺麗な眸に。今日は髪を編んでなくて、綺麗に束ねてアップにしていた。大人っぽく感じた。

説明し終えて気が緩んだのか、リリナネは笑みを浮かべて、見上げていた空から彼の方へ目を移した。目が合った。すると途端に。

見る見る顔が赤くなりどきまぎした口調になった。「い、今の説明で分かったかしら……？」。

「は、はい、とても……」アオイも何故か慌てた。

「じゃ、じゃあ、私はこれで……」どもりながら言うと、ギクシヤクした足取りでそそくさと立ち去った。

後ろ姿を見送りながら彼は思った。こんな時俺はどうしてたっけ。  
。もっと話したいけれどうまい言葉が浮かばない。

しかし記憶がないから知らないだけで、「こんなとき」の経験は  
元々無かった。

リリナネと入れ違いに、お廟の玄関からユタとリュウ少年が出てきた。

「やあ、帰ってきてたんですね。リュウが剣の稽古に行ったら、先生のイオワニさまが是非アオイさまをお連れしろって。今から行く？」

「うん。行けるけど、いったんこの斬馬刀を部屋に置いて来るよ」

「じゃあ、僕たちはここで待ってるね。あれね。戦履きをしてるじゃないか。それじゃ脱ぐのが大変だよ。僕が置いて来るから待って」

ユタはアオイの手から手鉾を取ると、走っていった。お廟の中に姿を消して、すぐに走って戻ってきた。

「じゃあ、行きましょう。すぐ近くだよ」

イオワニは例の五人の内の一人で、剣術家。道場を持っている。その道場へ向かった。壁をひとつ越えた隣の区画だった。平屋の大きな建物。母屋は土壁だが、道場は板壁だった。板壁の内側から稽古をする少年達の声が聞こえていた。その雰囲気は、何故か懐かしく感じられた。

しかし二人の少年は道場へは立ち寄らず、まっすぐ母屋へ向かった。



「イオワニさまは面倒くさがり屋で、教えてくださらないので。母屋にいらっしやるはずです」

「お酒を飲んでないといいんだけど……」

ユタとリュウ少年は、会つのが不安になるようなことを続けざま言った。

出てきたイオワニは酒を飲んでいなかった。しかしそれでも充分威圧感のある人物だった。凄味があると言った方が良くかもしれない。何処となく影のある目をした、三十代前半と思しき剣術家。顎に無精ひげ、髪もぼさぼさで、やさぐれた感じ。アオイを見てニヤツと晒った。

「話は聞いている。道場へ行こう。手合わせしてやる」

道場へ入ると、稽古をしていた少年達がざわめいた。師匠が道場へ姿を現したこともさることながら。

「誰だい？ あの人」

「リュウとユタが一緒だからひょっとしてタイラ様の廟堂の」

「じゃあ、あの剣士様？ 昨日の？」

少年達の視線を少し眩しく感じながら、アオイは道場の真ん中に立った。イオワニに木剣を渡された。ユタがそばに来て木剣に粉を振りかけた。

「この粉をかけると、当たってもクニヤってなるんだ。怪我しない

よ。木剣同士が当たると磁石みたいに反発するから気を付けて」そう説明して、木剣に呪文を唱えた。

イオワニの木剣にも、道場の少年が粉をかけた。

「お前の剣法で来い。但し、移動呪は無しだ。若しそれで俺の体を掠めることが出来たら、真珠岬の葡萄酒を一本やる」

しんと静まりかえった空気の中で対峙した。アオイはあの時と同じ構え。右肩を引き、左半身を敵に向け、右手の剣の剣先を斜め下に下げた。肩幅に足を開き、少し腰を沈めた。体勢次第で左右どちらの足も軸足となる。対するイオワニは正眼の構え。それまでは多少だらしなくも見えた姿が、一変した。

ずっとそのまま睨み合った。まったく踏み込めなかった。イオワニが口角をあげて微かに笑った。踏み込めない理由がアオイにも分った。

「気附いたか？」

「はい……」

「小鬼族如きが相手ならば、お前のその剣法でどれ程の群れでも退治できよう。しかし自分よりも腕が勝る相手と一対一で向き合えば、その構えは一瞬遅く不利だ」

言われたとおりだった。どう踏み込んでも、イオワニの方が一瞬早く彼を捉えることが出来る。その一瞬は埋まらなかった。

「しかし、改める必要はない。そうだな……。今日から毎日此処に

来て俺と睨み合え。その構えで俺を倒す道が見えれば誰が相手でも負けんだろう」

イオワニは剣をおろした。勝負が見れると思っていた少年達はがっかりしたようだった。イオワニは一人の少年に言った。

「人形を持って来てやれ」

言われた少年が道場の隅へ行き、大きな木箱を手にして戻って来た。木箱には蓋がなく、中には剣を持った木の人形が山ほど入っていた。イオワニは言った。

「一つを自分に見立てて、他を蠻族に見立てて、兵法を練れ。これも毎日やれ」そう言い残し背中を向けて道場を出て行った。

再び稽古の始まった道場の隅で、アオイはユタとリュウ少年に手伝ってもらい、人形遊びをした。

中心に自分の人形を置き、その周りを人形に取り巻かせた。さらにその周囲にもっと沢山の人形を並べた。配置を色々変えて様々な状況を頭のなかで組み立てた。

一度に相手にするのは不思議と三匹という状況が多い。昨日の戦いで分かった。若しもその三匹を交わして抜け出れば、其処にはさらに敵が居る。しかし、常に三匹三匹三匹と考えるのも良い。

後ろの敵が斬りかかって来る「気配」も不思議と背中を感じた。けれど時々移動呪で距離を置き、周囲の敵の位置や数を常に頭の中に入れておいたほうが良い。あの時上空から見たように。

移動呪に関するいくつかのルールも昨日分った。移動する前に体にかかっていた重力や運動、それらは移動後の体を支配しない。最初に移動した時から臆に感じていたが、空に跳び、落下しながら地上へ移動した時ハッキリ分った。どれほど重力がかかっているか、勢いよく跳んだ瞬間でも、移動すればチャラ。なら色々工夫できる。

人形を動かしながら、様々な状況を想定し、移動呪の使い方、足の運び、太刀筋の流れ、それらを頭のなかでイメージした。

その日から、これが日課になった。イオワニと睨み合い、人形で遊ぶ。さらに少年達に手伝ってもらい、実戦に見立てた稽古をした。取り囲ませ、次々打ちかかって来る木剣をかわしてすり抜けた。移動呪を交えて。

## 三・「石」

お廟に帰って入り口の三和土から廊下にかかるとき、アオイは迷った。戦履きを何処まで脱げばいいのか。イオワニの道場では全部脱いで裸足になった。剣術の練習は裸足ですると思ったから。しかも、見ればみんな裸足だった。けれどここでは一番下の絹の物は履いていて良い気がする。迷っているとユタが教えてくれた。

「皮のしとわずだけ脱ぐんだよ」

「だよな」そんな気がしていた。

「じゃあ、僕とリュウは晩ご飯の支度に行くね」ユタとリュウ少年は厨房の方へ立ち去った。

アオイは一人自分の部屋に戻った。腰の剣をおろし、壁に立てかけた。斬馬刀も壁に立てかけてあった。並べて見るとあらためて感じた。格好良い。これは殺傷の爲の道具、格好良いと感じるのは不謹慎だ、それは分かっている、やはり格好良いと感じてしまう。

斬馬刀を手に取った。かなり重い物。柄の部分は青い金属製。龍の浮き彫りが手に馴染み握りやすい。自然、これでどう戦うか、頭の中でイメージした。これを振るって。

するとどうしても思い出してしまう。のたうち廻る生き物の姿。手に染みついた厭な感触。彼が殺めたのは人間とは全く違う奇怪な面貌の生き物だった。けれど生き物である以上、母がいて子がいて、

親は子を慈しみ育てるはず。そこに思い至ると、やはり殺生を是とは言えない。

奴らは悪龍の靈力に影響され、凶暴化しているだけ。

アオイは斬馬刀を壁に立てかけた。鶏冠竜の毛皮の敷物の上に片膝立てて座り、考え込んだ。

ユタの家族の仇を俺が討つ、そうは言えない。その通りかも知れないが、俺に復讐の権利は無い。その権利のあるのはユタだけ。

暫く考えたが、回答らしきものには至らない。これは答えのないことだった。これは彼が自分に納得させなければいけないこと。正義では無い。たとえ人々を護る爲だとしても。浅はかな知性の持ち主は、それを安直に正義と言う。ねじ曲げた正義をかがげ人々を戦いへ送り出す。正義は存在しない。

けれど自分に納得させ、人々を護らなければならない。手の平に染みつくはずのものに堪え、あの時感じた不確かな何かを、胸に育てながら。

ノックの音がして扉が引かれた。着物の染み抜きをしてくれた少年だった。「リリナネ様とタパタイラ様がお待ちです」と言った。附いていくと例の広い板の間、祭祀場に通された。マアシナの神像の前に、リリナネとタパタイラは座っていた。前に古びた木箱を置いていた。木箱を挟んで、アオイは向かいに座った。

「貴殿のケイ「龍翅」にあわせて付ける石を、リリナネに選んでもらいなさい」タパタイラは言った。

「すみません。ありがとうございます」頭を下げた。

「いいのよ」

リリナネは相変わらずアオイの目を見ないようにしていた。巧みに視線を逸らしながら、木箱を開いて彼の方に向けた。箱の中は細かく仕切られ、綺麗な色の石が沢山入っていた。

「何色が好きかしら？」

「え？ 色で選んでいいんですか？」

基準がそこは思いもよらず、少し驚いて問い返すと、リリナネは慌てた。

「え、……ええっと、その、基本的には水晶を中心に合わせるの。他は、とりあえず好きな石を選んでみて。そしたら意味を教えてあげる。意味も大事だけど、あんまり欲張って色んな石を附けると良くないから。好きな色の石を中心に、他を選べばいいと思うの……」 幾つか石をつまみ上げて手の平にのせて見せてくれた。「これなんかどう？ 色は地味だけど」。

アオイはリリナネの手の平の上の石をしげしげと見た。確かに地味で、茶色っぽい石だった。二人が石を選び始めると、タパティラは立ち上がった。リリナネに言った。

「では、私は行くでしょう。後は頼まれてくれるか？」

「え……」

リリナネは手の平にのせていた石をバラバラと溢した。慌てて拾い集めた。明らかに動揺していた。何故だろう、慌てるみたいだけど、アオイは不思議に思った。

種を明かせば、二人きりになるのは予想外だったから。タパタイラも一緒だと思って安心していたのだ。まずいぢゃないか、とリリナネは焦っていた。また昼間みたいにももってしまう、と。しかしそれはアオイには分からない事情。

タパタイラは「良い石を選んでもらいなさい」とアオイに言い残して出て行った。

何故だか急に気まずい雰囲気になった。リリナネは綺麗に座り直した。正座に。アオイも慌てて真似をした。

「あの……。その黄色い石は何ですか？」リリナネが手にのせた石の名前を訊いてみた。

「こ、これは虎目石。集中力を高めるの。魔除けにもなるわ。ツツガだけじゃなくて、普通の人を持つにも良い石なの。ケイと一緒に付ける石は、大抵、普通の人が持つてもいい石ばかり……」

語尾が尻切れトンボになった。アオイは慌てて箱の中の石を指差した。

「こ、これは何ですか？」

「それは、魚目石。巫術師がよく着けている石なの。占い師とか、霊視を使う人とかも」

「へえ。こつちの黒い奴は？」

「それは黒瑪瑙。精神力や運動能力を高めてくれる。君にはぴった



りかも」そう言って、にっこり笑った。説明しているうちに照れが消えたようだった。

「じゃあ、これにします」

「え、もう決めるの？ もっと色々選んでみたら……」

「いえ。これがいいです。黒くて格好良いですから」

「そう……。じゃあ、こうしたらどう……？」

リリナネは箱の中から光沢のある青灰色の石をつまんで出した。

「これは曹灰長石。私たちが着けると霊的能力を高めてくれる。修復してくれたりもする。これを「龍翅」の両脇に一つずつ置いて、その先に、黒瑪瑙と水晶を順に並べていったらどうかしら？」

「いいですね。格好良さそうです」

お互いに、にっこり笑顔になり、目が合った。すると一瞬で、これまでのアオイの気遣いも、リリナネの頑張りも水泡に帰した。ギクシャクした空気が戻ってきた。そして途轍もない難関がやってきた。それが難関であることは、アオイにも容易に分かった。

「じゃあ、手を出して……」

「え……？」

「紐を外さなきゃ……」

「そうですね……」

アオイが手を差し出すと、リリナネは「龍翅」を通した紐の結び目をほどこいた。膝にのせて紐に石を通し始めた。難関は過ぎ去ったと、アオイにも分かった。さらに空気が和む事を願い、アオイは世間話をした。

「リリナネさんのケイにも名前があるんですか？」

リリナネは紐に石を通しながら答えた。

「うん。あるよ。私のケイの名前はメア・マタギ。千八百年前に、この世界にもたらされた物なの……」

「千八百年も前に……？」

「うん。この世界にあるケイはおよそ三百。ずっと魔導師の師から弟子へと継承されてるの。さあ、できたよ。でも、もう一個だけ石を入れてもいい？」リリナネはそう言っつて、小さな赤い石を出して手にのせて見せてくれた。

「いいですよ。それはどんな意味なのですか？」

「あんまり意味は無いんだけど……、これはおまじないの石。例えば戦場で命を落とさないようにとか、そんな感じの……」

「じゃあ、是非。入れてください」

「うん」

リリナネは嬉しそうな笑みを浮かべ、その石を紐に通した。一番端っこに。アオイにその石の意味が分かったのはずっと後のこと。

叶わないおまじないだと、冷酷な運命の歯車が二人に告げた後。

「じゃあ、もう一回手を出して。結んであげる」

「はい」

今度はさほど難関では無いみたいだった。アオイにも分かった。紐を結んでもらいながら訊いた。

「紐が切れて石が飛び散ったりしたら大変ですね」

「切れないよ。精霊に貰った紐だから」

「え？ 切れないんですか」

「不思議よね。鉄で切れば切れるのに。神霊や精霊のくれた紐は切れないの。いつまで経っても」

「そうなんですか……」

ごほん、ごほん、子供の咳払いの声にふり返った。見ると祭祀場の入り口の黒い木戸が開き、ユタとリュウ少年がこっちを見ていた。ニヤニヤ笑いながら。膝をつき合わせるようにして向かい合っていた二人は、慌てて離れた。

「アオイさま、リリナさま、ご飯が用意出来たよ」

四・「梅の実」

リリナネはリュウ少年と一緒に自分の部屋へ向かった。祭祀場の入り口でお礼を言って別れた。アオイはユタと一緒に自分の部屋へ戻った。廊下を歩きながらユタは言った。思わず咽せてしまうような事を。

「手を握りあっていたの？」

「ぶつ。ち、違う。紐を結んでもらってたんだ」

「なあんだ……」

ユタはつまらなさそうな顔をした。どうしてユタが残念がるのか分からなかった。

部屋に戻っていつものようにユタと晩ご飯を食べた。アオイのお膳には梅酒が附いていた。小さなコップに、底に梅の実を沈めて。ご飯を食べ終わったユタが欲しそうに見ていた。

「ん、飲みたいのか？」

「違うよ。梅酒の梅が食べたいんだよ」

「なんだ。そうなのか。……ほら。酔うなよ」

アオイは梅酒を飲み干して、コップをユタに渡した。ユタは梅の

実をつまみ上げて、嬉しそうな顔をして囓った。余程嬉しいのか、にやけてしまつて上手く口が閉じないようだった。

「そんなに好きなのか？」

「みんな好きだよ。リュウなんてこの間、五個も食べたんだつて。酔っちゃつたつて言つてた」

「へえ……」

子供達がどれほどこの梅酒の梅の実が好きか、アオイはこの後思ひ知ることになる。

「カタジニは何処かに行つてるの？ 今日は見かけなかつたけど」

「カタジニさまは政治堂へ報告に行つてたんだつて。政治堂というのはクムラギ議会のことだよ。カタジニさまは武人だからね。アオイさまはどつちなんだろう。魔導師ならツフガだけど、剣士なら武人だよ」

「ツフガと武人つて何か区別されてるの？」

「うん。武人は議会に参加できるけど、ツフガは特別職だから政治にかかわつちやいけないんだ。議会に参加できるのは、武人、商人、工人、農民、その人達の代表者。大年寄つて呼ばれてるよ」

「へえ……」

そんな事を話しながら浴室へ向かった。下に降りる時アオイはまた迷つた。兵靴の革紐を全部結ぶのは面倒だった。絹のしとうずを

履いた足につっかけて、革紐をずるずる引き摺りながら行くとうすと、ユタに注意された。

「アオイさま。それはお行儀が悪いです」

「そ、そうか……」

こんな風につっかけるのもアリだと思ったのだが、ただの思い違いのようだった。

浴室に入ると入り口の土間に見たこと無いくらい沢山の靴が並んでいた。ユタが目を丸くして言った。「今日はまた随分多いね」。これを片付けるのは無理だとあきらめたようだった。片付けようにも下足箱が靴であふれていた。いっばいいいっばいだった。

中に入ると休憩所は殆どすし詰め状態だった。若い女の子で。アオイが姿を現すと、視線が一齐に集中した。アオイが目を丸くすると、バツと音を立てて視線が逸れた。てんでに勝手な方を向いた。しかしヒソヒソ、きゃっきゃつとざわめいた。

「ははん……」ユタは言った。「昔、シユスローさまがここに逗留された時も、こんな風に若い娘さん達が見物に来たんだって」。自分の方が年下のくせに、若い娘さん達と生意気を言った。

「その時は、アヅハナウラさまが掃除のふりして箒でいちいち追い払ったんだって。でも、どう見てもその時とは比べものにならないくらい多いみたい。いったい僕はどれほど箒をふり廻せばいいんだろっ……」最後はぼやいた。

「これは、俺を見物に来たのか？」アオイは仰天して小声で訊いた。

「そうに決まってるよ。カタジニさまを見物に来ると思うっ。けど、これじゃあ箒をふり廻したら逆にやられちゃいそうだよ……」

しかしこの後起こる出来事によりこの状況は一夜にして終わり、ユタが箒をふり廻す必要は全くなくなる。

男湯もかなり人が多かった。アオイは、ユタと檜の浴槽の隅っこに入った。今日は朝から忙しくて草臥れ果てていた。朝一番に色々買い物に出かけ、お廟に戻ってすぐにイオワニの道場へ行き、帰ってからリリナネに石を選んでもらった。疲れた体をお湯に沈めた。その時はじめてアオイは、ユタが口の中に何か入れていることに気付いた。ほっぺたの内側に何か入っていた。

「ユタ？ 口に何を入れてるんだ？」

ユタは照れくさそうに笑った。

「梅の種だよ……」

「あれからずっと入れてたのか？」 吃驚して問い返した。

「だって、まだ少し味がするもの」

アオイは腕組みしてちょっと怖い顔を試みせた。いつもの意趣返しのもりで言った。

「ユタ。それはお行儀が悪いぞ」

「うん……」

「ほら。捨ててきてやるから出しな」ユタの前に手を差し出した。

「ううん。いいよ。自分で捨ててくる」ユタはそう言って、梅の種



を自分の手に出そうとして、「あれれ」と、落としてしまった。梅の種はゆらゆらとお湯の底へ沈んでいった。

「ほら。言わんこつちやない」アオイは沈んでいく種を追いかけ、お湯の中を透かして見た。その時、はじめて気附いた。

アオイとユタは大きな湯船の壁際に入っていた。アオイは目を細めてお湯の中を透かして見て気附いた。壁が途切れていることに。板壁はお湯に浸かったそのすぐ下で切れていた。奥があった。梅の種はゆらゆらとお湯に流され、湯船の檜の床の上を奥へ転がっていったのだ。

もしもアオイに記憶があつたとしても、板壁の向こうが何か想像もつかなかつたかも知れない。そこそこが中でつながっているなどとは、その正体が二十一世紀の日本人であるアオイに分かるはずがない。アオイの考えでは、この奥は風呂の沸かし口。きつと一際熱いお湯がたまっているに違いない場所。慌てて手を突っ込んだ。フワフワ漂っている種をつかまえようと。ユタが真っ青になつて言った。

「あつ、駄目です。アオイさま。そつちは」

「えっ？」

指先が何かつるつとしたものに触れ、板壁の向こうで女の人がか「きゃっ」と言った。一瞬、心臓が止まったように感じた。温かいお湯に浸かっているのに、全身が凍り。まさか　　??　と、思う間もなく手首を掴まれた。

「捕まえたっ、痴漢っ!!」

リリナネの声だった。

「ご、ご、ごか……」喉がつかまってた。アオイははじめて知った。人間はあまりに驚くと声が出なくなることを。正直な処、驚倒寸前だった。誤解です、も、違います、も、頭の中に渦巻くばかりで喉から出てこなかった。辛うじて喉から絞り出した。「ち、違っんです」。

声がかすれてひっくり返っていたが、相手は気附いた。

「その声は?? まさか痴漢はアオイセナ!？」リリナネも驚いたようだった。手が離された。しかしその代わり。

板壁の向こうが蜂の巣をつついたような騒ぎになった。それまでまったく何も聞こえなかったのに、今は明瞭に聞こえた。「え? あの剣士さまが痴漢??」「痴漢だったの!?!」「なんて人!?!」「変態だったなんて」「口々に。わんわん響いて聞こえた。

「違っんです。誤解です。梅の種を拾おうとして……」

「まあ、下手な言い逃れしてる。どうして風呂に梅の種が転がってるの? 往生際が悪い痴漢だよ」「何処かのおばさんの声と」「そうよ」「そうよ」と同調する女性達の声。

ユタが一生懸命加勢してくれた。板の向こうに言った。

「本当だよ。僕が食べてたの。アオイさまはそれを拾おうとして」

板壁の向こうがさらに騒然となった。子供をぐるにしているの?

子供を言いくるめて嘘をつかせるなんて、まぢで許せない奴、概ねそんなことを言っていた。

「リリナネさん？ リリナネさん？」アオイは必死で呼びかけたけれど、すでにそこにいないようだった。真っ青になった。女湯は不気味に静まり返った。ヒソヒソ、という感じで。愕然としてお湯に体を沈めたアオイに、ユタが申し訳なさそうに言った。

「ごめんなさい。僕の所為で……」

「いや。いい。気にするな。ただの誤解だから……きつと直ぐに誤解だと分かってもらえる……はず……。それより、どうしてつながっているんだ？」そこそこがつかつていいるなんて違反だと思った。泣きたい気分だった。

「普通はつながってるよ。だって、その方が薪代がかからないから……。それに僕たちがお掃除する時困るもの……行ったり来たり出来なくて……」

薪代くらい死ぬほど働いて何ヶ月分でも立て替えるから勘弁してくれ。板壁の上を見上げた。上はつながっていないかった。天井まで壁だった。記憶はないけれど思った。この造りは変じゃないか。上がつながってるんじゃないか。涙がこぼれそうだった。

近所のおじさんが言った。目が点になっていた。

「あなた、痴漢だったのか……？」

「ち、違います」

別のおじさんが言った。気さくな感じで励ましてくれたけれど。

「隠すな、隠すな。俺も男だ。気持ちは分からんでもない。でもな、兄ちゃん。それは、やっっちゃあなんねえ」

「していません……」

## 五・「手紙」

休憩所で待ち、リリナネが出てきたら謝ろうと思って、急いで風呂をあがった。ユタと一緒に男湯を出ると再び一斉に視線が集中した。ただし、さっきとは全然違う感じで。色で譬えれば白。いわゆる白い目が沢山。そして再びヒソヒソとざわめいた。さっきと全然違うヒソヒソだった。

気を取り直して、と言うよりも心を強くもって女湯の前で待っていると、背中に刺さった。「やだ、怖い」とか色々。アオイは耳たぶまで真っ赤になった。ここに立つ強靱な精神力は持ち合わせないと感じた。後ろでユタが一生懸命説明していた。

「違うんです。僕が梅の種を落としてしまって、アオイさまはそれを拾おうとして」

しかし誰も「なんだ、そうだったんですか」とは言わないし、どちらかと言えば止めて欲しかった。余計いたたまれなかった。

「リリナネさんを待ってるのですか？」

女湯から出てきた少女が、にっこり笑って言った。アオイは自分の正しい年齢を知らない。が、その少女は多分彼と同じか一つ下くらい。濡れた髪を頭の上にピンでまとめ、木桶を抱えていた。頬がほんのり桜色で、優しそうな眸をした少女だった。

「もう、随分前にあがられましたよ」笑顔で教えてくれた。

「そうですね……。ありがとうございます」アオイはお礼を言って、ユタを促し悄悄と浴室を後にした。

廟堂に戻ると入り口にカタジニがいた。笑いながら言った。

「リリナネの尻を撫で廻すとは貴様も豪傑だな」

「撫で……。廻していません……」肩を落として答えた。

部屋まで謝りに行く勇氣は、今はなかった。元氣も。行かなければいけないと思っても。ユタと別れ自分の部屋に一人戻った。腕組みをして座り、眉間に皺を寄せてしばらく解決策を考えた。しかしこれはどんなに難しい顔を試してみても、解決しなかった。ノックの音がした。

戸を開くとユタだった。紙と鉛筆と文字の本を持っていた。

「こんな時は勉強に励んで忘れてしまうのが一番です」ニコツと笑った。

「そうだな」そう答えたけれど、ユタに「こんな時」の経験があるとは思えなかった。

「それに、手紙を書くのが良いと思います。手紙を書いて誤解だと説明するのです」

「そうか、そうだな」

いい考えだった。二人で文机に並んで座り、教えてもらいながら手紙を書いた。先ずきちんと謝罪の言葉を書き、経緯を説明した。経緯は多少いいわけがましいような気がしたが、事実だから仕方な

かった。

「僕も書いとくね。嘘じゃないってちゃんと説明しなきゃ。それに、リリナネさまは豪快な人だから、きつと全然気にしてないと思うよ」

「豪快……？」そんなはずはなかった。アオイの知る限りとても女性らしい人だった。真っ赤になって恥ずかしがったり、二人きりになると慌てたりして。

「そうだよ。だって女大魔導師さまだもの」

「ふーん……。なあ、大魔導師ってどうやったらなれるんだ？」

「上級元素術を使えるようになったら、だよ。例えば焔呪だとプレ・アフィは単体焔呪。プレ・ナーフィが全体焔呪。両方とも上級があるけど、大魔導師になるにはプレ・ルツに指定されている上級術が使えなきゃ駄目なんだって」

「ふーん……。じゃあ、俺は無理だな。移動呪しか使えないから」大魔導師になればリリナネとつり合いがとれるかも知れない。ほんの少し、夢とか希望という形にはならないまでも思っていた。年下だから。

ユタはニコツと笑った。

「アオイさまはきつと大剣士さまになれるよ」

「大剣士にか……？」

「うん。大剣士は議会で叙位されるんだ。今は空位だよ。大魔導師の称号は「龍者」、大巫術師の称号は「天人<sup>てんにん</sup>」、大剣士の称号は「

雷人<sup>らいじん</sup>「だよ」

「雷神？」

「うん。カミナリだよ」ユタは座ったまま剣を構える格好をした。

「その人のふるう剣は雷光のごとし」。芝居がかって言うと、シュツ、シュツと空中を斬ってみせた。

「へえ……。格好いいじゃないか。……でもそれって、強ければなれるのか？」強ければいい、そんなはずはなかった。

「ううん。強いだけじゃ駄目だよ。行いも善くって、立派で、何か大きな働きをした人」

やっぱりね、アオイはため息をついて訊いた。

「じゃあ、痴漢をした人は？」

ユタは黙り込んだ。目をそらして。

そうこう話しているうちに手紙を書き終えた。

僕が届けようか、ユタは言ったが、自分で届けるのが筋だとアオイは思った。今日はもう遅いから明日渡すよ、と答えた。



翌朝、朝食前にリリナネの部屋に行った。引き戸の前に座り、ノックして声をかけてみた。「あの……アオイです」。返事がなかった。いないのかな　　と思ったが、いるかも知れなかった。どちらとも言えない。勇気を出して言ってみた。

「あの……、今日の交点の時間を……」そんなことを訊いてどうする　、と思った。

しかしやはり返事はない。本当にいないのかも　、そう思ったが、いるかも知れなかった。どちらか分からない。

「あの……、昨日はすみませんでした。手紙を置いていきます。読んでください」静まり返った戸の前に手紙を置いた。

自分の部屋に戻りいつものようにユタと朝ご飯を食べた。食べながら話した。

「もう元気になったんだから、俺も何か手伝うよ。掃除とか」

ユタは目を丸くしたけれど嬉しそうに笑った。「いいですよ、そんな……。悪いですから……」断ったけれど顔を見れば一緒に掃除をやりたいそうだった。

「気にするな。ご飯の後は何処の掃除をするんだ？」

「お庭だけ……悪いですから」

断っているが顔がにやけていた。俺と掃除をするのがそんなに嬉しいのか……、と思った。

\* \* \*

大きな箒を手にアオイはユタと二人で庭に出た。二人だけだった。

「二人だけなのか。他の子は？」

「分担があるから。お風呂掃除とか、食器洗いとか」

「じゃあ、いつもこの庭を一人で掃除してたのか？」

「ううん。交代制だよ。みんなと食器洗いをすることもあれば、マアシナさまのお部屋を掃除することもあるよ。庭は掃くだけだからみんな大抵一人でやるよ」

「そうか……。タパ様に言って、俺も当番に入れてもらおうよ」

「うん。僕はアオイさまと一緒に当番がいいな」

「頼んでみるよ」

「ほんとに？」

そんなことを話していると、浴室の方からリリナネがやって来た。物凄い勢いで、つかつかと。着物がびしょ濡れだった。ズボンは何論、上衣の袖口も。

アオイは女の人のそんな表情を何とか憶えていた。記憶の霧の中から浮かび上がった。柳眉を逆立てて、だった。けれど、もう少し激しかった。龍眉を逆立てて、が正しい気がした。アオイの前に立ち、アオイを睨み据えた。

豹に睨まれているようだった。肉食獣が小動物を眼光だけで射すくめてしまうあの感じ。紅鳶の眸を炯炯と光らせて、リリナネはずぶ濡れの手紙を突き出した。彼の書いた手紙だった。

「返すわ」怒気を孕み冷たく言った。

「あ、あの……」

「こんな嘘八百で誤魔化そうなんて」

「いえ……あの、本当です……けど」

「無かったわよ」

「え……?」

「種なんて何処にも無かったわ」

それですぶ濡れの理由が分かった。

「いや、でも……」

「返してくれる?」

「え……何を?」

「私の赤い石」

龍翅に付けてくれた石のことだとすぐ分かった。

「これは戦場で死なないようにとかのおまじないの石じゃ……」

「死になさい」

一瞬、冷凍呪を喰らったかと思った。アオイは手を差し出した。それを見てリリナネはムツと眉をしかめた。綺麗な眉がとんがった。しかし唇を固く結ぶと、手を伸ばし紐を解いた。自分の石を取り戻し、残りの石をアオイの手に突き返した。無言でくるりと背を向けた。

「あ……リリナネさん……紐」

ふり向いてもくれなかった。そのまま肩を怒らせて立ち去った。突風の如く。紐を結ん……結んでくれるわけがない……。

ユタが怯えた目をして言った。「怖かった……」。息が出来なかったみたいだった。

「ああ……」廟堂の入り口へ消える後ろ姿を見送りながらアオイは答えた。「怖かったな」。

ユタは申し訳なさそうに言った。

「ごめんなさい。手紙、あんまり効果なかったね」

「そんなことないさ。それより、これ結んでくれるか」龍翅と石を

通した紐を手渡した。

「うん」

紐を結びながらユタは言った。

「きつと男湯の方に流れていつちやったんじゃないかな。だからリナネさんが捜してもなかったんだよ」

「そうかもな……」

「今から浴室に行つて僕たちで捜してみようよ。今日のお風呂掃除の当番にはリュウもいるから」

しかし無駄だった。浴室にいたリュウ少年は言った。

「浴槽のお湯を抜こうとしていたら、リリナネさまが慌てて飛び込んできて「待つて、待つて」とおっしゃるのです。そのままお湯に飛び込んで一生懸命何かを捜してました。種だとおっしゃってました。君は見なかった？ と何度も訊かれました。けど結局見つからなかったみたいで、男湯の方まで……」

「え？ じゃあ、男湯の方も捜したの？」

ユタが訊くとリュウ少年は頷いた。

「そのあとお湯を抜きながら僕も気を付けて見てただけど……何もなかったよ」

種みたいなきさな物が簡単に見つかるとは思えなかったが、全く影も形も消えてなくなるのは不思議だった。

「誰かが踏んづけて割れちゃったのかな」

「でも、それだと欠片がないとおかしいじゃない」

二人の少年はしきりに不思議がっていた。アオイは、種はもうどうでも良かった。それよりも、リュウ少年が話したりリリナネの様子が少し嬉しかった。一生懸命捜してくれたという。

きっと一生懸命信じようとしてくれたんだ　そう思うことにした。

## 七・「ルル」

一生懸命信じようとしてくれた、アオイはそう思うことにしたが、それは思うことにした云々ではなく、それ以外なかった。彼は女性の心情に疎い。疎いと言うよりもほぼ解っていない。何しろ、キスを断られたらそれだけで脈がないと諦めてしまう男。しかも解っていないことを自覚していない。

リリナネは独り、自分の部屋で膝を抱えて考え込んでいた。痴漢など普通なら気にも止めない。しかし、好意を抱いている相手が実は痴漢をするような奴だった、となると話は別。ただでさえ、自分よりもずっと年下の男の子にときめいてしまったことを多少気恥ずかしく感じていた。悩みは深く複雑だった。

あいつはそんな奴じゃない、そう思っても、本人に記憶がないのだから、ひよとしたら何処かの町を追放された犯罪者かも知れなかった。いくら綺麗な顔をしていても、だから善い人とは限らない。

でも、やっぱりあいつはそんな奴じゃない。知らなかったんだ。何しろ記憶がないんだから。私が大声を出した所為で、すっかり痴漢扱いされてしまった。どうしよう……。

頭を悩ませていると朝一番にやって来た。顔を見る勇氣はなかった。尻込みしてどうしても扉を開けられないでいると手紙を置いていた。中を読んでやっぱりと思った。あの時、大騒ぎになって逃げように立ち去ったけれど、種が何とか言っていた。このことだ

ったんだ。もしもこの種を見つけることが出来たら、みんなに誤解だと説明できるじゃないか、急いで浴室へ行つた。

しかしどれ程捜しても種なんて何処にも無かつた。だんだん腹が立ってきた。一睡もしていない苛々と相まって。まさかこれも嘘なのか、あいつは嘘つきの犯罪者なのか。浴室を出るとそこにいた。箒を手に、いつものように涼しい目をして。爆発した。

嘘かどうかは、もうあまり問題ではなかつた。理由は自分でも分からなかつたが、涼しげな目が問題だつた。

そして爆発し終わった今、膝を抱えて後悔している。私は心が狭い……。痴漢くらい……。あの歳の男の子なら仕方ないじゃないか……。

そこまで寛大になる必要はない。

\* \* \*

掃除を済ませたアオイは、ユタとリュウ少年と一緒にイオワニの道場へ行つた。イオワニは道場にいた。彼が来るのを待っていたようだった。目が笑っていた。

「カタジニから聞いた。リリナネの尻を撫で廻したというのは本当か」

「本当なわけありません……」しかし、撫で廻してはいないが触れたのは事実だつた。掠めた、が一番正確な表現だが。言い直した。「故意ではありません……」。



「そうか」イオワニは愉快そうに笑った。「まあ、許してやれ。リナネはあの歳でけっこうウブなんだ」

「はい……。どうすれば故意ではないと説明できるでしょうか？」

イオワニは笑顔のまま背を向けた。分からないみたいだった。

そりゃそうだよな。アオイはため息をつき、悄然と肩を落とした。

しかしイオワニは、突き放したわけではなかった。やさぐれたおっさん剣士であるイオワニはこう言いたかった。青いぞ、坊主。故意かどうかは問題じゃない。問題は、相手に恥ずかしい思いをさせてしまったことだ、と。俺の背中を見て悟れ、そう思っただけだ。背を向けた。しかし、そんな男の美学的事柄が以心伝心で伝わるほどの余裕は、アオイにはなかった。落胆しただけだった。

\* \* \*

稽古を終え、廟堂へ戻る道すがら、ユタとリュウ少年はずっと言っていた。

「昨日のうちに気が附いて梅の種を捜しておけば良かったね。どうして気が附かなかつたんだろう」

しきりに悔やんでいた。アオイは、種はもうどうでも良かった。見つかりっこないとあきらめていた。物憂い顔で廟堂の門をくぐるうとしていた時、ふいに後ろから声をかけられた。

「剣士さま」

ふり返ると綺麗な赤い着物を着た、優しそうな面立ちの女の子だった。歳は彼と同じくらい。肩くらいまで髪を伸ばし、左耳の横に三つ編みを一つ編んでいた。柔らかそうな栗色の髪の毛先が、可愛らしく少しだけはねていた。「少しお話しがしたいのですが……」頬を染めて言った。

ユタとリュウ少年が顔を見合わせてニツと笑った。ユタに袖を引っ張られて、「ん？ 何だ？」と顔を近づけると、ユタは耳に口を寄せて小声で言った。

「きつと恋告ですよ」

小声で聞き返した。「鯉こく？」。味噌汁が頭に浮かんだ。

「やだなあ、とぼけちゃって。僕とリュウは先に帰ります」にやにや笑いながら門の内側へ消えて行った。

アオイは見知らぬ少女と二人取り残された。

「ええつと……君は？」

「ルル・オシヌミと言います」にっこり笑って答えた。恥ずかしそうに視線が泳いでいた。

「何処かで……」何処かで会った気がした。直ぐに思い出した。「あ、昨日の」。

「はい……」

女湯の前でリリナネは中にいないと教えてくれた少女だった。

「ええつと……、それで、話つて……？」聞かなくても、もう何となく分かった。いくら何でも雰囲気が雰囲気だった。

「はい……」女の子は消え入りそうな声で言った。真つ赤な顔をつむかせて。「あの……、お慕いしています……つきあってください……」

やっぱり、アオイは弱った。こんな時どうすれば良いのか記憶にない。どう言えば傷付けずに断れるかな……そればかり考えていた。しかし、ふと思った。これって、おかしいじゃないか。

「君は、気にならないの？ 昨日の事……」痴漢とつきあいたい女の子、そんなのいるわけなかった。

「はい……。だって、アオイさまは無実ですもの……」にっこり笑って開いた手の平の上には、あの梅の種が乗っていた。

「じゃあ、君が拾ってたの？」

「はい……。昨日、私はリリナネさんのすぐ側に入ってたんです。で、これが湯船の底に転がっているのに気附きました。というわけです……」一瞬、悪戯っぽい笑顔を見せた。が、すぐに恥ずかしそうに目を泳がせた。

「どうして言ってくれなかったの……？」

「だって、気附いたのがリリナネさんが出てしまった後でしたもの。それに……」あさつての方向に目を泳がせて言った。「……あまりにも高嶺の花なんですもの」。

「……………??」

女の子は夢見るような瞳で彼方を見つめ、右手をきゅっと握り、続けた。

「黙ってればアオイさまは「痴漢」。一気に減る恋敵たち。でも、私は無実と知っている。そしてこれをきっかけにお近づきに……そして始まる親密な交際……これは、まさに恋の種……」小さくきやつと言って再びあさつての方角を向いた。

これは、厄介な人かも知れない。

「アオイさまはお芝居は好きですか……？ それともツキツキの

方が良いかしら……？」

ツキツキって何だ？ 訊いてみたかったがグツとこらえた。「あの……、それより、その種の事をみんなに話してもらえませんか？ このままだと俺は痴漢に」

「いやです」

こういう人を叱っちゃいけない、本能で感じた。こらえた。この人は、アレの素養充分、アレ、何て言ったっけ？ 何処か夢見ているような大きな瞳も、危険な兆候をいっばい孕んでいるように感じた。アレ何て言ってたっけ……、スト……ストッパー……違うな……。

「私とつきあって頂けますか……？」

頬を染めて、うつむき加減に言う少女。ほんの少し、首を斜めに傾げて。アオイは頭を抱えたい気分だった。曖昧な返事をしてはいけないと感じた。それに女の子に告白されて安請け合いはいけないとも思った。記憶はないが、過去にそれで痛い経験をした気がした。しかし、上手い断りの文句など浮かばなかった。

「駄目ですか……？」 大きな眸に見る見る涙がたまった。

「いや……」

「いいんですか？」

涙をためた眸が嬉しそうに輝いた。その幸せそうな顔を見たら、「はい」と言っただけであげたい気持ちになった。流されては駄目だ、グツとこらえた。流されては、と言うよりも、渦巻きにのみ込まれ

そんな感じだった。得体の知れない何か、つまり言葉に直せば不思議光線、ポワポワと渦巻いていた。

「俺はその……あなたのことをあまり知りません……ですからあなたの望むようなお返事は出来ません……」

再び泣きそうな顔になった。心を鬼にして続けて言った。「それよりも、その種の事、みんなには黙っててもいいですから、一人だけ話してもらえませんか？」

「誰ですか……？」

「リリナネさんです」

「どうしてですか？」

「リリナネさんはきっと、その……、傷付いたはずだからです」

「ううん、それは嘘です……。アオイさまはリリナネさまが好きなのですね……？」

ポワポワなくせに、意外と鋭かった。アオイは一瞬躊躇したが「はい」と答えた。告白してきた相手に、嘘を言ったり誤魔化したりしてはいけない気がした。

ルルは泣かなかつた。泣きそうな顔になったが、にこつと笑った。けなげな笑顔を見せて言った。「分かりました」。目尻にたまった涙を、指先でぬぐった。

「え？ 分かってもらえましたか？」

「リリナネさんにお話しします。でも、その代わりお願いがあります」

「お願いって？」

「お友達になって下さい」

「そのくらいなら……」

「一緒にお芝居を見に行ったり、ツキツキを見ながら絶叫したり、お弁当を持って公園に行って肩を寄せ合って座ってお喋りをして、手をつないでお散歩しながら時に見つめ合い」

ツキツキって何だ？　もう一度思ったが、それよりも。

「ちょっと待って。その、途中辺りから友達と言うよりも恋人がすることになってますが」

「あら。アオイさまはご記憶がないのですね。友達といえば普通そうですよ。みんなしています」心得顔で言った。

「え？　ほんとに？」

嘘みたいだった。目を泳がせて黙り込んだ。そのあと、消え入りそうな小さな声で言った。

「お友達になって、私のことを知ったら……、お返事を頂けますか……？　良いでも、駄目でも、私のことを知ってから……」

期待させるようなことを言っているのだろうか、少し迷った。

けれど、このくらい約束してもと思い、笑顔で答えた。「はい。分かりました」

「私、頑張ります……」嬉しそうに、にこっと笑った。



お廟に戻ると入り口でユタが待っていた。聞きたくて堪らない顔をしているくせに、こういう事を興味津々に訊くのは男らしくないとも思っているのか、一言も訊かなかった。アオイも、こういう事柄は軽々しく話すものではないと思ったから言わなかった。

けれどニコニコ笑って附いてきて、とうとう部屋まで附いてきた。所在なさげに、けれどニコニコ笑っているその顔を見ると、言わないでは済まなさそうだった。言葉を選んで簡単にこう言った。

「お友達になることにした」

「へえ……」ユタは嬉しそうな顔をした。「良かったですねえ……」

「うん……」良かったのかどうか分からない。少し気が重かった。先延ばしにされた返事を、いずれ言わなければならぬ。

「オシヌミさまはとっても優しくって良い方ですよ」

「ん？ 知ってるの？」

「はい。ご近所ですから。お母さまを小さい時に亡くされて、今はお父さまと二人暮らしで……」

そんな気の毒な事情は聞きたくなかった。断りづらくなってしま  
う。

「オシ又三家は、もとは旧家の出なのですが今はすっかり……。確かお父さまは普通のお勤めのはずです」

「ふーん……」出来れば聞きたくない話が続いた。気のない返事をしたが、ユタは気附いてくれなかった。

「はい。町外れに大きな製鉄所があったでしょ。あれはオシ又三本家の製鉄所ですよ」

「オシ又三、製鉄……?」

記憶の暗い霧の奥深くに、微かな閃光が走った。遠い雷光のように。ここに存在する違和感を全て解き明かし、この暗い闇を一気に吹き飛ばしかねない瞬き。何かが暗い霧の奥底で胎動していた。

「旧家……、旧家って……?」

ユタはそんな彼の心の内側の様子には全く気附かず、物知り顔で答えた。

「サザキベ、ミチモリ、オシ又三はクムラギの旧家で、御三家と呼ばれています。あ、あとワニも。イオワニさまも旧家の出なんですよ」

「サザキ……オシ又三……」心の奥底の細い記憶の糸。口の中で何度も繰り返した。その糸をたぐれば、一瞬でこの闇は明るく照らされる、記憶が戻る、そんな気がした。けれど糸が途切れた。まるで何者かが断ち切ったように。何かが降りてきてよりいっそう深い霧の中に彼を閉ざした。それっきり何も見えなくなった。春雷を運ぶ雲が遠ざかってしまったように、それっきり。

「どうしたの？ お顔の色が……」

気附くとユタが心配そうに見ていた。

「いや、何でもない……大丈夫だ……」

笑って見せた。答えながら今の感覚を心の裡でなぞった。ぞっとする感覚。何か得体の知れないもの。その何かが自分の裡に入ってきた感覚を。

「あなたは呼ばれたの」  
「フィオラパの言葉が鮮明に蘇った。」

## 八・「赤い石」

その日の夕食後は、ユタを手伝って皿洗いをした。ユタと一緒に、それぞれ自分の箱膳を抱えて厨房へ向かった。「ここが厨房ですよ」。案内されて入った部屋で、またか　　と思った。もう何度目になるか分からない感覚。

その部屋は半分だけ板の間で奥が土間になっていた。土間には竈つばい調理台と手押しポンプの井戸があった。正直、その違和感にはもう慣れっこだったから、ここもか　　と思ったただだった。

食器棚や配膳台がある板の間を通り過ぎ、土間に降りた。井戸の周りは石を敷いた洗い場で、大きな木桶が幾つかあって、使い終わった食器が沈められていた。

この日の食器洗いの当番は、ユタとリュウ少年と、着物の染み抜きをしてくれたあの少年だった。ユタ達よりも年上で一四歳くらい。口数が少なく冷たい感じの少年。

少年の名は、ラナイナライ（ラナイ・ナライーラナイ・西風）、一番年かさでお廟の少年達の差配役ということだった。

ユタとリュウ少年、ラナイ少年と並んで、アオイは桶の中のお皿を洗った。タワシに粉末の洗剤をつけて。なるほどね　　としか思わなかった。しかもタワシも、タワシに似ているというだけで、どうもタワシとは雰囲気違っていた。「これ、何？」と訊くと、ユタは「タワシです」と答えた。「あ、そう」と答えた。

洗う道具はともかく、ふと疑問が浮かんだ。訊いてみた。

「なあ。お湯は使えないのか？」

ユタが答えた。

「お湯？ 真冬ならヤカンでお湯を沸かして桶に入れたりするけど……」

「ふーん……」

「どうしてですか？」

「いや……」お湯で洗っていたような気がしたのだが。「井戸からお湯がでるわけがないよな……」

みんな笑った。「井戸からお湯がでたら、それは温泉ですよ」

「だよな」

「ですよ。あ、アオイさま。次はその鉄鍋をお願いします」

「てつなべ……？」ユタの指差す方を見ると、大きなそれがあった。確か、なんとかパン。何パンかは思い出せなかった。鉄鍋でかまわなかった。「これだな」

アオイが鉄鍋を取り、洗剤の粉をふるうとすると皆一斉に言った。「あ、ダメです」。ユタだけでなくリュウ少年とラナイ少年も。

「え……？」

ユタに注意された。

「アオイさま。鉄鍋は洗剤で洗っちゃダメです」

「え？ そうなのか？」

「洗剤で油分がとんで、焦げ付きの原因になります。鉄の表面に油が馴染んでいるんですから」

「へえ……」そう言われてみればそんな気もした。洗剤で洗っていた気がして、深く考えずすっかり洗おうとしたのだが。「よく知ってるな……」

「よくじゃないです」ユタは諭すような口調で生意気を言った。「アオイさまは、ご記憶がないにもほどがあります」

リュウ少年とライナイ少年も、もっともだと言わんばかりに頷いた。常識、らしかった。

皿洗いを終え、皿を食器棚に並べ、箱膳を食器棚の横の壁際に重ねて積み上げた。それで今日の仕事は終わりだった。みんなで厨房を出て、家に帰るライナイ少年とリュウ少年をお廟の入り口で見送った。

ユタと二人で連れだって廊下を歩き部屋の前まで戻ると、彼の部屋の前にリリナネが立っていた。待っていたようだった。

アオイは一瞬ギクリとしたが、喧嘩を売りに来たのではなさそうだった。真っ赤な顔をして、今にも泣きそうな目をしていた。雰囲気からして、和解、だった。ルル・オシヌミの話聞いたんだと思

った。

不思議な事に、ユタの顔が見る見る赤くなった。

「僕は自分の部屋に戻るね。じゃあ、お休みなさい」真つ赤な顔でそう言つと、そそくさと自分の部屋に入り引き戸を閉じた。

どうしてあいつが照れるんだ、少し不思議に思った。

「あの……」リリナネは泣きそうな顔で頭を下げた。「ごめん……」  
。差し出した手の平に、あの種が乗っていた。ルル・オシヌミが話してくれたと分かった。

「私、どうしたら……」

「気にしないでください。もとはと言えば、俺の不注意ですから」

リリナネは首を振った。

「私、これをみんなに見せて説明する」

「いえ。いいです」誰にも言わない代わりに、という約束だった。

「その種は俺に下さい」

「どうして……？ それじゃ君は痴漢つて事に……」

アオイは笑つて答えた。

「説明しなくても、俺とリリナネさんが普通に話しているところを見れば、みんなあれは誤解だったと分かると思います」

「分かったわ。じゃあ、明日から一緒にお風呂にはいり」

「え？」

リリナネは真っ赤になって言い直した。「違う……、一緒に浴室へ行きましょう……」しどろもどろだった。「あそこが一番人が多いから……」

「はい」

リリナネはもう一度手の平を指しだした。アオイは種を取った。リリナネは笑った。まっすぐ目を見て笑顔を向けてくれたことが嬉しかった。

「じゃあ、もう一度あの石を付けてもらえますか？」

「おまじないの石？」

「はい」

「付けてくれるの？」

「はい」

アオイは手を差し出した。リリナネは紐を解き、赤い石を紐に通した。紐を結んでもらいながら、アオイは言った。軽口のもりで。「これで、戦場で死なずに済みます」

するとリリナネはバツが悪そうに目を伏せた。「うん……」と言いなながらも。その表情が少し意外だった。戦場で死なないおまじない、じゃないのかな　と思った。



紐を結び終って、リリナネは言った。「本当に、ごめんね……。  
明日から、毎朝、交点の時間を聞きに来て」

「はい」

「じゃあ、お休み」

「はい。お休みなさい」

リリナネと別れ、自分の部屋に入った。鶏冠竜の毛皮を文机の前に敷いて座った。種を机の上に転がした。自然、笑みが浮かんだ。万事治まった上に、距離が縮まった気がした。

「恋の種、か……」

しかし経緯を考えてみれば、そんなステキな名前が似合う代物では全くなかった。笑顔も凍り付く代物。汚名返上できただけでもよしと思わなければ。自嘲気味に笑うと、種を引き出しに入れ、ビシヤンと閉めた。

九・「風の夜」

その夜は風が強かった。夜半、ボタンと木窓が開いた音で目を覚ました。アオイが目を開くと、両開きの木窓がバタバタと風で揺れていた。

起き上がり、窓を閉めようと窓辺に立った。その時間こえた。風の奥に微かな半鐘の音。アオイは月明かりの中、目を凝らした。しかし本当に微かな音で方角も分からない。ともすれば風の音にかき消される。

ランプに火を点けていると、部屋の引き戸が開いた。ユタだった。

「アオイさま。半鐘が鳴ってるよ」

「うん。どっちだろう?」

ユタも分からないみたいだった。首を振った。

「とにかく支度するよ」

「うん。僕はリリナネさまとカタジニさまに知らせてくるね」

ユタは廊下を駆けていった。

アオイは青碧の着物を着て、劍龍の剣の帯取り金物の紐を腰帯に結んだ。絹のしとつずを履き、斬馬刀を手に取った。足音がして、

戻ってきたのはユタではなくラナイ少年だった。どうやら知らせに駆けてきたようだった。

「西に大群です。すでに防壁の内側に侵入していると。リリナ様とカタジニ様にはもうお知らせしました。お二人とも出立します。アオイ様も早く」

「分かった」口早に答え、部屋を出た。ラナイ少年が先に立った。

廊下を歩きながら少年は説明した。

「西の一番外側の区画は農地が広がっています。以前は壁の外だった場所です。悪龍が誕生して蠻族の襲撃が激化し、農地を護る爲に防壁が築かれました。集落が幾つもあります」

お廟の入り口に皆いた。タパタイラとリリナネとカタジニ。ユタも。リリナネとカタジニはすでに戦履きをしていた。

「来たな、色男。悪いが俺は先に行くぞ」カタジニは笑って言うと、斬馬刀を手に飛び出していった。

「急いで、アオイ」

「はい」

アオイは急いで皮のしとうずを穿いて紐を結んだ。兵靴を足にあてた。待っているリリナネに、ラナイ少年が言った。

「アオイ様は僕がご案内します。リリナ様は先に行かれてください」

「うん。分かった。アオイ、そのまま聞いて。今結ぶ印は、龍尾」

「はい」

口早に言い残しリリナネも出て行った。アオイは戦履きをするのに手間取った。気が急くあまり。タパタイラが後ろから言った。

「アオイ殿。心を静めて、戦いに臨まれよ」

「はい」

紐を結び終わり立ち上がりふり返ると、ユタが心配そうな顔をしていた。少し笑って頷いてみせた。先ず、俺が勇気を持たなければ  
そう思いながら。

「急ぎましょう」

ラナイ少年に促され、アオイは廟堂を飛び出した。タパタイラとユタに見送られ。

通りには町の人の姿があった。みんな寝着姿で、不安げな顔をしていた。一軒の家の戸口から、ルル・オシ又ミが顔をのぞかせていた。寝着姿で、何故か朝顔の鉢植えを抱いていた。アオイの姿を見つけるとにつこり笑って手をふった。

アオイは駆けながら笑顔を返した。緊張感のないルル・オシ又ミの顔を見て、自分がどれ程緊張していたのか気附いた。駆けながら大きく息をついた。ラナイ少年は言った。

「あまり急いで駆けると息が切れてしまいます。慌てず駆けましょ

う

「そうだな」そう答えたが、すでに息が切れそうだった。

壁を幾つか過ぎると武人の姿が目立った。馬で駆け、アオイとラナイ少年を追い越していった。皆、鎧の上に胴服をはおっていた。鎖頭巾をかぶっていた。町の人々が灯火の術をかけた棒をにかけて道を照らしていた。武人達も、三人に一人は灯火の術をかけた槍を手にしていた。ラナイ少年は言った。前方を指差し。

「あの門の向こうです」

騎兵が続々とその門の中へ駆け込んでいた。アオイは足を止めて言った。「分かった。君はもう戻るといい」

「はい。アオイ様、斬馬刀を。粉をかけます」

「粉？」

「はい。切れ味が鈍らなくなる粉です」

いくら切れる刃物でも、生き物を斬ればその脂で切れ味が鈍ってくる。その事は前回の戦いでアオイも知っていた。斬馬刀の刃を差し出すとラナイ少年は粉をかけ呪文を唱えた。剣にもかけてくれた。呪文を唱え終わるとラナイ少年は言った。

「ご武運を。アオイ様」

「うん。ありがとう。君も無事に戻ってくれ」

アオイはラナイ少年と別れ、門の中へ駆け込んだ。ラナイ少年はずっと見送っていた。

門を抜けると、そこは戦場だった。聞いていたとおり農地が広がっている。家々もある。灯火の術をかけた槍があちこちの地面に突き立てられ、戦場を照らしていた。切り結ぶ小鬼族と槍の騎兵。方々に。

冷静になれ。自分に言い聞かせた。手柄を焦る気持ちはない。目的は人々を護ること。先ずは。先ずは仲間を捜すことだと思つた。リリナネとカタジニ。そしてイオワニ。

風が強く空が鳴っていた。その風の底を駆ける騎馬、切り結ぶ人と蠻族。青白い灯火に照らされた、戦場には似つかわしくない幻想的な空間。家々が闇の中に沈んでいるが、住民はすでに避難して一人も残っていないようだった。その時、闇の中から小さな黒い影が躍りかかってきた。

戦靴の鉄の歯で地を捉え、身を翻して斧をかわした。引いた足で地を蹴り逆回転、斬馬刀を繰り出した。切っ先は深々と敵に突き刺さった。ビクビクと痙攣している小鬼族を引き倒して鋒身を抜いた。

側に二騎の兵が駆け寄った。馬上の武人は言った。声の感じは若かったが、二人とも鎖頭巾で顔は分からなかった。

「見かけぬ剣士、貴殿は？」

「アオイセナです。タイラ様の廟堂の」

「ツフガの剣士か。ミチモリ様より聞いている。よろしく頼む。我

はオニマルサザキベ（オニマル・サザキベ一王仁丸・雀部）。この区画の住民はすでに避難している。防壁の外には敵が押し寄せている。リリナ様が頼みの綱だ。リリナ様を門の外へ」

「分かりました。リリナネは何処に？」

「門の側だ。武運を祈る」早口に言い残し、駆けていった。

行く手の暗闇の中に石の壁が聳えている。あそこまで行かなければならない、早く。。。

## 十・「壁の上」

アオイは足を止め、息をついた。ずっと駆けてきて息が切れていた。

そこは激しい戦場だった。大きな門に面した広い道。闇の中に聳え立つ石の防壁。クムラギの一番外側の壁。その壁に何本も綱が垂らされ小鬼族が鈴なりにぶら下がっている。無数の矢が射かけられている。矢に当たり転がり落ちながらも、壁の上から続々と降りてきている。矢のうち数本に一本は灯火の術がかけられている。

仲間が何処にいるのかなど全く分からない。切り結ぶ、人と人型の異種族。門はその激戦区を抜けた先。形勢は圧倒的に人が優勢。けれど次々壁の向こうから降りてきている。壁の内側は優勢だが、壁の外にはどれ程押し寄せているのか分からない。

気附くと周囲に黒い影が三つあった。いつの間にか忍び寄っていた。うち一匹はすぐ側だった。

敵が斧を振り下ろすと同時に、右へ身を翻した。敵は斧をふり抜いた姿勢。交差させた左足を戻し、右足で地を蹴った。軀を廻しつつ斬馬刀で叩き斬った。残る二匹の敵は丁度側方。一匹はすでに斧を振り上げていた。

しかし慌てなかった。この状況は人形遊びでやった。鉾を廻した勢いもそのままに、強烈に地を蹴り跳んだ。



かろうじて逃れたものの、宙に躍り上がった無防備な軀。空中で流れた姿勢。格好の的だった。勿論、承知の上。すでに印を結んでいる。

「フル」

一匹の背後に跳び、まっすぐ下方へ着地して、軀を廻して斬り捨てた。横の敵に、右手一本で斬馬刀を繰り出した。少し遠い。それも分かつている。手の中の柄を滑らせた。切っ先は深々と敵に突き刺さった。刺さると同時にグツと柄を握り、鋒身を引き抜いた。

リリナネも、カタジニも、何処にいるのか分からない。イオワニも。リリナネは門の側だと聞いた。けれど、。頭上を睨みあげ、移動呪を唱えた。アオイが跳んだ先は壁の上だった。

石の上に立った。強風吹き抜けている。ド肝を抜かれた格好の小鬼族を立て続けに二匹斬り捨てた。甲高い声で喚きながら敵が退いた。前面と背後で彼を挟み、身構え。アオイは斬馬刀を廻して足下の綱を斬った。ぶら下がっていた敵が闇の中へ吸い込まれていった。

壁の幅は長槍一本分。あまり広くはないが、狭すぎるということもない。ただ、塀も柵もない。灯りは、灯火の術のかけられた矢が一本、側の屍に刺さっている。そのみ。足を踏み外せば転がり落ちるだけ。眼下には青白い灯火で照らされた幻想的な戦場。壁の反対側は真っ暗闇。しかしその闇の底には敵が蠢いているはず。風吹き抜ける空の中の路。

前面と背後の敵が示し合わせて襲いかかってきた。

前面と背後の敵が示し合わせて襲いかかってきた。その時、背後の小鬼族が立て続けに劍呪の餌食となった。リリナネの援護だった。

斬馬刀をふるった。彼にとって厄介な位置の敵、危ないタイミング、全てリリナネの劍呪が取り除いてくれる。

斬馬刀を廻すアオイ、その周囲の小鬼族が次々劍呪の餌食となる。さらに、彼から離れた場所に次々打ち込まれる灯火の矢。仄かに照らされた闇の中の路。

ここでは小技は使えない。力任せに薙ぎ払った。背後や、手に余る敵はリリナネに任せた。踏み込む度、石を蹴る度、兵靴の鉄の歯が火花を散らす。カツ、と石を刻む。石の上では、鉄の歯が逆効果だった。時に滑りそうになる。石を砕くほど蹴ればいいだけだそう思った。

アオイは屍を踏み越え敵を斬り倒しながら、隙を見て綱を切った。壁の外側から、一本の梯子が立てかけられているのに気附いた。一体どうやってこんな長い梯子を造ったのかは知らないが、この梯子でここに登り綱を渡したに違いない。登ってきていた小鬼族の首を斬馬刀で飛ばし、梯子を蹴り倒した。

綱は全て切った。梯子も倒した。アオイは石の縁を蹴り、空中に飛び出した。背中を数本の斧が掠めた。落下しながら唱えた。

地上に跳ぶと、そこは畑の中だった。地が軟らかい。すぐ側にイオウニがいた。数匹の小鬼族と切り結んでいた。アオイは一匹を斬

り伏せ、イオワニと背中合わせに立った。敵を睨み据えながら、イオワニは背中越しに言った。

「大した働きだな。大活躍じゃないか」

「見てたんですか」

「見らいでか」

襲いかかってきた敵をそれぞれ斬り伏せた。地が軟らかで足をとられそうだった。イオワニは言った。

「アオイ。ここは足場が悪い。道まで跳べ」

「え？」

「いいか。俺がつかまったらすぐに唱えろ」

「いや……、俺は自分以外跳ばせないんです……」

「馬鹿たれ。お前の体にくっついていてるモノは全てお前と共に跳ぶ。そうでなければ、お前は跳んだ先で丸裸になるじゃないか」

「そ、そうですね……」

言われてみればその通りだった。手を翳して人や物を移動させられないというだけだった。

団子になって一斉に襲いかかってきた小鬼族。イオワニがアオイの肩をつかんだ。「よし、跳べ」。アオイは素早く唱えた。「フル」。敵が斧を振り下ろした時には、二人の姿は消えていた。

広い道、中央に跳んだ。騎馬と小鬼族が激しく切り結んでいる。現れるやいなや、二人とも斬馬刀をふるい、それぞれ一匹と二匹を斬り捨てた。

「アオイッ！」

見るとすぐ側にリリナネがいた。リリナネを護るように斬馬刀をふるうカタジニも。

「おう！ 来たな。色男。壁の上で大働きじゃないか。次は俺も連れて行け」敵を斬り伏せながら、カタジニが笑って言った。

「良かった。会えましたね」斬馬刀を構えたままアオイは答えた。

「さつきはありがとうございました」。背中越しにリリナネに援護の礼を言った。

「息が切れてるじゃない。ちょっとじっとしてて」リリナネはそう言うと、アオイの前に回り手を翳した。

「マタトア」

不思議な事に息切れがおさまり、心が静まった。何かが軀の芯に据わった。しかも知覚が高まった気がした。視力、聴力、共に。慌ただしく動き回る戦場の様子が、まるで止まっているかのように感じられた。

「今のは？」

「神経呪よ。戦士に勇気と落ち着きを与え、五感を高めるわ。怪我

してる時は、逆に鎮痛効果がある」

「ありがとうございます」

斬馬刀を構え、敵と睨み合いながらイオワニは言った。

「内側の小鬼族は残り僅かだ。全て退治して門を開くぞ。アオイ。剣を抜け。お前の剣術を俺に見せる」

斬馬刀は柄が金属で重く、今まで腕でふり廻していた。彼本来の動きではない。イオワニは見抜いていた。

「分かりました」

アオイは斬馬刀を地に突き立て、劍竜環頭太刀を抜いた。印を結んだ。カタジニが気附いて慌てた。「おい、待て。俺も連れて行け」  
。待たずに唱えた。

人と蠻族が一番激しく切り結んでいる場所に跳んだ。門のすぐ側の激戦区。「こら、ずるいぞ、貴様」というカタジニの声が後方に聞こえた。

追い詰められた小鬼族の一匹が、背後から斬りかかってきた。

追い詰められた小鬼族の一匹が、背後から斬りかかってきた。後ろ目で見、左足を廻すだけで躲した。つんのめった敵。回避からそのまま剣を打ちおろし斬った。

ドサツと地に倒れた小鬼族。血を流し、ビクビク動いている。前回戦った時から気附いていたが、今ではハッキリ知っていた。こいつらは、人間より頑丈で生命力が強い。

眉を曇らせた時、正面と側方に敵。斧を振り上げて躍りかかってきた。しかし側方の敵はリリナネの剣呪を喰らい、沈んだ。正面の敵だけ。

手前の左足を軸に右足を踏み込んだ。得たりと斧を振り下ろす敵。踏み込んだのはフェイント。地に着くと同時に右足を引いた。斧が右肩を掠めた。引いた右足で地を蹴り、懐に飛び込み刃を叩き込んだ。肩口から胸にかけて斬り裂き、片腕を切り落とした。ゴロゴロと地を転がり廻る敵。

間髪入れず側方から躍りかかってきた敵。これも容易く躲せた。つんのめりながらも向き直り、敵は再び斧を振り上げた。

一瞬、僅かに足を動かすフェイント。敵が誘われ、その意識が流れた。次の瞬間、敵の意識が流れた反対側に飛び込み、けさ斬りに斬り捨てた。

その動きを詳細に説明すれば、先ず、手前の左足の後ろに右足を交差させた。右かかどが敵を向くくらい。軀は半身と言うよりも一瞬背中を向けるくらい。右足を起点に軀を廻しつつ左足を踏み込んだ。胸板を割られ敵は沈んだ。倒れ、地を転がり、這い、もがいて

いた。

一撃で絶命させることは、なかなか出来ない。とどめを刺してやるべきだろうか、一瞬、迷った。

しかしその時、側にもう一匹来ていた。軀を廻し向き合った。が、すでに敵は斧をふるっていた。横殴りに。水平に近い軌道で飛んでくる刃。リリナネは間の人馬が障壁となり援護できない。遠くに慌てている顔を見た。

しかし、これも人形遊びでやっていた。

後方へ身を倒した。刃が腹を掠めた。完全に軀を倒し左手を地についで、足を後方へ廻し、逃れた。軀を起こすやいなや移動呪。追い縋ってきていた小鬼族の背後に跳び、斬り捨てた。

呪文効果で無敵感に包まれていた。敵の動き、太刀筋、全てミリ単位で捉えることが出来た。容易く躲せ、自在に動けた。飛燕の如く。彼の空間は左右だけではなかった。地上近くもあった。そしてさらに移動呪。

目にした武人達が呆気にとられていた。そしてその時、声が響いた。「開門っ！ 門を開けえ！」あの武人、オニマルサザキべの声だった。

## 十一・「開門」

アオイがふり返るとすぐ背後、門の前でさっきの武人、オニマルサザキベが槍をかけた、号令していた。馬の手綱を絞り。「伝令だつ、門を開けえ！ 討って出るぞっ」

武人達が槍や弓をかけた呼応した。応、と響いた。アオイは踵を返した。リリナネを外に導かなければいけない。人馬の間を縫い、元いた場所を目指した。あれほどいた小鬼族は全て屍となり地に折り重なっていた。

仲間達はいつの間にかすぐ側に来ていた。門の脇後方。どつと詰め寄せた人垣の向こう。みんな笑っていた。人垣を抜け合流するとイオワニが言った。

「まるでツバクロ（ツバメ）だな。お前は」

「ツバクロ？」アオイの脳裏に薄ぼんやりと浮かんだのは、白黒の犬の顔だった。あれは何クロだっけ？ 思い出せないが随分古いモノという感じがした。

「ツバクロを知らんのか？」イオワニは説明に困っていた。「ツバクロはツバクロだ。説明しようがない。鳥だ。白黒で、クルクル飛ぶ……」

「へえ……」やっぱり白黒か、そう思った。で、犬は何クロだっけ、思い出せなかった。



「白黒の犬は何クロでしたっけ？」

イオワニは眉間に皺を寄せ首を捻った。「白黒の犬は……それは……ブチだろう。違うのか？」

カタジニもアオイを褒めた。磊落に笑いながら。「武人らが皆貴様に見とれてたぞ。百戦錬磨の男どもに見惚れるとは羨ましい奴だ」。あながち冗談ではなさそうだった。

リリナネが綺麗な眉をしかめて言った。「気色悪いことを言うな」

カタジニは笑ってやり返した。

「自分が見惚れることが無いといって、ひがむな」

「わっ、私は、」

カタジニはリリナネを無視してアオイに向き直り、今度は少し怒って言った。糸のような目を尖らせて。「しかした。次はちゃんと俺も連れて跳べ」

「はい。門が開いたら、敵の背後に跳びます」

「よし。じゃあ、俺も連れて行け」

「分かりました」そう答えたが、ふと思い出した。聞いたことある気がした。何かの拍子に蠅と混じってしまい、徐々に蠅に変身していく人の話。あれは移動呪で混じったんじゃないか。。

「カタジニさんはリリナネさんを護ってください」

「むう。何故だ。自分ばかりいい格好しようという魂胆か」

笑って、返事をせずリリナネの方を向いた。「灯火の粉を持って  
いませんか」

「あるわ」

「俺の斬馬刀にかけて貰えますか」

「うん、分かった」

アオイは斬馬刀の柄を、リリナネに差し出した。リリナネは粉を  
かけ呪文を唱えてくれた。斬馬刀の柄が青白い光に包まれた。その  
間中、カタジニはずっと言っていた。「戦場の男達の視線を独り占  
めする気だな。許されんぞ、貴様」とか色々。誰も取り合っていな  
かったので、アオイもそれに従った。

「よし。門が開くぞ。俺達は後方へ廻ろう」イオワニが三人を促し  
た。

後方へ廻りこむと、武人達が左右に割れ、陣中央に通してくれた。陣形は前面に歩兵、その背後に騎兵。騎兵らは灯火の矢を弓につがえている。その騎兵の只中に通された。馬上の武人が言った。

「リリナネ殿、我らが切り崩すまでお待ちください」

リリナネは頷いた。

「開門だ」一人の武人が呟いた。ギギ、と音が響いた。呼応するように方々で開の声があがった。

軋みながら開いていく巨大な門。僅かに開いた隙間からなだれ込む小鬼族。入れまいとする武人ら。斬り合い、刺し合う。隙間が広がる。さらさら激しい押し合いになった。肉弾戦。

「かなり多いな……」イオワニが口角を僅かにあげ、不敵に笑って言った。

「今日は多い方ということですか？」

アオイが問い返すと、不安になるようなことを言った。

「今まで見たことないくらい多い、という意味だ」

アオイとイオワニが、開いていく門を睨みながら話している後ろで、カタジニはリリナネに嘔み附いていた。実は移動中もずっと嘔み付いていたのだが、ずっと無視されていた。が、漸く無視されな

い攻撃点を見つけたカタジニ。

「だいたい、さっきはおかしかったぞ、お前。側で戦っておる俺にはちつとも加勢せず、アオイばかり依怙鼻肩しておったではないか」

リリナネは真っ赤になって反論した。

「わっ、私は鼻肩なんかしてないっ」

「いやいや。誰しも美しい容貌に惹かれるのは当然。その事を責めているのではない」

「ひっ、惹かれてなんかないっ」

アオイは背中越しに聞いていた。鼻肩してくれていたのかなと、ドキツとした処に「惹かれてなんかない」という台詞。ぐさつと胸を刺された。胸を刺されたというより、後頭部をゴンとやられた。

「その事は責めぬが、許せぬのは、その審美眼がおかしいという」とだ

「わ、私は、審美眼は確かだっ」

「ほづ。では、俺を見てどう思う」

「そ……そんな酷いことはとても言えない……」

「どづという意味だ」

アオイは隣のイオワニに訊いた。「いつもこんな風に漫才をやってるんですか?」。イオワニは問い返した。知らないようだった。

「まんざ……？ 何だ？ それは」

アオイも説明しようとして困った。言葉は口から出てきたものの、それが何かはさっぱりだった。「漫才は……、その、確か、沢山のお客の前で、話しを、……」

「善哉かな？」

「ぜんざい……？」

「客を集め、話師がありがたいお話しをする。あまり人気はないが」「違うと思います……」

後日見たそれでは、確かに、話師がありがたいお話しをし、最後を「善哉、善哉」と締めくくった。

門が開いた。

十二・「集結」

「リリナネさん。プレ・ルツって何ですか？」ユタから聞いていた。リリナネはそれが使えるはずだった。

「プレ・ルツは虐殺呪のこと」

「虐殺……ですか？」

「うん。一度に大軍を始末できる。だから虐殺呪。こういう状況でもなければ使っちゃいけない術」

「分かりました。俺はリリナネさんを何処に連れて行けばいいですか」

「敵味方入り乱れていたら使えない。だから、敵の前面に出たい。でも、この押し合いの中じゃ難しいかも」

「分かりました。先ず俺が後方に跳びます。背後から敵を切り崩して、リリナネさんが前に出れる状況にします」

「うん」

アオイは印を結んだ。人と蠻族がもみ合っている門、その奥の暗闇を睨み据え。

「あ、こら」カタジニが慌てて言った。「またか、貴様、ずる」で

途切れた。「いぞ、こらあ」は耳に微かに残っていた。

そこは畑の中だった。アオイは灯火の術をかけた斬馬刀を地に突き立てた。舌打ちをした。敵は壁際に寄せているものと思っていた。門の周辺に。背後に跳んだつもりだった。しかしそこは敵の只中だった。

すぐに取り囲まれた。そしてそれ以外は、彼には目もくれず、ますます駆けていく。続々と闇の奥から現れている。どれ程集まってきたのか、分からなかった。舌打ちしたのは、人は、これを全て殺さなければならぬのかという嘆き。武人達、自分、そして、主にはリリナネが。

剣を抜いた。

一斉に襲いかかってきた。この団子は避けきれない。移動呪で背後に跳んだ。地を抉り軀を廻して敵の背中を叩き斬った。けれど二匹は斬れなかった。剣をふり抜いた状態の彼に、次々斧が振り下ろされた。

印は結んだまま。

前方に跳び、一匹の正面に躍り出て、面食った敵の首を飛ばした。飛沫あがる血を浴びた。しかし血飛沫を斬り裂いて飛んできた斧。再び移動呪。剣を横に突き出して、一匹の側方に跳んだ。出現した時には剣は深々と腹に埋まっていた。バタバタ暴れる小鬼族を引き倒して剣を抜いた。しかし、間髪入れず打ちおろされる斧。再び移動呪。

きりが無い。とても一人では手に負えないと感じた。

その時には灯火の術のかけられた矢が、無数に射かけられていた。仄かに明らかになる戦場の全体図。彼の周辺は農地、その先は草原、前方遙かに、緩やかな丘陵地。緩やかな傾斜の先は闇に包まれている。その全てを埋め尽くして、小鬼族が駆けていた。闇の奥から、続々駆けてきている。全て、クムラギを指し。

くそ。

斬馬刀の回収はあきらめ、一旦後方へ跳んだ。門のすぐ外へ。人と蠻族が激しく切り結ぶ中を、イオワニ、カタジニが武人らと共にリリナネを護って斬馬刀をふるっていた。リリナネの剣呪が立て続けに敵を倒す中を駆け、合流した。

戻ってきたアオイに、イオワニが言った。

「こんなのは見たことない。確かに蠻族はこの二十年で増えたが。まさか、扉の神召喚を気取られたか……」

アオイは剣をふるい、一匹を切り捨て、訊いた。

「まずいんですか？」

「ああ。すこぶる附きにまずい。まあ、後で考えよう」

一人の武人が馬で駆けてきてリリナネに言った。

「リリナネ様、状況があまり良くありません。敵の勢いが強く、リリナネ様を前方に出すのは困難です。我らはこのまま押します。リリナネ様、ご判断を」



リリナネは頷き、アオイをふり返った。

「アオイ。私を、今アオイがいた場所まで連れて行って。あそこから後方の敵だけでも退治する」

「分かりました。つかまってください」アオイは自分の残してきた斬馬刀を睨み据えた。

リリナネが彼の肩に手をのせた。今度こそと手を伸ばしたカタジニの手が、反対の肩をつかむ前にイオワニの手がつかんだ。アオイは唱えた。三人とも、「こっ」まで聞こえた。

「らああ、貴様らあ」は後方遙かに聞こえた。「許さああん」は怒号の中にかき消された。

リリナネを真ん中に、アオイとイオワニは剣を構えた。イオワニも斬馬刀を地に突き立て、剣を抜いた。イオワニは上段、アオイはあの構え。足を止め、取り囲んだ小鬼族。目を剥き、牙ののぞく口を愉快げに歪め、恐ろしい形相で。灯火の術の青い光に照らされた不気味な顔。

次々襲いかかってきた敵。アオイはイオワニと共に斬った。

こいつらは退くことをしない、もう充分すぎるほど分かって  
いた。威嚇して追い散らすなど無理。全て斬らなければならない。  
そしてどれほど斬ってもこいつらは突っこんでくる。

「アオイ、リリナネが合図したら一気に下がれ。リリナネの前に出  
るな」敵を斬り伏せながらイオワニは言った。「一瞬で終わる」

「はい」答えながらリリナネを護り剣をふるった。しかし手に余る  
敵。移動呪をまじえ次々倒したが、討ち漏らしがリリナネを襲う。

しかしリリナネは自分の身は自分で守れた。襲いかかってくる敵  
を続けざま剣呪で倒し、情勢、一瞬の隙を見て取り、二人に合図し  
た。

「下がって！」

二人が一気に下がリリリナネの横に張り附いた。敵を近づけない  
よう剣で威嚇した。リリナネは右手の平を前方の闇の奥へ向け翳し  
た。呪文文言を唱えようとしたその時。

闇の奥に焰が走った。赤い光。光は帯状に広がった。丘陵地の上  
どろりと斜面をなめて。その左右に、眩い閃光。何度も。光ってい  
るのは小鬼族の軀。一瞬眩く光り、倒れ、闇の中に消える。何処ま  
でも光り、なぎ倒される。

「シユスだ！」リリナネが目を輝かせた。

敵を斬り伏せてイオワニが言った。「ああ。シユスだな。迎えるぞ」

「大魔導師の？」

問いかけたアオイに、リリナネが答えた。「そうよ。でも、どうしよう」。イオワニをふり返り訊いた。「ここで待つ？」

「ああ。後ろの奴らも気附いたようだ。ここで武人らと合流し、シユスを迎える爲に道を開こう」

「分かった」「分かりました」リリナネとアオイは同時に答えた。

答えると同時にアオイは敵に向かった。

敵只中で剣をふるう彼の側で、リリナネの剣呪が続けざま炸裂する。軀を廻して敵を斬りながら、その動作の流れの中で一瞬後方を見た。灯火の術をかけた槍をかがげ、武人らが馬を進めてきていた。敵を倒しながら。

中にカタジニの姿もあつた。顔が怒っていた。しかし見たのは一瞬で、すぐに再び敵と向き合ったから本当に怒っているのかどうかまでは分からなかった。

しかし彼は甘かった。怒っていないわけがなかった。

次に軀を廻して敵を斬り伏せた時、もう一度見えた。その顔はまっすぐ彼を睨み据えていた。斬馬刀をふり廻してばったばったと敵をなぎ倒しながら。

気のせいかな。

背後の敵を斬り伏せ、逆方向を見ると、闇の奥にもう一つ、新しい赤い焰が浮かんでいた。それが何かは、もう分かった。溶岩。局地的な噴出。静かに流れ出ている。その前面の左右に相変わらず激しい閃光。光っているのは小鬼族自身。間近で目にしたら、目が潰れてしまうのではないかと思えるほど眩い光。

体が光っている。体そのものが発火するのか。樹木があれば樹木も光を放ち、瞬時に燃え尽きる。

武人達の先陣が合流した。灯火の槍を地に突き立てて光の道を築きながら、大群の只中を切り開いてきた武人達。呐喊の声押し寄せ、アオイ達の周囲にも道が築かれた。そしてその先陣の中に当然いた響き渡った一際大きな罵声。「くおおらああ」。ふり返るとカタジニだった。

「貴様らあ、覚悟しろお！」

鬼の形相で、カタジニが胸服の内側から取り出した物は、アオイにも見覚えがあった。名前も憶えていた。ハリセン。

カタジニは華麗に舞い、アオイ、イオワニ、リリナネの頭を次々はたいた。パン、パン、パンと。「あいて」「イテ」「痛い」。

「なっ、何をするっ」噛み附いたりリリナネにカタジニは言った。

「ふん。俺を置き去りにした罰だ。今はこれで勘弁してやる。貴様

らには後でお説教だ。覚悟しておけ」そう言うとハリセンを綺麗にたたんで、胴服の内側、腰帯の背中側にさした。「持ってきていて良かったわい」と言いながら、斬馬刀を地に刺し剣を抜き、呆気にとられた一同を残し、駆け去った。

「まずかったですかね……？」アオイは隣のリリナネに訊いた。置き去りにして跳んだのは自分だった事を思いだし。

「大丈夫。あいつは五分したら忘れるから気にしないで」

「五分……」それよりも、と思った。「あの人はいつもハリセンを持ち歩いてるんですか？」

「ハリセン？ アレは、カタパンよ」

「カタパン？」

「あいつが考えた武器。仲間を叩く爲の物」

「えっ？ アレって、カタジニさんが考えた物だったんですか？」

「そうよ。他に誰があんなくならない物考えつくの？ あいつが考えて、あいつが自分の名前を附けた」

アレを考えたのがカタジニとは吃驚だった。何か違わないか、そんな個人的、局地的な物だっけ。もつと昔からある物で、もつと普及している物という気がした。しかし、普及する理由がない。考え込んでいるとリリナネに促された。

「アオイ。集中して。戦場のど真ん中よ」

「あ、はい」

イオワニも言った。笑いながら。「おいおい、ぼうつとしてたのか。大物だな、お前は。シユスはすぐそこまで来ている。合流したら全軍が一気に退くぞ」。

「はい」

その時には先陣はとうに先へ進んでいた。闇の中に光の道が出来ていた。一直線にクムラギの門へと導く道。そしてその道を護る武人ら。押し寄せる小鬼族を斬り伏せ道を護っている。武人の一人がふり返り言った。「イオワニ殿っ、俺だ、サカだ」。イオワニと知り合いのようだった。

「おう。なんだ、頑張ってるな」

「軽く言っな。加勢を頼めるか」

「おう」イオワニは答え、アオイとリリナネに言った。「俺は道を護る方に加わる。お前らは先陣を追え。行け」

「うん。分かった」リリナネはアオイを促した。「行こう。アオイ」

「はい」

前方を見た。闇の中の大群を切り開く武人達。閃光が間近まで来ていた。

アオイはリリナネと共に光の道を駆けた。すぐに先陣後方に合流した。武人らが蠻族の群れを切り開いている。そしてそこへ近づいてくる光。眩く光りバタバタと倒れる小鬼族。やがて二騎の騎馬が見えた。二人の男が小鬼族を蹴散らし駆けてくる。

一人は四十代と思しき痩せぎすの男。鷹のように鋭い目をしている。その男が手を翳す度、その手の先の小鬼族が眩い焰を噴き上げ倒れる。何処までもなぎ倒す。もう一人は三十代と思しき筋骨逞しい男。長槍をふるい、術者を護っている。その男の目も、鷹のように鋭い。二人とも長髪で、槍の男は後ろで髪を結び、術者の方は結ばず垂髪にしている。

術者がシユスロー、もう一人が、多分、聖女の叔父アツハナウラ。  
先陣の武人達が一気に割れ、二騎の騎馬が光の道に入った。しかしその背後から何かが付いて来ていた。馬上のシユスが何度ふり返り手を翳しても、倒れず、執拗に。

アオイは目を見張った。それは巨大な黒犬だった。武人らが行く手を阻み取り困んだが、蹴散らされている。リリナネが手を翳したけれど武人らを巻き込んでしまうのか、術を使うのを躊躇していた。「俺が行く」アオイは自分の剣を捨て、代わりに側に立っていた灯火の槍を抜いた。黒犬の頭上を睨み据え唱えた。

出現した時には、目論み通り槍は深々と犬の眉間に埋まっていた。犬が跳ね上がり、アオイは宙に投げ出された。飛ばされ、弧を描い

て地面に叩きつけられた。慌てて体を起こして見ると、黒犬は死んでいなかった。ブンブンと頭をふっていた。血まみれの槍が抜けた。アオイが目を丸くしていると、黒犬は踵を返し駆け去っていった。闇の中に姿を消した。

リリナネが走ってきて、倒れている彼に手を差し出した。

「お手柄ね。アレを追い払ったわ。怪我はない？ 立てる？」

「はい」リリナネの手を借り立ち上がった。「アレは何ですか？」  
驚き覚めやらなかった。

「害獣よ。つまり魔獣。さあ。みんな一氣に戻るわよ。急がなきゃ、取り残されちゃうわ。走れる？」

「はい」

リリナネは彼の剣を持ってきてくれた。走りながら剣を渡された。門へ向かい二人で駆けた。手をつないだままだった。

武人らが馬を走らせていた。「退け、一氣に退け」口々に号びながら。あの武人、オニマルサザキベの姿もあつた。負傷した兵に肩を貸していた。胴服の柄で分かった。



## 十三・「灰呪」

門の周囲に、武人らは陣形を組んでいた。門を中心に緩い半円。アオイとリリナネはその中に飛び込んだ。最後の一群と共に。背後にはもう、蠻族のみ。その陣の中にシユスとアヅハナウラもいた。イオワニとカタジニも。アオイが見上げると、馬上のシユスと一瞬目があつた。シユスは何も言わず目を前方に戻した。

オニマルサザキベが報告していた。大魔導師は頷き、馬を陣の外側に進めた。アヅハナウラと、オニマルサザキベをはじめとする数人の武人が術者を護り左右に立った。

イオワニが言った。「アオイ。聞いてると思うが、見るなよ」

「え？」

次の瞬間、眼前が輝いた。群がっていた小鬼族、闇の奥を駆けていた小鬼族、その全てが光った。大魔導師の走らせた右手に沿って。全て。光の洪水。武人達は腕で目を庇い、術が討ち漏らした小鬼族を斬り伏せていた。追い詰められ躍りかかってくる敵を。アオイはまともに光を見てしまい目が眩んだ。何も見えなくなった。

リリナネの声が耳元で聞こえた。「大丈夫？ アオイ」。イオワニの声もした。「何だ。見ちゃったのか。灰呪を見たら暫く目が効かんぞ。おいおい、誰も教えてなかったのか？」

「聞いていません……」

一匹の小鬼族が人の盾を突き破り陣中に入った。目が見えず立ちすくんでいるアオイに襲いかかった。イオワニ、カタジニが剣をふるうより、リリナネが手を翳すより早く、二人の武人が槍で貫き始末した。二人の武人は、イオワニらと目で笑みをかわし、立ち去った。

視力が戻った時、うつすらと夜が明けていた。風もおさまっていた。周りに武人は多くいるが、イオワニとカタジニの姿はなかった。シユスローとアヅハナウラの姿も。リリナネが一人、見えないアオイの爲に残ってくれていたみたいだった。

「見えるようになった？」

「はい。すみません」

リリナネは笑顔で答えた。「いいのよ。見ちゃったんだもの。仕方ないわ。言っただけでなかった私達も悪いし」

「敵はもう」

「全部退治したわ。壁の上に残っていた奴も」

「そうなんですか……。何だか、最後は役に立たなかったですね。すみません」

リリナネは笑顔で首をふった。

「あれだけ活躍したんだもの。充分よ」

「みんなは？」

「タパ様の廟堂に向かったわ。私達も戻りましょう」

「はい」

話している二人の側に、武人が二人やって来た。一人はオニマルサザキベ。鎖頭巾をかぶったままだったが、胴服で分かった。もう一人は三十代半ばで、頭巾を外していた。にこやかに笑いながら言った。

「見事な働きでしたな、ツフガの剣士アオイ殿。まさに、ミチモリ様より伺っていたとおり。私の名はモモナリマソノ（モモナリ・マソノ一百分・真苑）。今後またこのような事があれば、是非とも力を貸して頂きたい」

「はい。勿論」握手を交わした。

「アオイ殿の歳はお幾つかな？」

「いや……、あの、実はハッキリ憶えてなくて」

「ああ。記憶がないのでしたな。しかし見た処、甥っ子のオニマルと同じくらい。どうか仲良くしてやって頂ければ。親友にもなりましょうし何かと力にもなりましょう」

オニマルサザキベが手を差し出した。握手を交わした。

「よろしく。アオイセナ殿。見事な剣でした。敵に相對して、踏み

込まず横への移動、次の瞬間目にも止まらぬ早業で、気附いた時には斬り伏せている、何が何だか……。皆で目を丸くしておりました。色々話したい処ですが、今は忙しく。これにて」

二人の武人は立ち去った。

アオイはリリナネに言った。「俺の斬馬刀を取ってきます」

「うん。じゃあ、ここで待ってる」

薄明かりの空の下、平原を覆い尽くすように黒こげの死体が横たわっていた。その中を歩いた。途中、立ち止まり、目を閉じ、手を合わせた。

悪龍を倒さない限り、これは終わらない。悪龍を倒さない限り、人はこれらを無益に殺し続けなければならない。人々を護る為と見え。

祈り終わり頭をあげると、後ろで待っているはずのリリナネが側にいて、一緒に手を合わせていた。リリナネが祈り終わるのを待って、歩き始めた。

「意思の疎通は出来ませんよね……」

「うん……。私達の言葉は理解しない。蠻族の言葉は、私達には喋れない……。たとえ話せたとしても、無理……。操り人形とは言わないまでも、それに近いものだから……」

自分の斬馬刀を見つけた。側にイオワニとカタジニの斬馬刀も刺さっていた。暗鬱な思いに捕らわれていた心が、少し救われた。戦

いのさなかのことを思いだし。

自分に友達がいたのかどうか、記憶はない。それが良い仲間だったのか良くない仲間だったのかも。けれど、戦いながらずっと感じていた。この仲間がいい。友達と呼ぶには、皆、歳が離れていく。イオワニもカタジニも。けれど仲間だった。そしてこの仲間は良かった。

三本の鉾を抜き、まとめて肩に担いだ。

「帰りましょう」リリナネが言った。

十四・「帰路」

リリナネと並んで廟堂へ向かっていると、町の人みんなに挨拶され労われた。「ごくろうさまでした」。「お疲れ様だねえ」。みんな様にホツとした表情でにこやかに笑いながら、口々に。

笑顔と挨拶を返しながら二人並んで歩いた。少し誇らしいような、くすぐつたいような気分だった。

「お廟で少し休憩したら、後片付けに行くわよ。寝てなくて大変だけど頑張つて」歩きながらリリナネは言った。

「はい。後片付けて？」

「死体を片付けなきゃ。それは、町の人総出でやるの。男の人は穴掘り。女の人は炊き出し」

「へえ……」

「今回の大群だと何日かかるわね……」

「そうですね……」面倒くさがる気持ちはないが、あまり嬉しい作業ではなかった。

害獣についても教えてくれた。

「この地方に四頭、世界中で九十九頭の害獣がいるの。奴らは魔力

をおびていてその為死なない。何百年も生きてる。魔力の素になる魔方阵が何処かにあるの。それぞれに。でも、何処にあるのかは全く分からない。中には元素術を反射する奴もいる。さっきの黒犬もシユスが術を使っても効いてなかったでしょ。そしてあの黒犬は大抵蜥人がつれてるの。蜥人の守り神みたいなもの。だから蜥人がきつと近くにいたはず」

「へえ……。蜥人はどんな奴なんですか」

「小鬼族より大型の蠻族よ。丁度人と同じくらいの背丈で、人よりずっと頑丈。がっしりしてる。顔は灰色で蜥蜴みたい。蜥人のセキは蜥蜴の意味よ」

「へえ……」

「蜥人は弓も使うから、注意してね。灯火の術をかけた槍や斬馬刀を手にしていたら、的にされる」

「そうなんですか」

「でも、君なら大丈夫。弓さえ気を付けてれば」

「気になっていたことを一つ訊いた。「イオワニが言った、扉の神召喚を蠻族に気取られたって、まずいんですか……？」」

「うん。奴らじゃなくて、悪龍に気取られたってこと。これだけの数の小鬼族が攻めてきたって事は、きつともう気附かれてる。奴らは踊らされてるだけ。これはきつと悪龍の意志。イロキノが靈波を送り蠻族をここに集結させてるの。多分ね」

「悪龍は地の底にいるのにどうしてこの世界の状況を把握できるんですか……?」

「蠻族や害獣の目を通して知るんじゃないかって言われてる。逆に霊波を捉えているんじゃないかって」

「そうなんですか……。イロキノってどういう意味なんですか……?」

「イロキノはツフガの言葉で、悪蛆という意味」

「アクソ?」

「悪蛆のソはウジの事」

「あ、何だ。そうなんですか」

馬鹿なことを聞き返さなくて良かったと思った。もう一つ、気になっていたことを聞いた。彼らが戻ってきたということは。

「シユスロー様とアツハナウラ様が戻ってきたということは、最後の呪文材料を捜しに出発するんですか?」

「うん。でも人選はツフガの会合で決めるから。この状況なら政治堂から要請があると思うの。町の守備にツフガ側の人間も残しておいてくれる?」

町が蠻族の攻撃に晒されている現在の状況では、リリナネかシユスのどちらかが町に残る公算が高い、という事だと理解した。そしてその通りだった。リリナネは言った。「私かシユスのどちらかが残ることになると思うの」



「そうですか……」

自分はどちらにしても残ろうと思っていた。この町を護る。自分が役に立てると分かった。ユタとの約束もある。出来れば、リリナネに残って欲しいと思った。が。

そんなこと言えないよな。

「アオイさまあ」

前の方からユタとリュウ少年が駆けてきた。顔を輝かせ息せき切つて。リュウ少年はニコニコ笑っていた。ユタも笑顔だったが、アオイの前に立つと袖でごしごしと目を擦った。

「ご無事で戻られて、何よりです……」

「ああ、ホントにそうだな」

二人の少年は口々に言った。「お風呂の用意が出来てます」。「みんなが帰ってきたら入って貰おうと思つて、僕たちで沸かしたんです」。

「そうか。ありがとう」

「本当はアオイさまに一番に入つて貰おうと思つてただけど、カタジニさまに取られちゃった」

リリナネがプツと噴き出して笑い、アオイもつられて笑った。  
「そうか」

四人並んで廟堂へ帰った。



## 十五・「朝風呂」

廟堂の入り口にラナイ少年がいた。幾つも桶を並べて着物の血抜きをしていた。アオイとリリナネの姿を見ると、この少年にしては珍しくにつこり笑って言った。「お疲れ様でした。浴室へ行って着替えられたら、血の附いた着物は私に下さい」

「うん。ありがとう」リリナネが答えた。

アオイも、案内と剣にかけてくれた呪文のお礼を言って廟堂に入った。リリナネと並んで上がり口に腰掛け、戦履きを脱ぐと、足の裏の皮がズルツと剥けていた。

「あれれ」全く気が付かなかった。稽古でママが出来ていたのは知っていたが、一晩でズルツと剥がれてしまっていた。

「うわあ」二人の少年が痛そうに顔をしかめた。リリナネに「大丈夫？ お風呂に入れる？」と訊かれた。それほど痛みは感じなかったので、「はい。あまり痛くないですから」と答えた。そもそも、しとうずを脱ぐまで気附かなかった。

しかし歩くと、はがれた皮がぺったんぺったんと床にくつついて、変な感じだった。歩きにくいので、絹のしとうずをもう一度履いた。

「お風呂に入る時は紐で縛るしかないですね」ユタが言った。

「そうだな……」そう答えたが、それも何だかおかしな気がした。

「それとも、鋏で切っちゃいますか？」

「うん……」それは何だか聞いただけで痛そうだった。言ったユタ本人も痛そうにブルツとしながら言った。けれど何度かこんな風になった事はある気がしていた。その時はどうしてたっけ。鋏で切ったような気がした。

「お風呂から上がられたら、包帯を持って来ますね」

「うん。悪いな」

「じゃあ、僕とリュウは朝ご飯の支度に行きます」

ユタとリュウ少年は厨房に向かった。廊下の角を曲がっていった。リリナネは立ち止まった。リリナネの部屋の前だった。

「じゃあ、支度して玄関で待ってるね」

「え？」

「忘れたの？ 今から浴室へ行くんでしょ？ 私も一緒に行くから」

「あ、はい」そうだった。一緒に浴室へ行きましょうという約束をしていた。

リリナネは「入り口で待ってるね」と言っつて自分の部屋へ入った。

アオイは自分の部屋へ戻り、机から鋏を出した。鋏をあてるとブルツとした。ブルツとしながら切った。全く痛くはなかったが、ぞ

くぞくした。手ぬぐいと着替えを持って引き返すと、リリナネはもう待っていた。二人で浴堂へ行った。

処が朝早い浴堂は誰もいなかった。入り口に靴が無く、もしかしたらと思ったら、思った通り休憩所は無人だった。二人一緒の処を町の人たちに見せたかったのだが。

「これじゃ効果ないわね」クスツと笑ってリリナネが言った。

「そうですね」笑って答えたが、もうその必要はないような気もしていた。今朝、お廟へ帰る時感じた町の人々の様子から。けれど毎日一緒がいいに決まっているから何も言わなかった。

リリナネと別れ、藍色ののれんをくぐった。脱衣所の籠に着物があり、先客がいると分かった。入り口の下足棚に履き物が一足だけあったことを思い出した。

湯殿に入ると、そこにいたのは大魔導師シユスローだった。一人湯船に浸かっていた。アオイの顔を憶えていたようだった。何も言わず軽く黙礼した。

「どうも……こんにちは……」アオイも頭を下げた。

何を話して良いか分からなかった。とりあえず体を洗うことにした。洗っている間、互いに無言だった。

何か話した方がいいよな。無言って変だし。

多少焦ってそう思ったものの、何も思い浮かばなかった。訊きたいことは勿論色々あったが、いきなりそれを訊くのは変だった。きっかけの会話を思い附かなかった。すごかったです、灰呪、頭

に浮かぶのはそれくらいだった。けれどそれを言うのはやめた。それは生き物を沢山殺したことを褒めることになり、それをこの相手は喜ばない気がした。

やがて体を洗い終わった。仕方なくお湯に浸かった。浸からない方が変だった。するとシユスローの方が口を開いた。どうやらアオイが体を洗い終わるのを待っていたようだった。

「タバ様より君のことを聞いた。記憶がないそうだな」

「あ、はい。そうなんです」

変に緊張した。その相手は気さくなところが全くなかった。

「教えたことがある。しかし今日は私は帰ってきたばかりで忙しい。君も忙しいだろう。明日の午後四時頃は空いているか？」

「はい。あ、よく分かりませんが……。空けておきます」

「うむ。では、明日」

言い残して大魔導師は出て行った。背中に刀傷がいくつもあった。アオイは大きく息をついた。息が詰まっていた。足の裏にお湯が沁みてヒリヒリしていたが、それも全く気にならないほど。

「はあ……。ちよっとのんびりしよ……」

漸くくつろげた。



アオイはこんこんと眠っていた。遠くで何度もユタの声を聞いた。しかし夢を見ていた。

木製の天板の食卓の上に、クムラギ製と思しき足付きコップがある。そのコップをはさんで向かい合って座り、二人の人物が会話をしていた。部屋の様子も、人物の姿も、陰の中にありまったく分からない。ただ、声だけ聞こえた。一人は老人。一人は女性。老人が言った。

「職人が任せて下さいと言った時は、任せの方が良いんじゃない。わたらの予想以上の良い仕事をしてくれる」

「ホントにそうですね。思っていた以上のモノで」

この夢は何だろう。クムラギの何処かなんだらうけど。老人の声はあの時思い出した声に似ていた。剣を教えてくれた老人の声。これは何処だ、夢の中でぼんやり考えていた。ユタの声が大きくなった。

「アオイさま、アオイさま、起きて下さい」

目を開くとユタの顔があった。心配そうにのぞき込んでいた。隣にはラナイ少年もいた。「あれれ」。一瞬呆気にとられた。

「何で俺、こんな処で寝てたんだ？」



浴室の脱衣所の床に寝ていた。当然裸だった。濡れた体に手ぬぐいがかけてある。ユタはホツとした顔になった。ラナイ少年が説明してくれた。

「アオイさまは湯船の中で寝てらしたのです」

「え？ まぢで」

「まじです」ユタが少し怒った顔をして、いさめるような口調で答えた。

漸く思い出した。シユスが出て行き、緊張が解け、少しのんびりしようと思いい、いつの間にか泥のように意識がなくなった。夜の間からずっと続いていた緊張が解けて。

「リリナネさまはずっと休憩所で待ってらっしゃったのです。けれど全然アオイさまが出てこられないので心配なさって僕を呼びに来たのです。で、僕が中の様子を見ると、アオイさまは湯船の縁に頭を乗せて眠ってしまっていて」

「二人で運んでくれたの？」

「まさか」ユタはかぶりをふった。「僕じゃ動かせませんでした」

ラナイ少年が言った。口調も顔付きも冷淡だったが、微かに口角があがっていた。「ユタが呼びに来た時、丁度アツハナウラ様がいらっしゃったので、僕とアツハナウラ様で」

「まぢで？」

「まじです」

アツハナウラにそんなことをさせたとは恐縮だった。

「リリナネさまが待つてますよ。早く」

ユタにせかされて慌てて体を拭き着物を着た。慌てて男湯を出るとリリナネが待つていた。笑いながら言った。

「寝てたなんて。普通、戦の後は神経が高ぶって眠れないものなのに。君は大物ね」

褒められても逆に恐縮だった。皮肉じゃないことは口調で分かったが。

「すみません。相当待たせてしまったみたいで」

「いいのよ。気にしないで。私よりも、後でアツ様にお礼を言わなきゃ」

「ホントに……、そうですね……」恐縮至極とはこのことだ。眠気も吹っ飛んだと思った。

処が眠気は去ってくれなかった。部屋に戻り、いつものようにユタと二人でご飯を食べ、食べ終わる頃再びやって来た。箸の上げ下ろしさえ緩慢になった。

「アオイさま、小さな子供みたいですよ」  
何度もユタに言われた。

「ううん……。そうだな……」答える口も動かなかった。「何だか、

腹がふくれたら……急に……」

ユタはあきらめたように肩をすくめてにつこり笑った。立ち上がり、お膳を部屋の隅に寄せた。

「何してるんだ……？」その時には目の焦点さえままらなくなっていた。

「お布団を敷きますから」

「いや、後片付けがあるから……」

「とても出来そうに見えませんかよ」

「けど……行かなきゃ……」何でこんなに眠たいんだ？　ずっと考えていたが分からなかった。

「さあ、アオイさま。これが見えますか？」

「ああ……見える……それは布団。けど……」

「五分だけ横になればいいでしょ」

「そうだな……」

魅惑的な言葉だった。抗しきれず横になった。すぐに意識が深い場所へ沈んでいった。五分だけ　同じ言葉を繰り返しながら。

ユタは眠ってしまったアオイにかけ布団をかけて、二人分のお膳を抱えて部屋を出た。厨房に食器を戻し、皿洗いをしていたラナイ

少年に事情を話し、それから支度してお廟の入り口へ向かった。リリナネがいた。アオイを待っていたようだった。

「あら。アオイは？」

「アオイさまはきつとマタトアの後遺症です。ですから僕が代わりに後片付けに行きます」

「あら」リリナネは顔を赤くして笑った。「そうだったの。じゃあまさか、初めてだったのかしら？ 憶えてないだけかと思ったんだけど」

「きつとそうです」

「変ね。剣士なのにマタトアをかけられたこと無いなんて」

「ホントに。アオイさまは不思議なおかたです」

「まあ、難しい呪文だから……効き過ぎたのね。……私の所為だわ」

「きつとお疲れになったのです。他の皆さんは？」

「カタジニはもう出たわ。シユス様とアツ様は帰ってきたばかりだから色々あるみたい。すまないと言ってたわ」

「そうですか。じゃあ、出発しましょう」

「大丈夫？ 穴掘りは大変よ。私と一緒に炊き出しの方をやれば？」

「いいえ。僕はアオイさまの代わりですから」ユタは所得顔でこ

つと笑った。

リリナネはその顔を見て得心がいったのか、笑みを返して優しく言った。「そう。じゃあ行きましょう」。

二人並んで廟堂を後にした。

「ホントに不思議な人ね」

「はい。ホントに」

「ツバクロを知らなかったのよ。意味が分からなかったみたい。白黒の犬は何クロですかって聞き返してた」

「白黒の犬は、ブチじゃ……」

「カタジニの例のアレを見て、不思議そうに考え込んだり」

「カタジニさまのアレは誰だって不思議に思うに決まっています」

「あんなに強いのに、馬に乗れないみたいだし」

「乗ったことが無いかもっておっしゃってました」

「そんなはずないわ。きっとすっかり忘れてしまっているのね」

「はい。アオイさまは目にしたモノや、教えて差し上げたことは思い出すみたいですが、それ以外はさっぱり……。未だに鹿と鶏冠竜の区別がつかないみたいですし」

「ぶ、ありえないわよねえ」

「味噌汁を見て恋告と言っていましたし。コエをコイと勘違いしてました」

「ぶ、変な人。コエが恋じゃややこしいわよねえ……。あ。そういえば、お廟の近所のルルさん……」

「え？」

「アオイ君と仲良いのかしら？」

「え？」ユタは目を逸らした。

「何か聞いてる？」

「いいえ。何も」

十六・「後片付け」

アオイはガバツと跳ね起きた。壁の掛け時計を見た。見るまでもなく、窓から差し込む陽の感じで分かったが。

「げっ！ 昼近い」

ユタはどうして起こしてくれなかったんだ、バタバタと支度して、慌てふためき部屋を飛び出した。お廟の入り口で、アヅハナウラとタパタイラにばったり会った。丁度外出から戻ってきた処みた이었다。アオイは慌ててお礼を言った。

「さっきはすみません。ありがとうございました」

アヅハナウラは微かに笑みを浮かべて「いや、」と答えた。戦場では鷹のように鋭く感じたが、今は穏和な目をしていた。「気にすることはない」

「ホントにすみませんでした。今は急いでいるので」

タパタイラが問いかけた。「どうしてそんなに慌てているのかね」

「眠ってしまって、後片付けに行かなきゃいけないのに」

タパタイラは笑みを含みやさしく言った。「それならユタが代わりに行ったと聞いておる」

「え？ あいつが」

「然様。それに後片付けは午前か午後どちらか行けばよい。慌てずとも大丈夫じゃ」

「そうなんですか……」それでも急いだ方がよいと思った。自分の代わりにユタに穴掘りをさせるのは可哀想だった。いくらしっかりしていても、まだ子供。「とにかく、行ってきます」

タパとアツハナウラに軽く会釈して、お廟を飛び出した。

\* \* \*

昨夜の戦場は明るい太陽の下で、すっかり様変わりしていた。天幕が幾つも張られ、その下で飲み物や軽い食事がふるまわれていた。畑の中に幾つも大きな穴が掘られていた。ユタの姿を捜したが、見つけられず防壁の外へ向かった。

門をくぐると一面に黒こげの屍体が転がっていた。壁沿いに、やはり天幕が幾つも張られていて、その下にリリナネの姿を見つけた。一番手前の天幕の下で、女の人たちと話しをしていた。駆け寄るとアオイが声をかけるより早く、向こうが気附いた。

「あら。もう大丈夫なの？」

「はい。すみません」今ではどうしてあれほど眠かったのか不思議なほど頭がハッキリしていた。「眠ったらスッキリしたみたいです。ユタは？」

「向こうで土運びを手伝ってるわ」



「分かりました」

駆け出そうとすると、呼び止められた。

「あ、ちょっと待って。無理しない方がいいわよ」

「え？」

「分かってないみたいだけど呪文の後遺症なの」

「へ？」

「マタトア。きっと君は初めてだったのよ」

「え？」

「免疫がないと、後でどっとしわ寄せが来るの。だるくなったり眠くなったり」

「そうなんですか……」

「今日は無理しないでゆっくりしてた方がいいよ」

「はい……」

はいと答えたものの、ゆっくりしてようとは思わなかった。ユタの姿を捜して歩いた。方々で男達が畑を掘り返し、土を台車で運んでいた。屍体はまとめて牛車で運んでいた。

歩きながら考えた。あの呪文はひょっとしてアレみたいなものか……アレ、何て言ってたっけ……ド……ドールパン、……ダじゃないな……。 (ドーパンダ ドーピング)

最近は言葉もあまり思い出せなくなっていた。記憶が戻るのか不安になった。徐々に思い出すなら話しは分かるが、徐々に忘れていってしまったっている気がした。

同様に話し言葉も、古めかしいと感じていた話し言葉が当たり前に感じるようになっていた。どころか、実はずっと以前から気附いていたが、自分の話し言葉も相手に合わせて変わってきていた。頭に思い浮かぶ言葉も。

何でだろう、と思うところで、なにゆえ、等と頭に浮かび、少なからず慌てた。なにゆえなんて言ってたか？ と首を捻った。お礼を言うところで「かたじけない」と言いそうになり、慌てて「ありがとうございます」と言い換えていた。実際の処「かたじけない」などと言う人は見ていないにもかかわらず。

しかしそれは不思議でも何でもない。関西に住めば人は偽関西弁を話すようになる。人の頭の中には語群がセットで存在しているのかも知れない。相手に応じてそのセットが出たり入ったりしているのかも知れない。相手から出てくる言葉が関西の言葉であれば、対応する語群がセットで脳内から呼び起こされる。時代劇に似ていれば時代劇の話し言葉が。記憶と言うよりも反射・反応で。反対に、使わない語群は脳内の深い処へ降りてゆく。

「アオイさまー」

見るとユタが台車を押しながら手をふっていた。台車の上には大人の男達より少ないとは言え、土が山盛りになっている。重そうに少しふらついていた。アオイは慌てて駆け寄り、台車の手を取った。

「駄目じゃないか。どうして起こさなかったんだ？」

「えへへ」ユタは照れ笑いを浮かべた。「だってお疲れでしたから」

「もう大丈夫だから。お前は帰って休め」

「うん。でも、僕だって少しは役に立たないと」

「普段あれほど一生懸命働いてて何言ってるんだ。もう、休め。俺が交代するから」

「うん。アオイさまはもう平気なの？」

「ああ。寝かせて貰ったおかげでスッキリしたよ」

「そう。良かった。じゃあ、僕は飲み物を貰って休憩してから帰るね」

「ああ。あっちにリリナネがいたから」

「うん。じゃあね。アオイさま。無理しないでね」

「ああ」

立ち去ろうとしたユタを呼び止めた。礼を言った。「ユタ。ありがとう」。ユタは嬉しそうに照れ笑いを浮かべ、駆けていった。

\* \* \*

その後、アオイは男達に混じって土運びをし、穴掘りをした。おじさん達は気さくに話しかけてきて、昨夜の労をねぎらった。名前を訊かれ、「アオイセナです」と答えると、皆一様に目を丸くして、「あんたかい」と驚いていた。中に数人の武人もいて、「我らは離れた場所にて直接目にしてないが」と断りを入れながらも、その活躍ぶりを大仰に褒めた。ツバク口殿というあだ名が附いたみたいだった。

土を運んでいる途中、引き上げるイオワニとカタジニに会った。カタジニは言った。

「おう。来たな、アオイ。俺たちは午前働いたから、もう引き上げるところだ」

「お疲れ様でした」

「ユタから聞いた。マタトアの後遺症でつぶれてたそうだな。無理するなよ」

「はい」

イオワニは酒を飲んでいた。持参の酒瓶を空にしていた上に、帰る前に天幕で酒を貰っていた。門の内側に消えた後ろ姿は、遠目に見ても上機嫌だった。

「アオイセナ殿」ふいに声をかけられた。「この調子なら二日で終わりそうですね」

腕組みしてそこに立っていたのは、女のように綺麗な顔をした若者だった。線の細い顔立ちで切れ長の目。目尻が少し上がっていて、男の目から見ても艶やかな面立ち。歳は彼と同じくらい。知らない顔だったが、声に憶えがあった。

「そうですね」話を合わせて答えながら、何処で会った人か思い出そうとしていると、相手の方が気附いて詫びた。

「あ、これは失礼しました。あの時は頭巾をかぶったままでしたから。オニマルサザキベです」

「ああ」もつと厳つい男を想像していた。「どうも、……」思わず口にして、間抜けな感じの挨拶だと自分で思った。さらに間抜けかなと思っただけで、「アオイセナです」と、笑って手を差し出した。

あらためて握手を交わした。オニマルサザキベも「あらためて。よろしく」と笑みを浮かべて。その後並んで歩いた。

「アオイ殿は、敵の目前で、時に完全に一回転してませんか？ 取り囲まれて背後の敵に向き直るとかではなく、軀を廻して間合いに飛び込んだり、敵の攻撃を軀を廻して横に逃れたり」

「ええ。時々ですが」

「ううむ、剛胆な……」オニマルサザキベは信じられないとばかり唸った。「一瞬とは言え、敵から完全に目を離してしまって怖くないのですか？」

驚きの表情で真面目に問われても恐縮した。「いや……。相手が斧ばかりでしたから。剣を持った相手にはとても……」

「いやいや、謙遜なされるな。あの速さ故、出来る業と思います。皆がアオイ殿を何と呼んでいるかご存じですか？」

「もしかしてツバク口ですか」

「そうです」

「ツバクロって実は知らないんですが、どんな鳥ですか？」

「ツバクロは丁度今時分が季節ですから、あ、ほら、あそこに飛んでいます。ひらりひらりと」

オニマルサザキベの指差す方を見るとツバメが飛んでいた。空中の虫を追い、ヒラリヒラリと。しかし、飛び方と白黒模様はツバメだったが、記憶にある姿と若干違っていた。だからこれはツバメではなくツバクロなんだろう、と理解した。勿論、記憶の元の姿はハッキリ思い出せなかったが。あるいは訛りかも知れなかった。「なるほど」と答えた。あれですな、と言おうとして変だと思ってやめた。「あれですか」

「本当に記憶がないのですね」オニマルサザキベは笑みを浮かべて言った。

「ええ。何だか、憶えていても記憶違いばかりで」

並んで歩いていると、再び、後ろからふいに声をかけられた。

「アオイさま、オニマルさま」

ふり返るとルル・オシヌミだった。「ご苦労様です……」。相変わらずうつむき加減で、ほんの気持ち首を傾げ、恥ずかしげな笑みを浮かべていた。

「やあ、ルルさん」オニマルが答えた。どうやら知り合いみたいだった。それから同じことに気附いた。「アオイ殿とお知り合いですか？」

アオイが答えるより先に、ルルは答えた。恥ずかしげに目を伏せて。

「はい。実は交際を……」

「え？」「へっ？」二人同時に言った。勿論、「え？」がオニマルサザキベ。「へっ？」はアオイセナ。オニマルサザキベのまなじりが少しつり上がった。が、アオイは気附かなかった。それどころじやなかった。どうしてそういう風に話しが変わったのか問い詰めた気分だった。が、ルル・オシ又ミは続きを言った。

「を、前提にお友達に……」

その通りだった。あの時の話しはその通りで、まったく嘘は言っていないかった。そんな言い回しがあるのかどうかはともかく。が。

「ほう……」オニマルサザキベはにつこり笑いながらアオイに訊いた。「そうなのですか。アオイ殿」

につこり笑っていたが唇の端が少し引きつっていた。が、アオイは気附かなかった。アオイは女性に対して鈍いだけではなかった。そういう事柄全般に対して鈍かった。

「あ、ええ……そうなんですが……」その通りにしても、そういう紛らわしい言い方をしなくても良さそうに思い焦っていた。この子は天然なのか。それともわざとなのか。どっちなんだ。分からなかった。

しかし。そもそも、彼を痴漢にしておいてその隙に仲良くなるうと言う発想自体、策略家だった。そしてこの策略家は、意図せず以下の仕事もした。



アオイにようやく出来かけた同じ歳の友人、その心を離してしま  
った。策略家は策略家でまた、自分自身に向けられている好意には  
鈍かった。

オニマルサザキベは笑顔で言った。

「アオイ殿。ゆっくり話したい処ですが、私はそろそろ政治堂へ行かねばなりません。これにて」

アオイもゆっくり話したい処だったが、俺と違って色々忙しいのだろうと思った。「そうですね。また是非」。次回ゆっくり話したいと思った。

オニマルサザキベは軽く会釈をし、笑顔を残し立ち去った。

オニマルサザキベがいなくなると、ルルはアオイの前に小走りに駆け寄り、何かの券を差し出した。両手で握り。「お友達第一弾です」。見ているこちらが息詰まるほど、緊張した面持ちだった。

「何の券？」

「ツキツキです」

「ああ、ツキツキ」そう言えばツキツキって何かまだ訊いていなかった。「ツキツキって何？」。

しかし相手は緊張していた。用意していた台詞をそのまま言った。「もしご一緒くださるのでしたら、正午にお廟の前で待っています」うつむいたままそう言うと、アオイの手に券を握らせてくるりと背を向けた。

「え？」

トコトコトコと駆け出した背中に向かって訊いた。「いつの？」

恥ずかしそうにふり返り「明後日です」と言い残して駆け去った。

アオイは手の中の券を見てみた。もう、ある程度字は読める。券には、日と時間と、そして大きく『つきつきおう』の六文字。ツキツキ王って何だ？ 人の名前らしきモノも幾つか読めた。誰がツキツキ王なんだ？

しかしそもそもツキツキを知らない。お廟に帰ったらユタに訊こう。券をズボンのポケットにしまった。

その後再び作業に戻り、そろそろ三時かなという頃、馬に乗った人が知らせに来た。

「撤収う。時間でえす。お疲れ様でしたあ。道具を片付けてくださあい。明日も頑張ってくださいあい」大声で言っつて、馬を走らせ遠くで作業している人たちにも知らせに行つた。

どうやら午前三時間、午後三時間という決まりみだつた。「やれやれ」と引き上げるおじさん達に混じつてアオイも引き上げた。喉が渴いていた。飲み物を何か貰おうと、天幕に立ち寄るとリリナネがまだいた。

「あれ。ずっといたんですか？」

吃驚してアオイが問うと、笑みを浮かべて目線で指した。スノコの上にムシロが引かれた休憩の爲の場所があり、そこにスヤスヤとユタが眠っていた。リリナネの道服をかけて貰い。

「疲れちゃったのね」寝顔を見ながらリリナネは言った。

「ですね。じゃあ、俺がおぶって帰ります」

「でも、多分もう目を覚ますんじゃないかしら。起こしてみたら？」

「いや。俺の所為で草臥れさせたわけですし……。それより、リリナネさんまで残らせてしまっただけですみませんでした」

「いいのよ。みんなとお喋りしてただけだから」

それを聞いてふと気になった。誰とお喋りをしていたのか。あるいは、するのか。若しモルル・オシ又ミともお喋りをする仲間なら……。さつきみたいな事を言われたら大変じゃないか。昨日まで存在しなかった爆弾、それが今ではプカプカ周りを漂っていた。機雷のように。

しかし。

本物の策略家は、そんなあからさまな真似は決してしない。事実を誇張して吹聴してまわり、それがさらに誇張されあたかも公然の仲、のような噂となって自然にリリナネの耳に入るのを待っている処、だった。あの日宣言した「私、頑張ります」の言葉通り、ルルは頑張っていた。

「じゃあ、帰りましょう。おぶえる？ 私を抱き上げるから」

「はい、……。すみません……。」背中を向けしゃがんで、その背中にユタをもたれかけさせて貰った。それから背負った。ユタはまった

く目を覚まさなかった。

「よっぽど疲れたのね」

「ですね。こいつも昨日から寝てないはずですから」

「じゃあ、帰りましょう」

## 一七・「冥界入り人選」

お廟へ帰り着く頃、ユタは目を覚ました。アオイの背中から降りるとしきりに恐縮した。子供らしくない物言いにアオイもリリナネも笑った。ユタはしかし、眠っている間にアオイにおぶってもらっていたことがよほど嬉しかったらしく、そのあとずっとはしゃぎ気味だった。

お廟へ帰ると、ひとまずもう一度風呂に入った。汗と土埃を流した。休憩所でリリナネとユタと涼んでいると、ラナイ少年が捜しに来了。彼を見つけると幾分ホツとした顔をして言った。「リケミチモリ様とモモナリマソノ様がお見えです」

「え？ 俺に会いに？」

「そうです」

案内されて入った部屋で、タパタイラと並んで座って、二人の客人は待っていた。彼が現れると相好を崩した。特にリケミチモリは上機嫌だった。

「ご苦労でしたな」

アオイは労いの言葉に会釈しつつ、前に敷かれた鶏冠竜の敷物に座った。リュウ少年が入ってきて、冷たいお茶を置いて行った。そのコップは口辺が薄手でクムラギの物とは少し趣が違っていた。

「これって、ちょっと雰囲気違いますね」

リケミチモリは何か話そうとして口を開きかけていたが、先ずはアオイの疑問に答えてくれた。

「ええ。これはビドリオ。西の遠国の製品です。内国産と区別するためそう呼ばれています。今日、私がタパ様に差し上げたものです」

「ビドリオ……？」

「ええ。西域の言葉で硝子の意味です」

「硝子をビドリオ？」

「そうですが？」少し訝しげにリケミチモリは首を傾げた。

「あの……」アオイは思ったままの疑問をぶつけてみた。「そのビドリオが訛って、ビードロと呼ぶ地方がある、とか思いませんか？」

リケミチモリは目を見開き、ハタと膝を打った。「それは……」感心した顔付きで言った。「思いもありませんでしたな」

眉をしかめて考え始めたアオイに、「そんなことよりも」とリケミチモリは言葉を継いだ。そして自分で話そうとして思いとどまり、モモナリマソノと顔を見合わせて頷き合つと、「タパ様よりお願いできますか」と年長者に話しをふつた。

「うむ」初老の巫術師は穏やかな笑みを浮かべ頷いた。

「アオイ殿に話がある。それは他でもない。冥界入り人選のこと」

「冥界入り人選？」

「うむ。マアシナ様の御子をこの世界に連れ来る爲、冥界へ入る。知つての通り。その爲の準備を今しておる。しかし先ずアオイ殿に知つておいて貰わねばならぬことは、冥界に入れるのは五名のみということ」

「え？ たつた五人ですか？」

「うむ」巫術師は一つ頷き、理由を話した。「その地において最も脅威となるのは、悪魔による憑依。おそらく、仲間の軀に乗り移り、意のままに支配し、妨害してくるはず。我らが目的を達しようとするれば、憑依された者を味方の手で殺すしかなくなる」

「追い払う方法はないんですか……？」

「手立てはある。一つは悪魔の憑依を防ぐ石。その石を身につけていれば、悪魔に憑依されることはない。遙か北方の霊峰タオより、守宮猿から譲り受け、シユスらが持ち帰った。しかしその石の数が五」

「なるほど。そういうことなんですネ」守宮猿ってどんな猿？  
偉いのか？ 疑問はあつたが、質問はやめておいた。後でユ  
タに教えて貰おうと思つた。

巫術師は続けた。「その五名とは、シユスロー、アズハナウラ、カタジニ、リリナネ、イオワニと、すでに決まっている」

「そうなんですか……」



口に出したことはないが一緒にやりたかった。冥界へ入りマアシナの御子を連れ帰る。悪龍を倒さない限り、現在の無益な戦いは終わらない。悪龍を倒せるのはマアシナの御子だけ。今、この瞬間にも、ユタのような境遇の子が増えているかも知れない。俺がその爲に役立てるならと、思っていた。しかし話しを聞く限り彼はそこに参加できない。

「しかし」タパタイラは言葉を継いだ。話にはまだ続きがあった。「若しもその五名に何事かあり冥界に入れぬ場合に備えて、予備の人選を決めておかねばならぬ。そこでアオイ殿の意志を確かめたい。若しも貴殿にその志しあるならば……」

リケミチモリが先を受けて口を開いた。「私が推挽人となり、明日の政治堂の議事に諮ります。アオイ殿。善しや」

「思わず、広角が上がった。その人達に何かあつて欲しいとは勿論思わないが、若しも誰かが行けなくなった時は、自分が役に立てる。アオイは拳を床につけて言った。「行きます。冥界へ」

「おお」さすが俺の見こんだ男とばかり、リケミチモリはパツと顔を輝かせ相好を崩した。隣のモモナリマソノも敵つい顔を崩して笑った。モモナリマソノは言った。

「実は今までの処、予備の人選は甥のオニマル一人だけだった」

「え？ オニマル、君が？」

「うむ。勿論あいつはそれを誇りに思っている。よもやそれで慢心はしていないだろうが。しかし、これであいつも浮かれてばかりではいられなくなったわけだ。今後は二人良き競争相手となり、互い

に武芸を磨かれるが良い」

「はい」アオイは笑顔で答えた。良い友達になれそうだと思い。

アオイが意図せずライバルに廻ってしまったその男は、クムラギ最高の若武者と呼ばれている。その男に欠点は無い。文武両道に秀で、人柄良く人望高く。欠点と言えば、女を見る目がないことくらい。

\* \* \*

夕食の後、アオイはユタに「守宮猿って何」と訊いた。ユタは物知り顔で答えた。

「万物の霊長だよ」

「はあ？」万物の霊長って、その言葉は人間様を指していたよ  
うな気がした。薄ぼんやりとした記憶だが。

「神々に通じると言われるくらい、霊力が高いんだ。悪魔と戦う人  
々は守宮猿の棲む谷を訪ねて、智慧を授けて貰うんだよ」

「へえ……」だったらやっぱり万物の霊長ということになるな。  
なんとなく腑に落ちないものの納得した。

ユタは文机の上の紙を取り、絵を描いてくれた。「これが守宮猿  
様だよ」

「ふーん……」

その絵を見る限り、やはり猿に似ていた。毛がふさふさで後ろ脚で立っていて尻尾が細長い。顔がむき出しの処も猿。けれどむき出しの顔はどう見てもトカゲっぽかった。腕の肘から先と、脚の膝から先も毛が生えてなくむき出しで、そこは鳥の脚みたいだった。

「随分変わった奴だな……」

「失礼なことを言っちゃいけないよ。守宮猿様だよ」

十八・「ZEN」

翌日、タパの廟堂でツフガの会合があり、アオイは出席しなかったが、そこに出す料理をユタと作った。作ったと言うより、手伝った。竈風の調理台の前でユタは言った。

「アオイさまはコエの甘煮を作ったことはありますか？」

「さあ。多分あると思うけど」

「憶えてらっしゃらないのですね？」

アオイが「うん」と答えると、ユタは物知り顔で説明を始めた。

「コエは川魚ですから、熱湯をかけて臭みを抜きます。それからお酒やシヨウガやお砂糖をたっぷり入れたお鍋でコトコト煮込み、頃合いを見てお醤油を入れます。昨日、輪切りにした身を近所の漁師さんがわけてくださいました。実はもう煮込んであります。朝、アオイさまが起きる前から煮込み、アオイさまが後片付けに行ったら、つしやる間もずっと煮込んでいたのです」

「え？　じゃあもう出来てるの？」

「いいえ。まだです。これから最後の仕上げ、一番楽しい作業です」

「楽しい？」

「はい」

ユタはいかにも楽しげな顔附きで、二つ並んでいる大きな浅鍋に向かい合うと、落としぶたを取った。吹きこぼれそうに泡立っていた煮汁が、すうつと引いて、魚の輪切りが顔を出した。アオイがのぞき込むと、輪切りはそれぞれの鍋に五切れずつ。煮汁から顔を出している。生前のコエの姿が偲ばれた。丸々と身が肥えていた。

「本当は半日から一日かけて骨まで柔らかく煮るのですが、」ユタは塩の隣の小瓶を取り、中の粉をパツパツとかけた。「これがあればそこまで煮なくても大丈夫。これをかけると骨が柔らかくなるのです」

「へえ……調味料？」そんな便利なモノがあつたつけ　？　アオイが訊くと、ユタは鍋に向かって呪文を唱えた。

なるほどね　。

「で、俺は何をすれば？」

「これから煮詰めます」ユタは匙をアオイに手渡した。「この匙で煮汁をすくってコエの身にかけます」

「ふーん……」何処が楽しいのか分からない。

「どんどん煮汁が少なくなりますから、最後の方は鍋を傾けてやります。コエの身は崩れやすいので、匙をあてて崩さないように気を付けてください。火加減は僕が調節します。それから、隣の火口を使って、今からリュウが羹あつものを作りますから、邪魔にならないように気を付けてください」

「ふーん……。分かった」

アオイは真面目な顔で鍋に向き合った。ユタも隣で真面目な顔をして作業に取りかかった。羹って何かな、気になり、隣に目をやっている、リュウ少年が作っているのはお吸い物だった。

匙で煮汁をすくってはかけ、すくってはかけ。アオイもユタもいつしか無口になっていた。黙ってやるのがごく自然な感じがしたが、ふと気になり。「なあ……」訊いてみた。「お客って、十五・六人いるんだろ？」朝、彼が聞いた話ではそうだった。

「はい。そうですけど……」鍋から目を離さずユタは答えた。若干、話しかけたい欲しい、声にそんな空気が滲んでいた。

「数が足りませんか？」

「いえ。巫術師の方はお肉を食べないので。お野菜の煮物を用意しています」

「そうか……」

お廟の少年達に抜かりはなかった。

その後もずっと、煮汁をすくってはかけ、すくってはかけ。アオイもその作業が気に入った。かければかけるほど、魚の身においしいそうな照りが出てきた。ずっと黙って作業していた彼だが、思わずこう口にしてしまい。「美味そうになってきたな」。いつものようにユタにたしなめられた。

その後、出来上がった料理を人数分の箱膳の上に並べた。アオイが並べ、仕上がったお膳を、端からユタとリュウ少年が運んだ。最後の一膳まで運び終わり、戻ってきた二人の少年が、ハッと顔を見合わせた。

「あ、食前酒の梅酒をつけ忘れてた！」  
「大変！」

アオイも慌てた。

「梅酒は何処にあるんだ？」

「アオイさまの後ろの壺が全部梅酒です」

蓋付きの壺が並んでいる。「分かった。俺が注ぐ。どれから注げばいいんだ？」

「左からです。右の方が新しく左の方が古いものです」

「分かった」アオイは一番左の壺を開けた。梅酒が壺の半分くらいまで入っていて、梅の実が沢山沈んでいた。「俺が注ぐから、リュウは俺にコップを渡してくれ。俺が注いだらユタが受け取ってくれ」

中であつた小さなヒシヤクを手にした。リュウ少年が素早く手渡した小さなコップに、素早く梅酒を注ぎ、ユタに渡した。

一瞬、二人の少年は怪訝な表情をし、それから顔を見合わせた。目が吃驚していた。「どうした？」何か変か？　そう思いアオイが訊くと、二人の少年は我に返り。「いえ。何でも」と同時に答えた。

アオイは次々手渡されるコップに梅酒を注いでユタに渡した。ユタは二つのお盆の上にそれを並べた。十杯目くらいで、梅の実が邪魔になり、壺を傾けないとヒシヤクにすくえなくなつた。

「頑張ってください。アオイさま。あと少しです」

「ああ……」

最後には壺がほとんど空っぽになつた。壺の中には梅の実ばかりゴロゴロ。この梅の実はどうするのか、思わないでもなかつたが、最後の一杯まで注いだ。

「良かった。じゃあ、僕とリュウは急いでこれを運んできますね」

「ああ」答えながら、ふうつと息をついた。

二人の少年がパタパタと梅酒を運んでいったあと、アオイはゆっくりと厨房をあとにした。もう、用事はない筈だつた。あとは会合が終わつたあと、お膳を下げて皿を洗う。

梅の実だけ残つたけど…… ? 少し気になつたが。自分の部屋に戻つた。

厨房に戻つた二人の少年は、梅の実がどつちやり入つた壺を前に思案顔で相談した。

「これは……、どうしよう?」

「仕方ないよ。僕たちで食べなきゃ」

「そうだね。みんなを呼んでこよう」

「先ずはお皿の上に出してみようよ。どのくらいあるのか」

「そうだね」



二人の少年は大皿を置いて、壺の中の梅の実を箸でつまんで並べていった。数を数えながら。「すごいよ。もう二十だよ」「一人何個食べられるんだろう」

そこにラナイ少年が入ってきた。「え　？」二人の前の大皿を見て目を丸くし、二人に促されて壺の中をのぞいてさらに目を丸くした。「これは　」

「ええつと……アオイさまが梅の実を入れるのを忘れてお注ぎになったので……」  
「です」

ラナイ少年は始め口をぽかんと開けて吃驚していたが、ほどもなく、いつもの冷静さを取り戻した。

「仕方ない。だったら僕たちで食べなきゃ。二人でみんなを呼んで来て。私が壺から上げておくから」

そろそろ四時になるつかという頃、どうやら会合が終わったらしく、ぞろぞろと廊下を歩く足音が聞こえた。

見送りくらいしとくべきだよなと思い、アオイは部屋を出た。玄関に向かってさほども歩かないうちに、狭い廊下をぞろぞろと歩く人の流れに行きあつた。流れをやり過ぎ、後ろから附いて行った。お客さんらしき人達が先を歩き、その後ろにこの廟堂の人達、タパヤリリナネや少年達が歩いていて、アオイはその後ろから、あまり目立たないように附いて歩いた。様子がおかしいことに気附いた。お廟の少年達がなんだか、ふらふらしている。こいつらどうしたんだ　？　酒でも飲んだみたいだな　？　まさかな　。

門の処で客人達を見送った。やけに騒々しく陽気な少年達と一緒に。客の一人がアオイに歩み寄り、頭を下げてこう挨拶した。

「アオイセナ様ですね。私は南の廟堂のニシ・ヌタお婆様の代理の者です。ニシ・ヌタお婆様は高齢の爲本日こちらに参れませんが、是非アオイ様にお会いしたいとおっしゃってました。一度、南の廟堂へ遊びにおいでてください」

「はい。分かりました」

帰って行く客人達を、おじぎして見送った。

客の姿が消えると、彼の前にいたシユスがふり返り言った。「アオイ殿。このあと、いいかな？」

「はい」約束していた。忘れてはいない。

「部屋で待っていてくれ。用意が出来たら人を遣る」大魔導師はそう言い残すと、アヅハナウラやカタジニやタパと一緒に廟堂へ戻っていった。

その後ろを、アオイも戻りながら、しかしどうにも気になって仕方なかった。ユタが隣でユラユラしていた。

「どうしたんだ？」

「何がですか？」ユタは上機嫌な顔をあげた。しかし頭がゆっくりと円を描いていた。

「みんな変じゃないか？」

「そんなことないですよ」

「れすよ？」

微かに酒臭い。客人が帰ってしまった今も酒の臭いがするのはおかしかった。

「酔っぱらってるのか？」

「まさか」

ユタは笑いながらかぶりをふった。それから弾むような足取りでリュウ少年と一緒に駆けていった。途中から他の少年も巻き込んで鬼ごっこになった。ここでは珍しい光景だった。



部屋に戻っていくらも待たないうちに、シユス本人が迎えに現れた。本人が来ると思っていたいなかったアオイは、幾分吃驚した。大魔導師と二人、廊下を歩いていけると、後ろからバタバタとした足音。追いついていつたかと思うと、今度は前を横切ったり。鬼ごっこがまだ続いていた。

「いったいあいつらはどうしたんだ？　そう思いながら前を歩く大魔導師に話しかけた。「今日はなんだか変ですね」

大魔導師は笑ってふり返った。

「どうやら、梅酒の梅を沢山食べたらしい」

「えー！」

漸く思い至った。いつもお膳に附いていた梅酒は、コップの底に梅の実を沈めていたことを。道理でゴロゴロ残ったわけだった。じやあ、まさか、あれ全部食べちゃったのか？　確かに、みんな大好きだとは聞いていたけど。

「俺の所為です」アオイは苦笑しながら、大魔導師に話した。「俺が梅酒を注ぐとき、梅の実を入れ忘れたから。あの子達が怒られたりしないでしょうか？」

大魔導師は笑って言った。「怒られるほどのことではあるまい」。いつもの鋭い目が優しく和らいでいた。

その笑顔を見てようやく、アオイは相手が理解できた気がした。難しい人じゃない、この人のまっとうしている雰囲気は、自分に対

する厳しさの表れ。常に自分を厳しく律し、それが顔や、顔に表れる表情に刻まれている。しかし人に対しては優しく穏やかな男。こんな男になりたい。アオイにそう思わせた。

大魔導師シユスローは、マアシナの部屋の前で足を止めた。「さあ。ここだ」。

大魔導師に附いて中に入ると、そこにはタパとリリナネが待っていた。しかしリリナネは二人が入ってきてても目を向けない。マアシナの神像に向かい、足を組んで座って、膝の上に印を結んだ手を乗せて、瞑目している。タパはリリナネの斜め前で、マアシナの神像に対しては横を向き、つまり入ってきた彼らの方を向いて座っていて、彼らが入ってくるいつもの穏やかな笑みを浮かべた。

これはアレだ、オゼン、違う。ザゼン。

シユスローは言った。「他にもない。君に教えたいことはこれだ。ツフガとしてとても大切なこと。君は身につけた自分のケイの力を開くことが出来る。しかし君の身の裡に走る法力の経路をより強く確かなものとする爲に、これを行う」。

シユスはリリナネの隣に毛皮の敷物を敷き、そこに座るようアオイを促した。アオイが座ると、自分はその隣に敷物を敷き座った。「あとは私ではなく、タパ様に手ほどきして貰う方が良いでしょう。タパ殿。よろしく頼む」タパタイラに一言声をかけ、自分は瞑目した。

タパがアオイの前に来て座った。マアシナの神像に背を向けず、斜め前に。アオイは左腿の上に右足首を乗せ、さらにその右腿の上に左足首を引っ張り上げようとした。こんな感じだっけ。と思っ

ただが。

巫術師は笑って言った。「普通に楽に座りなさい」

「え？ あぐらでいいんですか？」確かに、言われて横を見ると、リリナネもシユスローも楽に座っている。

「うむ。座り方は重要ではない。楽な姿勢で良い。寝転がった方が良いと思えば寝転がっても良い。体は楽にくつろがせ、しかし心は気ままにうつろわせず、一つ処に留める。その方法をこれから伝授する」

「はい」

「先ず、目的から伝える。今、シユス殿が語られたとおり、法力の経路をより確かなものとして常に高く維持する、それもあがるがもっと大切なこと。それは貴殿の身の裡にラアテアの光を開くこと」

「はい」ラアテアは、マナみたいなもの……マナの力を授かるってことが、そう理解した。しかし少し意味合いが違っていた。そしてそれは彼にとって、得心がいく答えだった。

「若しも人の裡にその光が開かれれば、人は絶対的な善を知る。光が開かれた者の為すことは、全て善行となる。たとえ一生叶わずとも、常にそこへ近付こうと顔をそちらに向けていること。それは、一瞬にして多くの人命を奪う術が使える者には、とても大切なこと。アオイ殿はプレルツは使えぬが、ツフガの一人として、常に善の側に立つよう心がけなさい。その意志を知ろうと常に努めなさい。時にツフガの術は一国の命運を左右しもある。ツフガの意志が多くの人の運命を変える。言っていることが、伝わっているかな」

「はい」

アオイは途中から目を閉じて聞いていた。巫術師は「うむ」と一  
つ言った。

「方法を伝える前に、先ず、次のことを理解しなさい。それは、ア  
オイ殿が確かにここにあると認識している世界、物象、事象、それ  
らは全て、存在しないということを」

「え？」

アオイは目を開いた。巫術師は静かな笑みを浮かべていた。

「ここに紙があると思い、そこに丸を二つ並べて書き、その下に横  
棒を引けばどう見えるかな？」

少し考えて答えた。「顔……ですか？」

「うむ」巫術師は新米弟子の答えに満足げな笑みをみせた。「何故  
かな。それは紙に過ぎない。鉛筆で書かれた線に過ぎない。なのに  
何故顔に見えるのか」

言わんとしていることが臆に見えた気がした。

「もっと巧みな絵であったとしても、それは紙とその上に乗せられ  
た顔料、絵の具、それでしかない。何故、人はそれを見て、これは  
獣だとか、これは鳥だとか思うのか」

巫術師は言葉を切り、アオイに少し考えさせてから、続けた。



「それは人が投影するからである。人の心は自然に投影する。自分のうちにあるものを。それは何を見ているときも、変わらない。勝手に投影する。言い換えれば、人がそこにあると思っっているもの、現実に関心を取り囲んでいると思っっているもの、それらは全て、自己の投影に過ぎない。他者も物も事象も全て。それらは存在しない。それらと微妙に異なる形で、全て存在している。それらは人が普段認識しているよりも、もっと鮮やかな色彩で、鮮烈に、存在している。人が聞き漏らしている多くの音が存在している。このことを次の言葉の、言葉と言葉の間合いから、受け取りなさい」

巫術師タパは一呼吸おいて、言った。

「万物は存在しない。されど、万物は存在している」

これはアレだ。アオイがこの言葉を聞いてその言葉を思い出したのは、ほぼ奇蹟だった。しかしタパの言った言葉の間合いが、記憶の深い霧の中のその言葉とつながった。

色即是空、空即是色。誰が言った言葉とか、何に書いてあった言葉とかはまったく思い出せなかったが、言葉の意味を知っていたかどうかも分からないが、もし知らなかったとしても、今知った間合いに潜む意味合いは同一。

「さて。この認識に至るまでは人間は間違いだらけである。正義を知らず、正義を口にし、間違いを繰り返す。次のような言葉もある。若しも盲いた人が盲いた人を導こうとすれば、二人とも穴に落ちる。私にもあてはまる。私とて、目が見えているわけではない。私に導かれて穴に落ちないように気を付けなさい」

「冗談かな、と思い、笑った方がいいのかな、と迷ったが、巫術師はそんな彼の様子はあまり気にせず続けた。

「先ずは一人で立つこと。自身を律し、人にもたれず一人立つ。この地上に一人在る。そう努めなさい。無論、人は一人で生きているのではないから、そのことを言っているのではない。心のありようを言っている。己を基軸としたしっかりした芯を心に持つこと。人によりどこを求めないこと。人に気に入られ認められたところで何があるかね。それは相手が気に入る投影を受け入れたに過ぎない。基準を自己に持ちなさい。友とは、君子のように交わりなさい。自分の内側に入り込ませず、相手の内側にも入らぬこと。友とは、同じ目標、高みに向かい共に協力し合う者であり、もたれ合い占有しあう者ではない。踏み込みすぎるとお互いの責任がお互いにあるかのような錯覚さえ起こる」

「はい。ですが……」

「何かな？」

友達についての考え方は概ね納得できた。アオイ自身もそういう友人関係の方が良かった。ベタベタといつもつるみ、何をすることもいつも一緒という友人関係よりも。けれど。

「男女は？」

アオイがそう訊くと、隣で無心になっているはずのりりナネの肩がピクツと動いた。ん？ 聴いてるのかな？

巫術師タパは笑って言った。

「若しも、愛し愛される仲の、思い人がいるならば、」

「いえ、あの、今いるというわけじゃないですが」

「うむ。若しもそういう人があるときは、その人といるときは常に心を重ね合うようにしなさい。相手が自分であり、自分が相手であるかのように想念しなさい。我らは皆別個の肉体に宿っていているが、元々は同じ光より生じた。それは同質のもの。同質のものである以上、重ねれば重なる。一つになる。心は肉体を一瞬たりとも離れることが出来ないが、恋人同士であれば交感しやすい。重ね合うのは無理としても、交感くらいなら可能かも知れない。今の答えでよいかな？」

「はい」

「うむ。では要約して始めから順に言ってみよう。絶対的な善を知るため、ラアテアの光を身に開かんとする、物象の只中に身を置き、そして何をするか？」一つ言葉を切り、続けた。

「雑念を捨てて無になりなさい。ただ座してここに在ること。ここと言う雑念とは、人の思う全て。一切思考しないこと。心は勝手に移ろう。常に何事かとりとめもなく考えている。試しに紙を置いて自分の考え事を全て書いてみるといい。何かの事象について真面目に考えていたかと思うと、すぐに脇道にそれ、別の事象に移る。そうかと思えば次の瞬間には、また別の気になることを思い出す。一つ、今、目を閉じて、そして何が起こるか試してみなさい」

アオイは目を閉じた。しかしすぐに開いた。答えた。「まったく無理です」。

考えるな、そう思い、あ、今のって考えたことになるな、考えるなと考えて、さらに、今のって考えたことになるなと考えて

るじゃないか、と、今も考えてるじゃないか。いったん考えをそらそうとしたら、ええっとと出てきた。ええっとも考えたことになるな。無、と想念したら、無と考えていた。

「何か考えてしまいます」

巫術師は満足げに微笑み頷いた。

「赤ん坊は何を考えていると思うかね。あの、天使のような笑顔の内側には何があると。赤ん坊はまだ何一つ言葉を得ていない。思考する道具がない。何も考えていない。ただ、感じている。全てを。主には母親を。生まれ落ちたこの世界の全てを、夢中で感じ取るうと努めている。赤ん坊は全体と共に在る。赤ん坊になったつもりでここにただ座り、そして感じなさい。感じようとすれば、人の思考は途切れ始める。やがて熟達し、己を無とすることも出来るようになるう」

「はい」アオイは再び目を閉じた。

「肌に触れる微かな風を感じなさい。ここに在る香の匂いを感じなさい。目を閉じればここにはそれしかない。他の一切の万象から自身を切り離し、ここで空気を感じ、そして今そこに他に何があるかね？」

アオイは目を閉じたまま答えた。「自分……息をしています」

「然様。その自分の呼吸に全てを集中させ、それを余すところなく感じなさい。特別な呼吸法というものはない。様々にあっても、それらは全て方便に過ぎぬ。ただ、呼吸して感じる。体はくつろがせ、意識は呼吸に集中させ続けること。若しもどうしても上手くいかないと感じたときは、いったん立ち上がり、三度小刻みに深く

吸い、一度軽く吐き、その呼吸を繰り返さない。そうすると体は過酸素状態となり、しびれる。脳は異変に気付き、常日頃浸っている夢の中から目覚める。何が起こったのか状況を知ろうとする。その時、脳は現実を見つめている。その意識を保ったまま、横になり、眩暈が収まったら再び座り、静かに呼吸を始めなさい」

その後は、細かい方法の伝授が続いた。

作者注：禅では厳しく姿勢を保ち、そこから集中へ入っていきます。ですから、小題「ZEN」と銘打っていますがこれは座禅ではありません。この世界独自の信仰形態と捉えてください。

## 十九・「聖女」

「さて。もう良いだろう」最後にタパは言った。「人の集中できる時間などそれほど長くはない。日に十分で良い。早朝静かな時、あるいは寝る前の時間に、これを行いなさい」

「はい」

アオイは目を開いた。リリナネとシユスの姿はいつの間になく、そこにはタパと彼だけだった。

「二人は？」

「先に終え、アオイ殿の邪魔にならぬよう、静かに立った」

「そうですか……。あの、もうしばらく続けてもいいですか？」どうしても上手くできなかつた。呼吸に意識を集中させていても、必ず何かが心に浮かんでくる。

タパは笑みを浮かべ、「うむ」と頷き、静かに部屋を出て行った。アオイはマアシナの像に向かい、一人瞑目した。「何かが必ず心に浮かんでしまう事に、苛立つてはいけない」伝授の中でタパは言った。「マアシナの像を目に焼き付けておき、何事か浮かんだらすぐさまその像を鮮烈に頭に思い描き、すり替えてやるのも一つの方法。神の姿を思い浮かべることに意味は無い。何かの図案でもよい。それが自分にとって特別な意味を持つなら」。他にも教えられた様々な方法を、霧中でつかんだロープのように辿りながら、一人瞑

目し試みた。しかしどうしても上手くいかない。

徐々に慣れるしかないのかな、あきらめて、立ち上がるうと目を開いたとき、部屋に誰か入ってきた。ふり向くとアツハナウラだった。彼の姿を見て、入り口で立ち止まり。

「お邪魔だったかな？」

「いえ……、もうやめる処です」

「そうか」

アツハナウラは静かに入ってくると、アオイの隣に敷物を敷き座った。

「アツ様もされるのですか？」

「うむ。時々だが……」

アオイは邪魔しては悪いと思い、会釈して立ち上がるうとした。しかし、ふと思いついた。

「若しよろしければ、今、少しお話できますか？」

「何かな？」

その人のことは皆あまり口にしない。訊けば教えてくれるのだから、皆、口にしたいくない様子が伺える。雰囲気で分かる。その理由もなんとなく分かる気がしていた。おそらく罪悪感。けれど知っておきたい。訊くなら、この人以上の人はいなかった。

「聖女様は、どんな人だったのですか？」

「そうか……君には記憶がないのだったな……」アヅハナウラは微笑かに笑みを浮かべた。ほんの少し眉を曇らせ。「うむ」と頷き、話してくれた。

「あれには、悪いことをした。私達が過大な期待をかけすぎた。人が重大な自分の運命をあらかじめ知ってしまうことは、とても辛いことだ」

やっぱりそうだったのか……、アオイの予想していた通りだった。神霊に召されて冥界へ入る、自分の前途にそんな運命が待ち受けていたら。聖女マナハナウラの人生は、幸せな人生ではなかったのではないか、そう感じていた。

「幼い頃はとてもおてんばでよく笑う子だった。この廟堂で暮らしていた。気丈で、男の子を口喧嘩で言い負かしたりもした。けれど長じて自身の運命を深く考えるようになる……気鬱の病になり、廟堂の高楼、その最上階に一人閉じこもり、滅多に外出もしなくなつた……。無論、人とも会わず……。フィオラパだけと話を……。フィオラパ達はあの子を慰めに毎晩現れていた……」

そうなんですか……、そう言おうとしたが、かすれて変な声になりそうな気がしてやめた。

「しかし十七歳を迎える頃になると、悟りきつたような表情を見せるようになった。外出もするようになった。いつも物静かで口数少なく……。会う人皆に深い愛情を向け……。自分の望みは一切口にせず……。いつも笑みをたやさず、人の爲ばかり思い……。あれは、



本当に聖女だった……」

アヅハナウラはしばらく口をつぐんだ。逞しい体が小さく見えた。アオイはただ黙って先を待った。やがてアヅハナウラは、重い口を開きその日の事を話してくれた。

「その日、私達が歩いていけると空に光の門が現れ、そこから射した光があの子を包んだ。あの子はすっかり覚悟が決まっていた。私の顔を見上げ、今日まで育ててくれた礼を言い、タパ様やシユス様やリケ様、その人達の名前をあげ、お会い出来ず行きますが、感謝していたとお伝えください、そう言い残し、空へ昇っていった」

アヅハナウラはその通りには言わなかったが、聖女の残した言葉を一言一句正確に胸に刻みつけているようだった。

「私には、光に包まれたときのあの子の顔が、本当に幸せそうに輝いていたことだけが、心の救いだ……」遠くへ向けられた目に、うつすらと涙が浮かんでいた。愛惜や悔恨の情、それらと入り交じり。

「どうして……」アオイは理不尽に感じられて仕方なかった。「どうしてその人は、冥界へ行かなければならなかったのですか……」口惜しかった。

「決まっていたことだからだ。それは、生まれる前から決まっていた……」

「けど……」分からなかった。どうしてその人が犠牲にならなければならなかったのか。彼は若く、憤りを押さえられなかった。普段、そんな感情をみせることは滅多にない彼だが。「俺には分かりません」

「若しも……、あの子が冥界へ行かずに済むのなら、マアシナ様御

自身が降りてきて、その子達を授けて下さっただろう。始めからそうなっていたはずだ……。あの子が冥界へ入り、そして神霊として迎えられることは、始めから決まっていたことだ……」

「連れて帰れないのですか……？ その子達と一緒に、この世界に……」御子を受け取りに冥界へ入る、その時、その人も一緒にこの世界に連れ帰りたい、そう思った。気附かず涙が浮かんでいた。義憤、神に対する。

「君は若い……。よく考えなさい。若しもそれが出来るなら、御子を受け取りに冥界へ入らなければいけない、そんなことも起こらない。あの子が神霊となるのは、避けられない定めだったのだ……。全てはあの子の誕生から始まった……」

「そんなこと……」  
アオイは奥歯を噛みしめた。下を向いた。彼がそう決意したとしても、何も不思議はなかった。一瞬で心を決めた。

床の板目を睨みつけ。  
「もしも俺が冥界に入れたら、その人を連れて帰ります」

アツハナウラは驚き顔をあげた。歯噛み下を睨んでいる彼の顔を見て口をつぐみ、しかしこう言った。

「よく考えなさい……」

考えなしの行動をしてはいけない、言外にそう言っていた。

## 二十・「ツキツキ」

冥界へ入り聖女を連れ帰る、アオイはそう決意したが、それは心中に期すだけで公言しない方がいいと感じた。よく考えなさいと言ったアズハナウラの顔を見れば歴然としていた。それは人々から見れば大それた考え。しかも、現時点で彼は冥界入り正規の人員ではない。余計なことを口にして可能性を潰すべきじゃない。俺は。今、俺にできることをする。現時点で彼にできることは多くない。と言うよりも、他にない。

己を磨く。少しでも腕を上げ、何かの時は選ばれるように努めるしか。

部屋に戻るとユタが夕食を運んできていた。少し疲れた顔をしていたが、もう、酔いは醒めている様子だった。

「お前つてけっこう……酒に強いのかもな」戻る途中の廊下や部屋で、転がって眠っている数人の少年を見ていた。

ユタは小首を傾げて「さあ……」と答えた。

「お前が大人になったら一緒に飲もう」アオイは約束した。

「うん」ユタは嬉しそうににこつと笑った。

「それにしても」一言言っておくべきだと思った。「俺が間違えたときどうして黙ってたんだ？」

「ごめんなさい」ユタは照れ笑いを浮かべて謝った。

「まあいいや。次に飲むときは俺が連れてってやるよ。梅酒じゃない酒だ。お前が二十歳になる頃は……」

ふと思った。その時、俺はどうなっているのだろうか。今と同じこの廟堂で、同じ人々に囲まれて暮らしているのだろうか。タパヤリリナネ、カタジニやイオワニ、そしてユタと。

「僕が二十歳になる頃は、マアシナさまの御子さまも大きくなっているよ。お姉さんの方は十一歳になってるはずだよ」

「そうか。そうだな……」当然の如く冥界入りを成功させ、その子達も元気に育っているといい。そしてその子達の母親マナハナウラもそこにいて……。

アオイの心の中に未来の絵が浮かんだ。それを奇異に感じたのは、記憶を失って以来初めてのことだったから。この廟堂で目を覚ましてからというもの、ずっと先の将来のことを考えたことがなかった。現在のことを理解するのに精一杯で。その時浮かんだのは、優しく、温かい、理想的な光景。人は誰でもそんな空想の光景を胸に持ち、その光景に自分を重ねるべく、歩む。

翌日はルルオシヌミとの約束の日だった。そろそろ支度しようかなと思っていると、リケミチモリ氏が訪ねてきた、にこやかに笑いながら言った。

「リュウウから聞きました。ルルオシヌミさんとツキツキに行かれる

そうですね」

「え、リュウから？」話した覚えがなく、幾分驚いて問い返すと、  
「リュウはユタから聞いたそうです」リケミチモリ氏は種明かしをした。そして意味ありげな笑みを浮かべて、懐から封筒を取り出した。「そういう時はちゃんと事前におっしゃって下さい」と、差し出した。

「はい」何かまずかったのかなと思いつつ受け取ってみると、中は紙幣だった。

吃驚した彼にリケミチモリは言った。

「女性と出かけるのにお金が無くては恥をかくでしょう」

「いや、でも、頂くわけには」

「遠慮することはありません」固辞するアオイに封筒を押しつけて帰っていった。

助かったと言えば助かった。どうしようかなと思っていた処だった。それにしても、と彼は考えた。俺は何処から給料がもらえるんだろう、と。

ツフガは寄付と寄進で成り立っている。すでにアオイも仕組みを理解している。独り立ちしていない魔導師や巫術師は、師に寄せられた寄付から決まった割合を収入として得る。彼もタパの弟子になれば一口得ることが出来る。が、彼は巫術師を目指しているわけではない。タパからその話が一度出たときも、少し考えさせてください

いと答えた。自分は巫術師ではない、けれど魔導師なのか武人なのかはつきりしない。考えれば考えるほど分からない。魔法剣士って確かに聞いたことある気がするのに、誰に訊いてもそんな人は前代未聞だと言う。

現在の処はとても宙ぶらりんな状態だが、名目上はお手伝いの子供と同じ。無給。

何か仕事探さなきゃな。武人支度を全てリケミチモリ氏に揃えてもらった上、毎月お小遣いまで貰うわけにはいかないと思った。

日の辻にお廟の前に出てみると、ルルオシ又ミはすでに門の外で待っていた。アオイの姿を見て嬉しそうに顔を輝かせた。が、すぐに目を泳がせて頬を染めた。相変わらずポワポワした何かを渦巻かせていた。はつきりしない何か。「行きましようか」と彼が言うと、「はい」と恥ずかしそうなそぶりで頷いた。

アオイが歩き始めると、隣に来て歩いた。しかし彼は、自分は方向を知らないことに気附いた。

「えっと……、どっちですか？」

「こっちです……」逆方向を指した。

「そうですか……」

二人で正しい方向へ向かった。

アオイは余所行ききの爲の服を持っていない。いつもと変わらない風体。ルルオシ又ミは涼しげな柄の水色の着物を着て、髪にも可愛らしい髪留めをつけてお洒落をしていた。男性の着物は前を合わせて着る物しかないが、女性の着物にはすっぱりかぶって着る形の物もある。それは胸元まで切れ込みがあり、飾り紐で合わせて留める。普通の物と違い、飾り紐が胸元一箇所。ルルは今日それを着ていて、それを着る女性が大抵そうするように腰帯を結んでいなかった。可愛らしく涼しげな装い。

歩きながらアオイは訊いた。「ツキツキって何ですか？」。ユタ

に訊こうと思って忘れていた。

ルルオシ又ミははたと頭を悩ませた風だった。

「ツキツキは……」悩んだ末答えた。「ツキツキです……お答えし  
ようがありません……」

「どんなのですか？」何かの試合だというのは、アオイにも予想が  
附いていた。

「ええつと……こうするのです」

ルルは真似をして見せた。小さな拳を握りしめて構えると、可愛  
い声でシュツシュツと言いながら繰り出した。のろい上に全然格好  
になっていなかったが、アオイにも通じた。

「ああ」通じたものの言葉が出てこなかった。「それ、ボク……」

「僕……？」

「ええ。アレです。うーん……ボクサン」

「僕さん？」

「いや、ボクシン、デ？ いや、ダ」

「僕死んだ……？」

「そう。ボクシンダ、アレ？ いや……」

ツキツキでいいや。 。 幾分投げやりにそう思った。



やがて一際広くにぎやかな通りに出た。そこに幟が何本も立ち並んでいた。建物は大きい割と安普請。けれど前に人が溢れかえっている。風にはためく幟の文字を読んだ。『ホンジツ ツキツキオウ ケツテイセン』 『アラシヲヨブ フウウンジ チョウセンシヤ ニコニコ』 『ハチクノ レンシヨウカイドウ オウジャ ケレケレ』

「随分人気なんですね」隣のルルオシヌミに訊くと、

「はい……」と答え、向かいの建物を指差し、

「向かいには芝居小屋もあります」と言った。

言われて目をやると、こちらは白壁に立派な屋根の建物で、正面入り口の上に、芝居的一幕らしき絵が描かれた大きな看板をかがけていた。異国風の街の景色と、クムラギとは異質な服装をした人物の絵が気になった。絵と一緒に書かれていた大きな文字は『マーホーズ ノ リヨシユウ』

リヨシユウは虜囚か旅愁、絵を見る限り虜囚、と思ったが、  
「魔―法ズ？」

「はい。マーホーズは西の遠国の港街の名前です。今は歌劇がかかっています。西方から来た歌劇団です」

「へえ……」街の名前か。言わなくてよかった。言われてみれば聞いたことある気がした。意味も港という意味だったと思っただ。それより。

さつきからちょっと気になっていた。距離が近かった。隣りの立ち位置。始めはもっと離れていたのに徐々に接近してきて今は腕が

触れそうなくらい。きちんと言っておくべきかなと感じた。

「あの……」

「はい……」

「俺たちは友達ですよね？」

「はい……」

「こないだオニマル君に言ったような説明は誤解されると思うんですが……」

「ごめんなさい……」ルルは目を伏せて素直に謝った。「嬉しくて、つい……」

「いえ……分かってくれれば……気にしないでいいです」伏せた目が潤んでいるような気がして少し焦った。反省しているみたいだからもういいと思った。

しかしそれは反省しているのではなかった。小技のたぐいだった。

ツキツキ小屋の中は広く、天井も高いが、壁は安普請な板壁。中央に土を盛った舞台があり、その周囲は立ち見の土間になっている。その後ろに木製のひな壇が段々に作られていて、観客はそこに並んで見物する。

中に入ると目が慣れるまでしばらくかかった。灯火の術のかけられた棒や筒灯で照らされた小屋の中は、明るい日差しの戸外に比べ多少薄暗く、足下が不用心だった。板壁の隙間から陽が漏れていた。ルルの取った席はひな壇の前の方だった。アオイはルルに附いて階段を登り台の上に立った。しかしあとからあとから人がやって来て、アオイとルルは奥へと詰めた。次第にぎゅうぎゅう詰めになり、隣の人と肩が触れるくらいの間隔になった。

「土俵の側の券はとても高いのです」申し訳なさそうにルルが言った。

「ここの方が見やすいです」この辺が一番見やすいと、アオイは思った。それに立ち見の土間もひな壇同様すし詰め。「すごい人気ですね」。皆、券を片手に興奮気味だった。入場券ではない何かの券。「アレは入場券じゃないですよね？」

「皆さんお金を賭けているのです」

「へえ……なるほど」

その時「あっ」と小さな声をあげてルルは蹠踉めいた。ひな壇から落ちそうになったその体を、アオイは慌てて支えた。肩を抱くよ

うな格好で。

「あ、ありがとうございます」ルルは真っ赤になって顔を伏せた。

「いえ」アオイは手を戻した。しかし少し戸惑っていた。自分の中で保っていた距離感が曖昧になり。

興行主が挨拶をし、その後進行役の人が現れるとどつと歓声が沸き起こった。進行役は大声で開始を告げたが、何を言っているのか声が聞こえなかった。多分選手の名前を叫んだのだとアオイは思った。こんな光景は見たことある気がした。歓声の中、選手が登場した。上半身裸。拳には布を巻いて。アオイの朧な記憶と一致しない拳の装備。アレレと感じた。思わず、

「アレで殴り合うんですか？」隣のルルに訊くと、

「はい。まともに当たると大抵倒れてしまいます……」真面目な顔で答えた。

何となく納得してしまい、

「でしょうね……」と頷いた。

「どっちがツキツキ王ですか」と訊くと、ルルは彼の勘違いに気付き、

「これは前座の試合です」と教えてくれた。

試合が始まると、アオイはさらに自分の勘違いに気附かされた。拳の応酬ばかりではなく、蹴り技もあった。そういえばこうだったと思った。さらに蹴り技を見て思ったこと。特に、後ろ回し蹴り。

俺はひょっとしてこれをやっていたのだろうか。

後ろ回し蹴りの回転動作。前後の足の運び。一瞬、自分の動きと

重なって見えた。

俺は、西国近くの遠方の町、ビドリオが訛って硝子をビードロと呼ぶ町、そこでツキツキの選手だったのだろうか？　しかしいくら辿るうとしても辿る記憶が全くなかった。

その後もう一つ前座の試合があり、今日の選手権試合、王者戦が行われた。

「ルルさんはどちらを応援しているのですか？」アオイは訊いた。ルルは、祈るように手を握りしめて試合前の選手を見つめていた。

「ニコニコさんです。ケレケレさんの方が強いんですけど……」ハララドキドキといった感じの顔付きで答えた。

熱狂の増埒、そんな形容がピッタリくる歓声の中、挑戦者ニコニコが一瞬の間を置いて放ったとび膝蹴りが王者の頬を捉え。それまでの不利な試合展開を覆し、挑戦者が勝利した。紙切れと化した券が宙を舞った。隣できゃあきゃあ言っているルルオシ又ミを見て、アオイは何故か心が和んだ。素の相手が、ようやく見えた気がした。

二十一・「地水火風空」

汗びつしよりになり、興奮冷めやらぬ人々に混じって会場をあとにした二人。ツキツキ小屋の中は蒸し暑い。人の熱気がこもり、さらに人の壁で風が通らず。アオイは外の風を冷たく感じた。溢れかえった見物後の人混みの中で、ルルに訊いた。

「このあとは何処に行きますか？」

「そうですね。皆さんはバルでお茶を飲んだりします……」

「バル？」

「はい……」

「へえ……」

その時、半鐘が鳴った。始め遠くで微かに。そして町の四方から一斉に。すぐ側でこの区画の半鐘も鳴り始めた。ツキツキ小屋の前を埋め尽くした人々の間にざわめきが広がった。そして早駆けの蹄の音響き、駆けてきた数騎の武人。一人が馬を止め、人々に危急の事態を告げた。

「蜥人が入り込んでいる。見失った。ここへ現れるかも知れぬ。急ぎ家へ帰られよ」

人々は皆、不安げに顔を見合わせた。慌てて駆け出そうとした者

もいたが、大抵の人は冷静だった。年輩の男性が武人に問い返した。「何匹かね？」

「十数匹入り込みあらかた退治したが数匹取り逃した」口早に答え武人は駆け去った。

アオイもまた、冷静だった。大規模な襲撃じゃないと判断できた。搜索を手伝うよりも、この子を安全な場所まで送っていくこと、ふり返るとルルは怯えた顔をして、彼の袖の後ろをつかんでいた。アオイは心配ないと笑ってみせた。

「心配ありません。剣を持っていますから、出会しても大丈夫です」

ルルオシ又ミは「はい」と答え、ぎゅっと袖を握った。

足早に散ってゆく人々の間を、二人も急ぎ足で歩いた。騎兵が何騎も駆けていた。捜し廻っている様子だった。

アオイは、いつ敵が現れても良いように精神を集中させた。いつ、どんな形で現れても即座に反応できるように。それは彼が昨日やったことだった。心を静め、耳を澄まし、周囲に神経を張り巡らし、自分を保ち。

大きな辻を通り過ぎたとき、アオイのすぐ前方で悲鳴が沸き起った。彼は悲鳴の上がる前に気附いていた。すでにその目が捉えていた。狭い路地から飛び出してきたその姿を。筋骨隆々とした上半身、エラのような物のある太い首、パツクリ裂けた口と大きな顎、灰色の顔、トカゲそっくりの目を光らせて、身には毛皮の革鎧をまとい。立ちすくんだ人々に向けて、棘だらけの鉄球をふりあげた蜥人。三匹。

アオイはルルオシヌミの手をふりほどき剣を抜いた。



たった三匹。アオイはそう感じた。  
剣を抜くと同時に印を結び地を蹴り。

次の瞬間、そこにいた人々は、三つに別たれたアオイセナを見た。一匹の背後に現れ軀を廻して剣をふり抜いたアオイセナ、その隣の蜥人の側方に現れ、現れたときにはふり抜いた切っ先を深々と敵の軀に埋めていたアオイセナ、さらにもう一匹の背後に出現し、敵の後ろ首を真一文字に斬り裂き、背を向けて立ったアオイセナ。

実際には同じ空間同じ時間に彼は一人しかいなかった。人々の目に映った姿のうち、最後の姿以外は全て残像。

人々は言葉を失った。始めて目にした術に。本来、移動呪はそう使われるものではなかったうえ、移動呪の上級術はそうではなかった。今、人々が目にしたものは、分身の術。しわぶき一つなく静まり返った中、絶命しきれずのたうち廻る蜥人の嘎れた叫び声だけが響いていた。

アオイが呪文文言唱えたのは一回。あとの二回は目線だけで移動した。二回、体裏表に刃をふるう一連の動作の流れの中で。彼は臍に感じていた。今までの自分とは截然と違うもの、とても言葉では説明できない不確かな何かを。その何かを、彼の国の剣聖の言葉で表せばこうなる。

地水火風に譬えられる四つの極意を飛び抜かし、最終奥義である空の極意を、彼は臍に感得した。

水を打ったように静まりかえった大通り。我に返った武人らが馬を駆けさせ、のたうつ蜥人に槍でとどめを刺した。人々からどよめきが起こった。アオイは懐から布を出し、剣の血をぬぐい鞆に収めた。今のは、自分でも少し驚いていた。玄寂けんじやく、泰然としていて、それでいて鋭く進った。その感覚を忘れないよう胸に修めた。

歓声に近いどよめきの中、馬上の武人がアオイに言った。

「見事でした」

「いえ」アオイは軽く頭をさげた。「この三匹で終わりですか？」

「いえ。もう二匹いるはずですよ」武人は笑って答えた。「しかしお任せ下さい。あとは我らが」

年配の武人が若い武人に「伝令を。アオイセナ殿が三匹退治されたと」と命じ、その若者が駆け去った。そして武人らは口々に「さあ、残り僅かぞ。徹底的に捜せ」と声を掛け合って四方へ散った。

武人らが駆け去ると、アオイの周りに人だかりができた。人々は彼を知っていた。顔を知らずとも。飛燕の如き剣法と跳躍呪の使い手。巫術師タパの廟堂の剣客、アオイセナ。

「アオイ様ですね？ タパ様の廟堂の」

「今のはいったい何の術ですか？」

後ろから気丈そうなお婆さんが、人々をいさめるように言った。

「これこれ。剣士殿を困らせるな。しかもまだ潜んだ蜥人が残つてるといふのに。さあ、さあ。早く帰りなさい」

言われて、人々は名残惜しそうに散っていった。お婆さんはアオ

イと目が合つと、「ご苦労じゃったな」と微笑んで立ち去った。アオイは会釈を返した。

三々五々散つてゆく人々の中、アオイはルルオシヌミの姿を捜した。見つからず、アレレと思いふと立ち止まると、真後ろにいた。

「なんだ、すぐ側にいたんですね」

「はい」

「帰りましょう」

「はい」

アオイが歩き始めると隣に来て手をつないだ。注意できなかった。小刻みに手がふるえていた。きつと怖かったんだと思った。相手が不安な気持ちを忘れられるように、しっかりと握ってやった。

「さっきのは分身の術ですか……？」ルルオシヌミは肩をくつつけるようにして彼の顔を見上げて訊いた。

「いえ」そう見えたのかなと思って、アオイは笑い、教えた。「普通の移動呪です」

「でも……とても速くて。どうやったのですか……？」

「タパ様から聞いたことがあります。ケイは持ち主の声を聞くと。ケイは身につけた人の意志を感じるそうです。術者が呪文を唱えた時の意志を読み取り、持ち主の力を開いてやるのだと聞きました。だからさっきのは、予めどう跳ぶか頭に描いておいて呪文を唱えたのです」

「始めから三回跳ぶつもりで？」

「いいえ。始めの敵を斬って、跳ぼうと思って目線をやったらもう跳んでいました。次の跳躍も」

「すごく格好良かったです……。分身の術を使える人なんて聞いたことがありません……。そんな人はお話の中だけで……」

話しているうちに、ふるえがおさまったようだった。もう手を離しても大丈夫かなとアオイが思った時。斬馬刀を手にしたカタジニとオニマルサザキベにばったり出会った。

ん、と眉根を寄せたカタジニ。落雷に打たれたような顔をしたオニマル。アオイもハツとなった。気附いて慌てて手を離れた。しかしそれが逆に疑問を肯定した。「ほう」カタジニになるほどとばかり磊落な笑みを浮かべた。

「なるほど。そうか。素早いのは剣だけではなかったか」

「え？」

「密会中にちよちよつと蜥人を退治するとは大した奴だ」

「ち、違います。密会なんて」

「隠すな、隠すな」

「か、隠していません。ツキツキを見に行っただけで」

「それを密会という。で、邪魔した蜥人をズバツと斬り殺した。そりゃあ力も入ったろう」

「ち、ちが」どうして黙っているんだ　！　ちゃんと説明してくれ　！　アオイが隣を見ると、ルルは真っ赤になって照れていた。『肯定』『肯定』『肯定』と渦巻いていた。

「残りの蜥人捜しは俺たちに任せて、お前はその子……誰だっけ？　まあよい。廟堂の近所の子だろう。送っていけ」

オニマルサザキベも笑顔で言った。「ルルさんを家までお願いします」。しかし唇の端を引きつらせながら。

その後はカタジニに散々好いようにならかわれ、もはや否定するどころか、どちらかといえは何とかふりはらい、別れ、しかし少しも歩かないうちに出会った二人。丁度辻にさしかかったとき、横の道から飛び出してきた、蜥人捜索中のリリナネとイオワニ。

「あら」と、リリナネ。

「ん」と、訝しげに片方の眉をあげたイオワニ。すぐに間の悪い奴だと同情的な顔に。

「う」良くないことに、まずい　　と思っただアオイ。まずいことに言葉通り顔に出ていた。手はつないでない　　、焦って隣を見たら、袖の後ろをちよんとつまんでいた。

リリナネはすぐに笑顔を浮かべた。随分大人な感じの笑顔だった。「分身術を使う女連れの剣士って聞いてたけど、君だったのね」

「いったい何故そんな言い回しで伝わっているのか教えて欲しかった。それでは意味深だった。何とか説明しようとして、しかしどこ

から説明したらいいのか目を白黒して「えっと、いや」と口ごもっている。

「気を付けて帰ってね」

リリナネは笑顔で言い残し、忙しそうに駆け去った。イオワニが慰めるようにポンと彼の肩を一つ叩いて行った。彼は呆然と、街路の向こうに去っていくその人の背中を見送った。

二十二。「それぞれ」

クムラギの街路を西に東に駆ける武人ら。その中にあり、自分も  
蜥人捜索に駆けながら、しかしオニマルはずっと気が散っていた。  
頭から離れなかった。アオイセナに寄り添うルル。彼には見せたこ  
とのない表情。何度も自分を叱責していた。くそつ、俺はなんて度  
量が狭いんだ。男のくせに嫉妬するなんて。

いや。単に、居合わせただけかもしれない、帰り道が同  
じ方向なので送っていただけなのかも、馬鹿、そんなわけない  
、ツキツキに行ったと言っていた、今日の試合か、く  
そつ、俺は男の腐れだ、もうあきらめろ、交際秒読みと言  
っていたじゃないか、ルルさんが幸せなら、それが一番じゃな  
いか、それを好しと思えないようで、なにが男だ。  
俺は小さい、と自分を責めた。

同じく、クムラギの街路を辻から辻へ駆けるリリナネとイオワニ。

「おい。まあ、そんなに気にするな」後ろから声をかけたイオワニ。

「わっ、私が何を気にしていると言っただ」バツとふり返り、思わ  
ず素の喋り言葉が出たりリリナネ。

「別に交際しているわけじゃないだろう」

「だっ、だからどうしてあの子達が交際していたって私は全っ然気

にしてない」幾分危うい文法で吐き捨てると、話しかけるなとばかり足を速めた。

しょうがない、ほっとくか、イオワニは思った。リリナネがあの青年をどう思っているのか、聞かなくても分かっていた。あの青年が現れる前と今とでは歴然と様子が違う。一言で言えば、女の子になった。カタジニも勿論分かってからかっているし、シユスとアヅも帰ってきて、その変わりように吃驚したはず。

まあ、今まで免疫がなさ過ぎたからな、イオワニは足を止め腕組みをした。眉間に皺を寄せ、困った奴らだとばかり苦笑いを浮かべた。

。 だいたい、矛先はアオイに向いた。あいつは不用心過ぎる。

とは言えだいたい予想は附いていた。断れなかつたんだろうな。  
。 朝酒の酔い残るこめかみを指先で揉みながら、やはり困った奴らだと苦笑いを浮かべた。

半鐘の音が一つ残らず消え去り、程なく伝令が駆けてきた。

「残りの蜥人も退治されたと連絡がありました。イオワニ殿。ご苦労様でした。リリナネ殿には私から伝えておきます」

「そうか。ご苦労。やれやれ……」自分の道場へ足を向けた。

\* \* \*

政治堂で会合のさなか、シユスはその報を聞いた。ふむと笑みを



浮かべた。驚きはしない。ある程度予想していた。しかし、彼も今理解した。フィオラパがその青年に言ったという『図抜けてる』とは、こういうことだったのか、と。

ケイが術者の力を開く。術者がケイに宿る魔力を引き出す。術者の精神が高みにあればあるほど、非凡な結果となる。その時あの若者は、己を無として、そこあった空間、物象、すべてに己を同化させることで、そこに奔ることができたのだ。迸る水流のように。

それにしても。昨日の今日でそれができたか。それは大魔導師シユスにも意外だった。

あの若者には非凡な何かがある。多少無頓着で鈍く見えるところもあるが、それもまた、大成の道を歩んでいる表れ。小賢しい者には望めない。あの若者なら剣士としては勿論、魔導師としても大成できる。いまだかつて、その二つを両立させた者はいない。あの若者に俺の後を託したい。

ふと、顔をあげると、議事が進んでいた。決に至り彼の意見を求められていた。居並ぶ武人や市民代表者らの顔が、彼を見つめている。議事進行役の武人がもう一度繰り返した。

「今後の人選、並びにクムラギの防衛については、各方面からの要望を鑑みて、このような形に。宜しいですか？」

シユスは頷いた。「異存はない」

「うむ。では、明日、タパ様の廟堂の会合にて、本人らの意志を聞き、決定としましょう」

\* \* \*

お似合いじゃないか。廟堂の自分の部屋に戻ってきたリリナは、同じ言葉を何度も頭の中で繰り返した。笑みを浮かべながらお似合いの二人。自分でも、良い感じの笑顔になつていると感じながら。さつきも、ちゃんとこんな感じの笑顔で「気を付けて帰つてね」と言っていたなら、私もなかなか大人じゃないかと思いつから。

だいいち。文机の前に座り、腕組みしてみた。あの子は、自分じゃ憶えていないけれど、どう見ても十八くらい。あの子が十八なら私は五つも年上。相手にしているわけがない。文机に頬杖をついた。自然と失笑が漏れた。自分に。しかしじわつと目に何かが浮かんだ。慌ててこすつてそれもまた笑い飛ばした。馬鹿だな。

だいたい。こう考えるべきだと思った。あの子は観賞用。見て、眺めて楽しむもの。恋愛対象にはならない。相手にとつてそうであるばかりでなく、自分にとつてもそうだと考えた。

私がおつきあいするとすれば。再び腕組みをした。すぐに数人の武人の顔が浮かんだ。どの男も武芸に秀で人柄も善い。なんだ、さすがクムラギだな、ちょっと考えただけで、けっこういるじゃないか。

しかし問題は、その誰にも興味が持てないことだった。

ふん。幾分投げやりに。恋をしなければいけないという決まりはない、そう結論づけようとして。ふと気附いた。

恋、したこと、ない……？

真つ青になり次いで真つ赤になり、額に汗を浮かべながら記憶を辿った。私だつて恋くらい。しかし大魔導師になるべく幼い頃からそれ一筋に歩んできた人生。好きなと思つた同年代の男の子もいたが恋にはならなかった。ずっと好きだつた異性くらいいる。一生懸命頭の中で捜した。シユスは格好良いと思つていた、アツも。しかしそれはどう考えても捜していた答えではなかった。真つ青になった。

まずい。ますますもって好きだと知られるわけにいかない。二十三歳で恋愛経験なしなんて、言つてしまえば初恋つてことじゃないか。もし、私が男でそんな女に好かれたら。重すぎる。どころか。

気持ち悪いと思われるかも。涙ぐんでしまった。

## 二十三・「政治堂の要請」

翌日、会合が行われた。タパの廟堂に集まったのは、ツフガと武人それぞれの代表者ら。シュスロー、アツハナウラ、カタジニ、リリナネ、イオワニの冥界入り五名と並んで、アオイも出席した。対座する武人側は、リケミチモリ、モモナリマソノを筆頭に廉潔な名士が並び、中にオニマルサザキベの姿もあつた。アオイと目が合うと笑みを浮かべ黙礼した。アオイも礼を返した。

まず、議事進行役の武人が現在の情勢、そして今後やるべきことを訥訥と話した。話しぶりからして、話す内容ははじめから決まっているようだった。

「かねてより蜥人南下の噂がありました」と始め、昨日の襲撃でそれが事実と判明したこと、斥候であつた可能性もあるが、暗殺が目的であつた可能性も否定できないこと、などに触れた。「暗殺目的とすれば、狙いは扉の神召還呪を唱える者、ないし、召還呪を調合できる者、と考えるのが自然。蜥人は小鬼族と違い知能高く、悪龍の意を解しやすいうえその思うままかよいいたるはず。扉の神召喚を阻まんとしてその主な人物を狙つたのかも知れません」

「されど」一人が口を挟んだ。「シュス殿はまもなく最後の呪文材料得るため出立の予定」

議事進行役の武人は頷いて続けた。「ゆえに事態を案ふて、我らより二十名、護衛に附けたいと思ひますが、シュス殿、いかがですか？」

シユスは頷いた。「ありがたく」

アオイの見る限り何もかも形式的で、誰がいつどう話すか、あらかじめ決まっているとしか思えなかった。

議事進行役の武人は続けた。「しかし此処クムラギも努々油断できぬ情勢。調査者であるタパ様を狙つての襲撃あるやも知れませんが、なくとも、先日のような大規模な侵攻を警戒せねばなりません。クムラギ防衛のため、ツフガ側から二名の人員をお借りしたい。いかがでしょうか？」

タパが頷き、シユスをふり返り訊いた。「善いかな？」

シユスは頷き答えた。「かまいません」

何処までも儀礼的でお芝居のようなやりとりを経て、進行役の武人は言った。

「では。クムラギ議会の要請をお伝えします。商工農武人全代表の意見が一致しました。二名のうち一名は、シユス殿もしくはリリナネ殿のどちらかに残っていただきたく、政治堂を代表して、ねもころ懇勲ねもころにお願い申し上げます」

アオイの見る限り、この部分の返答だけお芝居ではなく、今、この場で決める事柄みただった。腕組みしているシユス。返答をためらっているリリナネ。二人の返事を待っている武人ら。

進行役の武人が言った。「プレルツを使えるのはお二人のみ。今回求める呪文材料は千年星と呼ばれる隕石の欠片。昔蜥蜴の巣窟である森を越え、蛇頭族の守っているそれを奪わねばなりません。不

衛生かつ疫病蚊の蔓延する森を越える旅は、女性の身には厳しいのではないかと憂いております。無論、リリナネ殿の天骨つまねながらのひとり、武勇、克己心、男になんら劣らずと存じておりますが、なほし我らの希望も、リリナネ殿、貴女に残っていただきたいと願う者が多く」

モモナリマソノが柔和な笑みを含み、口を添えた。「リリナネ殿。いかがかな？」

リリナネは会合が始まる前からずっと考えていた。今日は当然この話になると。順当に考えれば、今、進行役が言ったとおり。シユスが出立し自分が残るのが筋。そしてそれは彼女にとっても都合良い話だった。シユスはアオイに目をかけている。分かる。きつと連れて行くつもりに違いない。昨日の会合でその話をしたはず。このあと、アオイの気持ちを聞いて決定。アオイにしても、クムラギを出て他の町々を訪れれば記憶が戻るきつかけになるかも知れない。きつと、行くと答える。何ヶ月か顔を合わさなければ、その間に気持ちの整理ができる。アオイが帰ってきたときには、ちゃんと大人として接することができる。余計なあれやこれやでぐちゃぐちゃになった自分ではなく。答えは考えるまでもなかった。考えるまでもない答えを躊躇したのは、やはり心の奥底にいたから。離れたくないと思っっている未練たらしい自分が。

「残ります」自分でも不思議に感じたが、そう答えるとふつきれた気がした。これで良いと思っただ。幾分寂しく感じながらも。

武人らは皆、一様にホツとした笑みを浮かべ黙礼した。進行役が代表してお礼を言った。「ご決断感謝します。では、よろしくお願います」。武人らが全員頭を下げた。リリナネは返し、「こちらこそ。謹んでお受けいたします」と答えた。

進行役は話を進めた。「礼みやにそうお返事ありがとうございます。  
では次に、今お一方。これも政治堂全代表一致でこの方に残ってい  
ただきたいと即決しました。その方とは、アオイセナ殿」

「へっ」

素っ頓狂に小さな声を上げたりリリナネ。アオイが見ると真っ赤に  
なって焦っていた。バツとシユスの顔を見て、しかしシユスが不  
思議そうな顔で見返すと、顔を戻し下を向いてしきりに首をひねり。

「アオイ殿。いかがかな？」リケミチモリがいつものにこやかな笑  
顔で、返事を促した。

アオイも思わず笑みが浮かんだ。本意だった。拳を床について頭  
を下げ答えた。どう答えたらいいかも分かっていた。

「謹んで。努めます」

かよいいたる〓自由自在になる

案ふて（かむがふて）〓鑑みて・案じてに同じ

ねもころ（慇懃）〓心より・心をこめて

なほし〓それでもやはり

礼みや〓礼儀・作法

二十四・「ちぎれ雲」

シユスらの出立は明後日と決まり、慌ただしく準備が為された。その間アオイはどちらかと言えば蚊帳の外だった。来客の増えた夕帕の廟堂で、ユタを手伝って料理の支度や掃除をした。忙しい時間の合間を縫ってイオワニの道場へ行くと、こう言われた。

「俺が留守の間、一番弟子に道場を任せる。稽古に来いよ」

「誰ですか？」アオイが問い返すと、

「楽しみにしとけ」イオワニはニヤツと笑った。

その翌日の早朝。

朝の静かな時間に黙想するためマアシナの部屋へ行くと、リリナネがいた。座って目を閉じて。人の気配に顔をあげ、アオイを見て少し慌てた顔をしたが、すぐに大人っぽい微笑みを浮かべて言った。

「おはよう。朝早くから偉いのね」

「リリナネさんも。早いですね」

アオイは答えながら、誤解を解くいい機会だと思った。あれ以来まともに話す機会がなかった。

が、「私はもう済んだところなの。じゃあ」と、立ち上がりかけたリリナネ。



アオイは慌てて言った。

「あの……少しお話ししませんか？」

「え……いいけど……」

リリナネは困惑気味に答え、座り直した。

アオイは敷物を敷いて隣に座った。「ええつと……」。咄嗟にお話ししませんかと言ったものの、何処から話したらいいのか分からない。『ルル・オシヌミさんとはただの友達です』と切り出すのは、どう考えても変だった。ツキツキ辺りから話するのが適当だと思った。

「ツキツキって楽しいですね」

そう言われて女性が思うことは、『そんなに楽しかったのね』が普通。リリナネもそう思った。

「そうね」

気のない返事が返ってきて、アオイは何となく口ごもった。失速した。

「はい。……誘われて何となく行ってみたんですが……、楽しかったです」言いながら、これじゃあ遠回しすぎると感じた。「えつと、その……」ルルオシヌミには申し訳ないが正直に話してしまおうと思っ

「交際を申し込まれて……友達ならいいですよと答えたんですが」

「え？」

「変に期待させるような感じでまずかったですでしょうか？」恋愛相談、これだ、と閃いた。

リリナネはにこっと笑った。恋愛相談、彼女もそう受け取った。

「そうね。やっぱり期待しちゃうと思うわ」

「そうですか……」

「お付き合いしてあげたらいいじゃない」笑みを浮かべてリリナネは言った。

アオイは少なからず感じた。まったく脈がないみたいだな、と。

「いえ……そういうわけには……」

「どうして？他に好きな人がいるの？」

それはジャブだった。とんできたジャブに、アオイはそれとは気附かず、カウンターを当てた。

「はい」

「あら」紅鳶の眸が快活に見開かれた。興味津々に。「誰かしら？」

リリナネは初心者だった。もしもアオイに幾ばくかの経験があれば、KOパンチが放てたところだったが、アオイも初心者だった。そのうえ記憶もなかった。

「いえ……」目をそらした。言えるわけがないと思った。



その日の昼過ぎ。

胸服を注文した染め屋からおつかいが来た。見習いの少年は言った。

「絵師のキコ・ナカハ様が、ご相談したいことがあるので一度おいでてください、とのことですよ」

「そう。何だろう……？」

用事で近くに寄ったときでかまわないそうです、とも少年は言った。が、アオイは「今から行くよ」と答え、支度して出た。道は憶えていたが、少年と一緒に染め屋に向かった。歩きながら少年は言った。

「図柄のことだそうです」

「へえ……」

絵師キコ・ナカハの仕事場は、染め屋の大きな建物の裏側の母屋にあった。板の間に文机、壁一面に引き出し。引き出しの中はすべて絵が入っているらしく、開いた引き出しから線画がのぞいていた。床の上にも図案が散らばっていた。

絵師は文机に向かっていた。四十代半ば。注文したとき、「そりゃあ格好いいじゃないか」と言った痩せたおじさんだった。アオイが入ってくると顔をあげた。

「おう。すまねえな」気さくに言った。

「いえ」

毛皮の敷物をすすめられ、アオイは座った。少年がお茶を持って来た。絵師キコ・ナカハは一枚の布見本をアオイの前に置いた。

「こういう柄は見たことあるかい？」

それはとても細かで瀟洒な蔓草の図柄だった。

「はい。これって……」確かあれだよな、言葉を探していると。

「蔓花模様だ」キコ・ナカハは言った。

「そうですね……」アオイの頭に浮かんだ言葉は『サラサ（更紗）』だった。また記憶違いだと彼は思った。

キコ・ナカハは説明を続けた。「兄ちゃんの注文の絵を描いてみたんだが」一枚の絵を引き出しから出して、アオイに渡した。

一見して、アオイは思わず呟いた。

「すごい……」

線だけで色は着けられていないが、見事な獅子の絵。彼の注文したとおり、蛇を踏みつけている。蛇は踏みつけられて首を振っている。彼が臍に思い描いていたものより、数段迫力あった。

「背景に何を描こうか迷っちゃってな……」絵師は言った。「で、この蔓花模様を組み合わせてな……、蔓模様を引き裂いて獅子と

蛇が現れている感じにしようかと」

「お任せします」

「そうか」絵師は笑った。「下書きを見てからじゃなくていいの？」

「はい」アオイは思い出していた。夢の中の老人と女性の会話を。  
「お任せした方が、格好良くなると思いますから」

「そうか」絵師はさらに愉快げに笑った。そして真面目な顔に戻り言った。「俺たちは大抵注文されたとおりに絵を描く。絵描きじゃなくて職人だからな。でも、たまあに、どうしてもこう描いてみたかって絵がある。職人だからって、絵心がないわけじゃないからな。そもそも絵心がなけりゃあ、こんな仕事に就かねえ」最後はまた愉快げに笑った。

アオイも笑顔を返した。打ち解けた雰囲気になったので、最前頭に浮かんだ疑問を訊いてみた。世間話のつもりで。「こういう柄って」蔓模様を指した。「サラサって言いませんか？」

キコ・ナカハは目を丸くした。何か変なことを言ったかと、逆にアオイが戸惑うほど。

「兄ちゃん。サラサなんて言葉を誰から聞いた？」

「いや……。誰からも……」

絵師は腕組みして考え込んだ。眉根を寄せて難しい顔で。アオイが待っていると、気附いて話してくれた。吃驚するような話を。

「今から二百年も前のことだ。一人の旅人がふらつと現れて、染めの世界の歴史を変えた。それがこのナカ八屋中興の祖、キスケさんだ。兄ちゃんと同じく、記憶がなかった。が、腕は凄腕だった。しかも人が思い付かないようなことを次々やってのけた。糊糸目つて技法を考えついたのも彼だ。兄ちゃんが夏用に注文した胴服の色、御納戸茶つて色の染め方を考えついたのも彼だ。彼が考案した染め色は数え切れないほどある。そのキスケさんが、こんな柄の綿の布をサラサって呼んでたそうさ。コエをコイと呼び、ツバク口をツバメと呼んでいたという」

「そ、その人……」アオイは心底吃驚していた。「その人は俺の住んでいた町の人……」

「かもしんねえな」

「その人は何処から来たんですか？ 一生記憶が戻らなかったのですか？」

「いや。爺さんになる頃にはどうやら思い出していたみたいなんだがな。誰に聞かれてもニヤニヤ笑うばかりで、誰にも教えなかったそうさ」

「どうして……」

キコは首をひねり「さあな」と答えた。「ただ、死ぬ前に手紙を残したらしい」

「手紙？」

「その手紙つてのが、誰にも読めない字で書いてあったって言うから不思議な話じゃないか」

「それ」どういうことだと思った。まさかひよつとして。俺は字を忘れていたんじゃないかと、もともと知らなかったのか。その手紙は……今は何処に？」

キコは首をふった。「五十年くらいはこの家にあつたらしいが、火事で焼けちまつたんだと」

もしも残っていれば、俺はその手紙の文字を読めたかも知れない。あきらめがつかない顔で黙り込んだアオイに、絵師は言った。

「兄ちゃんなら読めたかも知れねえな。いったい何が書いてあつたんだろうな」

染め屋を出たアオイは、ずっと考えながら歩いた。腕組みをして、地面を見つめ。その人は俺と同じ町に住んでいた。何か伝えたくて、手紙を残した。同郷の者に。ふと気附いた。足が止まった。視界がかすんだ。目に見える物象の奥に、まったく違う何かが見えた気がした。

同じ言葉を使っているのに、文字が違うなんてあり得るか？

そんな馬鹿な話があるわけなかった。

戸惑い、答えを求めて、知らず空を見上げた。が、そこには、ただ何処までも青い空が広がっているだけだった。日差しは、すでに



初夏の兆しを含み眩い。

俺は、いったい何処から来た　。

ちぎれ雲が、ぽつんと一つ、はぐれ、ゆっくり流れていた。

## 第二章 完

## L i t o 2 4 5 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

第二章がおよそ五十話近くにもふくれあがり、書いた当人も吃驚しています。何とか収集がついてホッとしました。

あまりにくだい内容に、途中辟易とされた方もいらっしやったのではないかと思えます(笑)。ここまで読んでくださった方には、本当に感謝しています。

ここで一息入れて、予定になかったのに起こったこと、説明過多となった箇所などを頭の中でよくよく整理してから、第三章の詳細を練りたいと思います。

多分、読み返したら書き直したい処ばかりだと思いますが(笑)。誤字も沢山あると思います。誤字については勿論訂正したいと思っています。が、穴が空くほど読み返しても気附かないのがいつもの事、なので、結局気附かないかも知れませんが……(笑)。

しばらくお時間を頂き、第三章が固まりましたら、連載再開します。

22/10/1

第三章かたまりましたら、などと思っていました。が、とりあえず、書き終えている処まで掲載します。

詳細のぐたくたはブログに……。



## 第三章クムラギ

## 一・「盛夏」

盛夏、である。廟堂の人々の上衣は麻素材の白無地。夏の装い。アオイも白い上衣を着ている。下衣はくすんだ青や緑色を合わせている。見るからに涼しげな装いだが、アオイは感じていた。

何か無かったか？

真夏に暑いに任せて打つ手無し、ではなかったような気がした。窓辺で腕組みして考えていると、ユタが庭に打ち水をしていた。これかな？とも思ったが、これではないような気もした。

しかし朧な記憶の夏の暑さに比べて、ずっと過ごしやすい暑さだった。ムツと立ちこめる溼んだ熱気、というものは全くなく、廟堂の何処にいても、あるいは道を歩いていても、風が心地よく吹き抜けて過ごし良い。クムラギの街路は大抵硬い土の道なので、打ち水をするるとひんやりした冷気が立ちのぼる。粹だなあ、と感じた。

しかし閉口していることもある。夏用の胸服が仕上がってきていた。夏用とは言え、羽織ると暑い。当然のことながら。なるべくなら着たくないが、着ずに外出しようとするユタがうるさかった。

「アオイさま。立派な武人の方は、どんなに暑くても胸服を羽織られますよ」

「そう……」

あきらめて羽織ると、ユタはアオイのその姿をいつも満足げに眺めた。アオイが立派な武人のいでたちをしていることが自慢で仕方ないらしい。

注文では御納戸茶というくすんだ暗い青色単色のはずだったが、仕立屋が気を利かせて腰変わりの生地で仕立ててくれていた。つまり、腰から下が黒。そして、背中には注文通りのムカデの刺繍。いかにも武人好みの勇ましい図柄。羽織ると、アオイもすっかり、剛健、颯爽とした武人姿となる。

が、彼は正確には武人ではない。ツフガ側の人間。ツフガ側とははつきりしているものの、魔導師に弟子入りしているわけでも巫術師に弟子入りしているわけでもない。その身分はお廟のお手伝いの子供と同じ。形式だけ弟子になればいい、と、そんな話があればありがたいが、そんな例外的な事柄が簡単に通るほど緩いしきりではないらしい。以前タパからあった話は、正式に弟子入りして巫術師の修行をする、という話だった。巫術に興味はあったが、現状は魔導師と剣術家だけで手一杯。

打ち水を済ませたユタに、アオイは言った。窓から声をかけた。

「何かあったんだけどな……」

「何がですか？」

小首を傾げて問い返すユタに、アオイも首を捻りながら答えた。

「うん。もつと涼しくなる方法……」

「へえ。どうするんですか？」

アオイは人差し指を額にあてて考え考え答えた。

「ええつと……。先ず窓を全部閉めて……」

「え？ 窓を閉めるんですか？」

「うん。そう」

半信半疑、というよりもあきらかに疑いの眼差しを向けてユタは立ち去った。廟堂の入り口から入ってきてアオイのいる部屋まで来て、バタバタと木窓を閉じた。「で？ どうするんですか？」

アオイははたと困惑した。「何か、あつただけどな……ちつちやな白い棒みたいな奴……」

風が遮られムツと空気が立ちこめ、二人とも汗ばんだ。ユタは口を尖らせて言った。

「滅茶苦茶暑いですけど」

「そうだな……。窓、開けようか……」

彼、アオイセナが巫術師タパの廟堂に逗留して二ヶ月。今では、ここクムラギに、彼の名を知らない者はいない。あれからさらに二度、小規模な襲撃があり、そこでも彼は活躍し、名を馳せた。

円を基本としたその剣技、回転殺法、人々はそれを揶揄して「アオイセナの背中を見た者は次の瞬間には死んでいる」と噂した。ツバク口殿というあだ名でもよく呼ばれた。

そして本当にごく少数だが、彼が始めの頃やった失敗を知っていて、なおかつ彼をからかいたい者は、あの話をした。美貌の剣士が真っ赤になって困惑する様を楽しんだ。あれ以来、アオイは、どんなに混雑していても、湯船の真ん中に入るようにしている。

## 2・「孤児院」

少女の父が交通事故で帰らぬ人となって、二ヶ月が過ぎた。

今、少女は施設にいる。

始めは親戚の家に引き取られたが、そこで問題を起こし、結局ここに來ることになった。

けれどここにも親戚の家同様、意地の悪い子がいて、いつも争いになった。勿論、優しい大人の人もいるが、今では彼女も理解している。自分のことは自分で護らなければいけないこと。大人の味方は役に立たない。一度負けたら、終わり。

意地悪な子達と、口汚くやり合いながら、けれど彼女は思っていた。いつも。

パパ、お願い。私を迎えに来て。私をこの嫌な世界から連れ出して。お父さんの処に行きたいよう。





三・「鬼津靴」

革職人のヒワマナカからおつかいが来た。ようやく、注文した靴ができた、ということだった。

当初、二十日で作ってやると言っていたのだが、期日を過ぎても、何度たずねても、難しい顔でもうしばらく待て、と繰り返すばかりで、いつ出来るのか見当もつかない状態だった。それがようやく出来たという。

「御覧頂く前に」包みをとかず、おつかいの少年は言った。「お伝えせねばならないことがあります」

「何？」多少仰々しい物言いを、幾分訝しく思いながら問い返したアオイ。隣のユタも不審そうな顔付きだった。

「靴底の素材ですが、アレは勘弁しろと、おっしゃってました」

「へえ……」と答えつつ、アオイは隣のユタの顔を見て訊いた。「アレって素材は何だっけ？」

「さあ……僕は知りませんが……」ユタは訊かれて戸惑っていた。

おつかいの少年は言った。

「アレは、西方の泥棒靴の靴底と同じです」

「え？ 泥棒靴？」

「はい」物知り顔で少年は答えた。けれど詳しくは知らないようだった。「私は見たことありませんが」とことわって言った。「歩いても足音がしないことから泥棒靴と言われているのです」

「へえ……」俺はもしかして泥棒だったのか、とは思わなかったが、幾分吃驚な豆知識だった。

ユタが隣から口を挟んだ。こちら物知り顔で。

「この地方でも、兵靴へいかを履かず、皮のしとっずだけ履くことを、泥棒履きと言います」

「え、そうなのか？」吃驚して問い返したアオイ。

アオイもすでに理解している。この地方の履き物の感覚を。絹のしとっずは靴ではなく靴の内履きだが、皮のしとっずは『靴』なのだ。兵靴は着脱式の靴底、という感覚である。しかしそれは理解していても、今ユタが言った話ははじめて聞く話だった。

ユタは得たりと答えた。

「だから誰もしてないでしょ？ 行儀の悪い履き方です。アオイさまはしょっちゅう裸足に兵靴だけっかけたりしていますが、あれもお行儀が」

旗色が悪くなったのでアオイは話を戻した。おつかいの少年に訊いた。

「じゃあ、靴底はどうしたの？」

「兵靴と同じ革の靴底です。兵靴と同じく鋏を打っています」

そう言っつてようやく少年は、アオイの前にスツと包みを差し出した。アオイが布の結び目をほどくと中から現れたのは。

「へえ。これ、すごい……」

思わず呟いたアオイ。隣のユタも目を輝かせた。

それは、毛皮のオニツカだった。つま先、足の甲部分が黒いなめし革で、横、踝部分が、輝くように白い毛皮。

「やばいね」

「やばい？」

「何かまずいのですか？」

キョトンとした二人の少年。

「いや。その……激ヤバ……？」

ますますキョトンとした二人の少年。

「いや……いい。しぶいって言いたかっただけだ」

あきらめてそう言っつと、通じた。「ああ。しぶい、ですね」。得心がいった様子のクムラギの少年たち。アオイはふと思っつて訊いた。

「超シブっつて言っつ？」

少年二人は首をふつた。困惑気味に。首を傾げつつ。

三人は廟堂入り口の上がりかまちに腰掛けて話していたのだが、そこへリリナネが外から入っつてきた。靴を目にして言っつた。

「あら。いいじゃない。出来たのね」

アオイが答える前に、ユタが得意げに答えた。「良いでしょう。今届いたばかりなのです」。アオイはユタの言葉に合わせて頷いただけだった。

「へえ。私もこんな靴が欲しいわ。半靴ほんかよりずっと素敵」気に入った様子のリリナネに、

「お店にいらしてください」おつかいの少年は言った。

「この靴は売れそうなので大量に作る用意をしています」

「え、そうなのか？」吃驚してアオイが問うと、

「はい。実は政治堂からすでに大量注文も受けてあります」少年は平然と答えた。

「履きやすく動きやすく、戦靴せんかにぴったりですから。名前もアオイ様からお聞きした鬼津靴おにつかという名で売るそうです」

「え、鬼塚オニツカで？」

「はい」

「へえ……」

リリナネがにっこり微笑んで言った。

「じゃあ、私も一つ注文しようかしら。鬼津靴を」



## 四・存在しない町

ヒワマナカは商売上手だった。商売上手と言うよりも、愛想のわりにちゃっかりがめつかった。請求明細を見たら、はじめに貰った兵靴・皮のしとうず・絹のしとうず二足の値段も入っていた。くれたものとはかり思っていた。しかも、オニツカの値段は一般的な靴、半靴の二倍もした。

「あら。随分高いのね」隣から明細をのぞき込んでリリナネが言った。

少年は平然と答えた。「縫製が大変ですから」

「それに、名士の方は皆さん、履き物に一番お金をかけてらっしゃいますよ」

この子も立派に商売人だと、アオイは感じた。「まあ、そうね……」と、リリナネも口を引っ込めた。

「では、この明細をリケミチモリ様にお渡ししていただけますか？」という少年に、

「いや。俺が払うよ」とアオイは答えた。財布を出して支払いをした。

そのお金は、リケミチモリから毎月もらえるモノ。ただし、彼、アオイセナ本人が真っ当に稼いだ、彼本人のお金。

そのきっかけはあのビドリオ（西域のガラス製品）だった。ある日、リケミチモリが持って来た足附きのそれを見て、アオイは言った。その時頭に浮かんだままの言葉を。

「綺麗なセレ赤ですね」

「は？」とリケミチモリは問い返した。「今、何と？」

「いや……」また何か変なことを言ったか、戸惑いながらアオイは答えた。「セレ……赤じゃないのですか？」

リケミチモリは真剣な顔だった。「セレとは？」

「いや……セレンで発色させるんですよ」

自信なさげに言ったアオイの言葉に、リケミチモリは目を丸くした。そして笑い飛ばした。

「セレン！ あれは、毒物で」

「え？ 毒なんですか？」

しかしアオイが問い返した言葉をリケミチモリは無視した。その時には真剣な顔に戻り何事か考えていた。「むむ……」と何度も唸り。そしてバツと立ち上がり「今日はこれにて失礼」と言い残し、バタバタと帰って行った。

五日ほどのちに、にこにこ笑顔でやって来た。そしてすっかり話してくれた。

これまで、クムラギの硝子には、金で発色させるすおう赤しかなかったこと。西方のビドリオにある鮮やかな赤色は配合が秘密とされていて真似できなかったこと。それがやっと分かったこと。そしてアオイに礼を言い、大金を渡した。さらに。

「毎月の売り上げの割を、アオイ殿が当然受け取るべき金額としましょう」赤色の硝子が売れたらその割がアオイの取り分となることを約束した。

おかげでアオイは、身の回りの細々したモノを買いそろえることができ、ユタを連れてバルにお茶を飲みに出かけたり、ユタとリュウ少年を連れてバルに軽い食事に出かけたり、ルルオシヌミと芝居見物の帰りにバルでお茶を飲んだりできるようになった。

他には使い道がなかった。何かあったような気がしたが、ここには見あたらなかった。色んな商店をながめてもピンとくる物がない酒も飲まない。俺は、何にお金を使っていたのか。今では思い出せない。お金が足りないと思った記憶、もつとお金があればと思つた記憶、『ああ。金がねえ』と腹立たしくさえ感じた記憶は確かにあるのに、何にお金を使っていたのか思い出せなかった。今では余って仕方ない。

そして。

俺の故郷は西方に近い町、との思いを深めた。おそらく、<sup>くわんがく</sup>国境あたりだろう、と。このこと同じ言葉を話し、けれど違う文字を使い、泥棒靴を履き、ビドリオが訛ってビードロと呼び、西方では秘密である調査を誰もが公然と知っていて略語で口にする町。

ユタに訊いたら「そんな町があるはずありません」と返ってきた。腑に落ちず他の人に訊いても、「そんな町はきいたことがねえなあ」



「きいたことないです」「知りません」と、しめしあわせたように  
同じ答えだった。

五・「延命術の妖婆」

ヒワマナカのおつかいが帰った後も、玄関口で話し込んでいた三人。

「早速その靴を履いていく？」リリナネはアオイに訊いた。

今日はニシ・ヌタお婆さんの廟堂へ行くことになっていた。一度おいでなさいと言われていたものの、ずっと、先方のニシお婆さんの体調が悪くて行けなかった。最近ようやく具合が良くなったらしい。リリナネと一緒に行ってくれる。

「いえ」とアオイは答えた。「何だか履くと汚れそうで……どのみち汚れるんでしょうけど」履いて土埃などで汚すのが勿体ないくらい、綺麗な純白の靴だった。

「これ、何の毛皮ですか？」

「これはきつと大神よ」

「狼？」

「そう。大神」

後日、アオイが見たオオカミは、毛の生えた大きな蜥蜴だった。がに股の足がひよる長く、首がひよる長く、口が裂けていた。遊牧民が乗り物にしていた。

いつもの如く裸足に兵靴をつっかけて、軽く紐を結わえて出かけた。ようとしたアオイ。すぐさま咎められた。

「アオイさま。それはお行儀が悪いと、さっき言ったばかりですけど」

渋々、アオイはいったん自分の部屋に戻り、しとうずを重ね履きして、怒られないようにちゃんとムカデの胴服も羽織り、玄関に戻った。薄手の麻の胴服は、毎晩ユタが布団の下で寝押しして、折り目がビシツとしている。戻ってきたアオイを見て、ユタは満足げだった。

「お待たせして済みません」

アオイは、待っていてくれたリリナネに詫びた。

「いいのよ」とリリナネは答え、「じゃあ、行きましょう」と促して先に立った。

にこにこ顔のユタに見送られ、二人は廟堂をあとにした。

まばゆい夏の日差し。まばらに人馬が行き交うクムラギの街路。心地よい風が吹き抜けている。晴天の空に入道雲。二人は歩きながら話した。色々なことを。

「オニマル君との勝負は最近どうなの？」と訊かれ、  
「相変わらず、五分五分です。どちらかと言えば四分六分くらいで俺が負けます」とアオイは答えた。

イオワニが、留守の間道場を任せると言っていた一番弟子、それはオニマルサザキべだった。蠻族相手にはどれほどの群れでも負け

ないアオイだが、剣巧者の人間相手には苦戦した。オニマルは、向き合ってイオワニほどの威圧感はないが、それでも踏み込めない。誘っても誘い込まれない。仕掛けて惑わし、運が良ければ一本取れる、悪ければ逆に取られる、そんな感じ。

「頑張つてね。今日も稽古に行くんでしょ」

「はい」

「男の子同士の友情っていいわよね。憧れちゃうわ」

「そうですか？」

「そうよ。君たち二人は仲がいいもの。並んで歩いている姿を見て、女の子達が何て噂してるか知ってる？」

「え、何て？」

リリナネは悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。人差し指で彼を指し。

「どっちがクムラギで一番好い男か？」

「え、……」返答に困ったアオイ。思わず目をそらし口ごもった。

「それは、あいつに決まっています」と答えた。答えてから、今の返事じゃ俺もいい男って自認したことになるな、まずかったかな、自問した。

リリナネは微笑んで言った。

「本当に仲がいいのねえ」

仲がいいとは、アオイ本人も思っている。オニマルとは親友だとけれど。何かそこに在った。何だか分からないものが一枚、よそよそしく挟まっている。何か分からないものは何か分からないものであり、アオイにはそれが何か分からなかった。

ニシ又タお婆さんの廟堂につくと、お弟子さんが大きな部屋に通してくれた。そこはタパの廟堂にあるマアシナの部屋に似ていたが、神像はなかった。祭壇には小さな金ぴかの社があり、その中には何も無い。『無』が祀られていた。

その祭壇をはじめて目にしたアオイ。リリナネが教えてくれた。

「ラアテアの祭壇よ」

「へえ……」

なるほど、とアオイは少し感心した。リリナネはこれから会う人について説明した。

「聞いてると思うけど、ニシお婆さんは千里眼だからね」

「はい。聞いてます」

アオイも噂で聞いていた。聖女マナハナウラが誕生したときも、夢にマアシナが出てきたと言い、また、マナハナウラが冥界入りしたあとも、マナハナウラが夢枕に立ち、子供の誕生を知らせたという。

「アオイの故郷のことか教えてくれるかも」

「はい。実は少し期待してます」

「これも聞いてると思うけど、ニシお婆さんは百三十四歳だからね」  
「え!？」アオイは驚いた。「それは聞いてないです」しかし聞いてないことに驚いたのではなく、勿論年齢に驚いた。それは随分長生きに思えた。自分の常識がおかしいのかと思った。

「それって普通ですか？」

「普通なわけじゃない。延命術を使ってるのよ」

「延命術？ 長生きの魔法ですか」

部屋には彼ら二人しかいないのに、小声で話す二人。

「延命術を使っているのはとても重要な人だけ。その知識を後生に伝える必要のある巫術師とか、ね。政治堂とツフガ合議の許可が必要なの。でも、大抵誰もやりたがらないわ。呪文材料集めが滅茶苦茶大変だし、すごい苦痛らしいの」

「苦痛って？」

「体中の骨がバラバラになりそうに痛むんだって。術を唱えたときだけじゃなくて、何週間もよ。人間は天寿をまっとうするのが一番」

「そうですね……」

案内の少年が現れ、「お婆さまのご用意ができましたのでお通しします」と言った。案内された先がニシお婆さんの部屋だった。

お婆さんのいる場所は一段高くなっている。そこに大きめの毛皮の敷物を敷いて、そのうえに随分小さいお婆さんが、随分沢山着物を着込んで座っていた。頭巾の下にのぞいている小さな顔はしわくちゃで、目が何処か分からなかった。

お婆さんと向かい合わせに、敷物が二枚、並べて用意してあった。アオイとリリナネはそこに座った。案内の少年が下がり、別の少年がお茶を持って来た。

お婆さんが口を開いた。アオイの見た感じでそのまま表現すると、皺の一つが開いて声を発し、そこが口だと分かった。

「よう来たの。リリナネもご苦労」

「お元気そうで何よりです」

リリナネはにこやかに微笑んで軽く会釈した。

そのリリナネに笑って（皺を曲げて）頷いてみせ、お婆さんはアオイに目を（皺を）向けた。皺が開いて茶色い眼球がちらりとのぞいた。

「アオイセナかい？」

「はい。本日はお招きに預かり光栄に存じます」と、頭を深く下げた。アオイもこういった場合の儀礼的な常套句を、武人らしく身につけている。「ご尊顔を拝し」と続けたアオイに、

「よいよい」とお婆さんは言った。「堅苦しい挨拶は抜きじゃ。記憶がないと聞いておる。困っておろう？」

「はい」

アオイは頭を下げた。やっぱりその話か、と思い。ひよっとしてすでに全部知っていて、俺が何処から来たのか教える為に呼んだの

か、と。

お婆さんは言った。

「顔をあげてワシにようと顔を見せなさい」

「はい」アオイは言われたとおりにした。背筋を伸ばして姿勢を正した。

お婆さんは暫くの間じつとアオイの顔を見て、そして言った。

「ふむ。ちつとも見えん」

「え？」

「ワシにちつとも見えんということは、おぬしはちつとも見えん場所から来たということじゃ」

「はあ……」なるほど、と、得心がいくような、いかないような、だった。

「それよりも」とお婆さんは続けた。

「見えたぞ。おぬしの大望」

「え？」

「野心というべきか」

「本当に？」

アオイは目をまん丸く見開いて焦った。野心と言われて思い当た



ることと言えば、あれ以来誰にも話していないこと、聖女マナハナウラを冥界から連れ帰るといふ、そのことしかない。そしてそれは、あまり人に知られたくないことだった。それは人々から見れば、大それた考え。

お婆さんは笑った。しわくちやの口を曲げて。

「まあ、よい。心優しき故じゃ。それより、未来も見えた。聞きたいか？」

「え……」

正直、アオイは面食らった。巫術師がこの歳になると人よりも神に近い存在なのか。このお婆さんが見えたと言うなら、本当に未来が見えたのだろう。それを聞きたいかと問われて、聞きたいと答えるのは勇気がいった。しかし。

「はい。勿論」と、答えた。

お婆さんはかんらんかんらと笑った。そして皺（目）を曲げた。少し悲しげに見えた。寂しげにも。

「人がおのれの未来を知ってしまうことは良いことではない。そうじゃな……。こう言っておこう。おぬしの望むこと。一つ叶い、一つ失う。全て失い、そして最後には全て得る」

アオイは黙って考えた。謎々のような言葉の意味を。一つ叶い、とは、冥界入りの人員に選ばれるということだろうか、なら、一つ失うとは、聖女を連れ帰れないということか、色々考えてみたが、それだけの言葉では何も判断できなかった。

リリナネが心持ち肩を寄せて、小声でささやいた。  
「良いお告げじゃない。最後には全て得るんだから」

「そうですね」「アオイが顔を向けると、  
「そうよ」「リリナネはにこっと笑った。

お婆さんは最後に、アオイとリリナネに、等分に目をやりながら  
こう言った。

「強くあれ。何事があるうとも。闇に負けてはならぬ」

「はい」二人は頭を下げた。

## 六・「木剣勝負」

ニシ又タお婆さんの廟堂を辞したアオイは、リリナネとバルで軽い食事をして、タパの廟堂へ戻った。その後、ユタとリュウとともに、イオワニの道場へ稽古に出かけた。

最近ユタも木剣を握る。アオイに手合わせしてもらいたい一心で、けれど本物の剣はまだ無理のようだった。アオイは本人が持たせて欲しいと言つまで何も言わないつもりでいる。

道場ではオニマルが少年たちに稽古をつけていた。アオイが入つてくると、木剣をおろした。「おう」とお互い挨拶をした。少年たちがサツと退いて、一人が外へ駆けて行った。オニマルは笑いながら言った。

「体をほぐせ。皆待っている」

「うん」

アオイは軽く返事をして、屈伸をし、臄をのばし、肩を廻した。

ユタが木剣を持ってきて手渡した。粉をかけて呪文を唱え、小声で言った。

「今日はアオイさまが勝つに決まっています」

アオイは笑つて頷いた。

知らせに駆けた少年が戻り、見物人が集まってきた。この道場の見物、アオイセナとオニマルサザキベの木剣勝負を見物に。毎回お金を賭けているらしい近所のおじさんや、きゃっきゃっ騒ぐ若い女

の子たち。

アオイは木剣を手に、道場の中央でオニマルと向き合った。

「騒々しいのはいやだな」真面目な顔でオニマルが言った。

「うん。照れる」

笑みを交わした。が、すぐにお互い真剣な表情となった。無言で互いに交わした。今日は俺が勝つ。

間に立った少年が合図をしてサツと退いた。一瞬で緊迫した空気が凍り付いた。オニマルは正眼、両手で構え、アオイは片手、左半身互いにピクリとも動かない。

アオイは知っている。待っていても隙が生じないことを。かき乱すしか手はない。スツと左足を出し、引き、しかし微動だにしないオニマルを見て、さらに誘うべく横方向へ……。

アオイは本人も気附いていない。と言うより、知りようがない。彼の剣術が吸収した動きはカポエイラだけではない、が、それが何かと言うことを。複雑なステップがフエイントの中に織り込まれていた。勿論、それはダンスではない。足の運び。彼の頭の中に残っていたのは運指図ならぬ運足図。細かく足を刻む。それが回転動作と交じり予測不可能な動きとなっていた。

くっ、とオニマルはこらえた。何度もその動きに誘われて一本取られていた。見極めるべく見据えた。

アオイはオニマルの気が流れたのを感じた。一瞬の隙。けれど一瞬は一瞬。

左足を踏み込み。

そこから相手の予測を裏切る後ろ回転。つまりバックスピン、右足を背後に廻して回転、背中越しに木剣を叩き込んだ。しかし。奇襲は奇襲に過ぎず、オニマルは乱されなかった。一瞬早く、アオイの胸をはらっていた。粉をかけられた木剣がぐにゃつとしまった。

「ああ」アオイに賭けていたおじさんたちが悔しがり、「きゃああ」アオイ鼻肩の女の子たちが悲鳴をあげ、「おお」オニマルに賭けていたおじさんたちが小躍りし、「きゃああ」オニマル鼻肩の女の子たちが黄色い歓声をあげた。

「また俺の負けか」アオイは首を傾け肩をすくめて笑ってみせた。

オニマルは笑って言った。「またとは何だ。俺の方が負けが多い」

「いやいや。どう考えても俺の方が負けてる」

「そんなことがあるか」

言い合っても仕方のないことをお互い言い合った。

「さあ。稽古を始めるぞ」

オニマルは少年たちを促した。少年たちが立ち上がりそれぞれ木剣を取った。時、アオイはふと思った。あれれ、と。俺はこの勝負では移動呪を使わない、と言うことは、印を結ぶ必要がない左手が空いて。

「ちょっと待て」稽古を再開しようとしていたオニマルと少年たちに言った。「もういつペン勝負していいか？」

「かまわんが」訝しげにオニマル。

アオイはにっと笑った。

「俺、両手で剣を持っていいか？」

「は？」とオニマル。周りの少年たちも目を丸くした。その後顔を見合わせた。皆、吃驚していた。

「それは短剣術の模倣か？」と、訝しげに眉根を寄せてオニマル。

「何それ？」とアオイ。

「いや、短剣術なら両手持ちも聞いたことあるが」と説明したオニマルに。

「へえ」アオイは愉快げに目を曲げた。だったら勝てるかも、とばかり。

アオイはユタに頼んで一番短い木剣を持ってきてもらった。ユタは興奮気味に小声で言った。

「両手で剣を持つ人なんて、聞いたことありません」

アオイも小声で答えた。

「俺は聞いたことある気がするんだ」

「絶対アオイさまの勝ちです」そう言っつてユタはさがった。

再び、静まりかえった道場。中央で向き合った。アオイは左半身の左手に短めの木剣、奥の右にも木剣。向き合い、そのままお互い微動だにしなかった。オニマルの表情が次第に険しくなり……。立場が逆転していた。アオイは仕掛ける必要がなかった。

オニマルが剣先をさげた。

「これ、無しにしる。絶対俺が負ける」

お互い、ふっと笑った。

その後は、これもこの道場の名物であるアオイセナの二十人組み手。次々打ちかかる二十人の少年を相手に、足捌きと移動呪で躲す。この時は、オニマル鬣原の女の子たちもアオイ鬣原の女の子たちやおじさんたちと一緒に歓声を飛ばす。

それが終わるとアオイは道場の隅へ行き、ユタとリュウ少年に手伝ってもらって相変わらず人形遊び。これも毎日の日課。

そしてそれも終わると、ユタとリュウ少年に稽古をつけてやる。アオイは感じていた。二人とも筋がいいと。勿論、彼の相手ではなく、軽くあしらえるが、時折鋭い太刀筋がある。比べればユタの方が多くそれがある。剣を握ることさえできれば、ユタは立派な剣士となれるはずと感じていた。

七・「神隠しの秘密ルール」

目を覚ましたときには誰もいなかった。彼女一人。微かに立ちこめている灰色の空気。きな臭いにおい。

これ何　？　どうなってるの　？　息苦しくて咳き込んだ。

その時気附いた。ずっと鳴り響いているのが、目覚ましではなく非常ベルだと。

火事だ　！　施設が火事になったんだと理解できた。

心臓が早鐘のようになった。

他の子たちは　？　職員の方は　？　もうみんな逃げたのかも知れない。わたしを忘れて　。

慌てちゃ駄目だ　。　努めて冷静に考えた。窓を見た。窓から逃げるのは無理だった。アルミ製の柵がついている。扉から。扉から玄関までの通路を頭に思い描いた。大丈夫、きっと逃げられる、自分に言い聞かせた。

脱兎の如くベッドから飛び降りると扉へ走った。けれど。

「熱いつ！」

取っ手の金属が焼けただれていた。手を火傷した。彼女は周りを



見直し、タオルを見つけ、そのタオルで覆って取っ手を廻そうと考えた。そしてタオルを手に扉に向かった時。背後で声が出た。同い年くらいの女の子の声。

「馬鹿。なにやってんのよ。あんた映画見たことないの？」

吃驚して振り返った彼女の目に飛び込んだのは、ふくれっ面の女の子。体が透き通っている。目を丸くした彼女に、負けじとあきれ顔で肩をすくめてみせた。

「その扉の向こうは酸素を求めて炎の種がくすぶっている。開けたとたんに、ドッカーン。見たことない？ バックドラ……ええつと……ドラフープだっけ」

「あんた、誰……」

「わたしが誰かなんてどうでもいいの。どうせあんたはわたしに会ったことを向こうで憶えていない。いい？ ここでのあんたはもう助からない。焼け死ぬの。骨も残らない。ここではね。さあ、行きなさい。扉が開くわ」

女の子の隣に小さな光が浮かんだ。その光はみるみる大きくなり、穏やかな光を放つ球形の光の玉となった。表面に油膜のように虹が流れている。

「これ、何？」

「説明したつて、どうせ憶えてないわ。さっさと行きなさいつてば。ここを抜け出したかったんでしょ。いい？ 言っとくけど、あんたは予定外。けどこれで終わりなんてかわいそう過ぎて見てらんない。

昔はよくやっていたの。子供ルール。行きなさい。向こうに行ったら自由になりなさい。好きなことを好きなだけ。まあ、何を言ったら憶えてないでしょうけど」

八・「売り子」

廟堂に帰ったアオイを待っているのは、多少微妙な存在。勿論、門で出迎えているわけでも玄關に三つ指ついて待っているわけでもなく、とりあえず姿は見えない。喩えは悪いが、蜘蛛が糸をはるようにして、ここに巧妙に巣くっている。

ユタはリュウ少年と顔を見合わせて言った。

「じゃあ僕たちは夕ご飯の支度に行くね」

アオイは「え……」と言った。「いや……」と、言ってみた。

「じゃあ、俺も一緒に手伝うよ」

「いえいえ」ユタもリュウも大袈裟に手をふって言った。

「アオイさまはゆっくりお風呂につかられて下さい」

「あがられる頃には夕飯の支度が出来てますから」

そう言い残して二人の少年は風のように駆け去った。あつという間に姿を消した。

アオイは廟堂の庭に一人取り残され、多少悩んだ。

あいつらは俺が困る様子を見て愉しんでいるのか、それともマジでルルオシ又ミとくつつけばいいと思っているのか、アオイは判断に困りながらも覚悟を決めた。毎日のことなので。浴室へ足に向けた。

休憩所は風呂上がりの人達でにぎわっていた。ほとんどが顔見知りの人。アオイの姿を見ると気さくに話しかけてくる。近所のおじさんやおばさん。会釈しながらアオイは進んだ。その時にはすでに視界の隅に入っていた。

休憩所は正式には飲食所と言い、軽い食事や飲み物を出す。夏の間は裏手の井戸の側に飲み物を冷やして客に出している。そこに立っていた。新人の売り子さん。アオイと目が合うと嬉しそうに笑顔になり、次いで恥ずかしげに目を泳がせた。

アオイは会釈をして、しかし、かまって欲しげな相手の視線にまったく気付かないふりをして、男湯ののれんをくぐった。が。

汗を流してさっぱりして、再びそののれんをくぐって出てきたとき。

横から忍び寄ってきた小さな人影がアオイの頬に冷たい飲料の瓶をピトツとあてた。

「うっ」

これもいつものことなのでさほど吃驚はしないアオイ。しかし吃驚したふりをした。

「吃驚しました」

アオイがふり向き笑顔を見せると、ルルは照れ笑いを浮かべて目を伏せた。

「おごりです」

アオイは廟堂のお手伝いの子供と同じ身分なので、子供達と同様、風呂上がりには飲料を一本無料で貰える権利を持つ。なので、おごりて貰う必要は全くないが、「ありがとう」と、言っておいた。これもいつものこと。

ルルオシ又三とは、進展は何もないものの、しかし、はつきりした答えを出せないままである。いや、答えはとうに出ているものの、アオイはそれを伝えることがどうしても出来ない。で、ずるずると芝居に行ったりツキツキに行ったりしている。

アオイが座って飲み物を口にする、ルルは嬉しそうにちよこんと並んで隣に座った。

「先日のお芝居は面白かったですね」  
ルルに言われて、

「そうですね」と答えたが、恋愛モノだったのでアオイはあまり真剣に観ていなかった。歌劇、というのも馴染みがなかった。馴染みがあるもないも、そもそも記憶がないが、馴染みがない気がした。

それより、お芝居よりかなり面白く迫力ある何かがあった気がしたが、そういうのは大抵まったく思い出せない、これもいつものことと、もう、深く考えたりしなかった。

「またツキツキの券を買ったので……」ルルは口ごもりながら言った。

いつも買ったというが、嘘ばかりだとアオイは分かっていた。このあとのセリフも分かっている。

「もしご一緒下さるのでしたら、当日の正午にお廟の前で待っています……」

アオイは笑って言った。この子はそのうち芝居賃で破産すると思

い。  
「その券のお金は俺が払いましょう」

「い、いえ。買ったので……」多少慌てて言うルルに、

「では、下さった方に渡して下さい」アオイは財布を取り出し、二枚分の券の代金に充分なお金をルルの手に握らせて立ち上がった。

「じゃあ俺はこれで」

笑顔で言っつて、その場を立ち去った。あとに、券を手に握りしめ、胸ときめかせているルルを残し。そんな表情を見たら、とても言えない。どころか気持ち揺らぐ。可愛く感じて。だから、とっとと自分の部屋に戻ることにした。

九・「遊牧民」

目を開くと懐かしい人の顔があった。その人の腕に抱かれていた。

「お……お父さん、パパ」思わずその人の服をぎゅっとつかみ、ポロポロと涙をこぼした。

その人は多少吃驚した顔をしたが、優しく言った。

「私が君の父親に似ているのかな？」

「え……？」

顔を見て思わず「お父さん」という言葉が出たが、彼女は自分のお父さんのことを何も憶えていなかった。その男性が来ている服も随分異質な感じがしたが、では、何が普通なのかまったく記憶になかった。戸惑っていると、逆に訊かれた。

「手をやけどしているね。大丈夫かい？」

「あ……うん……」何故やけどしたのか思い出せない。

「君は何処の町の子で、どうしてこの草原の真ん中に倒れていたのかね？」

それは、こつちが聞きたいことだった。確かに彼女は草原の真ん中にいた。ただっ広い草原。何処までも続いている。けれど高地ら

しく、高い山の稜線が空に浮かんでいる。相手は一人ではなく、後ろに沢山、似た装束の人々がいた。そして人ばかりでなく、乗り物にしているらしい奇妙な生き物も沢山いた。真っ白い大きな蜥蜴っぽいモノ。首がひよる長く、体側面に突き出た足もがに股でひよる長く、ふさふさの毛並みがとても綺麗な生き物。目を見張っていると言われた。

「大神が珍しいかね？」

「オオカミ？」

「うむ。我らの馬代わりだ」

彼女は少し落ち着いていた。知らなきゃいけないのは自分の方だと悟った。訊いた。

「ここは何処で、おじさんは、おじさん達は誰なんですか？」

「ここはマウガラパラパの高原、オネパラケラ。我らの夏の間の居留地。我らは竜使いの民。私は頭首のリコチャキだ」



十・「その距離を縮める爲に」

その夜、寝る前。アオイは布団の上に座り腕組みして少し考えた。少しというよりしばらく。しばらくというよりかなり。熟考した。

ルルオシ又ミのことはとりあえず脇に置いておいて、存在しないモノと考えて、あるいは、いつまでも良いお友達と考えて、本命の方と何とか距離を縮める方法はないものか、と。

しばらく考えに考えた末、考えついた。(それは、考えついてみれば、大した考えではなかった。)

何か贈り物をしよう。大袈裟なものじゃなくて……、それでいて喜んで貰えそうなもの……。何がいいかな。

考えながら、アオイは横になった。我ながらいい考えじゃないかと、一人、悦に入った。

しかし。

よくよく考えてみればリリナネの好きなものを何も知らないことに気付いた。

うーん……。再び考え込んだ。

若い女性の好きなモノ。しかも自分よりもずっと大人の女性。普通に考えれば、指輪とか首飾りとかかな、と思った。しかし指輪は

重く受け取られそうだった。首飾りと言えば、最近クムラギの人々がみな身につけている魔除けの首飾りが思い浮かんだ。魔物の首の意匠の銀の首飾りで、それを身につけていれば悪龍の魔力を弾き返すという。ただこれは魔物の首が意匠になっっているので多少薄気味悪い。好きな人に送る物ではない気がした。

石……。石が思い浮かんだ。箱に沢山集めていた。いや、あれはこの廟堂の石だと言っていたけれど……。でも、詳しく……。魔導師なら詳しくて当然かも知れないけれど、好きかも知れない……。

リリナネは、自分の宝珠メアマタギを、首飾りにしてかけている。水晶や色んな石と一緒に。けど……。アオイは自分の手首の龍翹を見た。

こんな風な、数珠みたいな物は、リリナネは持っていない。

これとお揃いっぽい物をあげたい、と思った。勿論、あからさまにお揃いなのを贈るとアレだけど、似たような物なら良いかも……。

解答らしきモノに辿り着いて、アオイは再びにんまりした。銀製品や石を揃えた装飾品のお店は知っていた。早速、明日、行ってみようと思った。

十一。「石銀で願いを」

翌朝、いつものようにユタと朝ご飯を食べながら話した。買い物に行きたいのだけど、今日の俺の当番は何だ？と。

「午前に浴室のお掃除ですよ」

「え……そうなのか……」

お湯を抜き、浴槽を洗い、床を洗い、桶を干す。割と大変な仕事だが、仕事が大変だから戸惑ったのではない。すでに何度もやったことがあり、もう慣れているうえ、大抵多人数でやる。戸惑ったのは、最近、飲食所の売り子さんがお手伝いに来てくれる。飲食所のおばさんの話では、自ら志願して、らしい。聞くまでもなかった。

「ええつと……」戸惑いで箸が止まったアオイ。

「なんですか？」訝しげに問い返すユタ。

「そうなのか……？」無駄な念押し。

「はい」平然とした回答。

アオイはほんの少し、期待、というよりも、もしかしたら気を利かせてユタがこう言ってくれないかなと思った。お買い物に行きたいのでしたら行ってきてください、僕たちだけでやっておきますから。

しかしユタは何も言わず黙々とご飯を食べ、食べ終わると箸を置き、丁寧に手を合わせて「ごちそうさまでした」と言って、自分の箱膳を抱えて立ち上がった。

アオイが目で追っていると、入り口で立ち止まりふり返って言った。

「お買い物があるのでしたら行ってきてください。僕たちだけやっておきますから」子供らしくないおすまし顔で、わずかに口角があがっていた。

「あ、ありがとう……」

思わず口ごもり、何だか生意気じゃないかと感じた。しかも何故だかつしるめたい気持ちになった。

そして。

裸足に兵靴をつっかけてそそくさと廟堂の入り口から出ようとしたとき、浴堂へ向かうルルオシ又ミの姿が見えた。たすきをかけ袖をまくり上げ、嬉しそうにいそいそと。その嬉しそうな横顔を見たら、出かけられなくなった。この勢いで浴堂へ行き、そこに彼がないと知ったら多分涙ぐむ。そのくらいアオイでも分かった。

小さくため息をついて、アオイは浴堂へ向かった。

慕われて悪い気はしない。どころか、むしろ可愛く思える。日増しにそう感じる自分がある。そのことに戸惑っている。

アオイが浴堂へ入るとユタが素っ頓狂な声を出した。

「あれね？ お出かけになるんじゃない？」

その声にみながり向いた。

「いや……」アオイは何と答えたものか、言い淀んだ。「全然手伝わらないのもアレだから……少し手伝ってから行くよ」と、誤魔化した。

「お出かけになるのですか？」

いつの間にかアオイの真横にいて顔をのぞき込んで訊いてきたルル。アオイはギクツとした。「ええ。そうなんです……」と答えた。何故だか後ろめたかった。

ルルは嬉しそうに言った。

「でしたら私をご案内」

ご案内して貰うわけにはいかない。

「いえ。知ってる場所ですから」

「そうですか……」ルルは残念そうに言った。

そのあとは割合楽しく、ルルやユタやラナイ少年らとお風呂掃除をして、適当なところでアオイは一人切り上げ、出かけた。

石と銀の装飾品の店の名はそのまんま『石銀』。その店がある通りは銀座と呼ばれている。その区画には銀の取引所があり、銀製品の店が多い。銀座ばかりでなく米座もあれば桶座もあり、座とは同業者組合のこと。そう言われてみれば確かにそう聞いたことがある。が、何故かアオイは銀座という名に聞き覚えがあつた。はじめてこの通りを歩いたとき、ユタに「ここは銀座です」と教えられて、「え！　ここが??」と吃驚したのを憶えている。

ユタは平然と説明を続けた。「銀座もあれば金座もあります。そうでしょ?」

「うん……そうだよな……」なるほど、そうか、と納得してしまつたアオイ。「ひよつとして俺の住んでいた町にもあつたのかな……?」

「大きな町だつたら多分あるはずですよ」とユタは答えた。

だつたら当然か……と、さらに納得したアオイ。それが、もう一ヶ月以上前のこと。その時目に止まつたお洒落なお店。石銀。

そして今日、アオイはその石銀ののれんをはじめてくぐつた。実はここに立ち寄るのは避けていた。何故ならいつも若い女の子でにぎわっているから。

彼が店内に入ると、水をつつたように静まり返った。次いで緊迫した空気が流れた。彼は居心地悪かった。何だか女の子の聖域に入り込んだような気がして、顔が紅くなった。思わず拳動不審に「ええと……」と頭を掻き、次いで首を捻り、腕組みをして目を伏せて、棚に並んだ商品を見た。

が、何故だか店内の女の子が全員こつちを見ている気がして、勿論、凝視はしていないが、ちらちら見られている気がして、彼は落ち着かなかつた。商品をながめていてもちつとも目に入らなかつた。不自然に咳いてみた。「これは……あれかな……」自分でも意味不明だった。

店主らしき三十代半ばの女性が寄ってきた。「何かお探ですか？」

アオイは助かつたと思つた。「ええ」。自分の腕の龍翅の数珠を見せて、「これと似た感じの物を女性用に」

店内の空気がさらに緊迫した、というよりも、凍り付いた。が、アオイは気附かなかつた。が、客の女の子達が全員聞き耳を立てているのは感じた。気のせいだよな、と思つた。

店主は落ち着いていた。女性だが若くはなかつた。いや、三十代はまだまだ若い、小娘ではなかつた。

「黒瑪瑙と水晶の組み合わせが良いのですか？」クムラギー有名な剣士の意向を確かめた。

「いや……」アオイは正直に答えた。それだとまったくお揃いになつてしまふ。「僕は詳しくないのですが……黒ではなく、何か、女性の好む色の石で……」色違いのお揃い、それがいいと思つた。

「黒でないとなりますと、茶系、青系、赤系……」

「赤が良いです。赤と水晶で……」

店主は棚に並んでいる小箱の中の綺麗な桜色の石を指差した。「これは珊瑚石です。最近、若いお嬢さん達に人気なんですよ」

「そうですか……」綺麗だがもう少し濃い色の石が似合うと思った。その並びにある箱の石が気になった。「それは？」

「これは赤虎目です」

名前の通り、虎目石を紅くしたような、渋めの赤い石。アオイは気に入った。彼女の、紅鳶の瞳が思い浮かび、似ていると思った。

「意味は？」

「邪悪なモノをはね返します。魔除けであり、持つ人に靈力を授け、集中力を高めます。虎目石と同様の効果がありますが、虎目石よりも攻撃的な性質の強い石です。持ち主の勝負勘を高めるとか」

「へえ……」魔法使いにはうってつけじゃないか、と思った。

「じゃあ、これにします。これと水晶で……、あ、あと、これ、曹灰長石と……」そして、龍翅の代わりはないから仕方ないとしても、もう一つ、この数珠には石がついている。「この赤い石、何か分かりますか？」

店主に、リリナネがつけてくれた赤い石を見せた。



「あら。輝赤石ですね。」

「キセキ石？」

「ええ。別名、願掛け石と呼ばれてます。何かしら願いを込めて身につけていると、その願いが叶うという石です」

「ああ。確かに」

確かにそう言っていた。戦場で死なないとか。いや、でも、戦場で死なないお守りじゃなかったんだっけ？ うむむ、と考え込んでみると、店主は奥へ引っ込んだ。真新しい綺麗な輝赤石を三つ持ってきて彼の前に並べた。

「石には等級があります。当店で一番良いものを三つお持ちしました。手を翳してご自身で選んでください」

「え？」

「一つずつ手を翳してみて、波長が合うものを選ぶのです」

「波長？」

半信半疑でアオイは手を翳した。

「どうするんですか？」

店主は笑みを浮かべて言った。

「霊波を感じるはずですよ。翳した手の平に温かく優しい霊波を」

「うっん……」言われたら何となくそんな気もする。気のせいかもしれないが、真ん中のものに手を翳したときに温かく感じた。微妙に。

「これかな」これって霊波なのかな……？ が、正直な処。

店主はにっこり微笑んだ。

「これですね？」

「ええ。多分」確信は全くないですけど、というのが本心だった  
が。

「でしたら、手に優しく握りしめ、願いを込めるのです」

「え？ 今、ここで、ですか？」

「ええ」店主はにっこり笑って促した。

アオイは戸惑った。願いを込めるとしたら、あれしかないが、勝手にそんなこと願って良いのかどうか、それを秘密に相手に持たせて良いのかどうか。けれど。

アオイは少し照れながら、手に握りしめ、願いを込めた。声に出さず口中で呟いて。「リリナネさんと結ばれますように」。

十二・「名刀キトラ」

紐を通して数珠が出来上がると、店主は香を焚き、その煙に数珠を数度くぐらせた。

「さあ、これでこの石は清められました」  
そして包装紙を数種類出して、店主は訊ねた。

「贈る相手は若い女性の方ね？」

「ええ」と答えて、アオイは慌てて付け加えた。「でも、その……あくまで友達に贈る物ですからあまり大袈裟でない感じでお願います」

店主は心得てますとばかりに微笑んで、綺麗な透かしの入った半透明な薄い紙で商品を丁寧に包み、そして綺麗な箱に入れ、綺麗な模様入りの紙袋に入れた。確かに大仰ではないが充分可愛らしかった。

これはどうなんだ……？ アオイは自問自答した。これを渡すとき、これを差し出す俺の姿は、リリナネから見えてどうなんだ……？  
可愛すぎないか……？ 店主に訊きたかったが、店主は素敵に決まっていますとか言いそうだから自分で考えるしかなかった。

しかしそもそも、この店で、無骨で素っ気ない包装を求める方が無理というものだった。

石銀を出て、いくらも歩かないうちに、前の方からユタが駆けてきた。大慌てで、しかし、嬉しそうな顔で。アオイの姿を見つけると手をふり駆け寄った。

「もう。捜しちゃいましたよ」駆け寄ったユタは、息を切らして、満面の笑みを浮かべて言った。「剣が出来たそうです」

「え、ほんとに？」待っていた。片刃の湾曲刀。希代の刀工、キトラニケに依頼した、彼の刀。

「ほんとです。嘘を言ってどうするんですか」

じゃあ、すぐに行こうとばかり、鍛冶屋へ向かって駆け出そうとしたアオイ。ユタが後ろから呼び止めた。

「アオイさま。出来上がったっていうことは、鍛冶屋じゃなくて刀剣屋にあるということですよ」

あ、そうか、と足を止めたアオイ。出来上がったということは、鞘や柄や、様々なこしらえも全て作り終わって、注文主に渡せる状態ということ。「じゃあ刀剣屋に行こう」アオイはユタと並んで刀剣屋へ向かった。

「アオイさまが出かけたあとすぐにお使いの人が来て……。随分捜しましたよ。まさか女の子のお店にご用事とは思いませんでした」

「いや……。その。石を捜して……。」女の子向けの店だとは思っていたが、今のユタの口ぶりでは女の子限定の店という認識のようだった。冷たい汗が浮かんだ。「あそこなら売ってるかなと思っただ

「けだ……」

「石なら廟堂の方が沢山ありますよ？」不思議そうな顔をしたユタ。

「そつだよな……」

「それに、魔導師向けの石のお店もあります」

「そつか……」

「そうです。石銀はどちらかというところ、恋愛成就とか、そういう石を置いているお店です」

「へえ……知らなかった……」耳たぶまで赤くなったアオイ。しかし、言われてみれば凶星、それが目的だった。

刀剣屋ののれんをくぐると、店主がもみ手をして出迎えた。「お待ちしておりました。ささ。御覧になってください」

そこに一振りの刀。柄は鮫革が巻かれている。鞘は錦の布が貼られている。金属製の帯取り金物が二箇所。アオイの思い描いていた長さ。柄の長さも。

「随分綺麗な鞘だな……」尻鞘交換券を持っているが、こんな綺麗な鞘を尻鞘で隠してしまうのは勿体ないと感じた。

「ささ。お手に取って」

店主にすすめられてアオイは刀を手を取った。短めの刀身ながらズシツと重い。柄もまた短め。握り拳二つ半ほど。前提、右手でふ

るうが、状況によっては左手を添えることも出来る。刺し貫く場合など。

「ささ」早く抜けとばかりの店主。

「ね、ね。アオイさま。早く抜いて見せてよ」隣のユタもワクワク顔だった。

アオイは無言で頷いた。自然、笑みがこぼれた。

鰐は彫り物のない丸鰐。親指をかけた。スツと押すと、ぬこつと抜けた。ぬつと光る刀身がのぞいた。濡れているよう。全て抜いて、窓から入る陽に翳してみた。陽光が切っ先へぬるりと走った。本当に濡れているようだった。ほぼ真っ直ぐな刀身。美しい波紋。肉厚で鎬高い。手に持ち、重心に違和感がある。この感覚は何だろう。アオイは少し訝しく感じた。

軽くふつてみた。驚いた。重心が綺麗に切っ先へ流れた。ふることで、見事に切っ先に集約された。それは、まるで、斧をふつたような感覚。

アオイは目を見開いた。まるで斧のようなふり心地の、しかし刀彼の剣技、円の運動理論、回転殺法を、一段も二段も加速する刀。

アオイはまじまじと刀身を見た。銘が刻まれている。三文字。もう、彼にも当然読める。キトラ。

店主が言った。

「銘は普通なかごに刻みます。キトラニケ様は、ニケと刻みます。ニケが屋号ですから。しかしこれはよほど気に入られたのでしょう。キトラと刻まれたのは初めてのことです」

「そうなんだ……」

後世にまで語り伝えられる名刀キトラ、その名刀が、最も正当な持ち主の手に渡った瞬間だった。彼以上の使い手はなく、彼がこの世界を去ったのちも、名刀はその再来を待ち続けたという。キトラニケもまた、その生涯でこの刀以外にキトラの銘を刻まなかった。この世界にただ一本きりの名刀。

「すげえ……これ、最高……」アオイは呟いた。

ユタが聞き咎めた。「アオイさま。すげえではなくすごい、です」

正直な処、そのくらい良いじゃないかとアオイは思った。

「一緒だろ？」

「いいえ。アオイさまは時々言葉の使い方が汚いことが。前々から僕は気になってました。お国言葉かも知れませんが、ここでは立派な武人の方は」

アオイは耳クソをほじりながら背を向けた。その態度にユタはムツとしたようだった。自分の方がずっと年下のくせにこう言った。

「あ、なんだか、生意気な感じです」

一三・「名刀キトラ？」

刀剣屋を出たアオイは、ユタを連れて、鍛冶屋へ向かった。お礼を言いたかった。

しかし刀工は仕事だった。槌を振るい、ちらりともふり返らない。いや、一瞬だけ。見習いの少年に出迎えられ、戸口に立ったアオイをちらりと見た。が、にこりともせず、まったく無視して仕事を続けた。

アオイにも、もう分かっている。無愛想なわけじゃない。一瞬も気の抜けない仕事なのだ。冷めたら焼き直せば良いというわけじゃない。その一瞬にしか、打てない工程があるのだと。

アオイは深々と頭を下げた。無言で。刀工は後ろ目にそれを見て、にやりと満足げに笑った。

見習いの少年は言った。

「お気に召しましたか？ 師匠が気にされてました」

アオイは頷き、素直な気持ちをそのまま口にした。

「ええ。とても素晴らしいと思いました。感謝していますとお伝えしてください」

少年も嬉しそうだった。「これを」。ふところから券を二枚出した。「無料研ぎ券です。研ぎはロコオリノ（ロコ・織野）様にやらせると、師匠はおっしゃってました」



「ロコオリノに？」

幾分驚きながらアオイは券を受け取った。

ロコオリノならよく知っている。馴染みの研ぎ師。リケミチモリに紹介してもらった。今までも数回、研いでもらった。斬馬刀と劍竜の太刀を。アオイと同年配で、口数多く陽気な男。若い腕が良い。腕が良いとは知っていたが、名工からそんなに信頼されているとは思っていなかった。あらためて、あいつ腕が良いんだな、と思った。

そこで、その足で研ぎ屋へ行った。刀を見せて感想を聞きたかった、というよりも、自慢しようという目論見だった。

研ぎ屋ののれんをくぐり、アオイは無言で、刀をにかけて見せた。隣でユタも胸をはっていた。得意げな顔だった。

研ぎ屋の若い大将ロコは、いつものように陽気に迎えて、次いで怪訝な表情になった。

「よう、大立て者。ご機嫌じゃないか。何だ？ その派手な剣は。ん？ 柄が曲がっているのか？ なんだそれ？ 言つとくがそいつは俺じゃ直せんで。打ち直してもらえ。それにしてもどうしてそんな風に……ん、なんだそのにやにやは……チビ助もなんだか生意気じゃないか」

ユタはチビ助と言われてムツとした。アオイは自慢げに笑って刀をロコに手渡した。研ぎ師は受け取り、「む」と唸り、次いで真剣な顔になり、抜いて銘を見て、目を丸くした。

「キトラ！？ キトラニケがキトラを打った？？ ニケじゃなくて？ なんで！！」

全て抜いて翳して見て、ふってさらに目を丸くした。次いで若い

研ぎ師は惚れ惚れした表情で、舐めるように刀身を見ながら言った。  
「こいつは俺に研がせる。俺以外に研がせるな。な。頼む。俺にやらせる」

「ああ」アオイはにっと笑った。「キトラニケ様もそう言ってたそう  
うだ。だから見せに来た。頼むぞ」

「任せろ」ロコオリノは嬉しそうに笑った。にっと。

そのあとは勿論道場へ向かった。オニマルに見せて感想を聞きた  
かった。

「オニマル様は羨ましがるに決まっています」  
歩きながらユタは言った。

「うん。だろうな」  
アオイは笑って答えた。オニマルもキトラニケを一本持っている  
良い剣を。しかしこれは羨ましがるだろうと思った。

思った通りオニマルは、垂涎の眼差しを向けた。刀を抜いて、次  
いでふつてみて。「おお」と吃驚し。「これは」と目を丸くした。

「ううむ。さすが……。少し短いが……。お前の剣術にはちょうど良  
いあつらえ。しかもこのふり心地。お前のためにあるような刀じゃ  
ないか」

「だろ？」

アオイはやっぱり解ってくれたかと、にやっと笑った。

「これを得たら。まさに鬼に金棒だな。貴様」

オニマルもにやっと笑った。次いで目を細め。

「それにしても銘がキトラとは羨ましい限りだ。ニケよりも数段格

好  
い  
い  
」

やはり、そこを羨ましがった。

## 十四・「大人の女性」

彼女はラエモミ近くの大きな町の出身。ナネという姓はラエモミ近郊特有のもの。つまり、先住民の姓。カタジニのジニもそうで、カタジニはラエモミの出。

しかしこの地域は西方との交易が盛んなので、多くの人種の血が入り交じり、肌の色や髪の色は実に様々。先住民は背が低く肌の色が赤銅色だったと伝えられているが、その特徴を残す人は今はいない。

彼女を見れば、すらりとした美しい肢体、きめの細かい色白の肌、美しい紅鳶の眸、明るい茶色の髪。

その彼女は二十三歳。十三歳の時の自分と何が違っているのか説明できない。何も大人になっていないとを感じる。しかし。

彼女は大人であろうと努めていた。どれほどつのる気持ちが胸の内にあっても、常に大人として接しようと。同じ屋根の下に暮らし、朝な夕な顔をあわせても。

彼はルルオシヌミと順調みたいだった。時々、芝居やツキツキ見物に行っている。実は困っていますと恋愛相談は受けたものの、この調子ならいずれ情が移るだろうと感じていた。そうして恋心が芽生えることもある、自身の恋愛経験はなくせに、達観してそう思ったりした。

そうなる気になって仕方ない。彼の数珠につけたあの石が。こ

のまま持たせたままではいけない気がする。あれを着けさせたままにしているから、ルルと進展がないのかも知れない。けれど。

今さら返して欲しいなんて言えない。それは到底無理だった。返して貰う理由がとて言えない事柄である以上。

とは言え、自分はすっぱりあきらめなければならぬ。きれいさっぱり。いつも自分に言い聞かせていた。

あの子は十八歳くらい。まだ、子供じゃないか。いつも思うことを今日も思っつて、続けて思った。いつも思うことを。

ぜんぜん子供っぽくない……。

十八歳とは思えない、大きさを感じる。大人の男顔負けの、雄大な人間性を時折垣間見せる。それは、ひよつとしたら単に記憶を失っているから、そう見えるだけかも知れない。ただそれだけの理由かも知れない。

けど、……。間の抜けた言動や失敗談でさえ、おおらかに感じて、惹かれてしまう。

偶然を装い、不自然でなく顔をあわせたくて、マアシナの部屋で、神像を前に独り座る。毎朝、晩。彼が黙想するためここに来るのを待つて。たわいない会話を楽しみにして。ただ、一言一言、言葉を交わし、笑顔を交わすことが楽しみなだけ。

ところが彼女はこれも感じている。恋愛未経験の彼女には皆目見当もつかない、不確かなもの。で、ありながら、もしも感じた通りの事実なら、心臓バクバクのもの。

時折、瞬間的に、良い雰囲気になる。

きつと気のせいだ、額に冷たい汗を浮かべて、彼女は自分に言い聞かせていた。

静かに背後の扉が開いた。

彼女は笑みを浮かべてふり返り……、そこに立っていたタパに黙礼した。

「随分熱心じゃな」感心した口調で初老の巫術師は言った。

「いえ……」彼女は笑みを浮かべて答えた。当然、がっかりした。

## 十五・「竜使いの民の子」

居留地に案内された。頭首リコチャキのオオカミの背に乗せられて。その腕に抱かれて。

その人の腕の中は、とても安らげる懐かしい感覚だった。この人は本当に私のお父さんじゃなかったのかしら……。そう思えて仕方なかった。が、違うのだろう。

彼女がふり返り顔を見上げると、その人はその度優しく微笑んだ。本当にお父さんのようだった。

それにしても、どうして私は何も覚えていないのかしら……。自分の着ている服も違和感があった。他の人々の装束と違い、目に馴染みのある服だが、それは寝るときに着るものという覚えがあった。どうしてこの格好で草原を出歩いていたのか、まったく記憶にない。

案内されて着いた居留地。綺麗な色の天幕が並んでいた。奇妙な生き物が沢山いた。どうにも覚えがなかった。

いや。こんな草原に天幕の暮らし、という風景は臆に記憶にある。けれども。

本当に私はこんな生活をしていたのかしら……。まったく覚えていなかった。生き物も見覚えのないものばかりだった。

女性達に出迎えられた。中の一人が、頭首リコチャキと言葉を交わして、そのあと彼女の前にしゃがんで、にっこり笑顔で言った。

「この人がお父さんに似ていたの？　じゃあ、私はあなたのお母さんに似ているかしら？」

彼女は何と答えたらよいか分からず、首をふった。その人は優しく言葉を続けた。

「私はリコの女房。ニコという名前なの。よろしくね。何か思い出すまで、しばらくはここで暮らすと良いわ。私達には子供がいなかったからちょうどいいわ。ぜんぜん遠慮なくていいのよ。本当のお父さんお母さんと思ってね」

リコチャキも、うむと頷いた。が、首を捻りながら言った。

「それにしても名前も憶えていないのは困るな。何と呼んだものか……」そして彼女を見つめにつこり笑った。

「うむ。お前はとても美しい。ニコの『ニ(尔)』とは、美しいという意味。お前はその『ニ』を貰い、ニと名乗りなさい。とてもとても美しいという意味だ。記憶が戻るまで、お前は私達の娘、ニチャキだ。よいかな？」

彼女は頷いた。何故だか、涙ぐんでしまい目を擦った。嬉しかった。



## 十六・「いじめ」

キトラを話題に盛り上がったあとは、いつも通りの稽古をして、いつも通りに廟堂に帰ってきた。いつものようにユタとリュウは夕ご飯の支度へ行き、アオイは一人浴室へ向かった。

いつものように、井戸の側で、照れて目を伏せて会釈するルルオシ又ミに笑みを返して、男湯ののれんをくぐった。

そしていつものように汗を流してさっぱりして、脱衣所で足下に籠を置いて、着物を着ていたときだった。目の前の板壁越しに会話が聞こえた。その壁の向こうは戸外。浴室の裏庭で井戸の反対側にあたり、普段はあまり人がいない場所。

どうやら、壁のすぐ側でその会話は為されている。いや、もっと詳細に分かる。壁を背にした一人を数人で取り囲むようにして。口々に責め立てている。

詰問調の意地悪な物言いの女の子の声が聞こえた。

「剣士様があんななんかを相手にしているわけないわ」

「それを図々しく吹聴して廻って」

言い返す声は聞こえなかった。けれど、言われているのが誰か、声を聞くまでもなかった。

アオイは慌てて着物の前をあわせ、髪も体もほとんどびしょ濡れのまま、男湯を出た。吹き抜けの休憩所を、浴室の履き物をつっかけて裏庭に降りた。するとそこに、同世代の女の子に取り囲まれてルルオシ又ミがいた。壁を背に、うつむいて、涙ぐみ。

アオイは真つ赤になりながら、ツカツカと歩み寄った。取り囲んでいた女の子達が気付いて吃驚してふり返った。ルルも顔をあげて彼を見た。瞳が潤んでいた。

その時には彼は手を伸ばして、ルルオシ又ミの手を取っていた。ぐいっと手を引いて、人垣から引つ張り出した。

そして呆気にとられている、あるいはバツが悪そうに真つ赤になっている女の子達をあとに、アオイはルルをその場から連れ出した。無言で。はんば引き摺るようにして。そのまま浴堂を廻りこみ、廟堂を通りすぎ、廟堂の裏手まで連れて行った。

人気のない裏庭まで来て、アオイはようやく足を止めた。

手を離して向き直った。

「どうして言い返さないで黙っているのですか？」

アオイも詰問口調になっていた。慌てて言い直した。優しく。

「あんな風に言われることがよくあるのですか？」

ルルはこくと頷いた。けれど嬉しそうに目尻の涙を指先で拭いた。

「でも、いいのです。アオイ様が仲良くしてくださいさるのですから」

「言い返してやればいいじゃないですか」アオイは再び詰問調になった。腹が立って仕方なかった。自分などのためにいじめられる理不尽が。そしてこんなことが今までもあったのに、気付いてやれなかった自分が。

「でも」ルルは泣きながらにつこり笑った。「皆さんの言うとおりですもの。アオイ様はお付き合いですと一言も言っていないのに、私は嬉しくて、芝居見物やツキツキに行ったことを、つい

吹聴してしまつて」

「言つていいです」

「え？」

「もしもまた、あの子達にいじめられたら、言つてやるといいんです。俺とつきあつて」と

「え？ 本当に？」ルルオシ又ミの目からポロポロと涙がこぼれた。こらえきれない嗚咽を手で押さえ。「アオイ様、本当に……？」

「ええ……」と答えたが、その『ええ』はちよつとびびり気味の『ええ』だった。今、俺は『もしまた、あの子達にいじめられたら、そう言え』つて意味で言つたよな？ お付き合いますと返事したわけじゃないよな？

その時、背後の廟堂の壁。その壁の木窓がパタンと開き、顔を出した女性。そこにいた二人を見て、目を丸くしたが、すぐに笑顔で「ごめんなさいね。お邪魔だったみたいね」と言つた。

すぐに窓を閉じようとしたその人に、ルルは、ふり返つて、感極まつた様子で、泣きながら喜びを伝えた。

「アオイ様がつきあつてると人に言つても良いと……」

アオイは真つ青になった。誰に言つているんだ！！しかもその言い方はおかしくないか！！すでに既成事実があるような。どころか、まるで、彼が秘密にさせていたかのよう。

この子は自分に都合良いように現実をねじ曲げる病気なのか

！？今の言い回しは！？故意??天然にしても、これは

許される範囲か　??  
目を白黒しているよ。

大人な感じの微笑みを浮かべてリリナネは言った。

「あら。良かったわねえ」

しかし唇の端がふるえていた。彼女は彼女で、それを気取られた  
くなくて、背を向けて、スタスタと立ち去った。

L i t o 3 1 6 (後書き)

閲覧ありがとうございます。さて。またまた暫くの間仕事が多くなりまして。が、頑張って早めに更新できるよう努めます。またまた時間が空くと思いますが、このあとも、「葦原国の剣士」をよろしくお願ひします。

ルルは涙ぐんで口をへの字に曲げていた。アオイは心を鬼にしてキツチリ伝えた。お付き合いと返事したわけではないことを。最後の方は語調が尻すぼみになりながらも。しかし。

すぐに噂は広まったようだった。面と向かって訊かれたらちゃんとして否定して事情を説明できるのに、誰も訊いてくれなかった。どうやらそうらしい、そんな噂がひろまって、アオイには、どうやらそんな噂が広まっているらしい、としか分からなかった。

そして当然。

リリナネとはまたしても疎遠になった。話すきっかけがない上、どことなく相手がよそよそしい。なので話したくても話せない。いったいどう切り出しているのか分からない。誤解であることを伝え、けれど「へえ。そうだったの。でも、どうしてわざわざ私に？」と言われたら返す言葉がない。そもそも、そのことに関して何も訊いてこない処から判断しても、まったく脈がない。

石銀で買ったあの数珠は渡せないままになった。独り、文机の前に腕組みして座り、時々引き出しを開いて包みを見ては、ため息をついた。

十七。「限度を知らない策略家と底なしのお人好し」

人通り途絶えた昼下がりの廟堂の門の脇、外堀がつくるわずかな

日陰の下で、その会話はなされた。密やかに。けれど日陰からはみ出している子が何人も。全部で五・六人の女の子。いくら声をひそめていても自然と華やぐ雰囲気。キャツキャツと。

「本当に、みんな本当にありがとう。」

「いいのよ。気にしないで。友達じゃない」

「こんなに上手くいくなんて全然思ってた」

「良かったわね」

「うん。ありがとう。みんなのおかげ。お礼に今度バルでおごるね」

「うん。じゃあまたね」

「うん」

笑顔で、友達と別れたルル。互いにくると背を向けた。するとちょうどそこに。

ポンと門を出たところでその光景を目撃したアオイ。驚いた。鳩が豆鉄砲を食ったように。しかし瞬時に理解できた。なるほどそういうことが、と。

ぎこちない笑みを浮かべているルルにアオイは言った。

「仲直りしたんですね」

ルルは微笑んで答えた。

「181」



## 十八・「草原の生活／暁」

二二は草原の暮らしにすぐに慣れた。不思議な感覚だった。こんな生活をしていた憶えはない、何をするにもとても不便だと感じる暮らしぶり。なのに、こんな草原で暮らす人々、その光景は記憶の中にある。

けれど生き物はまったく見覚えのないモノばかり。いや、記憶違いだろうか。見たことあるような、けれどまったく違っていたような。どこことなく違和感のあるものばかり。大きなものから小さなものまで。

全て竜類に属する竜の仲間だと、リコチャキは教えてくれた。

「竜？ ドラゴンなの？ 恐竜なの？」

「ドラ？……キョウリュウ？ それは何かね」

リコチャキに怪訝な顔で問い返されたけれど、彼女は説明できなかった。言葉は出てきたものの、それが何かはさっぱりだった。姿も思い出せなかった。

「ドラゴとはドラコーの訛りかな。まあよい。私達は竜使いの民。竜類であればどのような竜であっても手なずけることが出来る」

「へえ。手なずけるって」手なずけて何をするんだらうと思った。

「うむ。オオカミのように乗り回したり、戦で戦わせたり」

「素敵。それってほんとに竜使いね」目を輝かせた彼女に、  
「うむ。そうだとも。お前には全て伝授してやるう。竜使いの術の  
全てを」リコチャキは優しく微笑んで言った。

そして名前の呼び方。

「二二」と、名前だけで呼ばれることは少なかった。二二チャキと  
名字まで一緒に呼ばれるのが普通だった。勿論お父さんはリコチャ  
キで、お母さんはニコチャキと呼ばれていた。

「フルネームで呼ぶなんてなんか変な感じ」彼女は最初の頃思わず  
そう言っただけで笑ってしまい、

「フルネ……何？」と、周囲の大人を困惑させた。

その他にも、彼女の記憶の中にはあるのに、みんなの知らない言  
葉がいくつもあった。時々それがポンと口をついて出て来て、みん  
なを笑わせたり、不思議がらせたりした。しかも彼女は口が達者で、  
一風変わった喋り言葉と相まって、周りの大人達を面白がらせた。

「本当にお前のお喋りは面白い。とても愉快的気分になる」

そう言っただけでニコチャキは喜んでくれた。お母さんのニコチャキも、  
「それに元気があっていいわ。これなら男の子にも負けないわね」  
と言ってくれた。付け加えて「いい？ 絶対負けちゃ駄目よ。たと  
え相手が男の子でも」とも。

「うん」と彼女は笑って答えた。「私負けしたことないよ」。記憶は  
ないけれどそんな気がした。

草原の朝は早い。空が紫から紅に変わるころ皆起きて、陽が昇る  
方角へ向かって手を合わせる。

リコチャキは教えてくれた。

「見えないけれど、今この空のこの方角にテアラギ様がいる。その恵みを感謝して受け取りなさい」

「テアラギ？」耳慣れない言葉にニニが問い返すと、

「うむ。空に白道を導く女神様だ」と言つて、さらに詳しく教えてくれた。

テアラギとは、見えない神様という意味で、何故見えないかというところ、その女神は太陽に愛されていて、今、空に登ってきたけれどすぐにあとから太陽が追いかけて昇ってきてその女神を後ろから抱きしめる、だから全く見えなくなるのだという。

「へえ……」ニニには少し違和感のある話だった。説話が、ではなく。「神様って普通見えないんじゃないかなかったかしら」そう言つと、

「普通は見えるとも」リコチャキに笑い飛ばされた。「見えないのはテアラギ、そしてマアシナラギくらいだ。そして、もつとも神聖なラアテアだ。他はみんな見える。見えないなら、何故いると分かるかね？」

「へえ……」吃驚な話と聞き覚えのない神様の名前。けれど自分は神様についてそんなに詳しくなかった気がした。だからあまり深く考えなかった。確かに、見えないモノを信じるなんておかしい。見たことある人が沢山いて当たり前前と思つた。



十九・「草原の暮らし／はじめての竜」

「モコおいで」

モコとはニニが附けた名前前で、それはパルプという種類の竜類。リスとイタチの合いの子みたいな姿で、リスより少し大きくてイタチのように胴長。けれど顔は平べったくてトカゲみたい。ニニがはじめて貰った竜。勿論手なずけの呪文を教えてもらって、手なずけた。呪文は繰り返し返せば繰り返すほど絆が深まるのだという。今ではいつも彼女の足下を駆け、彼女が座ると肩の上に乗る。夜眠るときも一緒。

彼女は嬉しくて仕方ない。用もないのに居留地を隅から隅まで、モコを連れて歩いて回った。

モコという名は、毛がフサフサしていたから何となく附けた名前だけれど、奇しくもそれは先住民の言葉で竜の意味だった。リコチャキ父さんを驚かせた。

「ほう。お前は先住民の言語を知っているのかね？」

ニニは首をふった。よく分からなかった。自分がこの地方の人間なら、どこかで聞いていたとしても不思議ではないけれど。

「モコとは竜類ばかりでなく、トカゲも、蛇も、全部含む。精霊の龍もモコだ。先住民達はあまり区別してなかったようだ」リコチャキ父さんは穏やかに続けた。「モコに限らず、先住民の言葉を今でも詳しく知るのは、魔導師や神官達、そして我ら龍使いの民。お前は何処から来たのかな？」

彼女は首をかしげた。それについてはさっぱりだった。いつも考  
えるけれどいくら考えてもさっぱり。楽観的な彼女はこう思ってい  
た。今が幸せなんだからいいじゃない。

それは記憶ではなく、感じる。ここはとても幸せだと。今まで自  
分が居た所よりずっと。

夜はオオカミの毛皮の毛布にくるまって寝る。はじめてその毛布  
を買ったとき。ニコチャキ母さんは笑顔で言った。

「大きな街の大金持ちだってこんな贅沢な毛布は持ってないのよ」

その言葉通り、これ以上ないほど柔らかで暖かかった。王様の気  
分、いや、彼女は女の子だから、お姫さまになった気分だった。

天幕の中の照明器具はカンテラ。その名前は聞いたことある気が  
した。見たことないけどこれがそうか、と彼女は感心して思った。  
それはまるで大きな土瓶だった。中に油を入れ、口に灯芯を差し  
込み、火を灯す。優しくて赤みの強い光が天幕の中を仄かに照らす。

ニコチャキ母さんがはじめて火をつけて見せてくれたとき、ニ二  
は思わず言った。

「素敵！」

ニコチャキ母さんにはっこり微笑んで言った。

「大きな街に行けば、筒灯という物もあるわ。持ち歩けるしとって  
も便利なんだけどね」

「ツットウ？」

「そうよ」

「へえ……」

それは知らないと思ったニニだが、後日大きな街で目にしたそれは、よく知っている物だった。名前も記憶にあった。けれど使った記憶はなかった。ランプだった。

## 二十・「草原の暮らし／陰陽二極の術」

ある夜、居留地中央の広場の焚き火の周りに女の子だけ集められた。二二は仲良くなった子と並んで座った。二二が座るとモコがするすると駆け上がり肩に乗った。他の子もそれぞれ自分のパルプを肩に乗せていたり、もう少し大きなケラップという竜を膝に抱いていた。ケラップはイタチ似でイタチよりずっと胴長。足が短くてパツと見は毛むくじゃらの小さな龍。

二二と同年代の子はいない。みんな少し年上か年下。そしてみんな優しい子ばかりだった。自分の喋り言葉は乱暴だから女の子達と話すときはちよつと気を付けなきゃと、彼女が気を使ってくる。だから彼女は男の子と遊ぶことが多かったし、そもそも独りで居留地や草原を探検して歩くことの方がずっと多かった。

今日は女の子だけを集めて何かの授業がある様子。まず、頭首リコチャキが皆の前に立った。難しい顔をつくって、話し始めた。

「この宇宙に在るモノは、全て、陰陽の二つに別つことができる。全てのモノは陰陽どちらかの性質を帯びている。一つ、想像してごらん。空と海を。水平線の彼方まで進んでも、どちらかがどちらに混じることもなく、ずっと美しい対比を描いている。どちらかがどちらを支配しているわけでもない。どちらかが勝っているわけでもない。これはもつとも美しい喩えだ。空は陽、海は陰に属する。陰と言うとあまり良くない印象を受けるかも知れない。なんだか暗く湿っぽい感じを。しかし今話したとおり、陰とはまったくそんなモノではない。陰とは『生み、育む』モノ。大地、海、地球、月、水、そし



て、君たち女性も陰に属する。対して陽は、空、風、太陽、光、空  
気、男、等。そして我ら竜使いの使う術は、竜使いの術のみではな  
い。陰に属する術がある。ではここで先生を代わろう」

そう言つてリコチャキはさがつて、みんなの後ろに立ち、代わり  
にニコチャキ母さんが照れ笑いを浮かべながらみんなの前に立つた。

「はい。では説明します。竜使いの男は、竜使いの術しか使えませ  
んが、私達女の子は、もう一つ術を使えます。死霊秘術です。これ  
は、陰に属するというよりも、闇に属する魔法。だから、使えるの  
は私達女性だけなの。陽に属する男性は使えません。使い方はとつ  
ても簡単。粉をまいて短い呪文をとなえるだけ。そうするとその土  
地に眠る霊を召喚できたり、亡骸を蘇らせたりできます。結果は四  
通り。霊が召喚されて霊体として現れる。霊が召喚されて物象に応  
化して現れる。埋まつていた骨が土塊をまとい生前の姿と似た姿で  
現れる。埋まつていた骨が体組織を再生して動く亡骸として現れる。  
最後のはちよつと気持ち悪いですね。どの結果になるかはやってみ  
ないと分かりません。加えて、そこにどんな霊が眠っているかも。  
さて。ここまでではいいですか？」

みんな頷いた。怖がっている子もいた。霊とか亡骸とか聞いて。  
怯えた顔を友達と見合わせている子も。けれどニニは逆だった。ワ  
クワクワしていた。

これ、本当なんだ。嘘みたい。こんなことが全部本当だ  
なんて。竜使いだけでも吃驚なのに、今度は死霊術。これが全  
部本当のことだなんて。私、今、魔法の授業を受けてる。  
ワクワクが止まらなかった。

ニコ母さんの話は続いた。

「使う時はとっても簡単。けれど粉をつくるのはとってもとっても

難しいの。粉の製法はいつたん脇に置いておいて、まずこのことから理解して。闇に属する魔法だから、使用には細心の注意が必要です。闇にのみ込まれてしまわないように。闇に関わればともすれば人は光を見失います。でも大丈夫。今のあなた達の優しい真っ直ぐな心を常に持つていればちつとも怖がることないわ。優しい心は常に闇に勝ります。基本的な接し方はこう。闇に関わるのではなく、闇の作用をちよつとだけ利用してやるの。じゃあ、いいかしら。具体的な幽体反応についての説明に入ります」

みんなが頷くのを待つて、二コ母さんは話を続けた。

「三魂七魄とって命には十の魂魄が宿つています。このうち三魂は次の生へ転生するけれど、七魄は骨とともに残り、この世に留まつていてと言います。そんなに沢山あるのかどうか本当の処は知らないけれど、私達が使役するのはこの七魄の部分。土中の骨に宿るそれに働きかけ通常起こり得ない反応を引き起こすには

「

残念ながら、二二に何とか理解できたのはここまで。その先の話はとても難しかった。けれど二二はちつとも残念がったり、悔しがったりしなかった。にこにこしながら話の続きを聞いた。楽しくて焦らなくても時間は沢山ある。いつかきつとできるよつになると思つた。

二十一。「竜使いの民／旅立ちの訪れ」

彼らが沢山飼っている山羊。山羊もまた竜類ということだった。「へえ……」とニニは答えた。山羊が竜なんて変、と思ったが、山羊は頭に羽根飾りをつけていた。草原で時々見かける野生の鹿（と教えてもらった）も、頭に羽根飾りをつけていた。

居留地にも頭に羽根飾りをつけている竜がいた。孔雀竜と呼ばれていた。孔雀（勿論ニニは孔雀について正確な記憶などなかったが）と呼ばれるくらいだからとても派手な羽根飾りだった。ブワツと広げるととても綺麗だった。

そんな竜を目にしているから、羽根飾りがある以上、山羊も竜に違いなかった。

しかし山羊の番をしている犬。これは、犬だった。彼女がこの草原で目を覚まして、以来目にしてきた中で、唯一、まったく違和感のない生き物。これは犬に違いないと自信を持って言える姿。

「あんた知ってるわ。犬でしょ」そう言うと、  
犬は「わん」と答えた。尻尾をふって嬉しそうに。

\* \* \*

ニニが眠ったあと、その寝顔を見ながら、ニコ母さんはリコ父さんに言った。

「私は思つのですよ。こんなことを願つのはとってもいけないことだと思つのですが、このまま二二の記憶が戻らないでくれたらと……」

「それは……私も同じ思いだが……」

その言葉を聞いてニコ母さんは嬉しそうに微笑んだ。けれどニコ父さんは口ごもりながら難しい顔をして続けた。

「だが、そんな事を考えてはいけない……。きっと今頃、二二の両親は必死に二二を捜しているだろう。それを考えれば、早くご両親の元へ帰してあげなければいけない……」

「その通りですね……」ニコ母さんは寂しげに言った。

「もうすぐ夏が終わる」

「はい……」

「お前は皆と一緒に里へ帰りなさい。私は予定通り、数人を引き連れてクムラギへ行く。物資の調達が目的だが、二二を連れて行こうと思う。途中の村で聞いて回ろう。二二を知る人がいないか」

「そうですね……」

ニコ母さんは寂しげに微笑み、次いで寝返りを打ってお父さんに背を向けて、気付かれないように袖で目を擦った。

翌日、リコ父さんから話を聞いたニ二は小躍りして喜んだ。大都  
邑って何のことだか分からなかったけれど、クムラギがとも素敵  
な所だということは分かった。そこでしか手に入らない灯火の粉や  
名産品の刀剣を買いに行くらしいが、ニ二には着物を買ってくれる  
という。

「クムラギの着物はとっても綺麗なのよ」

そう言ってお母さんが持って来て見せてくれた着物は、みんなが  
着ている物と形は同じだったけれど、うっとりするほど手触りの良  
い絹製で、染めと刺繍で綺麗な模様が描いてあった。花と竜鳥。

「わあ……」ニ二は目を見開いて。自然と口をついて出てきた言葉  
は。

「スカジャンみたい」

「スカ……?」

「ジャン……?」

怪訝な顔で問い返したりリコ父さんとニコ母さん。けれどニ二は、  
自分で言ったのにスカジャンが何かさっぱり憶えていなかった。首  
を捻っている。

「気に入った?」ニコ母さんに聞かれて、

「うん。とっても」ニ二は満面の笑顔を返した。

その日の内に出立の準備がなされ、出立は翌日と決まった。頭首  
リコチャキと五名の若者がクムラギへ向かい、他の人達は竜使いの  
里コロナエへ帰省する。そこはラエモミ（真珠岬）よりもずっと西  
方だという。ラエモミが何処かニ二にはさっぱり分からなかったけ  
れど。

その夜は、お互いの旅の無事を願って、ちよつとした宴が催された。ご馳走が出て、大人の男達はお酒を飲んだ。大きな焚き火を囲んで。

ニニはずつとニコ母さんの隣に座っていた。体をくつつけて。しばらく会えないから。ニコ母さんは腕を回して優しく肩を抱いてくれていた。

「お別れしても私を忘れないでね」

ニニはどうしてこんなこと言うんだろうと、不安になった。

「忘れるわけないよ。だって大好きだし」言いながら照れたけれど、ニニは大好きだと伝えることができて嬉しかった。ずっと言い続けた。ここで暮らし始めてからずっと。

ニコ母さんは嬉しそうに笑って、指先で目尻を擦った。そんなニコ母さんの様子には気附かず、ニニは満面の笑顔で続けた。

「コロナエで待っててね。私も早くコロナエへ行きたいなあ」  
クムラギも楽しみだけれど、竜使いの故郷コロナエへ早く行ってみたかった。きっと素敵な場所に違いないから。

満天の星空へ昇らんばかりに、舞い上がる火の粉。パチパチとはぜながら。白く瞬く星々の中へ昇り、明滅して消えてゆく赤い小さな炎の欠片。煌めいては暗がりへ消えて、沈んでいく。その様子をつっこり微笑んで眺めながら、ニコ母さんは言った。言いにくそうに。

「あのね……。もしもね……。もしもニニの記憶が戻って……。本当のお父さんお母さんのことを思い出したら、私達には何も遠慮しなくていいからね。本当のお父さんお母さんと一緒に幸せに暮らし

てね。でも、私達のこと、時々でいいから思い出してね」

ニニは立ち上がった。拳を握りしめた。お母さんが何を心配しているのか分かってしまった。「わたし、私……」ポロポロと涙がこぼれた。

「私、頑張る。ぜったい何も思い出さないっ」

ふぐ、ひぐ、と嗚咽が漏れた。吃驚したニコ母さんに抱きしめられた。彼女はこらえきれなくなり泣きじゃくった。

「私、ニコ母さんの子供がいい……」

彼女は知っていた。過去の自分の事はまったく思い出せない、けれど自分にはお父さんもお母さんもいなかった、と。

リコとニコが私のお父さんお母さん。私をここへ連れてきてくれたのは、きっと、神さま。

翌日。

竜使いの人々は出立した。それぞれの方角へ。

高原から天幕が消え去った。彼らがいた痕跡は何一つ残っていない。ただ、焚き火で焼け焦げた地面だけが、そこに人が暮らしていたことを物語っていた。

二十二。「お客さん」

お廟の廊下で、ユタはその女の子に会った。歳は彼よりも少し下で、買ったばかりと思われる綺麗な着物を着ていた。花と小鳥の可愛い柄が、可愛い顔にとてもよく似合っていた。壁にかけられた筒灯を物珍しげに見ていたが、彼の方をふり向くと言った。

「あんた、この子？」

ユタはムツとした。この女の子は口の利き方を知らないと思ったが、優しい彼は許してあげることにした。何しろ年下。そのことだけで、彼は妹と重ねて見てしまう。

「この子というわけじゃありませんが、ここで働いている者です」  
大人な受け答えのお手本を見せたつもりだったが、相手はあまり感心してくれた風はなかった。

「ふーん……」と答え、筒灯に目を戻した。「これ、ランプでしょ？」

ユタは何度も聞いていた。アオイが筒灯のことをそう呼んでいるのを。だから物知り顔でこう答えた。

「そうです。筒灯というのが一般的ですが」

「なあんだ。ツツトウってランプのことだったんだ」

そう言って、屈託ない笑顔を見せた。つられてユタも笑顔を返し



た。笑った顔は本当に可愛らしかった。

「超しぶいわねえ」

その言葉もユタは知っていた。だからこう答えた。

「やばいでしょ」

すると相手は訝しげに眉をしかめ、次いで呆れた顔で笑った。

「やばいってほどじゃないし」

馬鹿にされたように感じ、やっぱりこの子は生意気だと思った。

「そもそも、君は誰で、どうしてここにいるの？」

年上の威厳を示してそう言うと、

「私はお父さんと一緒にここに泊まるのよ」と答えた。

「じゃあ君が」

竜使いの民の頭首リコチャキが、娘と一族の者数名を連れてお廟に逗留することは聞いていた。

「竜使いの頭首、リコチャキの娘さん？」

「そうよ。よろしくね。二日ほどお世話になるけど。あんだ、ここのお手伝いさんなんですよ」

認識を間違っているうえ、その言い方には語弊があると感じた。今度こそまじでムツとしたユタ。そこへリユウが通りかかった。

「ユタ。どうしたの？ その子は誰？」

ユタが答えるより先に、女の子が答えた。

「私は二二チャキ。あんたは誰？ あ、そう言えば、さつきから話してたけどあんたの名前も聞いてなかったわね」

「僕はユタミツキ。君より少し年上です」

かろうじて年上であることと、礼節あるものの言い方をアピールしたユタ。しかしそれはこの相手にはまるで問題ではなかった。としか思えなかった。

「僕はリュウミチモリ。ユタとは親友で同い年です」  
困惑気味の顔でリュウも名乗った。

「あ、そう」

名前を覚えてくれた様子はない。その後の会話でもあんたと呼ばれたユタとリュウ。

二人はため息をついて顔を見合わせた。

何しろ竜使いの頭首リコチャキがお嬢さんを連れてやって来ると聞いて、勝手に、少し年上の綺麗なお姉さんを想像していた二人。期待を裏切られたうえに取り扱いに困る子。

けれど優しい二人は、多少生意気でも年下の子には親切にしてあげるべきだと考え、お廟の中を案内してあげることにした。

\* \* \*

「なるほど。では、ここに来るまでの道中、その子を知る者は誰一人いなかったと、そういうわけですか」

「ええ。まことに不思議なことですが。どれほど歩いたとしても子供の足。きつとすぐ見つかると思っていたのですが……」

ユタとリュウが二二に翻弄されていたその同じ頃、廟堂の一室でリコチャキとタパタイラが話していた。二二のことを。

「両親が見つかるどころか、誰一人知る者がいなかったと」

「ええ。一人として……」

タパは静かに頷くと、いつもの穏和な笑みを浮かべた。一人の男を思い浮かべ。

「ここクムラギにも、似た境遇の者が一人現れた。今、この廟堂で暮らしておる。アオイセナという剣士。その者、剣士でありながら、異例づくめのケイを与えられ、その働きたるや、その一風変わった剣術と相まって、比ぶる者なき有りよう。おそらくは、聖女マナハナウラ誕生に始まる定めのために、定めを結実へと導くため、天が遣わした者。そう、私は思うておる」

「ほう……そのようなお方が……」

「そう。故に、私は思う。リコチャキ殿。そなたのもとに現れたその幼き子も、長じてはこの定め深く関わる勇者となるのではないかと。両親の見つからぬのがその証拠。そして時折もらす奇異なる言葉、まるでフィオラパと話しているような。それもまた天の遣わした者である証拠ではないか」

「なんと……」リコチャキは言葉に詰まった。「では、あの子は、定めのため天が遣わした者だと？　それが私如き者のもとに？」

「うむ。断言するには早計かも知れぬが、我が私見ではそうとしか

思えぬ。故にリコチャキ殿。それが天意ならば、そなたの術を、余す処なくその子に伝えるが良い。その子がひとりとなりし時、定めを導く助けとなるはずである。なぜならば、天はそれを予見して、そなたを選び、そなたのもとに遣わしたはず故」

リコチャキは頭を垂れた。床に拳をつけて。胸にこみ上げるものがあつた。それが瞼に滲み。伏せた目からポトとこぼれ落ちたモノが床を濡らした。そして目に宿つた強い光。

「タパ殿。ありがたきお言葉。我が術はもとより、我妻ニコチャキの術も、余す処なく、あの子に伝えましょう。この定めの一助となるべく」

「二十三・「マリコラギ」

「ここがマアシナラギさまのお部屋です」

ユタの案内でマアシナの部屋へ入ってきた三人。祭壇の神像を見た二二は。

「わあ……綺麗な神さま」瞳を輝かせた。

そんな表情を見ると、やっぱり年相応に感じてしまい、妹と重ねて見てしまうユタ。優しい口調で説明を続けた。

「以前はこの廟堂でも、他の廟堂と同じようにラアテアさまを祀っていたのです。ですが聖女さま誕生以来、マアシナさまを祀るようになりました」

「へえ……聖女……？ ラアテア？」小首を傾げた二二。「私達はテアラギさまを毎朝拜んでいるわ。テアラギさまとラアテアさまって違うの？」

ユタとリュウは顔を見合わせた。「ああ」と。

「それはマリコラギさまですね」

「マリコラギ？」不思議そうな顔をした二二に。

「マリコとは先住民の言葉で、夜明けの光のことです。テアラギさまの本名のお名前は巫術師の方しか知りませんが、もとは暁の女神

さまでした。ですから昔はマリコラギさまと呼ばれていたそうです。それが太陽に抱擁される説話から、見えない女神、空に白道をえがく女神という意味合いに変化したのです」

「へえ」感心した顔附きになった二二。にっこり笑ってユタの顔を見上げた。

「あんたって物知りなのね」

相変わらずの「あんた」呼ばわりは気になったが、ユタは少ししい気分だった。リュウも横で微笑んでいた。

そこへガラツと扉が開き。

「ん？」

入ってきたのはアオイだった。そこにいた三人を見てキョトンとした。ユタはすぐに気を利かせて言った。

「あ、これから黙想なさるのですか？」

「ああ。そのつもりだったんだけど……。お邪魔だったかな？」

知らない女の子を挟んで談笑しているユタとリュウを見て、アオイも気を利かせた。ユタが説明した。

「竜使いの頭首リコチャキサマのお嬢さまに、お廟の中をご案内して差し上げているのです。ここはもう出ますからどうぞ使われてください」

「へえ。そうなんだ。でも」俺が出直してきてもいいんだぜ、と続

けようとしたアオイだったが、そこに偶然来合わせた女性。

「あら」そこにいた三人と一人を目にして、「これは何の集まりかしら？」にっこり微笑んで言った。

「あ、えっと……」

慌てて話そうとしたアオイ。しかし慌てたあまり言葉が続かなかった。ユタが助け船を出した。

「リコチャキさまのお嬢さまをご案内していたのです。アオイさまはこれから黙想なさるそうです。リリナネさまもご一緒されてはいかがですか？」

アオイは感じた。ユタはちょっと気を利かせすぎだと。そんな言い方をしたらリリナネは固辞するに決まっていると。案の定、リリナネはこう答えた。

「あら。お邪魔しちゃ悪いから私が出直してくるわ」

慌てて言ったアオイ。顔を赤くして。

「あ。いえ。俺が出直してきますから、どうぞリリナネさんが先に」

そんな様子の二人を後に残して、ユタとリュウは二二を促してマアシナの部屋をあとにした。部屋を出てユタは二二にこう説明した。

「あのお二人は、今、とても微妙な状態なのです」

「ふーん……。変なの……好きあつてみたいなのに」二二は鋭かった。年の割にませてもいた。しかし関心事は違っていた。色恋沙汰はどうでもいいみたいで、それよりも。「でも、とってても綺麗な

女の人ね。私も大人になったらあんな綺麗な人になりたいなあ」

ユタもリユウも「きつとなれますよ」と言いかけた言葉をのみ込んだ。素直にそう感じたのだが、なんだかお世辞みたいで照れくさかった。男のくせにおべんちゃらを言っつては格好悪いと。だいいち好きかと思われてしまうと。代わりにこう説明した。

「あの人は女性ながら大魔導師さまなのです」

「へえ。ますます素敵。憧れちゃう」

ユタは上機嫌になり、ますます饒舌になった。

「しかもプレルツを二つも使えるのです。プレルツを二つ使える魔導師さまなんて、三百年に一人いるかないかです。シュスさまでも、一つしか使えないのですから」

「へえ……」ますます感心した顔付きのニニ。しかし。「プレルツって何？」

「プレルツというのは、上級元素術の中でも、ツフガが厳に使用を戒めている特別な術のことで」

「ツフガ？」

「魔導師と巫術師のことをツフガと言います。古いしきたりですな。がった組合みたいなので」

「へえ……それって魔導師ギルドのこと？」

「ギル……？」



「……ド？」

「あれ？ 違ったったかしら……」

ユタとリュウ二人で、プレ（呪文）とケイのイロハからプレルツのことまで説明した。廟堂の方々を案内して歩きながら。

厨房の前を通りかかったときだった。年上の子とラナイナライが何やら困った顔で話し込んでいた。ユタとリュウを見ると、年上の子は「ちようど良かった」と言った。

「おつかいを頼まれてくれないか？」

「どんなですか？」

問い返したユタにラナイナライが詳しく説明した。

「リコチャキサマのご一行の夕食に、シシ肉を出したいのだけれど、この近くはあいにく品切ればかりで」

年上の子が言った。

「お前達で探してきてくれないか。どうしてもなければ、森側の獵師さんの村まで行ってみたら？」

「ええ。いいですよ。僕にはうつつつけですね」

ユタは答えた。何しろ彼は（武家の子であるリュウや他の子達と違い）もとは木こりの子。その界限は彼の生まれ育った場所。

ラナイナライが少し心配な顔をして言った。

「大丈夫かい？ 遠いから気をつけて行ってくるんだよ」

「ええ。全然大丈夫ですよ。リュウ、行こう」

と、行きかけたところで、当然の如く二人の後ろをついて来た者。

「あれれ」 氣附いたユタとリュウがふり返ると。

「何？ 私は行っちゃ駄目なの？」

二十四・「おつかい」

廟堂の玄関を出ると、二二は口笛を吹いた。指で輪を作り唇に当て。高く綺麗な音が辺りに響き渡り。すると。

小さな生き物が素早く駆けてきて二二の体を駆け上がり肩に乗った。四本の足は鳥そっくりで、体は少し胴長。平べったい頭を二二の頬にすり寄せた。「うふふ」と二二は嬉しそうに笑った。

「へえ……」感心したユタとリュウ。「それも竜なの？」大人ぶつたしゃべり方が引つ込んだユタ。子供っぽい素の言葉が出た。

「うん。パルプという竜類。私の竜。リコさんにもらったの。名前前はモコよ」

二二はモコの頭を撫でながら言った。

「いいなあ……」

心底羨ましいと思ったユタとリュウ。何しろ、犬猫さえ飼ったことがない二人。しかしさらに二人を羨ましがらせたモノは。

門の脇につながれていた五頭のオオカミ。馬とはまるで違う、まさに竜と呼ばれるにふさわしい勇姿。美しい純白の毛並み。長い首、引き締まった細い躰、尾。神獣の龍のようだが、龍よりずっと長い四肢。体横に膝をはって突き出ている。

さらに。オオカミとは別にもう一頭いた。これぞ竜使いの竜と言え、戦竜が。

「すごい、爪……」目を丸くしてリュウが言うと、  
「一本だけすごく長いんだね……これで刺されたらきつとどんな動物でも一撃だよ……」ユタも感心して言った。

二二は二人に感心してもらえたことが嬉しくて仕方ないみたいで、  
「お父さんの竜よ。色もとっても綺麗でしょ」「自慢げに言った。

「うん……格好いい……」  
今度生まれ変わったら絶対竜使いが良い、二人の少年はそう思った。

門を出るところで、再びアオイと一緒にになった。

「ん？」アオイは言った。「何処に出かけるんだ？」

「シシ肉を探しておつかいに出るのです」ユタが答えた。「アオイスamaは？」

「うん。俺は稽古に行こうと思って」

「そうですか」

しかし門を出たところでアオイは捕まった。待ち伏せされていた。ルル・オシヌミに捕まったアオイをあとに残して、ユタとリュウは二二を連れて北へ向かった。

「アオイスamaはとってもおもてになるのです」

ユタが言うと、二二は後ろをふり返りつつ言った。

「あんなブリッ子は私嫌いだなあ……さっきのお姉さんの方がずつと好いの……」

「ぶり？」

「うん。ブリッ子」

「そうですか……」

そう答えてユタはリュウに小声で聞いた。「聞いたことある？」  
リュウも小声で答えた。「ないよ。どんな意味だろう？」

「多分あまり良い意味じゃないね」

「みたいだね。どうしてだろう。おしとやかでとっても優しいお姉さんなのに」

二人は首を捻った。

\* \* \*

その同じ頃。クムラギより遙か南方。昔蜥蜴の巣窟である太古の森を越えた先の渓谷にある蛇頭族の集落。岩肌に穿たれた無数の巢穴に、張り巡らされた綱の橋。本来ならば数千の蛇頭族の兵士と王族がこの渓谷にいるはずだった。

シュスらは肩すかしを食らった気分だった。もぬけの殻とはこのこと。いたのは二十匹ほどだった。しかも戦うことなく逃げ去った。宝玉のたぐいなど、彼らにとっての宝物は持ち去っていたが、千年星の欠片はさほど大切なモノではなかったのだろう。残されていた。

勞せずして目的の呪文材料を手に入れた一行。困惑した顔を見合

わせた。

「うーん……なんだか物凄くないやな予感がするな」少し戯けてカタジニが言った。口調は戯けていたが目は真剣そのものだった。

アズハナウラはできるだけ冷静に考えて、自分の考えを口にした。「しかし蛇頭族は知能が高い。容易には悪龍の影響を受けぬはず。現に今まででも、蛇頭族が街や村を襲ったという話は聞いたことがない」

「悪龍誕生以来、起こるはずのないことが次々容易に現実となっている」

イオワニはいつもの癖で、眉間皺を指先で押さえ、しぶい顔を作り言った。

「大急ぎでクムラギに……戻ったところで、手遅れだろうな……。まあ、クムラギへ行ったとは限らんが……が、状況から考えたら、クムラギかな……。やっぱり……。そうか。俺はようやく合点がいったぞ。蜥人南下。南下してきたのに攻撃は散発的で大々的な侵攻はなかった。奴らは待ってたんだ。違うか？ お前達はどう思う？俺の考え過ぎならそうだと言ってくれ」

アズハナウラが真面目な顔で答えた。「考えすぎであることを願おう」

「そりゃ」イオワニに代わってカタジニが言った。「全肯定じゃないかっ。否定意見を言え」

「うーむ」シユスは腕組みをし、遠く空を見上げた。「俺としては、気を利かせてリリナネが残るよう仕向けたのだが。武人らに言い含めて……。しかし俺が残るべきだったか……」

「ほんとに貴様が一番アレだな。貴様はアレの刑だ」カタジニは懐に手を入れた。

「アレは勘弁してくれ」まったく表情を崩さずシユスは言った。

「しまった。カタパンを忘れてきていた」とカタジニ。

「とにかく」イオワニが割って入った。「まんざいをやっている場合じゃない」

「なんだ？ まんざい……？」と、怪訝な顔になった一同。

「アオイが言っていた。こつこつやりとりをマンザイと言うそうだ」

「ほう……」と、唸った一同。そして一人の男の存在を思い出した。その男がクムラギにしていることを。

「アオイがいたな……」

「そうだな」

皆、祈るような思いで、北の空を見上げた。彼らが見上げた空の、そのずっと先の空の下に、クムラギはある。空の底に横たわるようにして。その巨大な街の命運は一人の女魔導師の双肩にかかっている。もしもイオワニが危惧したとおりの事態となったら、彼女一人ではとうてい護りきれない。

アオイ。リリナネを助けてやってくれ。





## 二十五・「男の子」

そこも、悪龍誕生以前は防壁の外だった。北部森林地帯を生活の糧としている人々の集落。木こりや、炭焼きや、猟師の集落が点在する界限。しかし現在は防壁が築かれ、森とは完全に別たれている。ユタミツキがここを訪れるのは随分久しぶりのこと。

彼の育った家は今はもう無い。小さな畑になっている。影も形もないが、彼はそれがあつた場所へ行くことができない。この区画に足を踏み入れることはできても。

それは、とても勇気が要ること。つらい現実と向き合わなければならぬ。だから避けている。

けれど。時々我慢できなくなって近くまで行ってみる。会えるような気がして。もしかしたら全部悪い夢で、帰ってきたら家は元通りで、扉を開けるとお父さんとお母さんと妹が、「おかえりユタ」「おかえりお兄ちゃん」とむかえてくれる気がして。

けれどそれは勿論幻想に過ぎず、その度現実を目の当たりにしてしよげかえり、大河ラーのほとりでこっそり泣いて帰る。誰にも見られないように。独り、膝を抱えて。前回は溺れていたアオイを見つけた日だった。

それ以来ここへは来ていなかった。

今、数ヶ月ぶりにここに来て、感じた。以前とは違う自分がいることに。

勿論、まだ家のあった場所には行けない。けれど歩いていけば何処にでもある、思い出の場所。お母さんとつくし採りした土手。妹とバツタを追った野原。お父さんの後ろを歩いた森への道。歩けば鮮明に思い出す。きのうの事のように。三人の面影を。けれど以前のように胸を締め付けられるような辛さはない。

それは時が癒してくれたからでも、彼がその人達を忘れてしまったからでもない。彼はそこを巣立ったのだ。

生者と死者は別たれる。生きている者には理解できない境界線で。その人達は時の流れから姿を消し、見えない境界線の向こう側へ行く。世界中の何処を捜しても、その人はもういない。

どれほど悲しくともその人達は時の壁の向こう側にしか存在せず、彼は未来を生きななければならない。それを理解した。

リュウミチモリは、友達のそんな内面の変化を、敏感に感じ取った。けれど何も言わなかった。そこは男の子。それが男の友情だと幼いなりに思っていた。

しかしまったく事情を知らない二二はまるで遠慮が無かった。と言うよりも、容赦なかった。知りたいことは訊いた。

「あんたここに住んでたの？」

「そうだけど」相変わらず生意気だなあと感じながらも律儀に答えるユタ。

「へえ……。どうしてお廟の召使いになったの？」

「ぶつ。勘違いしてるみたいだからちゃんと教えてあげるけど、召使いじゃありません」ユタは年下の子をいさめるお兄さん口調で言

った。

「お廟で働いているのは、みんな武家の子弟で、お廟で読み書きや神さまのことや礼儀作法を学ぶのです。お手伝いしながら」

「へえ。そうなんだ。じゃあ、どうしてあんたはお廟にいるの？  
だって、獵師の子なんですよ」

「ええ。まあ……僕の父さんは獵師と木こりと両方やってたけど……」

「あんたの家は何処なの？」

「僕の家は反対側のもっと向こうの方です」

「寄らないの？ せっかく近くまで来たのに」

さすがに返答につまったユタ。みかねてリュウが口を挟んだ。「あの……。ちよつと、いい？」そう言つて二二を手招いてそこから連れ出した。二二は「なあに？」と言いながらついていった。

一人残されたユタは、リュウが上手いように説明してくれるだろうと思つた。別にいいや。と。少し離れた場所で話している二人を見て思つた。

「おや。ユタじゃないかい」

ふり返ると顔見知りのおばさんだつた。

「やあ。こんにちは」

「元気でやってるみたいだね。噂は聞いているよ」

「え？　どんな噂なの？」

「タパタイラ様のお廟でとつてもお利口さんに頑張ってるって。それから、ほら。例のアオイセナ様ととつても仲良しで本当の兄弟みたいだって」

「ほんとに？」

ユタは照れ笑いを浮かべた。そんな嬉しい噂ならもつと聞きたかったけれど用向きを思い出した。

「シシ肉を探してるんだけど。最近仕留めた人いない？」

おばさんはうーんと唸った。

「あいにく聞かないね……。そうそう。きのうマシキ爺さんが森に入ったから今頃仕留めているかもだよ。シシ肉だったら赤ジシでも大ジシでも良いんだろ」

「うん。大ジシだったら運ぶのが大変だね。マシキお爺さんならきつともう仕留めてる頃かも」

「爺さんの猟師小屋は知ってるだろ？」

「うん。何度も遊びに行ったもの。色々教えてくれてありがとう」

「お礼なんて言わなくていいよ。それよりたまには遊びに帰っておいで。でもってしっかりお務めするんだよ。真面目に努めれば武家に奉公できるかも知れないし。そうなりゃ大出世じゃないか」

「うん」曖昧に笑って調子を合わせたが、出世とかそんなことはどうでもいい顔付きのユタ。

笑顔でおばさんと別れたとき、二二とリュウが戻ってきた。二二はわんわん泣いていて、リュウは困惑していた。

二二はヒックヒックとえずきながら、何度も「ごめんね。ごめん」と言った。リュウは小声で「ごめんよ。ユタ。全部話しちゃった」と言った。

ユタは友達に「いいよ」と答えた。それよりも年下の女の子に泣かれて困った。泣くような子だと思っていなかったから余計に。

「ごめんなさい。私、全然知らなかったから。あんたが、その……そんなに……辛いことがわああああん」

そう言っつてわんわん泣く二二に、「いいよ。知らなかったんだから」と慰めた。

二二は二二で、何故だか分からないが、父親や母親と死に別れた辛さや哀しみを自分の事のように理解できた。彼女はその哀しみを知っていた。だから涙が止まらなかった。

「もういいですよ」ユタは全然怒っていなかった。彼は懐かしく思っ出していた。妹のベそかき顔を。

「全然、気にしてないから。それに、女の子なんだから色々訊きたがるのが普通です。それよりも」彼は二二が泣き止むことを願って話題を変えた。

「今、知り合いのおばさんから聞いたんですが、マルマシキ爺さんというところいら辺りで一番腕利きの猟師さんが獵に出ているそうです。きつと今頃は獲物がどっちやり、ですよ」

ずっと黙っていたリユウが口を挟んだ。「そのお爺さんが獵をする場所は分かるの？」

「勿論」ユタは答えた。「マシキ爺さんの猟師小屋は何度も遊びに行ったことがあるから」

「森に入るの……？ 私達だけで？」

涙を拭きながら二二は聞いた。

ユタは笑って答えた。

「うん。この森には危険な獣はいないから。それにマシキ爺さんの猟師小屋は、みんな子供達だけで遊びに行くよ」

「へえ……」

三人は森へ向かった。その後ろ姿を、数人の村人が見ていた。その時は誰一人、案じていなかった。

## 二十六・「クムラギ大襲撃／第一報」

この大都邑は北から北東を広大な森に面している。

西南を大河ラーに接し、北西には平原が広がっている。以前、小鬼族が群れて襲い来た平原である。

東から東南一帯も広大な平原に面している。その平原にはテコテコ川が流れていて、大河ラーにそそいでいる。西南の草原が何もなただの丘陵地であるのに対し、東の草原はテコテコ川流域に添って農地があり、農民や漁民の集落が点在している。テコテコ川は古くはワイテコテコと言い、ワイテコとも呼ばれる。白い川という意味である。

人が行き交うために橋がある。簡易なものからしっかりしたものまで、いくつも。

第一報は、彼らからもたらされた。ワイテコ流域で暮らす人々から。クムラギへ逃げ込んできた彼らは言った。蛇頭族の大群が攻め来た。簡易なものは勿論、壊せる橋は全て壊してきたから少しは時間稼ぎができるだろうとも言っていたという。

アオイがその第一報を聞いたのは道場で稽古中のこと。すぐに支度をした。オニマルサザキベと共に。

「蛇頭族って見たことないけど」アオイに訊かれて、

「蜥人よりも長手で手足が長い。首が長く蛇っぽい顔をしている」  
オニマルは簡潔に答えた。姿形は見ればすぐに分かることだと。それよりも。

「蠻族にあつては一番知能が高い。武術に長け戦術的にも手強いは

ず。小鬼族とは違う。用心しろ」

「はずって、どういうことだ？」

「蛇頭族が街を襲うなど前代未聞だ」

「なるほど……」

オニマルの説明を聞きながら、アオイはムカデの胸服をはおり、キトラを腰に帯びた。オニツカを履いた。オニマルもまた、白地の布に銀の刺繍の龍鳥の胸服をはおり、冠頭太刀の二ヶを腰に帯びた。足もとは戦履きでかためた。

そこへ第二報が飛び込んできた。

すでに東の防壁の門のうち三つが破られ侵入されていると。しかも蛇頭族と蜥人の混成部隊であると。

「門、三つか……。まずいな……」

唸るように呟いたオニマル。アオイにも伝わった。門が三つも破られたということはかなりの数の敵が入り込んだということ。これは、かつてない、今まで彼が経験したことのない市街戦になると。

伝令の少年は言った。

「皆様はすでに現地へ直行しています。リケミチモリ様とモモナリマソノ様が政治堂へ入られました。まずは伝令にて、その後陣頭にて指揮を執られます」

「ああ。分かった」オニマルは答えるとアオイをふり返った。「悪いが」

「ああ」アオイも分かっているようにすぐに頷いた。遠慮するな、先に行け、と。



オニマルは馬で来ていた。アオイは馬に乗れない。乗ったことがあつたかもと、以前乗ってみたが、絶対乗ったことない筈だと感じた。着座位置が想像より随分高くて、しかも意思の疎通がまったくできず、恐怖を感じた。もっと低くて思い通り走る何かがあつた気がした。乗れなくていいや、そう思った。以来乗っていない。

\* \* \*

リケミチモリを筆頭に政治堂へ集結したクムラギ武家の頭首ら。まずは正確な情報の入手に努めたが、次々もたらされる情報はいづれも混乱していた。比較的信用にたると、信頼できる情報にしばらく、現在分かつていることは以下の事柄。

すでに三つの門が破られ侵入され市街戦となっていること。

民間人の死傷者が多数出ていること。

敵は第二の区画の門を破る勢いであること。

敵の主体は蛇頭族が主であり、もっといえるはずの蜥人の姿が少ないこと。

「蜥人の主軍が何処かに潜んでいるはずだ」

「だが何処へ伏せる。森か？」

「まだはつきりしたことは言えぬ。ともあれ今は東側の守備を徹底すること」

「伝令を密に。伝令の人員を十分確保せよ。我らも急ぎ東へ。陣を」

リケミチモリがモモナリマソノに言った。

「俺は足手まといになるだろう。すまぬが先に行ってくれ。モモナリ殿。陣頭指揮は貴殿に頼む」

モモナリマソノは微かに口角をあげて答えた。

「足手まといなどと言つな。だが、リケ殿。指揮は俺ではなく、あの男に任せたい。俺の一存で決めさせてもらつてよいか？」

「良いが……。誰だ？」

「うむ」モモナリマソノは一つ頷いて、言った。多少気恥ずかしそうに。

「身内の身びいきと言われても仕方ないかも知れぬが……。だがしかし奴もそろそろ分かつているだろう。彼我の器の違いを。知つての通り冥界では元素魔法は使えぬ。故に自分が選ばれる可能性もあると考えているだろうが、此度の戦で思い知るはず。伯父としては可哀想に思えてならぬが。が、しかしだ。それは剣の技量に限つた話であり、俺の見るところ、大局を見て物事を判断したり兵を動かしたりなど、戦の指揮に関しては俺の甥の方が上だ。と、身内のひいき目かも知れぬがそう思う。リケ殿は如何に？」

笑みを浮かべたモモナリマソノにリケミチモリも笑みを返した。

「うむ。俺もそう思う。が、まずは此度の侵攻を防ぎ、二人とも無事に戦い抜いてくれることを願わねば。この戦で二人を失うようなことになればクムラギの損失だ」

## 二十七・「クムラギ大襲撃／東大路の激戦」

狂乱の蠻族の群れ。蛇頭族は長身でしかも首が長く人間より頭二つ高い。抜けている。暗緑色の肌、顔。目は蛇そっくりで虹彩も蛇のように縦長。鼻筋が通っていて、それはまさに言葉通りであり、顔面を左右に別つ鋭角な隆起。口は唇が無くパツクリと裂けている。その恐ろしい顔が逃げ惑う人々の背後から襲い来ている。

顔附きを見れば分かる。極度の興奮状態であり理性を失っていることが。他我に支配されている。

駆けつけた騎兵らは、逃げる人波が妨げとなり進軍が容易でない。馬を進めることができない。何とか蛇頭族の群れまで突き進み、干戈を交えても、斬馬刀を繰る敵に苦戦を強いられている。さらに蛇頭族の背後から蜥人の放つ矢が襲い来る。

そこへ駆けつけたオニマルサザキベ。状況を一瞥するや号令した。

「我はサザキベ家はオニマル。クムラギ参議の命を承けた。おのおの方。今よりは我が下知に従え」すでにここへ駆けてくるまでに、伝令が駆けてきて彼に並び、政治堂の命を伝えていた。指揮を執れと。

「先ずは民間人をこの区画から逃れさせよ。そののち門を閉じて敵を殲滅する。各々、奮迅せよ」

「応」と方々から声が響いた。

勇猛果敢に戦うクムラギの騎馬武人ら。しかし奮戦しても状況は

蠻族に有利。家々に逃げ込んでいる民間人も多くいる。そこへ押し入る蠻族。救わんとする武人ら。

「くっ」

唇を噛み、オニマルは馬を降りた。斬馬刀を操る蛇頭族に対し、馬上から太刀で戦うは圧倒的に不利だった。

「弓兵以外は下馬せよ。太刀、槍兵は下馬して戦え」檄を飛ばした。

道の中央。数匹の蛇頭族と対峙して渡り合うオニマル。アオイならばこう太刀を振るうはず、頭の片隅を掠めた。友よ、何をしている、早く来てくれ、とも。

二匹を斬り伏せ、背後から襲い来た蛇頭族に向き直った。しかし敵が早かった。かろうじて一撃を躲した。すかさず二刃目が襲い来る。躲せない。その時。

鞭のようにしなうて飛んできた長い腕。鎌のような長い爪が敵の胸板を貫いた。孔雀竜。頭頂部の冠から長い首背後につながるたてがみのような鶏冠をブワツと立てた。その背後にオオカミにまたがった龍使い頭領リコチャキ。そして同じくオオカミにまたがった五名の竜使いの若武者。

「我はコロナエの竜使い、頭首リコチャキ。クムラギの若き大将よ。わずか五名なれど、我らコロナエの兵も加勢する」とリコチャキ。

「ありがたき。礼を言う」とオニマル。

リコチャキが号令するやいなや、竜使いらはオオカミを駆けさせ猛然と敵に躍りかかった。

オニマルはオオカミの戦いぶりはじめて目の当たりにし、その破壊力に驚愕した。噂には聞いていたが、噂以上。通常の騎馬兵の比ではない。斬馬刀を巧みに繰る蛇頭族をもともせぬ素早さ。背の上の龍使いの意のままに駆け、食らいつき、あるいは爪で引き倒し、喉を、腹を食い破る。

そしてさらに素晴らしい働きを見せたのはリコチャキの孔雀竜。弓兵の蜥人を次々爪にかけ、なぎ倒し、喉を食い破り引き千切り。しかし。

斬馬刀を手にした蛇頭族に取り囲まれた。二太刀浴びて、それでもなお立ち向かう。しかしリコチャキは鋭く命じ、孔雀竜を退かせた。オニマルは竜を庇い、蛇頭族へ立ち向かった。リコチャキもまた、オニマルに並び立った。

状況は、狂乱のていで襲い来る蠻族の大群、逃げ惑う人々、それを庇い蠻族と切り結ぶ武人、竜使い。混乱の極みの目抜き通り。激戦の東大路。

その時。

人々、闘う人々、逃げる人々、誰も皆、その男の『残像』を見たに過ぎなかった。誰一人として、その男の動きを、跳躍を、連続した動きとして捉えられなかった。そもそも、いつ彼がここへ到着して、逃げる人々を庇い剣をふるっていたのか。誰も気付いていなかった。

ただ、血飛沫をあげ次々倒れていく蠻族を見て驚き、目を凝らし、そして気附いた。垣間見えては消え、現れては飛燕のように舞い、刀を振るう蒼い胸服の男に。



二十八・「クムラギ大襲撃ノアオイセナ見参」

ある者は蠻族から逃げていて転び、もう駄目だと観念した時に、敵背後に出現し真一文字に刀を振るった彼を見た。目を見張ったが次の瞬間には消えていた。いなかった。何処へ跳んだのかも分からない。

ある者は、斬馬刀を引き込み繰り出す蛇頭族のその動きの間隙をぬって、二回転して血刀叩き込んだその姿を見た。そして同じく、すぐに見失った。

またある者は目の前に出現し、出現したときには敵の心臓を刃で貫いて現れ、次の瞬間には消え去った陽炎の如きその姿を見た。

屋根の上で矢を射かけていた少年兵達は、矢を射るのをやめた。彼が何処に現れるか分からないからである。

「あ、あそこだよ」

「え？ 何処だい？」

「いや、もう消えちゃった。何処だろう」

「あ、見えた、あそこ」

「何処？」

「もうわかんないや。矢を射るのは完全にやめ。へ夕に矢を射てアオイさまに当たったら大変だから」

「だね」

通りには研ぎ師の口コオリノもいた。武人でもなければその義理もないのだが、騒動好きのこの男は、逃げる人々に手を貸すためにわざわざ駆けつけていた。

口コオリノもまた、アオイの姿をはつきりと目で捉えたわけでは

ない。けれど垣間見たその速さに、「やっぱりな」と頷き独りごちた。隣にいた見知らぬ人に言った。腕組みして、自慢げに。

「あの刀には秘密があるんだ。うん。そんなに聞きたいなら教えてやるが。実はな。重心が切っ先にある。そんな馬鹿なと思うかい？ うん。だがな。現にそうなんだ。刃は片刃で直刀。柄に反りがあり、肉厚で鎬高い。で、この鎬が切っ先へ行くほど高い。ほんのわずか。目で見ても分からないくらいだ。けれど振ると重心の所在がはっきりする。だから奴にはうつつつけの刀なんだ。速ければ速いほど、重心は切っ先に集約される。回転殺法ここに極まれり、つて処だ。見ただろ？ さっき奴は二回転して飛び込んで叩き斬ったぜ。アレは奴のためにある刀だ。で。そいつを研げるのはこの俺様だけだ。生半可な研ぎ師が研いたらアレを台無しにしちまう」

「ほう。そうかい。そいつはすげえな」隣の人は生返事をした。研ぎ師の自慢話よりも目の前で起きていることを見るのに夢中で。

しかしロコが解説したとおりのことを、アオイ本人が一番感じていた。

はじめて実戦で使うキトラ。しかしまさに水を得た魚。ずっと以前から使っていたかの如く手に馴染んだ感覚。円の運動理論を数段加速するその感覚。今までよりさらに早く、さらに重みを増したその切っ先。それを感じていた。

そして、その速さが、さらに得物の短さが、今までの彼になかった動きを可能にしていた。

宙を跳ぶ。彼は過去にそれを体得していた。記憶にはなかったが。自然と躰に出た。



敵を斜め袈裟に斬り裂き、その勢いもそのままに背後に片足ふりあげる。その勢いで宙を舞う。キリモミ飛行するかの如く。宙返りして敵の狭間を抜ける。着地するやいなや、コマのように回転し敵懐に飛び込み斬りつける。

さらに、移動呪で跳ぶ。

一回の呪文詠唱で、立て続けに三度から五度跳ぶ。時に空に跳び上空から情勢を見て取る。全ての敵と味方の位置を把握するため。

風を切り地上の敵背後に跳び、躰を廻し真一文字に敵の後ろ首を斬り裂き、次の瞬間には消え、ふり抜いた切っ先を別の敵の腹に深々と埋めて出現し、再び別の敵の背後に跳び、ふり返った敵が斬馬刀振りかざした時には、二回転して白刃叩き込んでいる。

次の瞬間には側方へ抜けている。円を描き。

双方から襲い来る敵。それを移動呪で躲す。抜けた先、目の敵を撫で斬って、跳躍、鬼津靴で地を蹴り宙を跳ぶ。何者も彼を捉えられない。予測不可能。たとえ空中の彼を斬馬刀が捉えたとしても、寸前に、移動呪で逃れる。

そして。

跳んだ先で、真っ直ぐ下方へ着地して、ゆっくりと躰を廻してふり返った。キトラをかけた。

その時には、いまだ続々と敵は押し寄せているものの、民間人は後方へ逃れ、武人達は敵前面に詰め寄せていた。形勢整っていた。

そして誰もが、彼を見ていた。言葉一つなく。敵と渡り合っている武人も。逃げていた人々も足を止め。ようやく姿を現したその男を凝視し。

アオイはこんな時何と言つか、臍に記憶にあつた。確か、自分の名を名乗り、「見参」とか、「参上」とか言う。確かそうだったと思つた。が、そんなことを言う人を実際には見たことなかつた。だから、喉まで出かかつていたその言葉をのみ込んだ。

ロコオリノが叫んだ。芝居見物よろしく。

「アオイセナ見参っ！！ よっ、この大立て役者っ！！ カミトケの如しとは貴様の事だっ」

どつと歓声沸いた。いまだ襲撃は激しくも。後方へ逃れた人々は勿論、干戈を交える武人らも。「見事」「クムラギー」と。

一斉に自分に向けられた声に顔を赤くしたアオイ。しかし少し残念に思つた。言つてもよかつたのか、見参。だつたらちよつと言つてみたかつた、と。

カミトケ 雷

二十九。「クムラギ大襲撃ノリリナネ、見参」

オニマルは悟った。冥界へ行くのは俺ではないと。

そこでは元素魔法は使えない。そこに月が無いからである。ケイに宿る元素魔法の力を開くには月の力を必要とする。故に冥界では元素魔法は使えない。

しかしそれをさっ引いても、器の違いを思い知った。

冥界へ行くのは、俺ではなく、アオイだ。

そして、まず間違いなく行くことになる理由も彼は知っていた。

アオイには話していないが、アオイが知っているのは、冥界で元素魔法が使えないこと、そしてそれをはじめとする幾つかの決まり事だけである。彼ら二人はあくまで予備の人選だが、どちらかが必ず行かなければいけない。そうなるであろう事が予測されていた。

記憶のないアオイは気附いていないが、この国の人間なら誰もが思い至る自然の理。

蛇頭族らが一斉に喉を鳴らしている。奇怪な呐喊の声。どるるる、くどるるる、奇声が響き渡る。

奇怪な声に負けぬようオニマルは声を張り上げた。よく通る若き指揮官の声、凜々しく戦場に響いた。

「アオイセナが道を開いた。今が時。各々つ、専心せよ」自らが最前線で太刀を振るいながら。

「応」方々から一斉に返ってくる声。

「弓兵は背後の蜥人を狙え」

「応」後方から、屋根の上から返ってくる声。

アオイが駆けてきて、横に並んだ。「オニマル」。友の名を呼んだ。オニマルは太刀振るう手を休めず、しかし笑って言った。

「遅いぞ、アオイ。待ちわびた」

アオイは真顔で答えた。

「えっ、と。すまない。そんなに遅かったか？」

「いや」オニマルは苦笑した。この男の、この愚直とも言える実直さは何処から来るのだらう、と。冥界入りの手柄をとられても、想い人をとられても、恨めない。憎む気にもなれない。良い友人。「逆の意味だ。早くて感心した」

「そうか」

最前線に並び立ち、二人はそれぞれの得物を振るった。それぞれの剣法で。アオイは時に移動呪を交えながらも、大きくは離れない。常に友人と共に戦った。二人は抜きんでていた。獅子奮迅の如く奮戦する、百戦錬磨のクムラギ武人の中にも、二人それぞれ剣技は、喩えるなら、オニマルは疾風、アオイは雷光。

オニマルも道場での木剣勝負と違い、型にはまらぬ粗野な剣となっている。女のように綺麗な顔に似合わぬ豪の剣。旋風巻き起こして敵に襲いかかる。

両名とも自分より身の丈高く腕も長い敵の懐に一瞬で飛び込み白

刃喰らわせる。首を飛ばす。腹を割く。返り血が胸腹を染める。路を染める。

オニマルのもとへひっきりなしに伝令の騎兵が駆けてきて、情勢を伝える。他の通りの状況を報告する。ここには見えないが、他二つ門が破られている。蜥人の主軍が何処かに潜んでいる。オニマルは戦場の全体を予測し、伝令に鋭く指示を発する。伝令が他の戦場へ駆けてゆく。

その間のオニマルはアオイが庇う。敵を近づけない。

自然、オニマルとアオイを中心とした戦線が形作られた。オニマル、アオイ、そしてその両名と並び戦うコロナエのオオカミ騎兵らを中心とした、堅牢な横の線。堅塁さながら敵の進軍をはね返す。

アオイはオオカミに舌を巻いていた。滅茶苦茶強えじゃねえか、と。お廟にいるのを見たときから、これがどうせアレだろうなと思っていた。自分の靴の毛皮と見比べて。そんな馬鹿なとも思っただが、大抵自分のそんな馬鹿なは外れるので、どうせそうだろうと。しかしその時の彼は鋭い一面も持ち合わせていた。

これは竜じゃなくてトカゲの仲間だよな……爬虫類……、独りごちた。が、誰にも言わなかった。トカゲに毛が生えてるわけないでしょう、ユタに言われそうだった。しかし。だったら剣竜型のものに毛が生えている理由も分からない。

まあ。俺には記憶が無いのだから仕方ない。それにしても記憶違いが多すぎるけれど。今の彼はそれで片付けた。何しろ戦場。集中しなければならぬ。

またぼうつとしてる。アオイ君。戦場のど真ん中よ。リリナネの声が聞こえた気がした。

最近は君付けで呼ばれることが多い。前より他人行儀でよそよそしい。勿論、友達同士でも恋人同士でも君付けで呼ぶが、この場合の君付けは、大人ぶったお姉さん口調。

早く来てくれないかな、リリナネ。電光石火の如く太刀振るいながら、頭を掠めた思い。武力の堅塁となり敵の進軍を阻んでいるが、ただ阻んでいるだけ。後から後から押し寄せてくる。きりがない。リリナネなら防壁の外の大軍をプレルツで退治できる。

そう言えばリリナネの使えるプレルツって何だろう？ 聞いてなかったな。頭を掠めた思考が移ろい、幾分ぼんやりしてそう思ったとき。再び声が聞こえた。すぐ後ろから。

「アオイ。集中して」続いて剣呪呪文文言が。「リピ」

アオイの側方にいた敵が、空気中に出現した八本の剣に串刺しにされて倒れた。

「リリナネさんっ」

ふり返ると、リリナネがラナイナライを従えて到着したところだった。ラナイナライは護衛役らしい。斬馬刀を手にしていた。

アオイとオニマルは最前線から退いた。大魔導師と戦略を話すため。他の武人らが彼らの抜けた穴を庇った。

駆け寄るやいなや。開口一番、アオイは訊いた。

「リリナネさんは言わないんですか？ リリナネ、見参」

「ぶっ」

リリナネは頬を赤らめて言った。叱責に近かった。「言わないわ

よ。お芝居じゃあるまいし。恥ずかしいじゃない」

「え、そうなんですか」なんだ、やっぱり普通は言わないのか、アオイは残念に思った。次に機会あれば言おうと目論んでいた。

三十・「クムラギ大襲撃ノ若き指揮官」

リリナネはオニマルに向かって口早に話した。

「他二つの通りはここより状況が悪いわ。もう一つ内側の門まで破られている」

「そうか……持ちこたえられなかったか」オニマルは呟いた。

最前来た伝令は言っていた。今はまだ何とか持ちこたえています、と。

「もう一つ悪い知らせ」リリナネは続けた。「さらにあと二つ。外壁の門が破られたわ。内側から破られたの。このままじゃ市街地深くまで侵入される。もう、時間の問題」

「分かりました」オニマルは本題は口に出さず目で伝えた。「リリナネ殿」。それは、政治堂を代表する指揮官としての正式な依頼。

「うん」リリナネは頷いた。言われなくても心得ていた。

そんなやりとりを他所に、アオイはラナイナライと話していた。いつもと違う不安げな顔がなんとなく気になり。

「どうかしたのか？ ラナイ。そうか。お前は初陣だな。で、緊張してるのか？」初めての戦に緊張しているのかと思っただが。

「いえ……」ラナイナライは憂い顔で曖昧に答えた。



「じゃあ何だ？」と訊いたところで、その会話はリリナネに遮られた。

「アオイ。私を防壁の上に連れて行って。外の敵を一掃する。蜥人の主軍も気になるけれど、先ず、この外の敵だけでも退治する」

「分かった」アオイが答えたその時。

新たな伝令が駆けてきた。北から来た伝令は言った。

「森で狼煙があがっています。おそらく蜥人の主軍からの合図。街に侵攻した蛇頭族からの合図を待っているでしょう。蜥人の主軍は北部森林地帯に伏せていると思われます」

それを聞いて皆一様に驚いたが、中でもラナイナライは真っ青になり、そして早口で打ち明けた。

「大変だ。あの……ユタとリュウと、竜使いのお嬢さんがひよつとしたら森へ行ったかも知れません。シシ肉をわけて貰ってきておつかいを頼んだのです」

アオイは目を見開いた。「ユタが？」

伝令も驚き言った。彼はそれを裏付ける話を知っていた。

「森側から避難してきた村人達が言っていました。村の者は残らず避難したが、外から来た子供らが三人森へ入っていったままだと」

無言でキュツと唇を結んだアオイ。まなじりを決した。

リコチャキが割って入った。

「話は聞いた。我が娘がいるならば、私が行こう。どなたか案内を

お願いしたい」言葉は慇懃無礼ながら、切実な声音が親の心情を顕していた。

「暫時お待ち下さい」オニマルが答えた。切れ長の目を思慮深げに伏せ。何事か懸命に考えている様子だった。瞬時に判断をくだしたか。顔をあげるとアオイに訊いた。

「アオイ。余力はあるか。まだまだ跳べるか？」

「ああ。全然平気だ」

アオイの答えを聞くと、次はリリナネに向き直った。

「リリナネさん。できますか」

リリナネは詳しく話さなくても、何をすればいいのか分かったみたいだった。

「うん。でも、森が消えちゃうけど……いい？」

「非常時です。かまいません。街が在れば再び植林もできるでしょう。クムラギの存亡がかかっています」

「分かったわ」

リコチャキは訝しげに眉根を寄せて問うた。  
「私にはまるで話が分からぬ。説明してくれ」

オニマルが答えた。簡潔に。理路整然と。

「この男、アオイセナならば、こちらの女性魔導師、リリナネを連れて一瞬で森まで跳べます。三人を見つけたら、即座に彼女の術で蜥人の主軍を森ごと殲滅します」

「つまりはこういう事か。この二人だけで森へ向かうと」

「ええ。もつとも優先されるべきは機動力。ご安心を。この二人ならば、きつと貴殿の子女を救出できるでしょう。この男はクムラギ一の剣士であり史上希に見る移動呪の使い手。この女性はシユスロ―に次ぐ東部自由都市連合第二位の大魔導師。実際にはシユス殿が大魔導師を辞しているので、第一位の大魔導師」

リコチャキはなおも不安な思いは隠せない様子だったが、想いを目に託した。祈るような想いを。できるなら、何を差し置いても、道理をねじ曲げてでも、自分が行きたい。それが親の心情。けれど己を殺して二人に託した。

「タパ殿より貴殿の話は聞いている。どうか。お願いする。必ずや娘を」

アオイは頷いた。「必ず」。そしてそれは彼自身の約束でもある。ユタに、お前は俺が護ってやると約束した。今が、その約束を守るとき。

三十一・「クムラギ大襲撃／第一のプレルツ」

アオイはキトラの血を拭い鞘に収めた。リリナネに右手を差し出した。

「リリナネさん」

「ううん」

リリナネは首をふった。アオイが跳ぼうとしていた方角ではなく、蠻族が続々押し寄せる東の防壁、クムラギ最外郭の防壁の上を指した。

「はじめの予定通り。先ずはあそこに跳んで。大丈夫。一瞬で終わるから」

「分かりました」

アオイは左手に龍首の印を結び、リリナネに右手を差し出した。差し出された手をリリナネが握った。しっかりと。

アオイは唱えた。

「フル」

一瞬で姿が消えた。オニマルをはじめとする残された人々は防壁の上にその姿を捜し、すぐにそこに立つ二人の後ろ姿を見つけた。

「頼むぞ。アオイ」オニマルは呟いた。

リリナネは敵を殲滅できる。その能力は充分信頼している。しかし彼女が呪文を唱えられる戦略拠点に導く、森の中を移動呪で捜索し三人の子供を見つけ出す、それはアオイの肩にかかっている。

防壁の上のリリナネが手を走らせた。呪文文言は聞こえなかった。空が沈んだように、彼らには見えた。事実、東から吹いていた風がピタリと止まった。

防壁の上へ跳んだアオイとリリナネ。風吹き抜けている。美しい青空を雲が駆けている。見おろす平原に、想像していたより少ない敵の軍勢。数ヶ月前の小鬼族の襲撃よりもずっと少ない。しかしそれでも万を越す蛇頭族の大軍。

「意外と少ないですね」

防壁に詰め寄せている敵を見おろしてアオイは言った。

「うん。それでも五つ以上の部族が集結してるわ」

リリナネは哀しげに目を伏せた。蠻族とは言え、これを全て殺す。自分の手で。しかし感傷的になったのは一瞬。

龍首の印を結ぶと、敵の軍勢全てに向けて手を走らせた。そして唱えた呪文文言は、重力呪文呪文文言。

「タオミ」

ズン、と空気が鳴った。空が、大地が、沈み込んだように見えた。一瞬で終わった。押し寄せていた敵が全て地に倒れ伏している。口から目から耳から鼻から、体中の穴という穴から血を流し、体中の骨がグチャグチャに砕けた様子で。

あまりにも惨いその様子に、アオイは思わず目をそらしそうになった。けれどかろうじて見据えた。目をそらせば、リリナネに対して非道と言ったと同じ意味になる、そう感じて見据えた。

殺さなければ殺される。街を護る爲。だからこれは正義のためであり正義のための戦いにおける殺戮は正義である。そうは言えない

し思えない。そんな正義など有り得ない。これは善悪ではない。ただ、現実。人々を護る爲にこれをした。これからも躊躇うことなく同じ状況になれば同じことをする。ただ、この光景を忘れることは一生ない。

「重力呪ってこんなに強いんですね……」

アオイも重力呪くらいは知っていた。しかし彼が聞いていた知識では、その呪文は攻撃補助的な呪文で、高重力空間に敵を捕捉して動けなくしたり、といったもの。リリナネは何もかもぺちゃんこに押し潰してしまった。これは想像を絶していた。

「私だけ。桁外れに強い……」小さな声でリリナネは答えた。「重力呪がプレルツに指定されたのは、ツフガの長い歴史の中でも私が初めて。でも、加圧呪は強いけど逆の反重力呪『キリラギ』は全然使えないの。さあ、急ぎましょう、アオイ。お願い。跳んで」

「はい」

二人はしっかりと手をつないだ。アオイは跳躍先の防壁を見据えた。

この大都邑はいくつもの石壁に遮られいくつもの区画に別たれている。それはこの街が徐々に大きくなっていった歴史のあかし。内側のものほど古く低く、外側に行くほど新しく高く頑丈。

二人はその防壁をいくつも跳び、時に防壁の上を駆け、次の防壁が見えたら再び跳び、北へ北へと向かった。

森が見えたとき、二人は息をのんだ。地平線まで続く広大な森。その森の至る所から幾筋も狼煙があがっていた。

アオイは唇を噛んだ。ユタは無事なのか。この中にいて、見つからずに隠れていられるのか。

リリナネが言った。呟くように。自らを鼓舞するように。「きつと大丈夫よ」。目が合い、見つめ合った。アオイは頷いた。思いは同じ。きつと助ける。死なせない。

\* \* \*

時は少し溯り。

森の中を歩く三人の子供。木漏れ日、落ち葉を踏みしめて歩く森の中の小道、平和を絵に描いたような光景。しかし。

「今日はやけに静かだな……」

ユタは奇妙に感じていた。

「鳥の声も聞こえないし。なんでだろう？ ちょっと変」

「いつもと違うの？」と、リュウミチモリ。

「うん。よく分からないけど何だか変な感じ……」それが何か、ユタ自身も解せない顔付き。

「何かあるのかしら」少し不安げな顔でニニも言った。「モコが怖がってるみたい。服の中に入って出てこないの」

「この森に小動物が怖がるような肉食の獣はいないはずですけど……とにかく、もう少しでマシキお爺さんの獵師小屋に着きます。急ぎましょ」

引き返さなかった彼らは賢明だった。それは結果論かも知れない。引き返さなくとも、この先で待ち受けていた窮地を逃れられなかつ

たかも知れない。二二がそれを思い出さなかったら。ユタが勇気を  
持てなかったら。

やがて小屋が見えた。やけに静かだった。煙突から煙も出ていな  
い。

「いないのかな？」

首を傾げながら、友達二人をふり返って見たユタ。同じく首を傾  
げる二人にさらに首を傾げてみせ、ユタは扉に向き直り戸板をコン  
コンと叩いた。

「マシキお爺さん。僕だよ。ユタミツキだよ。いる？ いないの？」

まったく足音も何もしなかった。人の気配も。けれど扉がギイ  
と軋んだ音を立ててわずかに開き、そして顔を出したマルマシキ老人  
は目を丸くしてユタに言った。押し殺した声で。

「お前達。いったいどうやってここまで来た？」

「え………？」

「気附かなかったのか？ 森中、蜥人だらけだ。下生えの木々の中  
に伏せている。よく無事で………」



三十二・「クムラギ大襲撃／兄の背中」

「ともかく、中に入れ。よくぞ無事に……」

お爺さんはそれ以上言葉が出てこなかった。三人を中へ入らせた。

中は粗末な猟師小屋。床は土間で壁には雑多な道具類がかけられている。縄や、野鳥網。山鉾や弓や矢坪など。

三人とも今はもう理解できていた。自分達がどんな場所を抜けてきたのか。ずっと感じていた気配は何だったのか、注視されているような厭な感覚は本当にその通り、言葉通りだったことに。

「どうしたら良いでしょう？」

リュウミチモリがお爺さんに訊いた。顔面蒼白になっている友達に代わり。お爺さんは答えた。

「わからん。ここにいれば無事というわけではない。今までは、奴らはおそらくこの小屋は無人だと思っていたじゃろう。だが、今は違う。きつとお前達を見ていたはずじゃ」

「襲ってくるかしら？」ニニが口を挟んだ。黙っていられないといった顔付きで。

お爺さんは腕組みをして顔を伏せた。

「おそらく。奴らの目的はクムラギ襲撃に間違いないが、だからと

「いつてここにいる人間を殺さずに見逃す道理はない」

「お爺さん」ユタが言った。青ざめた顔ながらも。意を決した様子で。「あの山鉈をもらってもいい？」

壁に掛かっている山鉈を指差した。それは刃渡りがとても長い。短めの剣くらいある。しかし柄は短い。山歩きをするとき、蔓などを切り払う刀。

「勿論良いが……。あれで戦うつもりか？」

「うん。でも、もっと柄が長い方がいいから、僕は子供だから、蠻族と戦うにはもっと長い柄の方がいいから、あそこにある鎌の柄と取り替えようと思って」

柄の長い鎌を指した。それは、雑草などを払うための鎌。柄が長く得物にはちょうど良いが、蜥人の硬い皮膚を斬り裂くには役不足。

「よしよし。心得た。わしが柄を取り替えてやろう」

鎌も山鉈も少し変わった形状で、柄を差し込み楔で留めるようになっている。

お爺さんは金槌でトントントンと叩いて刃を外し、あっという間に柄を取り替えた。楔の頭を金槌で潰して、刃が抜けないようにしてくれた。

出来上がった得物を見てリュウが顔を輝かせた。

「やあ。即席の手鉾になったね」

ユタは笑顔で頷いた。硬い表情ながら。僕だって、頑張らなきゃ。  
。彼は勇気をふりしぼっていた。己を鼓舞して。

否。それでは多少意味合いが違う。その必要はなかった。

彼は思い出していた。それだけだった。戦いにおもむくアオイの後ろ姿。その背中を。その姿を心に思い描いていただけ。

男の子なら誰でも思う。格好いい、男の中の男と呼ばれる男になりたいと。男の子なら誰でも心の中に持っている。その誰かを。それは、身近な誰かかも知れない。あるいは、現実には存在しない、物語の中の人かも知れない。それが誰かは重要ではない。男の子は、その姿に自分を重ねていって、いつしか勇敢な男となる。

お爺さんはもう一本同じものを作ってくれた。リュウが受け取った。リュウはユタの顔をのぞき込んで訊いた。

「大丈夫？」

ユタは頷いてみせた。唇を硬く結び。

「うん」

「一緒に戦おう」

リュウは笑ってみせた。勿論、彼も怖い。怯えている。けれど友人の心情を慮れば、そんな怯えは消え失せる。そしてまた。

年下の女の子の前で格好悪い姿は見せられない。

その年下の女の子が言った。

「私のは作ってくれないの？」

お爺さんはたしなめた。

「お前さんには無理じゃ」

しかし口を尖らせて続けた。

「でも、あそこに子供用の槍みたいなのがあるじゃない。私、あれでもいいよ」

「あれは、投げ槍じゃ。わしが使う。もしもお前さんがあれで戦って運良く蜥人を刺せたとしても、致命傷を負わせるどころか、一瞬で槍を持って行かれるだけじゃ」

「なんとかするわ」

「なんとかならぬ」

\* \* \*

最北の防壁が見えた。その手前にはかなり広大な木こりや炭焼きの村が点在する区画がある。のどかな風景。作陶もするらしく、登り窯なども見える。今はその美しい風景を眺めている余裕はない。アオイはリリナネの手を取り、一気に最北の防壁の上に跳んだ。

地平線まで続く森を目前にして、あらためて顔を見合わせた二人。いったい、この何処を捜せば良いというのか。狼煙の数は数十。森の至る所から立ちのぼっている。

奴らは待ちきれなくなったのだと見て取れた。だから、侵攻部隊からの合図を待てず、狼煙を焚いたのだと。まだか、早くしろ、と。こいつらつて。アオイは感じた。せつかちで堪え性がない。作戦もクソもない。

リリナネが見つけた。目を凝らして森の奥を見つめて。  
「あそこ。あそここの煙は狼煙じゃないわ。火事よ。小さな建物が燃えている」

「小さな建物？」森の中にある小さな建物といえば獵師小屋以外ない。「じゃあ、もしかしたら、そこに……」

シシ肉を探して獵師村まで行ってみつからなかったら、森の獵師小屋を訪ねたかも知れない。ユタなら知り合いの獵師もいるだろう。伝令の話を思い出した。村人はこうも言っていたという。子供だけでなく、獵師のお爺さんも一人、森へ入ったままだと。

「伝令の人の話の……マルマルなんとか爺さん。もしかしたらユタはそのお爺さんの獵師小屋を訪ねたんじゃ……」

リリナネは焦りを隠せない表情で言った。そんな変な名前じゃなかったと思うけど、と前置きして。

「そのお爺さんの獵師小屋に隠れていて火をつけられたのかも。アオイ。あそこまで一気に跳べる？」

一瞬答えに詰まったアオイ。マルマルが変だと言われて常識を覆された気がした。それが変なら、変な名前ではいっばいだった。マルマルが変でそれらが変でない理由がわからない。

第一、あなたの名前はどうなんですか？ 喉まで出かかった言葉をのみ込んだ。論争になりかねなかった。論争ですめばいいが喧嘩になりそうな話題。ともかく、今そんなことで言い争っている時間はない。

「跳べます」と答えて「いや……」と言い直した。すぐわかった。あそこを睨み据えて跳んだら煙の中、火災の真上。少し脇を睨み据えて跳んでも、樹木の上。続けて跳ぶ先は、樹木の天井以外ない。

運が良ければ枝をつかめるが。彼一人だったらそれでも良いが。

「いったん、下に降りましょう」アオイはキトラを抜いた。「リリナネさん、俺の肩につかまって」

「わかったわ。お願い。頑張つて。アオイ」

「はい」

すでにマタトアは唱えてもらっている。森の中を小刻みに跳んでいく。群れなす敵を斬り伏せながら。息つく間もなく跳ぶ。子供達を見つけるまで。無限跳躍。

アオイは唱えた。眼下の地上を見据え。

「フル」

## 三十三・「クムラギ大襲撃ノ侍」

獵師小屋の中で息を潜めている三人の子供とお爺さん。

ユタは武器を握る自分の手がじっとりと汗ばんでいることに気付いた。大きく息をついて、親友の顔を見た。リュウも緊張した面持ちだったが、目が合うとにっこり笑った。「大丈夫だよ」と言った。ユタは頷いた。

リュウだって怖いに違いない。でも、一生懸命勇気をふりしぼっているんだ。僕だって頑張らなきゃ。それに、女の子だったらもっと怖いに違いない、そう思って隣を視たら、そうでもなさそうだった。この子は違うな。

一番悠然としていた。泰然自若。

彼なりに、こう理解した。まだ、怖さを経験したことがないんだ。

恐怖を知らない。だから怖がってない。けれど、できれば、このままが良いに決まっている。怖い思いなんてさせたくない。妹を護ってやれなかった。怖い思いをさせた。護ってやりたかった。

唇をかみしめた。もう、誰にも、怖い思いをさせない。みんなを護りたい。自分の力で。手鉾を握る手に力が入った。自然、目から怯えが消え、勇気がともった。

「マアシナさま。ご加護を」口中呟いたら、リュウも気附いて、同じ言葉を言った。「マアシナさまのご加護を」

二人の少年は頷きあつた。

独特の臭いが漂ってきた。板壁の隙間から入り込んできている。お爺さんが言った。

「狼煙を焚いているようじゃ」

「何の合図でしょうか？」リュウが訊いた。

「うむ。おそらく……」お爺さんは唸るように呟いた。

下生えに潜んでいた蠻族が一齐に狼煙を焚いたなら、それは攻撃の合図。クムラギへ向かつて進撃するに違いない。だとすれば、こは？

みんなが不安に思ったその時。

タン、タン、タン、と立て続けに壁が鳴った。

「矢が打ち込まれた」お爺さんが緊迫した声音で言った。「火矢か？」

すぐにお爺さんの思ったとおりだとわかった。漂うきな臭い臭い。板壁の隙間から入ってくる煙。

「壁が燃えてるの？」当たり前の事を訊いた二二。中からはわからないが、外側は火が舐めているはず。

「そうじゃ」お爺さんは深刻な顔で口早に答えた。



さらに打ち込まれる火矢。タンタンタンと立て続けに四方の壁に。

「丸焼けになっちゃう。早くここから出なきゃ」

大慌ての二二。しかしお爺さんは慎重だった。

「よいか。お前達は扉の横に立ちなさい。決して前には出てはいけない。」そう言い含めて、お爺さんは自分も身を隠したまま、バツと扉を開けた。

途端に土砂降り雨の如く飛んできた矢。扉の周りを蜂の巣にし、さらに小屋の中にも飛び込んできた。

「ほらな」

目を丸くしている子供達にお爺さんは肩をすくめてみせた。子供達が怖がらないように、おどけてみせたつもりだった。

しかし怯えている子は一人もいなかった。三人とも目を見開いて驚きながらも、次の瞬間には懸命に考えていた。どうすればよいかを。

しかし敵は考える時間を与えてくれなかった。小屋の中に打ち込まれた数本の火矢。奥の壁に刺さった。

「きゃ」「二二が叫んだ。「大変」

お爺さんが慌てて扉を閉じ、ユタとリュウが火を消しに走った。しかし油を含んだ布。炎は消えない。壁を焦がし今にも燃え広がろう。「駄目だ」ユタは唇を噛んだ。

ここには焼死ぬ。が、外に飛び出せば雨のような矢を浴びる。

すでに小屋の中は熱を孕んだ煙が薄ぼんやりと景色を歪めて漂っ

ている。滝のように流れ出る汗。必死に火を消しながらユタは思った。

火を熱いと感じるのは、体。  
斬られたり、刺されたりして、痛みを感じるのも。体が、僕なの？ それを怖れるのは、『僕』なの？

その時、彼は何かを感得した。とても言葉では説明できない答えを。それを簡潔に説明する言葉は、こことは違う世界にある。侍。その死生観。

ふり返った彼はみんなに言った。

「お爺さん、扉を開けて。僕が一番に駆け出す。敵が僕を狙っている間に、小屋から逃げて」

「何言ってるの？ あんた死んじゃうわよ」ニニが吃驚して言った。

お爺さんも言った。「そうじゃ。お前さんを行かせるくらいなら、わしが矢の的になるわい」

その時にはみんな頭を低くして、袖布を口に当て、煙を吸わないようにしゃがんでいた。その姿勢で話していた。

「でも、お爺さんより僕の方が足が速いもの。大丈夫。きっと矢が当たる前に物陰を見つけて」

ユタの言葉はニニの悲鳴にも似た金切り声にさえぎられた。

「きゃああああ。私、すごい持ってるのっ。どうして今まで思い出さなかったのかしらっ。ニコ母さんから貰ってたの。出発前にお母さんがくれたのっ」

腰の革帯の鎖輪に、ずらり鈴なりにつけられた黒革の巾着袋を指した。

勿論、彼女は呪文文言も憶えていた。ツパパク。それは先住民の言葉で屍の意味。粉の製法は、彼女にはまだ難しい。しかし粉をまいて呪文を唱えることは、簡単。

三十四・「クムラギ大襲撃／ネクロマンサー」

二二はお爺さんに扉を少しだけ開けて貰い、その隙間から粉をまいた。フツと息を吹きかけて。粉は少量。風に乗り、大地に降りた。そのわずかな量で、付近一帯の大地に働きかけ、妖変を引き起こす。二二は粉が地面に落ちるのを待つて唱えた。

「ツパパク」

大地が微かに震えたように、みんなには見えた。二二一人だけ、大地が幽かな光を放ったように感じた。

「何が出てくるの？」

ユタの質問に、

「わかんないの」二二は正直に答えた。

出てくるまでわからない。ニコ母さんの説明では『結果は四通り。霊が召喚されて霊体として現れる。霊が召喚されて物象に応化して現れる。埋まっていた骨が土塊をまとい生前の姿と似た姿で現れる。埋まっていた骨が体組織を再生して動く亡骸として現れる。』

みんな、わずかに開いた扉の隙間から息をつめて見ていた。すでに小屋の中は煙で息ができないくらい。

「あ」リュウが気附いた。「土が動いた」

その時にはみんな気附いていた。あちこちで、土がぼこぼこ盛

り上がって、中から何かが這い出てきていた。そのうちの一体が完全に姿を現した。それを見てお爺さんは呟いた。

「小型の昔蜥蜴じゃ」

鋭い牙を持ち、二足歩行、前足は飾りのように小さい。大昔にこの地で埋もれた亡骸が、体組織を再生して這い出てきた。不完全な肉をまとい、ところどころ破れた皮膚で。

自分の使った術ながら。「うげげ。気持ち悪」ニニは毒づいた。確かに見た目は悪かった。しかし。

蜥人達は一齐に矢を射た。亡骸に。いくら矢が当たってもまったく効き目はない。昔蜥蜴たちは敵に襲いかかり鋭い牙で噛みつき始めた。動きは遅いが。

「なんと好都合な。今じゃ」

お爺さんの合図で、みんな小屋から走り出た。

お爺さんは立て続けに矢を射た。

ユタとリュウは、棒の先に鉄球がついた武器をふりあげて昔蜥蜴と戦っている蜥人の背中に、山鉈の刃を叩き込んだ。「ごぶっ」血を吐いた蜥人。

「うっ」柄を握る手に感じた生々しい感触。初めての感触。

そして彼らの方に向き直り、憤怒の形相で躍りかかってきた血まみれの敵。一瞬怯んだユタとリュウ。しかし昔蜥蜴の牙に助けられた。その蜥人は首を食い千切られて倒れた。

二人は顔を見合わせた。頷きあった。思いは同じ。これくらいで怯んじや駄目だ。

そして相談していたわけでも事前にも示し合わせていたわけでもま  
ったくないが、二人はこのことも理解していた。二人一組で、一匹  
を相手にする。蜥人と人間の子供では体格差がありすぎる。一対一  
でまともに勝負したら到底太刀打ちできない。二人で一緒に戦う。  
新たな、近くの敵にむかった。飛んでくる矢の中を。勇敢に駆けて

そしてニニは。その時すでにありつただけの粉をまいていた。ニコ  
母さんが持たせてくれていた粉の全てを。

土中からさらに多くの昔蜥蜴の屍が湧いて出た。そして今回は、  
別の幽体反応も現出した。はじめ気附かなかった。それは土の中か  
ら出てこなかった。気附いた時、空中を無数の妖変が飛び交ってい  
た。それは幽体が物象に応化して現れたもの。つまり、一時的に物  
質の形で姿を現した霊体。所々物質で、所々幽体で臃。例えば手足  
などは臃ではつきり見えない。しかし胴体や首や頭部や鋭い牙はは  
つきり物象化している。

長いトカゲのような、否、龍に近い姿の幽体。無数に宙を飛びま  
わり、術者を護り敵に襲いかかっている。

「これは……何かしら……？」

首をかしげたニニに、お爺さんは答えた。

「おそらく、大神の祖先じゃろう。お前さん達竜使いの守り神が現  
れたのかも知れぬな」

「やん。なんか嬉しい」

もしもお爺さんの言うとおりなら、竜使いではない、他所からき  
た子供である自分を、竜使いの守り神達が竜使いの子として認めて

くれたことになる。二二は小躍りして喜びたい気分だった。

死霊術の粉は土地に眠る霊や骸を使役するのだからつじつまは合わない。が、竜使いの一族の守り神がオオカミの祖先であり、一族の者を常に見守っていたとしても不思議はなにもない。そして二二を一族の長の子と認め、その窮地を救うべく姿を現したとしても。

第二の妖変の出現で、彼らは圧倒的に有利になった。ユタモリユウも戦いやすかった。時々顔を見合わせては声を掛けあった。

「次はあいつ」

「うん」

少し自信も芽生えていた。僕達も戦える。

二人は自然に、自分達なりの戦い方を編み出していた。子供ならではの戦法。昔蜥蜴の屍を矢の盾に、飛び交う幽体にまぎれて頭を低くして駆けまわり、二人息を合わせて奇襲する。正々堂々と敵に対峙しない。けれど、それを卑怯とは誰も言わないだろう。

そして二人は同時に、戦いというもの、生き物を殺めるといふことがどういふことなのかも理解していた。しかし今は、そのことについて深く考える余裕はない。厭だ、したくない、という選択肢も。

戦う彼らの背後で、小屋が激しく燃え上がっていた。すでに壁も屋根も炎に包まれ、柱が倒壊する寸前だった。黒煙ももうと空に立ちのぼっていた。防壁の上でリリナネが見た煙。

樹木が、群れて駆けてくる敵が邪魔で、一気に跳べない。本当に小刻みに跳んでいくしかない。樹木の狭間を睨み据え、跳ぶ。現れざま、側の敵を斬り伏せる。リリナネは剣呪を唱える。あるいは重力呪を唱える。周囲の敵を制圧すると、再び跳ぶ。その繰り返し。

リリナネが重力呪を唱えると、メキメキバリバリとすごい音を立て、かざした手の先一直線に木々が押し潰される。故に、後方と前方には向けない。後方に向ければその術はクムラギにまでおよび、前方へ向ければ獵師小屋にいるかも知れない子供達を巻き込みかねない。

前方から無数の敵が駆けて来る。木々の狭間を抜け、落ち葉を蹴散らし。方々から聞こえてくる甲高い呐喊の声。くああこっこっこつお、咽を鳴らしている。奇怪な声、呼応しあう。

「あいつら無事なのか!？」

敵を斬り伏せ、アオイは思わず言った。こんな中にいて、無事でいられるのか? そもそも、こんなに敵がいる中を、どうやって獵師小屋まで行くことができたのか。

「きっと。あの火事が獵師小屋ならそこにいるはず」

リリナネは答えたが、自信なさげな声だった。

「それより、アオイ。方角は合ってるの?」彼女は感じていた。数度跳んで、微妙に方向がずれているように。

「えっ……」



実はアオイも感じていた。というより、白状すると、数回跳んだらすっかり方角を見失っていた。多分こっちだろう、という方向へ跳んでいた。何しろ視界がきかない森の中。

「確か俺は方向音痴だったような……」記憶はないが言われたことがある気がした。

「え」リリナネは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。「歌が音痴な人なら沢山いるけれど、方角が音痴なんて！！」絶句した。

「いや、ええつと」

アオイも面食らったが。勝手に理解した。どうやらこの辺りの人は、方角に鈍い人を音痴に喩える習慣がないらしい。

「だいたいは分かります。こっちですよね」

襲いかかってきた敵を斬り伏せ、思う方角を指差すと。

そのおよそ三十度右を指してリリナネは言った。

「こっちだと思っけど」

「だいたい合っている、大して違わないじゃないか、アオイはそう思った。」

その方角へさらに数度跳んで、跳んだ瞬間目の前にいたもの。

「うわっ」

牙を剥いて襲いかかっていたその首筋に刃を突き立てた。しかし何の効果もなかった。食らいついてきたその首を切り落とした。躰を廻し、キトラを一閃させ。

倒れたそれを見てアオイは思わず言った。「これ、キョウ……」

リリナネの言葉にさえぎられた。

「昔蜥蜴ね。小型の」

「ああ。これが昔蜥蜴ですか……」咽まで出かかっていた言葉は暗い霧の奥へ消え去っていった。

倒れた昔蜥蜴の体は、煙を噴きあげ、ぐづぐづと土塊に返っていった。二人の見ている前で瞬く間に。

「屍……。きつと竜使いの女の子が術を使ったんだわ。死霊術を」

「死霊術!? ネクロマンシーですか??」閃光のように閃いた。脳裏に。その言葉が。

「え? なく……なくら、ね黒……なに?」

リリナネはまったく意味が分からない様子だったが、アオイは半ば驚愕の面持ちで、浮かんだ言葉を口中で反芻した。記憶の奥深くに沈んでいた語群。一気に浮上してきて鮮烈に脳内を渦巻いている。何か、何か一つでも突破口があれば一瞬で霧が晴れそうな予感があった。

「フィオラパのことをネヌファとかシルフとか言ったりしますか?」

「んん?? と怪訝な顔になり、「さあ……」リリナネは首を捻った。不可解な若僧、とばかり。「どうして今そんなことを?」

「えつと……」上手く説明できなかった。「急に気になって」

リリナネは半ば呆れ顔で、半ば「君のことは充分理解しているか

らあまり言いたくないけど』といった顔付きで、諭すように言った。「お願い。アオイ。集中して。これがいたってことは、きつとみんな無事。きつとこのすぐ近くにいる。けれど、一足違いで取り返しのつかないことになることだってあるかも……」

「そうですね」真顔に戻ったアオイ。雑念は捨てた。

襲いかかってきた蜥人斬り捨て、「行きましょう」その声をかけると、

「ええ」リリナネはそう言って、前方を指差した。

それは、アオイの思い描いていた方角とは若干違っていた。ん、と思ったアオイ。しかし自分は方向音痴。自分の方向感覚はあてにならない。けれど。

彼は跳んだ。顔だけリリナネの指し示した方角へ向け。目は自分の思う方角へ向けて。リリナネはまったく気附かなかった。

二・三度それを繰り返すと、リリナネの思う方角とはまったく違う場所へ出ていた。しかしリリナネは方角が違っていることに気附いていない。アオイは自信があった。理由は分からない。呼ぶ声が聞こえた。

三十五・「クムラギ大襲撃／飛燕と劍呪」

死霊術は時間が経つと消え去る。今まで彼らを護ってくれていた屍や霊体。次々土塊に戻っていった。一体、また一体と消えてゆくにつれ、徐々に形勢不利になっていったユタとリュウとお爺さん。そして最後の一体が消え去ったとき。

不気味に迫る蠻族の群れに取り囲まれていた。

「うぬ……もはやこれまでか。無念な……」マシキお爺さんは自分の身を盾にして三人の子供を庇った。三人をかいなに抱き寄せ、蠻族に背を向け。老い先短い自分はどうなってもよい。ただ、子供達だけは逃がしてやりたかった。もはや叶わない。取り囲まれ、蟻の這い出る隙間もない。あとはこの身を盾に、子供らに刃が届かぬように願う。死しても、抱き庇い。かいなに力をこめた。

取り囲んだ蜥人のうち一頭が、前に出て目を歪めて笑い、何か言葉を発した。それを聞いて他の蜥人達も愉快げに嗤った。

ユタはお爺さんの腕の隙間から敵を睨んだ。悔しかった。すぐ真横に二二の顔がある。ほつぺたがくつききそうなほど近くに。泣きべそ顔で「リコ父さん、ニコ母さん」唇をとがらせ二親の名を呼んだ。

ユタはお爺さんの手をふりはらい駆けだした。山鉦をふりかざして手前の敵に躍りかかった。覚悟した。もう、勝てるとは思っていない。生きのびられるとも。自分の捨て身の行動で、仲間達が助か

る道が開ければ、そう思い。奇蹟が起これと。

しかし彼の義勇は簡単にへし折られた。山鉦と共に。鉄球を喰らった刃は折れて飛んで行き、彼自身もはね返され倒れた。その彼を見おろして、愉快げに目を歪めて、仁王立ちして武器を振り上げた蜥人。

もう駄目だ、殺される、涙が滲んだ。けれど。

彼は目をそらさなかった。にらみ返した。ギュツと口をつむり。奥歯を食いしばり。

その顔を見て、蜥人はさらに嗤った。愉しそうだった。残虐な愉しみに酔っている。ニタリと口角をあげた。次の瞬間。

その首が躰を離れ上方へ飛んだ。身がくずおれた。首が飛び躰が倒れるまでのわずかな間に飛沫あがり視界をさえぎった滝の如き血飛沫。その血飛沫の向こうに、アオイの背中が一瞬見えた。しかし飛沫が全て地に落ちる前に、消えていた。

ユタは涙の滲んだ目を袖でゴシゴシと擦って、身を起こして辺りを捜した。二とリユウを庇うお爺さんに襲いかかっていた蜥人に、血刀叩き込んでいた。まるで飛燕のように身を廻し。二匹を倒し、すぐに消え去り。別の敵の心臓を貫いて現れ、再び消え去る。その周囲で劍呪が次々炸裂して、彼を助けていた。

ユタは気附いた。いつの間にか側に立っていた。白練と呼ばれる純白の道服をおった美しい女性魔導師。彼が見上げると、にっこり笑って見おろした。「大丈夫？ ユタ。怪我はない？」

「はい」

ユタは袖で目を擦ろうとして、慌ててやめた。泣いていると思わ

れたくないから。頷くふりをして、気附かれないように擦った。ぎこちない笑顔を作り。見られないように目をそらして。

その彼を庇い立ち、目の前に現れた見慣れた胸服の後ろ姿。くすんだ青色と腰変わりの黒。背にほどこされた白いムカデの刺繡。どちらかと言えばゾツとする図柄に、まったく似合わない端正な顔がふり返り、微かに口角をあげて、優しい目を微笑ませた。

「アオイセナ、見参」悪戯っぽく笑った。次いで優しい笑顔に変わり。「ユタ。よく頑張ったな」

ユタは何ひとつはつきり見えなかった。次々あふれでるもので滲んでしまい。口をへの字に曲げてこらえた。「ちっとも。こんなのへっちゃらです」と言おうとしたけれど言えなかった。ただ、頷いた。

その顔を優しく見つめたアオイとリリナネ。彼がどれほど頑張ったか、言わずともその涙が物語っていた。けれど見つめたは一瞬。優しい一瞥。二人はすぐさま敵に向き直り、アオイは再び敵只中に跳び、リリナネは剣呪を唱え敵を撃った。

敵五体が続けざま剣呪で沈め、リリナネは鋭く号令した。全員に

「敵を殲滅する。みんな、できるだけ私の側に来て！アオイも。戻って！」

全員が体を寄せた。その彼らを護つて、アオイは襲いかかってくる蜥人に、キトラをにかけて威嚇した。ふり廻して追い散らした。マシキお爺さんも残っていた矢を射た。リリナネは左手に印を結び、右手を天上にかかげた。

リリナネ、第二のプレルツ。呪文文言は、  
「パステイニ」

彼方で破裂音鳴り響いた。遠くで。無数に。次々間断なく轟き、森を、地を揺るがす大音響となった。音の正体はすぐ分かった。彼らのすぐ側でも次々炸裂した。耳がキンとなり、皆、鼓膜が破れそうに感じた。眩しくて目もくらんだ。

それは直系三メートルほどのドーム型の火球。破裂音と共に地上に現れ、敵をのみ込みまる焦げにする。次々と至るところで炸裂する。それは火球術の亜種であり、術者の周囲三百六十度で無数に炸裂する。範囲は術者の能力次第。リリナネの場合、この森をすつぱりのみ込む規模。爆裂焰呪と呼ばれる上級元素術。火球術は単体焰<sup>プレ・ア</sup>呪だが、これは火球術の亜種でありながら、全体焰呪<sup>ファイ</sup>。

彼らのすぐ側にいるため術を逃れ彼らに襲いかかってきた敵は、全てアオイの刃とリリナネの剣呪の餌食となった。

「あちい……」閃光の如く太刀振るいながら、アオイは思わず閉口して言った。術者本人に直接は言わなかったが。小声で呟いた。なにしろ灼熱の焰のただなか。熱気が頬を焦がす。尋常でないく

らい。すぐ側で何度も炸裂する火球。

「いつまで続くんだ……」独りごちた。本人には言えなかった。「  
すぎすぎだろ……、派手過ぎじゃねえか……？」

いつ果てるともなく続いていた爆発が、いつしか途絶え気味になり。やがて終わった。術は収束した。もう、敵はいない。いや、敵  
どころではない。

皆、言葉なく、呆然とそこに広がる光景に見入った。

そこにはただ何処までも広がる焦土があるだけだった。ところどころまばらに焼け焦げた木々が残っている。森が消えた。蜥人ばかりでなく。森にいた沢山の生き物も全て。死に絶えた。鳥は難を逃れただろうが、今は空の何処にも姿がない。

プレルツはツフガが敵に使用を戒めた術。その理由を、短時間に二度、目の当たりにしたアオイ。

自然、頭を垂れ、黙祷した。敵のために。巻き添えになった森の命のために。隣でリリナネも同様にしていた。ユタも、子供達も、お爺さんも。

顔をあげると、リリナネが何か言った。けれど耳がキーンとしていて何も聞こえなかった。

「はい？」意図せず、素っ頓狂な声になった。自分の声も聞こえない。「何ですか？」なんですかと言ったのかあんれすかと言ったのか定かでない。

リリナネは困った顔で何か言葉を続けた。しかし口がパクパク動いているだけで声はまったく聞こえない。



彼女は困った顔で指差した。クムラギを。

焦土広がるその先に、遠くクムラギの防壁が見える。もう、視界を遮る物が何もない。

その時ようやく声が聞こえた。耳鳴りが治まり音が戻ってきた。

「戻りましょう。町で暴れ回っている残りの蛇頭族を追い払わなきゃ」

アオイは頷いた。「はい」合点承知の助、と付け加えようと、しかし、そんな事を言う人を実際には見たことないのでやめておいた。

「わしらは歩いて戻ろうかの」

マシキお爺さんが子供達に言った。子供達は頷いた。みんな笑顔だった。

アオイはキトラの血を拭い鞘におさめ、リリナネに右手を差し出した。好い雰囲気だと感じた。二人で力をあわせて成し遂げた。いつも間にある他人行儀な雰囲気、クムラギの防壁のように高い壁、それが消え失せたと感じた。戦いの中で。

「行きましょう。きつとオニマルが頑張ってるはずですよ」骨っぽい男口調、口の端に笑みを含み、『いつもよりほんの気持ち、男らしく』を意識してそう言つと。

「ええ」

リリナネはその手を取り、

「いいわよ。跳んでくれる？ アオイ君」冷淡に言った。顔を彼に向けず、ちらりとも向けず、クムラギの方だけ見て。

ん、面食らったアオイ。というより。横ビンタ食らったに等しい心持ち。急に君付け。距離感アリアリのお姉さん口調。元の木阿弥的呼ばれ方。よそよそしさ。再び聳え立った壁。そして。

説明の必要はないがその後もずっと君付けで呼ばれた。

### L i t t o 3 「資料 古代ポリネシア語」

(こういう余談を載せるとしらけてしまうかも知れませんが、誤解のないように、違う部分は違つと明記しておいた方が良いと思ひました。)

#### 「資料 古代ポリネシア語」

このシリーズでは古代ポリネシア語が多く出てきます。しかし正確ではありません。

まず、明確に違つ点、意図的に違えている点から説明します。

天は L a n g i

山は M a u n g a

風は M a t a n g i です。

が、(ハワイ語でG音が抜けラニ、マウナ、マタニと変化したように、この世界では)N音が抜け、ラギ、マウガ、マタギへと転訛しています。

同様に聖職者・魔術師は T u f u n g a ですが、これもツフガへと変化しています。ハワイ語でカフナに相当する語です。

このような相違点が他にもあります。

(参考までに、現在の研究により判明している言語の変遷は以下のような感じ、だそうです。

古代ポリネシア語(紀元前600年～200年)

紀元前200年～紀元200年くらいに、古代中核ポリネシア語とトンガ語等に分岐

紀元200年～800年くらいに、古代東部ポリネシア語とサ

モア語等に分岐

紀元800年～1000年の間に、古代中央部ポリネシア語と  
ハワイ語・マオリ語・タヒチ語等へ。）

手元にハワイ語の本があり、そこに語源として紹介されている古代  
ポリネシア語から引用しています。大抵そのまま引用していますが、  
希に創作や意識や歪曲が含まれています。

主に古代ポリネシア語を使用し、そこにない語は古代中核ポリネシ  
ア語、古代東部ポリネシア語を使用しています。  
逐語・造語は、ハワイ語に倣っています。

また、古代日本語についても、

オオカミの語源は大神ないし大噛みであると言われている  
鯉の語源はコエであると言われている

蛇は古くはハハと呼ばれていた

食用にする獣をシシと呼んでいた（故に鹿も猪もシシだった。のち  
にアカジシ、クノシシと呼ばれるようになった）  
等を参考にしています。

コエは（はつきりしたことは分かっていませんが）『越え』の意味  
であるという説が濃厚らしく、本文中ユタとアオイが料理を作るシ  
ーンで、丸々と身が肥えていた云々のくだりがあり、コエの語源が  
『肥え』から来ているのではと思わせる記述がありますが、アレは  
作者の創作であり、そういう事実はありません。

ほとんどの事柄は調べて、事実を元に構築していますが、希に創作  
や歪曲、または不注意による事実誤認（きつとあると思います）な  
どが混じっています。



## 三十七・「火焰の獅子」

クムラギを発ち大河ラーを渡ると、古い街道の始まりである。ハラタフィット。古都ラエモミへと続く道。大仰な名前がついているものの、何の変哲もない普通の道。が、人馬がこの道を踏みしめ、歩みを刻み始め、千七百年以上の時が経つ。古くはラエモミがこの地方の中心都市だった。

彼ら竜使いの一行はそのラエモミをも通り過ぎ、さらに西方へ向かう。穏やかな風そよぐ草原、コロナエへ。その地よりさらに西方は、広い砂漠が広がっており、西国と呼ばれる地域とこの国との文化圏を別つ。

「ああ、愉しかった。また来たいなあ」

オオカミの背にゆられながら、父親の顔をふり返って見上げ、二二は言った。笑顔で。そして名残惜しそうに、河の向こうに聳え立つクムラギの高い壁を見つめた。

「ほう。そうか……」

リコチャキは少し驚いた。というより安堵した。すっかり口数が少なくなり、時に物思いに耽っている二二の様子を見て、怖い思いをした故、心に傷を負ったのではないかと憂いていたのだ。が、杞憂だった。

「怖くはなかったかね？」

リコチャキの問いに、二二は笑顔で答えた。

「うづん。ちつとも。だって、とっても勇敢な男の子が助けてくれたもの。めっちゃ格好良かったんだから」

「ほづ……」

なるほど、そういうことだったのか、とリコは納得した。しかもあの若者に目をつけるとは我が娘ながら目が高いと。が、しかし、年齢なりに微笑ましく子供らしい。

「残念だが、あの方にはすでに許嫁がいらっしゃるそう。お廟の近くのお嬢さんでルルなんとかさんという。それにお前が年頃になる頃にはあの剣士様は」

ニニがプツと噴き出して笑って、リコ父さんの勘違いは遮られた。

「違うよ。それって、パツ、パツで消えちゃう人でしょ。全然違うよ。でも、許婚ってほんとう？ マリリリさんはどうなるの？」

「マリリリ？ そんな名前の人が……ん。ひよっとして大魔導師のリリナネ様のことかね？」

「そうだった……？？ どっちでもいいけど。その、魔法使いのお姉さんの方が絶対お似合いだと思うんだけどなあ。好きあってるみたいだったし」

「そうか……。だが私が聞いた噂では、すでに将来を誓った人がいるということだ」

「それって、あのブリツ子の人でしょう？」

「ぶり……？」

隣の若者が手綱を繰りオオカミを寄せて、会話に割って入った。笑いながら。

「相変わらず、お嬢のお国言葉は面白い。しかもなんとなく分からないでもない。お嬢の故郷は一体何処であろうな。処でお嬢が勇敢で格好いいと見そめた男の子は誰のことだ？」

二二は照れ笑いを浮かべて答えた。

「いたじゃない。お廟の子」

「ああ、なるほど」

リコチャキも、周囲の若者達も、はたと膝を打った。

「勇気があつて優しく、めっちゃ格好良かったんだから」

言っているうちに恥ずかしくなったのか、語尾が照れ笑いと言うよりもにやけ笑いになって尻切れトンボになった。その顔を見て、リコチャキも若者達も思わず笑みがこぼれた。微笑ましく感じ。が、当然の疑問がひとつ。

「二人いたが。どっちの男の子かね？」

リコチャキに聞かれて、

「うん、えつとね……」

急に説明に困った二二。あれれ、と。

「ええつとね……優しいお兄さん風の方の人……」

「名前は？」

はたと首を捻った二二。むむむ、と。



「ええつとね……ええつと……」彼女は名前を憶えていなかった。

まあ、また翌年、クムラギへ連れて行ってやる、そうすればまた会えると、リコチャキに慰められた二二。そうですとも、お嬢、名前を憶えてなくなつたつて、あのお廟に行けば会えるに決まつてますと、若者達も口を揃えて言った。それくらい、その時の彼女は可哀想な顔をしていた。瞳に涙をためて、口をへの字に曲げて。今にも泣き出しそうなの。

しかし翌夏、クムラギを訪れたとき、そのお廟はなくなつていた。建物はあつたが、お廟ではなくなつていた。そこにいた人々は誰一人残つていず。誰に訊いても、その人達が何処へ行つたのか教えてくれなかつた。

そしてそれつきりになつた。彼女は幼く、いつしか忘れてしまつた。けれどその男の子のことは、大切な思い出として胸の奥にしまわれた。

十年後、ウタルルの草原の小さな村で、リュウミチモリに再会したときも、始め彼女は気附いていなかった。あの時一緒にいた子だとは。リュウミチモリの方が気附いて、獵師小屋での話をして、ようやく彼女は気附いた。そして聞いた。彼の運命を。そしてようやく。彼女は知つた。ずっと一緒にいた女の子がお兄さんと慕つていた人が、その人だつたことを。故にサラハナウラをむかえた彼女が、暗く沈んだ顔をしていたのは、あながちサラをからかう目的だけだつたわけではない。それは素の表情だつたのだ。

\* \* \*

民間人の死傷者を多数出してしまつたが、クムラギ武人らは市街

地に入り込んだ蛇頭族の撃退に成功した。市街戦を制した。そこで  
もやはりリリナネ、そしてアオイの担った役割は大きかった。が、  
しかし。指揮官が愚物であれば被害はもっと拡大していただろう。  
年若くも切れ者の指揮官であったからこそ、迅速に撃退でき、被害  
を最小限に抑えることができた。しかも彼はおのれが先頭に立ち死  
を怖れず敵に立ち向かった。故に、あとに従う者もまた、死を怖れ  
ず奮戦した。それ故の勝利だった。

激戦を制した数日後、オニマルは政治堂へ呼ばれた。モモナリマ  
ソノ、リケミチモリはじめとするクムラギ参議が顔を揃えていた。  
にこやかに迎えられた。しかしそこにタパラツフガ側の人の顔もあ  
った。故に、政治に関わる話で呼ばれたのではないと理解できた。  
おそらく冥界入りの話。

政治堂段上の壁。そこには五本の聖杖がある。シユスロー達が守  
宮猿より譲り受け、ここへ持ち帰った聖なる杖。冥界入りの戦士に  
与えられる物。

人々は口々にオニマルの今回の働き、指揮官としての才を褒め称  
えながらも、最後には、その杖を指してこう言った。言いくそ  
うに。リケミチモリが言おうとして、伯父のモモナリマソノが制して  
言った。

「お前には不本意かも知れぬ。が、適材適所という言葉がある。人  
は、もっともふさわしい居場所を与えられてはじめて、もっとも素  
晴らしい働きが出来るというもの」聖杖を指し、「これを与えられ  
るのは……」言葉を濁した。

オニマルは口の端に笑みを含み、爽やかに答えた。

「分かっています。私ではありません。マアシナの御子を冥界から  
連れ帰るためにやって来た、そうとしか思えない男がいます。その

聖杖を受け取るべきは、その者です」

気持ちは決まっていた。言い淀む伯父貴に気を使うなと言いたかった。しかも自分の歩むべき道筋というものも、朧ながら見えている。タパが口添えしてくれた。

「貴殿には、貴殿にしか成し得ないことがある。いずれ定めのために、貴殿の力が必要となる時がきつと来るはず」

リケも。笑顔で。

「その時は頼むぞ」

「むろん」

オニマルは雄々しく微笑んでみせ、居並ぶ人々全員に黙礼した。

「では。失礼します」挨拶して背を向け政治堂をあとにした。人々はその後ろ姿を頼もしく見送った。すでに、未来の大將軍の姿が背にうつすらと見えていた。

政治堂を出たオニマルは、空を見上げた。晴れ晴れした気分だった。初秋。空の青がすっかり秋めいて、爽やかな風吹き渡っている。今の心境にぴったりな空の色。俺は俺、俺にしか成せぬ未来がある。胸中呟いた。

\* \* \*

オニマルが空を見上げ未来に思い馳せていたその同じ頃。予定の期日よりずっと遅れて、タパの廟堂へ届けられた注成品。アオイの部屋に運ばれていた。外出先から戻ってきたアオイと子供達。それを見つけて。

「すげえ……」

「アオイさま。すげえではなくすごいです……」

言葉の悪さを咎めたユタも、ポカンと口を開いたままになった。

「これは……やばいな……」

腕組みしてアオイ。絶句気味。ううん、と唸り。

「なるほど……。これくらいしぶいと、『やばい』のですね……」  
何故だか納得した顔附きのユタ。隣で同じく腕組みした。

一緒にいたラナイナライとリュウミチモリも、同様にしきりに感心して、その道服の仕上りを褒めた。衣紋掛けに袖を通され壁にかけられている、背に描かれた見事な絵を。

腰から上、背中一面に火焰の如き蔓花模様が描かれている。赤く鋭角な葉と鋭角な黄の花弁。模様は細かく、まるで燃えさかる炎に見える。その文様を引き裂き姿を現している獅子と蛇。獅子は青白く、爛々と目を輝かせ牙を剥き、蛇は黒く多頭であり、獅子に踏みつけられて苦しげに首をよじっている。その首のいくつかは火焰からはみ出している。

「すげえ……やばいよね、これ……」と繰り返す四人。呆けたように絵に見とれて。

窓から入ってくる風が、少し肌寒く感じる初秋の午後のことだった。その日、速駆けの伝令が到着し、シユスロー等が数日中にクムラギに帰還することを伝えた。

第三章  
完

L i t o 3 3 8 (後書)

第四章 冥界入り

一 「苦し紛れの一手」

「俺が留守の間にどれほど上達したか確かめてやる。かかって来い、アオイ。手合わせしてやる」

昨夜遅くまで酒宴がもよおされ、そこで浴びるほど酒を飲みへべれけになっていた姿が嘘のようなイオワニ。

場所はイオワニの道場。道場の中央でアオイとイオワニ。むろん、今のセリフはイオワニ。口に余裕の笑みを浮かべ、アオイを見据え、言い終わると、いつもの癖で眉間皺を指で押さえ、背を向けた。

「はい」アオイは素直に答えた。しかし。「大丈夫ですか？」相手を気遣った。

「何がだ？」ふり返り、右の眉尻をあげて問い返したイオワニ。

「いえ……まだ、酔われているのではないかと……」

「ふん」イオワニは鼻で笑った。「冥界へ行く前に教えといてやる。二日酔いは、朝酒を飲むとなおる」

「そうですね。わかりました」

周囲には黒山の人ばかり。この道場の少年達に加え、いつも見物

に来る近所のおじさんや女の子達。今日はいつもの倍以上の人が集まっていた。皆、なにやらニヤニヤしている。

「何だ、気色悪いな……」イオワニは不快げに呟いた。「こいつ等は何を笑っているんだ」

オニマルがニヤニヤしながら答えた。

「さあ。分かりませぬ」

ニヤニヤしながら木剣を二本持ってアオイの元へ駆けてきたユタに、イオワニが鋭く言った。

「言っておくが、両手持ちは無しだ」誰から聞いたか知らないが、イオワニは知っていた。

途端に沸き起こった不平不満の声。集まった人々がブウブウ言った。「それでも師匠か」とか「何本持ったって勝手じゃないか」とか「心の狭い奴だ」「人格矮小」「玉が小さいのか」とか色々。

「うるせえ」イオワニは一括した。「だいたいお前等の持つてるその券は何だ?? ツキツキの賭け札みたいな奴は」

皆、手に青色の券を持っていた。バツと一斉に隠した。しかしユタが無邪気な顔で教えた。

「あれは表で売っているのです。ツキツキの興行主のシシイナタ（シシ・イナタノ獅子・稲田）様が胴元になって」

きのこの酒宴で、酔ったイオワニが繰り返し公言したせいで、今日の勝負は、すでに広く人々の知る処であった。そこにかぶりついてきた腹黒い興行家。



イオワニは白目を剥いて憤った。「賭にすると何事だっ」しかし賭よりも腹立たしいのは。イオワニも常識だから知っている。ツキツキの試合の賭け札は、挑戦者が青色の札、王者が赤色の札。そこから推測してほぼ全員が持っている札の色を見れば、皆がどっちに賭けているのか……。明白だった。

青色の札を後ろ手に隠してオニマルは師匠をなだめた。

「師匠殿。誰がどっちに賭けていようと、実力のある者が勝つのです。それほど怒ることではありませんまい」

「貴様はどっちに賭けたんだ？ 札の色を見せてみる」

オニマルは目をそらした。「私は……」鮮やかな手つきで、後ろ手に持った札を袖口に隠匿した。次いでごく自然に腕組みをして、隠匿物を懐へ移した。「賭け事などしません」

アオイの木剣に粉をかけて呪文を唱え、ラナイナライがそっとその場をあとにした。道場の少年もイオワニの木剣に呪文をかけて小走りに群衆の中へ戻った。ラナイ、少年、双方の手に青色の札がチラリと見えた。

イオワニの右眉が高くつり上がり、ただでさえ深い眉間皺がより深く刻まれた。不愉快至極とばかりに口の端をあげて、アオイをにらみ据えた。抑えた口調で、冷やかに言った。

「クムラギーの剣士と呼ばれいい気になっているようだが、誰がクムラギーか、はっきり教えてやる。ここにいる全ての奴らに」

アオイは真面目な顔して頭を下げたが、集まった人皆ニヤツと笑った。それを目にしてさらに不機嫌になったイオワニ。

一方のアオイは冷静に考えていた。イオワニは酔っている。しか

も今の件で怒っている。平常心ではない。

勝機はある、と思われた。処が。

二人がそれぞれのかまえて対峙し、道場は水を打ったように静まり返った。そのまま二人微動だにせず時間のみが経過し……。アオイがしかけた次の瞬間。

人々の目には何が起こったのかはつきり分からなかった。ただ、アオイがぐるりと軀を廻して、そして木剣をはじめ飛ばされたことだけ。

イオワニは打ち込まれたアオイの木剣に、自己の剣をあてることすらなく、呪文の反発効果だけで受け流した。太刀筋崩れぎみに身が泳いだアオイ。しかしそこは回転殺法の真骨頂。もともと剣術とは体重移動の流れが違う。泳いだといってもほんのわずか。勢いもそのまま、さらに一回転軀を廻して木剣叩き込んだ。

対するイオワニは、アオイが微かに体制崩したその瞬間に一太刀浴びせることが出来た。それをしなかつたのは、ここにいる全ての人々に彼我の力の違いを見せつけるため。

打ち込まれた木剣に、今度は真つ向から木剣を合わせた。アオイの手から木剣がはじき飛ばされ、道場の天井近くまで舞い上がった。それが床に落ちてカランと音を立てた。時には、イオワニはアオイの背後に廻りこみ背を撫で斬っていた。

女の子達が「きゃあ」と黄色い悲鳴をあげ、おじさん達が「ああ」と嘆息をつき、青色の札が一斉に宙を舞った。

「ふん。百年早い」ふり返ることもせず鼻で笑ったイオワニ。

「ありがとございました」アオイは頭を下げ、礼を言った。見事にやられた。背後に廻りこまれ背を斬られた。これだけ鮮やかにやられると無念もクソもない。

はじき飛ばされた木剣を拾い上げ、さがろうとしたアオイに、イオワニは言った。

「まだだ。アオイ。三本勝負だ」

「え」足を止めたアオイ。

イオワニは勝たせるつもりだった。こんな騒動さえなければ。冥界へ入る前に、自信をつけさせるために。けれども。

わざと手を抜いて勝たせてやれば、それを見抜けぬ奴ではない。故に真つ向勝負で、勝たせる。そして、すでにそれくらいの腕をつけていると感じていた。三本に一本は勝てるだろう、と。ヘタをすれば二本取られるかも知れないと。

アオイは中央に戻った。一礼して再びイオワニと向き合った。

慌てたのはおじさん達。泡を食って捨てた札を拾い始めた。「俺の札はどこだ」。場内騒然となり混乱が起こった。札には賭けた分の数字が「三口」とか「五口」とか書かれている。「ズルするなよ。自分のを拾え」皆、言い合っていたが。皆、一口でも多い札を捜して拾いまわった。

「うるさいっ！！ 静まりやがれ！！」

イオワニに一括され、ようやく静かになった。おじさん達は渋々と捜すのをあきらめた。あきらめがつかない顔付きで。女の子達も。

ユタとリュウモ。ラナイら少年剣士達も。

幸いオニマルは懐に入れたままだった。しかも自己の物は懐中に持ちながら、床に落ちていたのを一枚拾って、それも、さも自分の物のような顔して手に握りこんだ。廉潔な志持つ清廉潔白な若者だが、道徳心の塊というわけではない。茶目っ気が微塵もないわけではない。彼にとってこれは験担ぎ。冥界入りする友人への餞別、はなむけ。太く賭けたが、換金するつもりはなかった。あくまで験担ぎ。しかし拾った分は換金しても良いかも、と思っていた。

一方、女の子達にしてみれば、人気の剣士を応援して併せてお金儲けも出来る好機。何しろ通常時のツキツキの賭け札は購入に年齢制限がある。処がこれは正規の興行ではないから年齢関係ない。堂々と賭け事が出来るかつてない好機。「アオイさま、頑張ってください」黄色い声援を飛ばしながら、心の中では「いい格好しいのキモイおっさんはやられちゃえいいのに」と、一心に呪いの念を飛ばしていた。

ユタ等少年達にしてみても、ためていたお駄賃を全部賭けて惜しくない勝負。もしもアオイが勝てば、しばらくはバルでの駄菓子賃に困ることもない。「アオイさま、頑張ってください」と声援を送りながら、しかし、師匠の強いことは充分知っている。「師匠、転べばいいのに。転べ転べ転べ」と念を送っていた。

研ぎ師のロコオリノと革職人のヒワマナカも見物に来ていた。互いに「どうした。若い。仕事はいいのか?」「おっさんこそ。最近は注文がないのか」とけん制しあっていた。ざつくばらん強突張りオヤジと、野次馬根性太め快活磊落あんちゃんは仲が悪かった。

声援を背にうけて、しかしアオイは気にしないよう努めた。期待

はひしと身を感じる。が、寄せられた思いを背に向き合えば、それだけで腕が縮こまる。彼の相手は、それら人々ではない。ただ一人目の前にいる男、イオワ二のみ。しかし。

一度目の勝負でも感じたが、いったい何処をどうすれば、昨夜のあの酔っぱらいがこうなるのか。一分の隙もない。朝酒云々とは冗談ではなく本当に当然の如く飲んだのだろうが、この立ち姿の何処に酔いがあるのか。アオイは踏み込めず、やはり時間のみ経過した。

飲んだ量を考えれば、今、目の前にいるのは人間ではなく、酒の滴の集合体が皮を被った物。それは言い過ぎにしても。人の体のほとんどは水分。その水分が一夜にして全て酒にすり替わった生き物、それはあながち言い過ぎではない気がする。

相手がどれほどの剣豪であっても、このかまえにどれほど隙がなくとも、この相手は一撃必殺、おそらく頭にあるのはそれのみ。長丁場は戦えない。俺は、違う。

熟考するまでもなく、作戦は決まっていた。オニマルを相手に何千回と繰り返し返してきた同じ手を使う。

じりじりと横へ動くアオイ。イオワニは剣先を向けたまま躰を廻してついて来た。アオイはさらに素早く動き、惑わし、次いで一気に間合いをつめ足技を使い踏み込んだ。右へ小さく踏み込み、逆の左へ一瞬踏み込み、イオワニが反応した寸隙ぬって右側方へ躰を廻して飛び込み木剣を一閃させた。一瞬だった。

撫で斬ったアオイの木剣、応じたイオワニの木剣、呪文の反発効果で双方の手を離れ大きく宙に舞った。

イオワニは剣をはじき飛ばされ少なからず驚いた。俺が、と。それは、互いの太刀筋がどれほど鋭かったかを如実に物語っている。少年達であれば、反発しあつた剣がぐにやりとあらぬ方向へ流れ、体制が崩れる。

処がこの二人は、互いの木剣をはじき飛ばしてしまった。

見守っていた人々は、一斉に息をついた。ふう、とか、はあ、とか。息をつめて見守っていて、息ができなかつたらしい。皆、一斉に息をつき、そしてもの問いたげにオニマルの方を見た。オニマルは気配を感じてふり返り、律儀に答えた。

「今のは、双方痛み分け、つまり、引き分けとなります」

ほう、そうか……、おじさん達は腕組みをして唸った。女の子達も、もう、全然キヤーキヤー言っていなかった。ドキドキして勝負を見ていた。

少年が拾って持って来た木剣を受け取りながら、イオワニは心中

独りごちた。予想以上。顔には決して出さないが、弟子の成長ぶりに満足していた。今のは一瞬観念した。一本取られたと。やるじゃねえか。

だが。あくまで勝負は真剣。手は抜かない。

こいつには結局の処、今の手しかない。手を変え品を変え攻め込んできても、結局の処、全て同じ手。惑わし。目眩まし。

イオワニは道場中央で正眼にかまえた。対するアオイはいつものかまえ。

正眼にかまえ見据えると、腰を落としたそのかまえは、かなり低く感じる。そして剣は体後ろに隠れ、見えない。つまり、間合いが見切れない。正直な処、これでくるくる廻られたら、かなりやつかい。はじめて対峙した日とはまるで別人。威圧感を感じているのは、俺の方。イオワニは笑いたい気分だった。弟子を褒めてやりたい。よくもまあ、これだけの剣士になったものだ、と。何より姿勢が美しい。自然にそこに在る。その姿勢から、雷光の如く発する剣。かっこういいじゃねえか、ニヤツとしたその時。アオイがしかけてきた。

最前と同じ手、左に踏み込むと見せかけて右に飛び込んできた。舐めたか。馬鹿正直な男。目線の先を見れば思惑がバレバレだった。イオワニは木剣叩き込んだ。が。捉えたのは残像。そこにアオイはいなかった。

こいつ、苦し紛れに移動呪を使ったか、ズルっ！！

瞬間、イオワニは思ったが、それは思い違いだった。アオイはそこにいた。特殊な方法、彼らには見たこともない方法で足をたたんで身をかがめ。つまり左足の膝裏に右足の甲を挟んで瞬間その場に

転び、次いで引っかけた足に力込め、勢いよく立ち上がった。その間、まさに刹那。

剣ふり抜いたイオワニの前に再び現れたアオイ。度肝抜かれたイオワニの胴をはらって後方へ抜けた。躰を廻して。

どつと湧いた道場。おじさん達がわいわい喚きおらび、女の子達がキヤーキヤー言った。

「何だ今のは！？ どうやったんだ」あんぐりと口を開けた口ココオリノ。

研ぎ師でさえ驚いたくらいだから、ユタ等少年剣士達はむろん、年長のオニマルも驚いた。目を瞠った。「今のは何だ??」

負けたイオワニも、何がどうなってそうなったのかまるで分かっていなかった。「はあ??」胴を斬られたその瞬間の姿勢そのままに、棒立ちして目を剥いていた。

しかしアオイ本人は、皆の反応を奇異に感じた。彼の中では、今の足技は随分古いモノという認識だった。まさか通用するとは思っていなかった。苦し紛れの一手だった。



二・「三都政治堂合議による正式な要請」

その後、道場の表通りで一騒動あった。換金につめ寄せた人々にツキツキの興行主シシイナタは頑迷に言い張り、頑としてゆずらなかった。

「双方、一勝一敗一分け。つまり、勝負はついていない。よってこの賭は無効です」

「なんだとっ！　するってえとどついうことだ??」息巻いたおじさん達。

「換金はお断り申し上げます」慇懃無礼にシシイナタ。

「そんな馬鹿な話があるかあ」

当然の如くおじさん達は激高した。

「だったら賭けた金を戻せえ」

「そうよそうよ、当然でしょ」後ろで女の子達も口をそろえて言った。

するとシシイナタ、呆れ顔をつくってみせ、

「これは正規の興行ではないですからね……」あくまで、皆さんのお楽しみのために、自分が胴元になってやったんだ、自腹覚悟で、と言わんばかりの態度だった。

「なんでしたら道場へ戻り、もう一勝負やってもらったらいかがですか？　勝敗はつきりつけば賭け金はお支払いしましょう」

シシイナタは四十そこそこながら海千山千。興行の世界で一代でのしあがった男。狡猾で手練れていた。

おじさん達は泡を食って道場へ駆け込んだが、すでにイオワニは母屋へ戻り朝風呂の最中。アオイセナはお廟の少年達と一緒に廟堂へ帰ったという。がつくりと肩を落としたおじさん達。と、女の子達。

最前より幾分落胆気味に再びつめ寄せた人々に、シシイナタは最前よりさらに慇懃無礼な口調で冷やかに言った。

「でしたら、その券を大切に持っていてください。いつか再び勝負あり勝敗はつきりついた時、勝ち札を換金させていただきます」

おじさん達はバルでやけ酒飲むためにその場をあとにし、女の子達はプリプリ怒りながらその場をあとにした。口々に腹黒イナタの悪口を言いながら。

\* \* \*

お廟へ帰ったアオイを待っていたのは、リケミチモリ。廟堂の客間で待っていた。アヅハナウラも同席していた。リケミチモリはいつものように愛想良い笑顔でアオイを迎えたが、アヅハナウラは難しい顔で会釈しただけで、無言だった。目を伏せて、腕組みをして。

リケミチモリは笑顔で言った。

「本来ならば、タパ様とシユス様にも同席して頂きたかったのですが、今はお二人とも呪文材料の調合で手が空かず……」

ヴェセプタ召還呪をシユスのケイ「ハハキリ（羽々斬）」に宿す調合が始まっていた。廟堂の離れに炉を備えた調合室があり、二人

ともそこにこもりきりである。

「そこで一番の適任は私であろうと思い、僭越ながら、私よりお話しさせて頂きます」

いつもより丁寧な言葉づかいに、大事な話であることがアオイにも分かった。おそらく、冥界入りの話。そしてその通りだった。

「政治堂の正式な決定をお伝えします。此度、冥界入りする人選に、アオイセナ殿が正式に選ばれましたことを、お伝えします」

「ありがとうございます」

アオイは頭を下げた。感謝したが、あくまで予備の人選に選ばれたということ。今の処、冥界入り五名は病気も怪我もしていない。この分では自分の出番はなさそうだと彼は思っていた。

その顔を見て、「やはり……」と小さく呟き、リケはアツハナウラと顔を見合わせた。アツハナウラは目を伏せた。曇らせた顔に、リケ殿の口からお伝えください、とあった。

アオイもさすがに訝しく感じた。リケが言った。優しく。記憶ない若者でも分かりやすく伝わるように。

「予備の人選ですが、アオイ殿は必ず冥界へ入らなければなりません」

「え？」

当然、驚き、問い返したアオイ。

「何故ですか？」

リケは続けた。複雑な表情で。複雑な表情だったが、その眸にあるのは哀しみの色だった。それも、ずっと以前から覚悟していたことと、そんな哀しみの色。

「アオイ殿は聞いたことはないですか？ 原理神召喚呪はとても危険な術で、普通の人間が唱えれば命を落とすことになる」と

「ええ。聞いたことありますけれど……。え！？ じゃあ、まさか！？」一瞬にして舞い降りた洞察。相手が言わんとしていることが分かった。

「呪文を唱えれば……」

「そんな！！ だって、シユス様は大魔導師じゃないですか！？」それは普通じゃないことにならないのか　！！

リケは目を伏せ、首をふった。

「いくら大魔導師と言えども、シユス様は普通の人間。ここで言う普通でない人間とは、例えば此度冥界より連れ帰るマアシナの御子のように、半神<sup>ツブテ</sup>半人の人のことなど」

「そんな……。じゃあ、ヴェセプタを召喚すればシユス様は……」アオイは呆然となった。言葉が途切れた。

リケは頷き、続けた。

「悪龍イロキノは数え切れない人命と引き替えに闇の原理神を召喚しましたが、その人々は生け贄であったと同時に、奴が自身の命を守るための盾だったのです。結果、奴はその人々が苦しみますり泣く血まみれの顔が無数に貼り付いた蛇の姿となった、一説にそう言われています」

アオイはうつむき、刮目して床の節目をにらんだ。悪龍のことは耳に入っていないかった。涙が滲みそうに感じていたが、眼球が干涸らびたように乾いていた。

「しかし」リケは続けた。

アオイはその言葉に、ひよっとしたら希望があるのか、そう思った。そしてその通りだったが、それは文字通り、希望的観測に過ぎなかった。しかし彼らが、この地方の人々が、どれほどその推測に期待を寄せているか、充分過ぎるほどリケの口調から感じ取れた。

「奇蹟が起こるかも知れません。シユス殿はノアの魔導師。万人には到底成し得ない、想像を絶する修業をつまれた方。常に、身の裡に迸るノアの光と闘い、自身を厳しく律し、己を強く保ってきた方。そのような人ならば、奇蹟も起こるかも知れません」

「じゃあ」

「そうです」リケは深く頷いた。「命を落とさずにすむかも知れません」

しかし次いで出てきたのは意外な言葉だった。

「しかしその場合でも、アオイ殿に冥界へ入って頂かなければなりません」

「え？」

リケは、これもまた、記憶のないアオイに分かるように易しく説明してくれた。

「冥界では元素魔法は使えない。そして最も恐ろしい悪魔の攻撃は憑依である。これはご存じですね？」

「はい」

「悪魔に対抗するには、憑依を防ぐ石。それもご存じですね。その石を身につけていけば、悪魔に憑依されることはない」

「はい」

「他にも一つ。我らには切り札があります。それが、シユス様のケイ「ハハキリ」に宿されている「太陽神魂呪」です。これがあれば、どんな悪魔に襲われても却けることができます」

「太陽神ごん呪……？」

「ええ。ノアの光を身の裡に開き、手から放ち、闇を祓う術です。二十年前、悪龍誕生のおり、シユス様はこの術を唱え、必然的にノアに帰依することとなり、ノアの光宿す魔導師となりました」

「そうなのですか……」

「もしもシユス様が命を落とされれば、「ハハキリ」はリリナ様へ渡され、この役はリリナ様に託されます。しかしシユス様ご健在ならば、リリナ様は冥界に入る必要がなくなります。ですから、その場合も、アオイ殿。貴殿に入って頂かなければなりません」

話の内容は全て分かった。俺は冥界へ入る。シユス存命でも、なくとも。武者震い、身を襲った。

リケミチモリは姿勢を正した。そして改まった口調で、厳かに、要請を伝えた。

「アオイセナ殿。クムラギ、ラエモミ、プアロア、東部自由都市連合を統べる三都政治堂全ての合議による正式な依頼です。貴殿に冥界に入つて頂きたく、そして冥界より、聖女マナハナウラの御子を、人間界に連れ帰つて頂きたく、ここに三都を代表し、ねもころにお願ひ申し上げます」

リケミチモリは深々と頭を下げた。

アオイも、応じて頭を下げた。深く。唇噛み締め。重責を身に沁みて感じて。

「慎んで。努めます」

声が震えた。その自分を恥じた。シユスの覚悟を思えば。そして、予想される運命を臆に知りながら、口に出さず、今日まで見守り続けてきた人々の気持ちを思えば。

努めますではとても足りない、粉骨砕身する。固く決意した。

リケミチモリの隣ですつと黙っていたアツハナウラが、はじめて口を開いた。重い口調ながら、これを伝えるのは自分の役目と。

「シユスロー様が、当時起こっていた神隠し事件の真相をつかむためここクムラギを訪れ、この廟堂へ来られたのは、私が十三歳の時だった。お手伝いをさせてもらい、そして、悪魔の力を借りて恐ろしいことを成さんとする者のあることをつきとめ、私も願い出て、その征伐へ同行させてもらった」

アヅは言葉を切り、遠くを見やった。それは彼にしてみても、遙か昔の出来事のように感じられた。

「彼方の凍原の地下に、巨大な、迷宮めいた石造りの地下道があり、人々を捉えていた牢獄が延々と続き、その最奥の広大な地下宮に奴はいた。誕生したばかりだった……。醜く巨大な蛇の姿で。神火の焰呪で広間の水路に溶岩を満たし。犠牲となった人々の亡骸が延々と連なる暗闇の中に、とぐろを巻いてうずくまり……。闇の中に立ちこめていた熱気と怨念……。あの時の光景は、一生忘れられぬ……」

アオイは言葉なく聞いていた。アヅは静かに続けた。

「あつという間に、共にいた三十名が犠牲となった。シユス様がノアの術を使い、かろうじて私達は生きのびた。そこから逃れることが出来た。わずか五名だった」

リケが言葉を添えた。

「闇の原理神であるウポコ・ポオの宇宙的对立物は解放の原理神ノア。故に、その術は悪龍イロキノに絶大な効果があったわけですが、そのノアの光をもってしても、奴の闇の力は被えず……」



その力関係は、アオイもよく知るところだった。タパやユタから話を聞いている。ウポコポオはサタンのことであり、ノアはルシフアーのこと。当初の認識に多少の違いはあったものの、その二神の対立は、記憶ない彼でもよく知るところであった。

アヅは話を続けた。

「が、私達には希望があった。マナだ。あの子が生まれた。フィオラパがシユス様に伝えた『定め』がすでに始まっていた。処が私達は定めの意味も、何が起るのかも、その時は分かっていた。まだ、何も……あの子が冥界へ召された時でさえ……」

一つ言葉を切り、アヅは続けた。虚空をにらみ据え。

「が、その数ヶ月後、あの子がニシヌタお婆さまの夢枕に立ち、御子懐妊のことを伝えたとき、私達ははじめてこの定めの意味を知った。あの子が冥界へ入らなければならなかった理由も。」

マアシナの御子であれば、ラアテアの光を現出させる呪文を唱えることが出来る。その呪文ならば、悪龍を滅ぼすことが出来る。この禍は、愚かな人間が発端となっている。故に、我ら人間の手で止めねばならぬ。これは、人が人の手で成さねばならぬこと。

シユス様は、この定めの意味を知ったとき、即座に決意された。自らを犠牲とし、ヴェセプタを召喚し、冥界への扉を開くことを」

アオイは唇を噛み締めるばかりで、何も言うことが出来なかった。そんな彼に、アヅは穏やかな口調で優しく言った。言葉は優しくかったが、内容は重かった。

「故に、後を託され冥界へ入る我らは、いかなる障害があろうともそれを却け、御子をこの世界へ連れ帰らねばならぬ。アオイ殿」  
アヅは真っ直ぐアオイの目を見た。

「共に」

共にやろうと、アツハナウラは言っていた。共に死力を尽くして頑張りうと。干涸らび乾いていたアオイの目に熱いものがこみあげた。見られないように、頭を垂れた。頷いて。「共に」「答えた声

## 三・「若き魔導師」

廟堂の門でリケミチモリを見送ったあと、自然アオイの足は離れの調査室へとむかった。忙しいことはむろん知っている。会えるとは思っていない。会って話せたとしても、何を話したいのか解らない。ただ、顔を見たいだけだった。

どちらかと言えば、今日までその人を避けていた。自然と。嫌いのではない。むしろ逆。憧れめいた気持ちを抱いている。けれどその人のまとうあまりにも厳しい雰囲気を感じていた。だが、その人がこの世にあるのは、あと数日。

時刻は夕暮れ、黄昏時。すでに薄暗がりの廟堂の裏庭を抜け、調査室の前に立った。窓から灯りが漏れ、時折不可思議な色合いの光が走った。風肌寒い秋の夕暮れながら、調査室の中は大変な熱気らしく、窓から漏れる空気が揺らいでいる。壁からの放射熱を肌を感じる。微かな熱。

アオイはしばらくそこに佇んでいた。窓から中の様子を覗くことも、扉を叩くことも出来なかった。ただ立っていた。様々な思い交錯して。

暗がりの中を誰かが歩いてきて、そこいるアオイを見て言った。「どうなさったのですか？ ご用事ですか？」

ラナイナライだった。アオイは咄嗟には言葉が出てこなかった。

「いや……。ラナイは？ 調合室に？」

「ええ。私は皆さんの夕げのお膳を下げに」

「そうか……」

「ご用でしたら私が伝えましょうか？」

「いや」アオイは言葉に詰まった。が、正直に言った。「シユス様と少し話したかっただけだ。けれど忙しいだろうから」

するとラナイナライはにっこり微笑んだ。

「少しくらい大丈夫だと思います。調合はタパ様が主にやっていますから。それにお手伝いの方も南の廟堂から来て下さっていますし」  
南の廟堂とは、ニシヌタ老婆の廟堂。

「そうか……」

「少し待っていて下さい」

ラナイナライはそう言い残して、調合室の中へ入っていった。

待つほどもなく、ラナイナライが五人分の箱膳を高く重ねて持ち出てきて、にっこり頷いて立ち去った。次いで扉の中から出てきたのは、その人シユスローだった。

やはり中は大変な熱気と湿度らしく、髪を束ね、着物の袖をたすき掛けし、汗だけで全身を火照らせている。

「何か、私に用かな？」

暗がりの中に立っていたアオイに問いかけた。

「いえ……」アオイはどう答えてよいのかわからなかった。素直に詫びた。「すみません。何も用はないのですが……、少しお話がしたくて……」それが一番正直な気持ちだった。

大魔導師は優しい笑みを浮かべた。暗がりの中で。

「ふむ」

若者が何を知りここへ来たのか、見当がついた。しかし寡黙な男。黙したまま相手の言葉を待った。

「あの……」

アオイは言い淀んだ。言いたいことは山ほどあるのに、何を言おうとしても、どんな言葉も、軽く感じた。

俺は何を言いここに来たのだろう。俺は、俺のどんな気持ちを伝えたかったのか。俺が、それを伝えたところで、何が変わるというのか。

逡巡しながら、彼は思い浮かべていた。はじめてシユスとあった日に、浴室でばったり出くわした時のことを。あの時も、聞きたいことが山ほどあったのに、きっかけの会話を思い付かなかった。それが、まるで昨日の事のよう。

今日は思い付いた。きっかけの会話を。

「ハハキリは、蛇斬りという意味ではありませんか？」

大魔導師は幾分驚いた顔をした。

「ほう……。君は何処でそれを知ったのかね？」

「いえ……」勿論記憶にない。そんな気がただけだった。「アマノハハキリと聞いた憶えがあります」

「ふむ……」シユスは不思議そうに首を捻った。「天のハハキリ、とは知らぬ。聞いたことがない。しかしこれは正統なケイではない。これは私が二十二歳の時、とある筋から手に入れた物。当然、まっとうな経緯を持つ物ではない。名称も伝承。もしかしたら、大昔はそう呼ばれていたのかも知れぬな」

「そうですか……」

アオイは感心した顔して相づちを打ったが、会話の内容よりも、会話が成立し、相手から次々言葉が出てくることが嬉しかった。そしてそのことを少し気恥ずかしく感じた。何故そう感じるのか分ならず戸惑いながらも。彼は分かっていたいなかったが、それは父親と向き合い語り合う感覚。

「この世界には正統なケイとそうでないケイがある。正統なケイとは、魔導師の師から弟子へと継承されてきた物。光の導神より与えられ、元素魔法を宿す。しかし希にそうでない物がある。闇の導神、つまり悪魔より与えられ、悪魔の術を宿すケイや、ハハキリのような謎に包まれたケイ」

「謎に包まれた……?」

「うむ。ハハキリをこの世界にもたらした神霊が何者か、全く伝えられていない。普通のケイではない。原理神にかかわる術を宿せるケイ。そのような物を、光の導神や、ましてや悪魔がもたらせるはずがない」

「じゃあ、もしかしたら」

魔導師はアオイの思い違いに首をふった。優しく正した。

「いや。ノアは宇宙をさまよう獰猛な光。その光を身の裡に常に感じているから、私には分かる。この光には明確な理性や意志はない。ただ、衝動的で、例えるなら鎖を引き千切り飛び立とうとする獰猛な龍鳥。人の爲にケイをもたらすような意志は持たない」

「じゃあ、ハハキリは誰が？」

シユスは微かに笑みを含み、首をかしげた。

「分からぬ。一説にノアの使いの霊がもたらしたとも言われているが、ではその神霊は何処のどの霊かとなると、これもまた皆目見当もつかない。説明できる者は誰一人いない」

大魔導師は苦笑いを浮かべて夜空を見上げた。アオイも同じように空を見上げた。うちとけて、笑みを浮かべて。すでにとつぷりと日は暮れて、秋の夜空はすんでいて、月がことさら美しかった。虫の音美しく辺りを包んでいた。

今なら、照れもなく、また気負いもなく、飾りない素直な気持ち可言えると思つた。そう思つたが。

「俺は信じてます。シユス様は、普通の人ではないと」

やはり言葉の最後で声が震え、肩が震えた。うつむき、拳を握りしめた。

大魔導師シユスローは、若者の背中を、ポンと優しく叩いた。微かに微笑み、そして遠く闇の奥を見つめた。遠い昔の話を聞かせた。

「昔、一人の若い魔導師がいた。優しい男だった。優しすぎたのかも知れぬ。私とは同門で、共に学んだ。名をイズ八という。私と同じ年だったが、私よりも遥かに優れた資質があった。私がいくら頑張っても追いつけなかったほどだ。二十歳になったとき、修行の旅に出たいと願い出、師もそれをお許しになった。誰もが彼を信頼し、間違いなど犯すはずがないと思っていた。そして出立し、それきりになった……」

「まさか、その人が……」

「その旅の途中で何があつたのか、誰も知らぬ。折しも、東方の旧王朝との戦のさなかだった。そこでいくつもの非道を目の当たりにしたのかも知れぬ。あるいはまさしく戦いに巻き込まれ、旅先で出逢った大切な人を失ったのかも知れない。どんな悲劇にみまわれたか知らぬが、その男は決意した。この世界を終焉させる。終末の焰を灯す術を修めると。その手段のために、全ての悪魔と結託することや、数知れぬ人の命を奪うことの是非など、その善し悪しの判断はつかなかったようだ。むろん、焰が灯れば、この宇宙そのものが消えてしまうのだから、もはや善し悪しなど関係なかったのだろう」

「そうなのですか……」

アオイには、驚くような話の連続だった。悪龍がシユスの同門であったこと、その誕生の背景に必ずしもその男ばかりを責められない、同情すべき事情が在ると推測されること。そしてそれらを差し置いても。なにより。

「終末の焰って一体どんな……」



世界を焼き尽くす焔、その話は聞いた憶えがある。朧ながら。故に、朧にその光景を想像していた。世界が炎に包まれていく様を。しかしその術はこの宇宙自体を終焉させるという。そんな事が可能なのか。それはどのようにして起こるのか。

「終末の焔は」シユスは魔導師ではないアオイにも理解できるように易しく説明した。「簡単に言えば、逆の『素因』。つまり、この宇宙誕生のきっかけとなった『何か』がある。仮にそれを素因と呼ぶ。その逆のモノを出現させる法」

なるほど　と納得いくようで、皆目分らない、そんな話だった。

「その焔は、焔のように見えるだけで実際は焔ではないという。何にでも燃え移り、全てを灰に変えながら燃え広がり、七日でこの星を覆い尽くし、この星を巨大な火球に変える。その火球は止まるどころを知らずさらに膨れ続け、ある一定の時点で急激に膨張をはじめ、宇宙は調和を保ちきれず、崩壊する。誕生前の無に帰す。時の流れは終わる」

黙り込んだアオイに、シユスは言った。

「故に、そんな術は決して唱えさせてはならぬ。我らがこの宇宙に在る理由。綿々と人の営みが続いている理由。私達が何故ここに在るのか、それには必ず理由があるはず。それを無碍に消し去ることはさせない。アオイ殿」

シユスは改まった口調で、アオイの方に向き直った。

「私は、この定め礎となることに、何の迷いもない。あとを頼む」

ぐっ、と、ふきこぼれそうになった涙。自分に寄せられた信頼、託された希望。過分な、としか言いようのないもの。俺はそれに見合うほどの男じゃない、大魔導師にこれほど信頼されて、それにかなう働きができるのか、そんな自分を必死に隠した。目の前の相手に見せられない。うつむいて。

「はい。必ず」

必ず、言葉に出来ない。今、口を開けば、嗚咽に変わる。

「四・誰も知らない術」

翌日。

誰も彼も来客多く、会えなかった。もしくは、会えてもゆっくり話せなかった。イオワニ、カタジニ、リリナネ、共に冥界入りする五人。むろん、アツハナウラも。

例えばカタジニと話そうとしてもずっと出ずっぱりで何処にいるのか分からないし、リリナネと話そうとしても絶えず来客があり顔はあわせても話は出来なかった。イオワニは道場にいたがこちらも来客ひっきりなしで会えなかった。

ユタとは話した。タベ。

「お前は知ってたのか？ シュス様のこと。召還呪を唱えると……その……」

言い淀んだアオイに、にこっと笑って即答した。子供らしい無邪気な答えだった。心の底から信じきっていた。

「シュス様は普通の人じゃないですから。ご無事に決まっています」

「そうか」

アオイも思わず笑みが出た。俺も信じるべきだ、その人を、  
そう思った。

ユタは訳知り顔でこう続けた。

「それにリリナネ様が太陽神魂呪を使えないかも知れません」

「え？ そうなのか？」

「そうですよ。原理神にかかわる術ですよ。呪文文言さえ唱えれば誰にでも使えるというものじゃないです。そりゃあ勿論、リリナネさまは立派な大魔導師さまですけれど」

いつものことながら、子供らしくない物言い。

「そうか……」

「そうだったら困りますから、やっぱりシユスさまにはご無事でいらわないと」

笑顔のユタに、アオイも笑顔で答えた。子供らしい論理の矛盾には触れず。

「そうだな」

今度は、残念で仕方ないといった顔を作り、ユタは言った。

「マリコラギさまの隠形法をご存知の方がいらっしゃれば良いのですけれど……」

「ああ……。あれか……」

その名称を聞くたび、アオイは不思議な感覚に包まれる。何処かで絶対聞いた覚えがあるのに、全然思い出せない、何かが、例えば一文字違いで何か違うような不可思議な感覚。

「不思議な話ですよねえ」

ユタは、背伸びして作っていた訳知り顔が引つ込み、一転して子供っぽい口調で感心して言った。「あると噂だけあって誰も知らない術なんて」

「そうだな」

マリコラギ隠形法とは、五百年ほど前から噂のみ存在する術。あと噂されているだけで、しかし実際には誰も知らない。何処の町の巫術師も。むろん魔導師も。噂の発端が何かも定かでない。

その術を唱えるとマリコラギが太陽に抱擁され見えないのと同様に、術者はマリコラギの威光に包まれ、悪霊や悪魔には見えなくなるといふ。普通の人にはまったく支障なくそこにいると見えるのに、悪魔や悪霊だけから身を隠す事が出来る。今回の冥界入りにはうつつつけの術。だが、誰も知らない。宿せるケイも存在しない。

今回あらためてタパはじめ方々の町の巫術師が、文献を読み調べ、あらゆる土地へおもむき聞き込み調査を行ったが、結局分からずじまいだった。

俺は……、聞いたことある気がする。アオイはその名を聞くたび不可思議な感覚に囚われ物思いに耽る。何故。

箸が止まり、遠い目をして彼方に思いを馳せていたら。

「どうしたんですか？ アオイさま？」

ユタに現実引き戻された。

「いや。何でもない」

「ご飯が冷めてしまいましたよ。それに早く食べてお片付けしないと今日は当番ですから」

「ああ……そうだな……」

アオイの冥界入りは確実ながら、名目上は予備の人選。他の人達

が用意や挨拶などで忙しいのに対し、彼は特に挨拶回りする先もない。リケミチモリにはすでに挨拶をすましている。他にすることもないので、いつもと変わらずお廟のお手伝いをしている。

\* \* \*

シユスは普通の人じゃない。子供のように純真にそう信じこんでているのは、子供ばかりでない。町の人々も。

ルルオシヌミは不思議そうな顔をして首を傾げて言った。

「シユス様は普通じゃない人じゃないのではないのですか？」

否定が連続してどっちの意味になったか定かではなかったが、大丈夫だと信じきっているようだった。

研ぎ屋へ行ってみた。ロコオリノも同じことを言った。

「心配ないさ。シユス様は普通の人じゃないからな」

「どうして今まで教えてくれなかったんだ？」

「分かってるモンと思ってたよ。ひよつとしたら分かってないかも思ったけど、だったらなおさらさ。もし教えたら、お前のことだから、暗い顔してくよくよ思い悩むんじゃないかと思ってな。誰もまったく気にしていないことを心配でたまらない顔してうるうるさねたら堪らんからな」

研ぎ師の大將は軽く笑いとばした。

アオイは女々しい男と言われた気がして少しムツとした。腕組みして言い返した。

「ふん。お気遣い礼を言う。が、俺はお前が思ってるほど心配性じゃない」

ロコオリノは笑い話にしたが、それは表面上のことであり、本心は違っていた。逆だった。けれどそれは、今、アオイに言うべきではないこと。冥界入りをひかえている。くよくよ思い悩ませたくない。その時が来れば分かること。覚悟も決まるはず。それよりも。伝えることがあった。

研ぎ屋を出ようとしたアオイを呼び止めた。「あ、そうそう」さも、今、思い出したように。

「冥界入りするとき太鼓叩く役、俺に決まったから」にかつと笑った。

「え、太鼓叩くのか？」

「そうさ。戦士を送るんだぞ。叩くさ」

「それをお前が？」

「ああ。知らねえのか？俺は太鼓の名手だぜ。祭りの一番太鼓は俺だし、普段の戦の時も俺が叩いてるんだぜ」

「へえ……」

ロコオリノは、笑みを崩さなかったが、幾分しんみりした口調になった。

「勇壮に打ち鳴らして送ってやる。必ず無事に帰ってこい」

アオイも。笑顔を返した。

「ああ。頼む」

言葉に出来なかった思いを、目で交わした。互いに。

アオイはその足でイオワニの道場へ行った。が、イオワニは来客多く会えなかった。引き返していたとき、道でばったりオニマルと会った。

「少し話せるか？」

そう言ったのはオニマルの方だった。

「ああ」アオイは頷いた。「ちょうど話したかったところだ。お前は忙しくないのか？」

切れ長の眸を思慮深げに少し伏せ、「少しだけだ。挨拶回りとかどうでもいいことだ。歩きながら話そう」オニマルはアオイを促して歩き出した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1923k/>

---

NOA / 葦原國の剣士

2011年12月9日01時57分発行